

---

# シリアスな感じのゼロ魔

匠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シリアスな感じのゼロ魔

### 【コード】

N1914M

### 【作者名】

匠

### 【あらすじ】

タイトルを変更しました（前タイトル ゼロの使い魔〜不死の主従の暇潰し〜）

あらすじを書くのが難しいので、一行で説明します。

ゼロ魔の世界に行った主人公が殺伐としていきます



## 登場人物紹介

イリア・フロイス

女

500歳

種族 不死者

腰まで伸ばした白銀の髪に深い藍色の瞳、常にゴシッククロリータをみに纏っている。

年齢は12歳ぐらい、誰に対しても偉そうな態度をとる、言葉を現実にする能力(仮)を使う  
しかし、ある秘密が……

フィリン・アーシア

女

300歳

種族 吸血鬼(仮)

黒い髪をポニーテールにしている、瞳の色は赤。服は普通のメイド服。体はまさに大人の女性といったような形である

ポニーテールなのはイリアに言われたからで、フィリン自体は普通におろした方が好み  
武器はナイフ

リリス

500歳

女

種族 (多分)人間

淡い紫色の髪をウェーブ状にしている、瞳の色は髪と同じ淡い紫、服は白いワンピース、見た目は15歳ぐらい  
男のような喋り方をする、イリアとは知り合い

世界を渡る能力を持っている

リース・ド・セビリア

12歳

女

種族 人間

綺麗な金髪を肩まで伸ばしている、瞳の色は碧色。学院では制服を着ているが前世の好みから、男物が好き。  
言葉遣いも男らしさが出ている  
なんだかんだで面倒見がいい

## プロローグ

とある世界の城の中で溜め息をこぼす少女がいた。

少女の名はイリア・フロイス、腰まである銀髪のロングヘアに深い藍色の瞳、ゴシッククロリータを身に纏った少女である。

イリアは退屈そうな顔をしながら窓の外の景色を眺めている、外では雪が降り積もり、幻想的な空気を醸し出している。

「暇ね……………」

と、呟いた時、沈黙が支配する部屋にノックの音が響いた。

「失礼します、主。」

扉を開け、部屋の中に入ってきたのは黒い髪をポニーテールにして血のように紅い瞳をした20歳ぐらいの妙齢の女性だった。

「どうしたの？ファイリン」

そう、イリアが問いかけるとファイリンは手に持っていた、手紙をイリアに渡した。

「リリース様からお手紙を預かっています」

「そう、読んでみて」

そう言つとイリアは旅人と名乗る少女を思い浮かべると、ファイリンが手紙を読み始めた。

「『イリア、久しぶり、今暇なら、近頃何か起きるから、気が向いたら関わって頂戴 世界の旅人 リリス』だそうです」

手紙を読み終わったファイリンはイリアの方を見ていった。

「どうします？主、行きますか？」

イリアはファイリンを何を当たり前な事を言うのかといった目で見た。「行くに決まっているでしょう？退屈しのぎには丁度いいわ」

そう言つてイリアは椅子の背もたれに寄りかかりながらファイリンにだされたお茶を飲んだ。

そうして、しばらくイリアとファイリンで暇つぶしに雑談をしている

と、突然イリアの目の前に白く輝く鏡が現れた。

「どうやらこれがリスの言っていた『何か』らしい。イリアはフィリンの方を見て笑いながら言った。

「行くわよ、フィリン」

フィリンは黙ってイリアの後をついていこうとしたがイリアは鏡の表面に触れた瞬間ポツリと呟いた。

「生意気ね」

「？」

意味不明なイリアの呟きにフィリンは首をかしげた。

「この鏡、触った瞬間私を引っ張るのよ、なんか生意気ね」

イリアはそういうと「抜ける」と小さく呟いた。すると言葉通りにイリアの手が抜けた、薄れ行く鏡を見ながらフィリンは主に聞いた。

「いいのですか？」

「いいのよ、だいたいこういうのは二度三度つて繰り返すものなのよ」

イリアの予想道理、間をおかずに新たな鏡が現れた、ただそれもイリアは無視した。

そして、五度目の鏡が現れた時、何を思ったかいきなり手を突っ込むと叫んだ。

「割れる！！」

そういつた瞬間イリアの目の前の空間が音を立てて文字通り割れた、その向こう側に見える桃色の髪をした少女のほうけたような顔を見てイリアは言った。

「こんにちは、呼んだかしら？」

かくして物語は始まる。

サイゴの

## 其の一

イリアはほうけたように自分を見つめてくる少女を見つめかえした、青い空と緑豊かな草原、どうやら今回はまともな世界にきたらしい。目の前の少女の歳は十五ぐらいであろうか、ピンクブロンドの髪と、意思の強そうな瞳、顔はいい方だが綺麗というより可愛らしいといった方がしっくりくる、とイリアは分析した。

「ここは、何処？できれば貴女、説明して欲しいのだけれど？」

とイリアが聞くと、少女は気をとりなおすように咳払いをしたあと少し黙ってから口を開いてこう言った。

「ここはトリステイン魔法学院よ、それであんた誰？」

今の少女の言葉を聞く限り、ここはトリステインと言うらしい。しかしイリアのいた世界にトリステインなどといった土地は存在しない。(となると、此処は異世界みたいね、ま、私は退屈しなければ何処にいようがいいのだけだね。)

と、思いながら回りを見渡す、周りの生徒達はほぼ全員ピンクの少女に野次を飛ばしている、そんな中青い髪の少女と頭の寂しい中年男性だけがイリア達を警戒しながら見ていた。

しかし、周りがうるさいとイリアは思った、目の前の少女は頭の寂しい男性の所で騒いでいるし、周りの生徒達の野次はエスカレートしているし、とにかく五月蠅い、いい加減現状把握をしたいので、どうしたら落ち着くのかを考えていると、横にいるフィリンが主人の考えを空気が感じ取ったのか

「私が黙らせます」

そう言うとフィリンは地面に足を叩きつけ地面を震わした、案の定生徒達はいきなり地面が揺れた事に戸惑い、静かになった。イリアは周りが静かになったのを確認するとこの場の責任者らしき頭のとても寂しい男性に声をかけた。

「驚かしちゃったかしら、私たちは何が起きたのかよくわからない



の、だから貴方に教えてもらおうと思ったわけ、わかった？」

そう言うと、男性（ピンクの少女からはコルベールと呼ばれていた）は少し驚いてから、イリアを見て

「えー、私はここトリスティン魔法学院の教師をしている、コルベールといいます、お嬢さんの名前は？」

と言った、イリアは周りの野次からこの世界がイリア達の世界と同じ貴族がいるらしい、なので名前だけを伝える事にした、

「私の名前はイリア、イリア・フロイス、こちらが私の従者のフィリン・アーシア、平民よ」

イリアがそう言うとコルベールは驚いたようだ、それもそうだ、話し方が丁寧でなおかつ従者もいると普通は誰でも貴族だと思う。

「で、何か用があるんでしょう？」

イリアがそう言うとコルベールは思考の海から戻って来た。

「あ、ああ、そうです、この儀式はコモン・サーヴァントといって自分に合った使い魔を召喚するものです、召喚されたものにはコントラクト・サーヴァントを行うことで自分の使い魔にする事が出来るのです、この儀式は神聖なものですので使い魔の変更は出来ません。」

この言葉を聞く限り自分がフィリンが使い魔になるらしい、

（まあ、退屈してるしちょうどいいんだけど）

「わかったわ、契約しましょう、出来れば、だけど」

とコルベールに言って、イリアは自分を召喚した少女に向かって歩いていった、少女は自分がただの平民だと思っっているらしく、近くに来るなり。

「ふん、貴女みたいな平民がこの私の使い魔にされるんだから感謝しなさいよね。」と言って横を向いた、イリアはそれを見て微笑みながら

「わかったわ、ではやりましょう」

イリアがそう言うと、少女は呪文を唱え始めた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリ

エール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使  
い魔となせ」

そう言つて、イリアの顔を捕まえて顔を近づけてきた、

「あら？使い魔の契約つてキスだったの？」

それを聞いたルイズは顔を赤くして

「う、うるさいわね！コホン……いくわよ」

と、言つてキスをしてきた。

「あら？終わったのかしら？」

とイリアが呟く、すると左手から煙とともにルーンが刻まれていた、  
横にいたコルベールは激痛が走っているはずなのに顔色ひとつ変え  
ないイリアに、内心驚愕していた。

「解析」

と、イリアが呟くとルーンに関しての情報が頭の中に入つて来た、  
どうやらこのルーンはガンダールヴいうらしい、効果は手に持った  
武器の情報提供と、身体強化、故郷の思い出の封印好感を持たせる  
ための催眠効果があつた、しかし、武器に関しての情報は要らない  
し、身体強化は邪魔だし。残りのものなど論外だ、なのでこのルー  
ンを消すことにした。

「拒絶」

すると刻まれたルーンが何もなかったかのように消えていき、磁器  
の様な傷ひとつない肌になっていた。

「な、なんでルーンが消えたのよ……！」

と、いつてイリアの頭をガクガク揺するルイズ、すると何を思った  
のか

「こ、こんなのおかしいわこれは失敗、だからもう一回」

と、いつてルイズはイリアにもう一回キスをした、しかし、拒絶さ  
れたルーンは腕に刻まれることもなく、

「こ、コノヤロー……！」

と、叫びながらイリアに深いキスをする類、はたから見ると、とて  
も百合百合しい光景なのだがルイズにその自覚はない。

見るにみかねたコルベールは二人を止めに行った、

「ミス・ヴァリエール、貴女が召喚した人はもう一人います、その人と契約をしたらどうでしょう」

と、蕩けた目をしたルイズはおぼつかない足取りでフィリンの元へ向かった、

イリアはルイズがフィリンと契約しているのを横目にこれからの生活の基盤を整えるために、コルベールと交渉を始めた

## 其の二

突然だが、イリア・フロイスとフィリン・アーシアは不死者だ。今のところどの世界でも不死者というのは忌み嫌われる存在だ、なので、自分達、不死者が一応安心して暮らせる環境を整えなくては行けない。

これは、その為の第一歩だ、

「ミスタ・コルベール、少しいいかしら？」

声を掛けられたコルベールはイリアの方を振り返る、どうやらフィリンの腕に刻まれたルーンのスケッチを取っていたらしい（フィリンのルーンもイリアと同じガンダールヴだった）

「ああ、何でしょうか、イリアさん」

イリアはそう返事を返したコルベールを改めて観察した、薄々感づいていたが、コルベールはできる。一見頼りない中年のオヤジだが、先程から全く重心がぶれていない、おそらく軍隊に所属していたのだろう、それも、それなりの強さの。

そうイリアが分析しているとコルベールが声を掛けてきた、

「イリアさん？」

「ああ、すみませんね、少し考え事をしていて、で、用件なんだけど、私たちは今、ここに召喚されたばかりで、住むところもなければ、食べられる物もない。できれば衣食住の確保をお願いしたいのだけど、いいかしら？」

そう言うと、コルベールは少し黙った、それから、顔を上げると、

「ミス・ヴァリエール、此方に来てください」

コルベールと呼ばれたルイズがコルベールと話している内にフィリンに話し掛けた。

「フィリン」

「はい、何でしょうか」

「貴女、私達が不死者だっということ、出来る限り周りに漏らさ

ないでちょうだい、この世界が安全なんて分からないから、」

「はい、わかりました、いつものようにですね」

そう言うとフィリンはルイズの元へ歩いていった、すると、コルベールがこちらを見て

「イリアさん、貴女を召喚したのはミス・ヴァリエールですので、住む部屋はミス・ヴァリエールと同じになってしまいますがよろしいでしょうか？」

イリアは別にそれでも構わないのでコルベールに返事を返すと、コルベールが校舎に向けて歩き出した、どうやら学長室と呼ばれる、この学院トップの部屋に向かうらしい。途中で生徒が野次を飛ばしてきたので、フィリンが少し殺気を混ぜて睨んだら、すぐに黙った。その時ルイズが目を開いてこちらを見て来たが、どうしたのだろうか。

「つきました、ここが学長室です」

コルベールの指したドアを見ると、豪華な飾りつけがされたドアの上に金のプレートに学長室と書かれているのを見つけた。

「ふうん、……結構金をかけているみたいね、さあ、コルベール、開けて」

イリアがそう言うとコルベールはイリアの言葉使いが荒くなっていくを感じて、苦笑しながら学長室のドアを開けた。

中に居るのは髭を伸ばした老人だった、がその風貌は弱々しい物ではなく、むしろ仙人の様に威厳に満ちた空気を纏っている、「失礼するわ、私はイリア・フロイス、あなたが此処の学長さん？」

そう言ったイリアを学長は見てきた。

「そうじゃ、儂がこの学院の学長、オールド・オスマンじゃが、何かようかの？イリア殿」

「わかつているでしょう、さっきまで見てたんだから」

そう言われると、オスマンは驚いた、自分は確かに魔導具『遠見の鏡』でイリア達を見ていたが、あれがバレるとは微塵も思っていなかったのだ、

「ほっほっほっ、バレてしまったか、ジジイなりの冗談だったのだ  
が」

「どの口が言うのかしらねえ」

「それで、イリア殿の用件じゃが、衣食住の保証はするが、それ以外  
の事は此方は一切干渉しない、それでいいかの？」

「別に、それでいいわ。いくわよフィリン、」

「はい、主」

「え、ちよっと、待ちなさいよ〜!〜!」

そう言っただけでイリア達は出ていった、2人きりになった学長室の沈黙  
の中オスマンが口を開いた、

「のう、コルベール君、彼女達の事をどう思う？」

声を掛けられたコルベールはさっきの少女の事を思い出した、彼女の  
話し方も普通の少女のそれとは違うものだったし、なにより、此  
方を見る目がとても冷静な観察者の目になっていたのをコルベール  
は見逃さなかった。

彼はこう語る、自分の疑問を口に出すように。

「さあ……………何なんでしょうね」

答える者はいない

### 其三

学長室の帰り、ルイズとフィリンは学院の廊下を歩いていて、イリアはどうしたかというところ、「この子と一緒に居るとちよつと……ね、と言うわけでフィリン、宜しく」といつて家を創りに行つてしまつた、おそらく、明日学院の何処かに城が建つことになるかとフィリンが考えていると

「あのさ、フィリン……だっけ？ 貴女なんであんな子供に付いていくの？ もつといい人もいたんじゃないの？」

と、ルイズに聞かれた、フィリンは主との約束で話せないこともあるので、所々省いて話す事にした。

「実は、私は昔親を失い、路上生活を送っていました、もちろん、そんな私を村人達は異端視して、私を迫害してきました、目につくと石を投げられ、物を買おうとしても何も売ってもらえず、村人達にリンチされ、いつ死んでもおかしくない状態でした。そんなある日、主が現れたのです、主は私から村人達を引き剥がすと、私を抱えて逃げ出しました、そうして、主の家に私は運ばれました、最初は私もなぜこんなことをするのか分からず戸惑っていましたがある日、主にその事を聞くと『いや、なんか昔の私を思い出したからかしらね』と答えました、その後従者にならないか誘われ今に至る、と言うわけです」

そうフィリンが話終わると、ルイズは少しうつむいていた、しばらく二人の間を沈黙が流れる、と、その沈黙をやぶる様にルイズが口を開いた。

「ゴメン、なんか嫌なこと思い出させたいで。」

「別にいいですよ、むしろ、あの出来事は私にとって、主と会えた特別な日ですから」

と、フィリンが言うとルイズもある程度納得したのか、少し顔に元気が戻ってきた。

「そう、ならいいわ、それより貴女の事をなんて呼んだらいいかしら」

「私はいつも主にフィリンと呼ばれているので、フィリンと呼んでください。で、貴女はどう呼んだらいいでしょうか？」

「別に、ルイズでいいわよ、付いたわ、ここが私の部屋」  
そう言いながらルイズはドアを開けた。

フィリンは部屋の様子を見た、部屋の広さは12畳ぐらいだろうか、中には一通りの生活用品があり、その全てが成金趣味の様な無駄に豪華な造りになっていた、一目で判る、ここは貴族の部屋だと。そんな中、ルイズとフィリンはテーブルを挟んで向かい合って座っていた、テーブルの上には先程呼んだメイドに持ってきてもらったティーセットがある、それは別に問題ないのだが、真夜中に何故メイドが起きていたのか、とフィリンはどうでもいいことを考えた。

「ねえ、フィリン」

さつきまで黙っていたルイズが沈黙をやぶる様に言った

「はい、何でしょう」

「貴女は、使い魔の役割って判るかしら？」

そう聞かれて、フィリンは自分の思ったことを言ってみた。

「主人の手伝いでしょうか？」

「いや、それもあるけど、より具体的に言うと一つ目は使い魔とは主人の目となり耳となる能力なんだけど……無理みたいね、全く見えないし」

「そうですか」

「そうなの、それで二つ目は主人の望む物を取ってくる、例えば薬の材料とか」

「私は見つけることが出来ますが……」

「いや、私は薬を作らないから要らないんだけどね、そして最後、これが一番重要で主人を守るということ、使い魔の力で主人の安全を保証する事、なんだけど……あなたの細腕じゃあそれを期待するのは酷よね。」



そう言われてフィリンは自分の腕を見る、確かにこの腕では力仕事は出来ないように見えてしまうだろう、しかし、教えるのも面倒なので黙っている。

「全く、どうしてこんなの召喚しちゃったのかしら、どうせなら、ドラゴンとかグリフォンとかを召喚したかったのに……こんなのが使い魔なんて……私よりスタイルいいし」

そう言われて少しムカツとくる出るところは出ているフィリンだったが、決して表に出さず黙っている。

「まあ、いいわ。とにかく、あなたに仕事を与えるわ、掃除とか、洗濯とか、まあ、簡単に言つと雑用ね」

そう言うルイズだったが、フィリンにとってそれは毎日主に頼まれる事と同じなので特に文句もない。

「分かりました、では洗濯物を早く渡して下さい、次の日には仕上げますから」

「はいはい、後で渡すわ、あ、そうそうあなたの寝る場所は床だから」

そう言つてルイズは着ている服を脱ぎ始めた。女同士なので何も感じないがもし、男がいたらどうなっていたのだろうと、フィリンは思った。

「じゃあ、これ、洗濯お願いね」

そう言つて、さっきまで着ていた服を投げる、そうしながらルイズはネグリジエを羽織つてベッドに潜り込んだ。

「お休み」

すると、ルイズはすぐに寝息をたて始めた。フィリンはそれを確認すると、部屋を出た。洗濯出来る所を探して廊下を歩いていると、主と出会った

「あら、フィリンじゃない、どうしたの？」

主にそう聞かれたのでフィリンは正直に答えた。

「実はルイズに頼まれて洗濯をするために洗濯出来る所を探しているのです。」

そう言うと主は少し目を開いてこういった「へえ、もうあのルイズって子を名前で呼んでるんだ、昔っからいつてるけど、私も名前で呼んでくれてもいいのに」

「……………まあ、善処します。それで洗濯出来る所は何処にありますか？」

「こつちにあるわ、ついてきなさい」

そう言って、主……………イリアの後を付いていく、しばらくすると学院の近くに井戸があった。どうやらここで服を洗うらしい。フィリンは水を操って半径1mぐらいの水球を作るとその中に服を入れて回した、そうしている間、二人は無言だった。

沈黙の中、双月を見上げていると、イリアがボソツと呟いた。

「始まるわ、この世界の大きな動きと私達の暇潰しが」

その言葉を聞き、フィリンは振り返るがそこには夜の静かな闇だけが広がっていた。

フィリンは独り月を見上げ、これからの出来事に想いを寄せた。

## 其の四

フィリンが洗濯を終えてルイズの部屋を（徹底的に）掃除していると、徐々に部屋に光が差し込んできた。どうやら夜が明けたらしい。

太陽。

それは吸血鬼にとって天敵……のはずだが彼女達は吸血鬼ではないので、特に弱点らしい弱点も無いのだった。

そう言うことでフィリンは窓から差し込んでくる光を眩しそうに眺めていた。

数十分後

部屋の掃除を終えて、椅子に座っていたフィリンだったが、そろそろ朝食の時間帯なのに中々起きないルイズを起こそうと、毛布を剥いだ。

「え！？何！？」

「朝ですよ、ルイズ」

すると、ルイズはぼんやりした目を此方に向け

「あれ？あんた、誰？」

どうやらルイズは寝ぼけているらしいので、傍にあった桶に入った冷水をルイズにぶちまけた。

「ぶはっ！何これ！？冷た！！！」

「目は醒めましたか？」

「え…………… ああ、昨日の使い魔か……………じゃあ、昨日のは夢じゃ無かったんだ……」

「まあ、そんなことより濡れているので早く着替えて下さい。」

そうフィリンに言われると、ルイズは「あんたのせいじゃない……………」と呟きながら、ネグリジエを脱いだ、そしてフィリンに

「服」

と言った。一瞬、主語だけで意味がわからなかったが、それを理解すると

「ご自分で」

「いや、使い魔の役割は主人のサポートだから……………」

「ご自分で」

「だから……………」

「自分でやりなさい」

「……………わかったわよ」

まったく……………などと呟きながらしぶしぶと言った感じで着替えた。着替えが終わったのを確認すると

「では、早く食堂に行きましょう」

そう言つて、フィリン達は外に出た。するとちょうど向こう側のドアも開いてその中から赤い髪の女性が憧れそうな体をした女性がいた。

女は周りに色気を振り撒きながらこちらを見てきた、

「あら、おはようルイズ」

ルイズはその声を聞くと、露骨に嫌そうな顔を作つて返事を返した、  
「おはよう、キュルケ」  
するとキュルケは、フィリンの方を見て言った。

「ふうん、あなたがルイズの使い魔？く、本当に人間なのね」

笑いを堪えながらそういうキュルケ、ルイズは額に青筋を浮かべている

「そうよ」

「ぷ、あつはつはつはつ、凄いやない、あなたが初めてかもよ？  
サモン・サーヴァントで平民を呼ぶなんて、さすが『ゼロ』のルイズ」

フィリンは、ルイズがからかわれているのを見て、少し面白くなかったが黙っていた。ルイズはひきつった笑みを浮かべている、しかし気付いていないのかキュルケは平然とした顔をしている。

「あたしも昨日召喚したのが居るのよ、あなたとは違って、一発でね、」

「へ、へえーそうなんだー」

ルイズは表面上は冷静なように見えるが口から「べ、別にくやしくないから!!」とか漏らしている。

「これが私の使い魔よーフレイム。」

キュルケがそういうとキュルケの部屋から巨大な赤い蜥蜴のようなものが現れた、フィリンは確かあれに似たようなものを見たことがある、確かそれは

「サラマンダー火蜥蜴ですか」

「へえ、よく知っているわね、そうよ、しかも見てこの大きさ、この子は間違いなく火竜山脈のサラマンダーよー火を司る、私にはぴったりでしょう?」

「そう、良かったわね」

そう言うときュルケはルイズの横に立っていたフィリンに話の矛先を変えた。

「そうだ、あなた名前は?」

「私はフィリン・アーシアと申します、以後お見知りおきを」

「いいのよ、こんなやつにかまわないで」「何、ルイズ妬いてるの?」

「別に妬いてなんかないわよ!!」

「あつはつはつはつ。わかつたわかつた、じゃあね」

そう言うと、キュルケは赤い髪を揺らしながらこの場を去っていった、キュルケが角を曲がって姿が見えなくなると途端にルイズが騒ぎだした。

「あゝ!!ムカつく、なによあの女!!自分がいい使い魔召喚したからっていい気になっちゃって!!」

「召喚とは、進級するための儀式ではないのですか?ならばそんなに気にする必要はないのでは?」

「違うの、召喚した使い魔はメイジの才能に比例するの、メイジを

見るなら使い魔を見ろっつてという言葉まであるのよ!」

「なら、貴女の方が彼女より上でしよう」

するとルイズはキョトンとした顔をした

「どうしてそう思うわけ？」

「簡単な話です、幻獣は確かに強い、しかし、それを使役するのは人間です。つまりその人間を召喚した貴女の方が力量は上の筈です」  
そう言つて、フィリンはルイズの反応を伺つと、何故かガツカリした顔をしていた。

「あんたねえ、いい？メイジと平民とは天と地との差があるの、例えるならドラゴンとトカゲよ平民を召喚しても、トカゲを召喚するのと同じぐらいなのよ、わかった？」

「……………油断しているといつか足元をすくわれますよ」

「へ？」

「何でもありません。行きますよ」

後ろから置いていかれたルイズの声が聞こえたがフィリンは無視した。自分を馬鹿にするのはいい、だが主であるイリアを馬鹿にするのは許せなかった。

角を曲がったあたりでフィリンに追い付いたルイズは何か文句を言いたかったみたいだが、その言葉が口から出ることはなかった。

理由は簡単何故なら少し離れた広場の所に

白銀の鉄のような物で作られた城が浮いていたからだ。

ルイズは口を開きながら「あり得ない……………」と呟いているが、フィリンはあれを知っている。あれはイリアの十八番であるイリアオリジナル魔法「白銀の浮遊城」だ、この城は全てミスリル銀でできており、その魔力を通しやすい性質を利用して。要塞としても機能する便利なものだ（欠点は魔力消費量が膨大なことだがイリアの魔力は無尽蔵なので問題はない）

しかし、周りの生徒はそんなこと知らないので

「何なんだ、あれは！！！」

「まさか、エルフが攻めて来たのか!？」

「……………凄い魔力……………」

「でも綺麗……………」

「ふん、僕の方が美しい、そう思わないか? ケティ」

と、いろいろ勝手なことを騒いでる。

無論ルイズも例外ではなく

「な、何よあれ…………… あんな魔法、見たこともきいたこともないわ

…………… 一体何なのよ……………！！！！！」

寧ろ周りより五月蠅い。とりあえず少しルイズを落ち着ける為に早くこの場を離れようと、ルイズを引き摺りながら食堂へ向かった。

## 其の五（前書き）

遅れてすいません、なかなかネタが浮かばなくて、もしかしたらこれから不定期投稿になるかもしれません。

本当にすいません



## 其の五

フィリン達が食堂に来る前にイリアは厨房で朝食をとっていた。

「おう、嬢ちゃん、たらふく食ってくれよ!!」

「あら、ありがとうマルトー、シエスタこれも追加で」

「は、はい!!」

「がっはっはっはっ、いい食いつぶりだ嬢ちゃん、あんたのこと気に入ったぜ!!」

何故ここでイリアが朝食をとらせてもらっているかというところ、大体こんな流れである。

イリアが食べ物の匂いにつられてやって来る

マルトーに名前を尋ねられる

名前と召喚前の過去（捏造）を話す

マルトーが同情して賄いを振る舞う  
という経緯である。

たっぷり朝食をとったあとイリアはシエスタと話をしていた。

「ねえシエスタ、貴女はなんで学院で働いているの？」

「私の家は田舎のほうでタルブっていうんですけれど、そこに私の両親がいるんです、でも田舎のほうだから家が貧乏なんですだから給料がいい魔法学院で働くことにしたんです」

「へえ、えらいのね。そうそう私も貴女の仕事を手伝いたいのだけれど、いいかしら？」

そういわれると、シエスタは少し驚いた後

「気持ちはずれいですけど、いいんです。私の仕事ですからイリアさんに迷惑をかけるわけにはいきません。」

「あら、誰が迷惑と言ったのかしら？私は貴女に食事の礼をしたい

と言っているのよ。貴女に断られる方が私にとっては迷惑なのよ」  
するとシエスタは少し考えてからパツと笑顔になって

「それなら、イリアさんは食後のデザートを運んでください」

「わかったわ、後、この服じゃあどう見てもメイドには見えないから服を貸してくれないかしら？」

イリアはゴシッククローリータのフリルをつかみながら言った。確かにその服では目立つとシエスタは思いイリアを更衣室に連れて行った  
（数分後）

イリアはシエスタに渡されたケーキを持ちながら貴族たちにケーキを配っていた

「どうぞ」

「どうも、なあ君なかなかいい顔をしているじゃないか、どうだ？  
今夜僕の部屋に……」

「遠慮するわ」

といったような光景が何度か繰り返されながらもイリアはケーキを配っていた

「どうぞ」

「ああ、そこに置いといて……ってあんた昨日のやつじゃない！  
！」

「あら、お早うフィリン」

「主………イリアお早うございます」

少しフィリンに名前を呼ばれて嬉しいのか微笑んでいるイリア、周りの貴族の男はその笑顔に見とれているのだがイリアはそれに気付いていない

「それで、あの城の出来はどうだった？」  
「ええ、また一段と手の込んだ造りでしたね、あの周りの城壁の模様のモチーフは何ですか？」

「今回は『堅牢な城』だったけど、わかった？」

「なんとなくなら解りましたけど、流石ですね。しかしまた大きく創りましたね、掃除が大変そうです」

「それについては問題ないわ、汚れは自動で排除されるから」  
「それはそれは」

と、主従同士会話をしていると、横から口を挟むものがいた

「ちよつと、無視しないでよ!!」

「ん？何かしら」

「あの城を作ったって言ってたわよね？つまりあなたはメイジなの？」

「んー」とイリアは考えた、どうやらルイズが言った内容によると、魔法が使える＝特別、らしいなので

「さあ？」

「さあ？つてなによ!!」

「じゃあ、フィリンまた後で」

「ええ」

「ちよつと、無視しないでよ!!」

そのままルイズたちから離れるとイリアはケーキ配りを再開した。

その後デザートを配り終えたイリアはシエスタと少し話をしてから学院をふらふらしていた。特にする事も無かったがふと、思った（そう言えばフィリン達の授業があったわね、さつきからあまり時間も経ってないし今からむかえば間に合うはず）

イリアはフィリンの居場所は分かるのでそちらの方に向かって転移した、ばれると不味いので認識阻害の結果をはる。

もちろん此方に気付く者はいず。イリアはこっそりと青い髪の少女の横に移動した。

「隣、座るわよ」

イリア話しかけると少女は驚いたようにこちらを見てきた、どうやらいきなり現れた（実際は気付かなかっただけ）イリアを警戒しているようだ。

そんな少女の様子を気にせず、イリアは少女の隣の席に座った

「あなたは……………?」

「私はイリア、イリア・フロイスよ、貴女の名前は?」

「私……タバサ」

タバサはイリアを警戒しながら教室に入って来た初老の女性を見ていた

「そう、タバサ、面白い名前ね」

クスクス笑っているイリアをタバサは少し敵意のある目で見ていたがすぐに目をそらし教壇に立った女性を見た

「はいっ、皆さん静かに、自己紹介から始めましょう、私はシュヴルーズ、春の使い魔召喚はうまくいきましたか?わたしは召喚された、使い魔を見るのが楽しみなのですよ」

女性はシュヴルーズというらしい、ふとルイズの方を見ると俯いているが見えた、どうやらフィリンを召喚したのが恥ずかしいらしい

「あら、一段と変わった使い魔を召喚しましたね、ミス・ヴァリエール」

すると周りの生徒達がいきなりわらいだした。

「ゼロのルイズ!! 召喚に失敗したからってそこら辺の平民を連れてきちゃ駄目だろ!!」

太りぎみの生徒が言うのと、ルイズが立ち上がった、

「ミス・シュヴルーズ!! 風っぴきのマリコリヌがわたしを侮辱しました!!」

そういったルイズの横でフィリンがマリコリヌの方を睨んでいた、イリアはそのフィリンの様子に違和感を覚えたが大したことはなさそうなので、無視した。

『主、少し説教をしても宜しいですか?』

フィリンからの念話が届いた、脳の中に響く声に不快感を覚えながらイリアは念話を返した。

『駄目よ、貴女らしくない、それに私は念話は好きじゃないって言ったでしょう。そんなことも忘れたの?』

『すいません、でも私はルイズを』

有無を言わず念話を切った、フィリンは変わった、確かに前は自分の意見を持ってほしいと思っただが流石にこれは不自然だ、イリアはルーンについて学院長に聞くことに決めた。

「あなた方は、こんなことをしていて恥ずかしく無いんですか？一々喚いてとても貴族の行いとは思えません。シュヴルーズさんあなたも教師なのですから無自覚とはいえ自らの生徒を貶める発言は控えていただきたい。」

その、言葉を聞いてイリアの予感確信に変わった、いつものフィリンは会って2日も経ってないのに、その人を助けることはしない、イリアはこの変わってしまったフィリンを元に戻すために、学院長室に向かった、

全ては自分の従者の為に

## 其の六

イリアは廊下を歩いていった。

いつもの彼女の様な掴み所の無い雰囲気ではなく、辺りに怒りを撒き散らしながら進む彼女の姿。

しかし、これは学院長やルイズへの怒りではない、フィリンの変化に気付けなかった自分に対する怒りだ。その怒りを原動力にしてイリアは学院長室に向かっていた。

（しかし、本当にフィリンは元に戻ることを望んでいるのだろうか？）

不意にそう思った。

これは自分の自己満足ではないのか、フィリンは自分の元に戻りたく無いのではないのか、

だが、イリアの考えは決まっていた。

（それはフィリンを助けてから聞けばいい）

そう、イリアは結論付けて、曲がり角を曲がった時、視界の先に怪しい人影をみつけた、それはフードを被り何事かをぶつぶつ言いながら、壁を叩いている。

「ま　く、何が　　が弱点だ、こんな　　じゃ、　　出  
来な　　いか」

イリアは人影に近寄った、人影はまだぶつぶつ言っている。

「ねえ、其処の貴女、」

「うひゃあ！！！」

人影は声をかけられた途端に飛び上がった。

「な　な　な　な、何の用だい！？」

声からしてイリアの予想道理女だった、イリアは女を腹いせにからかうことにした。

「お姉さん、貴女は此所で何をしているの？」

もちろんイリアは大体女がしたいことは解るが、敢えて突っ込まな

かった。

「わわわ私は何もしてないよ、お嬢ちゃんこそ、ここで何してるんだい？」

「私はね、学院長室っていう場所に向かっているのだけれど、道が解らなくて。それでふらふら歩いていたらお姉さんを見つけたの」「見た目相応の幼女の用に喋って見ると、女は一応安心したようで、愛想がいい笑顔でイリアに話しかけてきた。

「そうなんだ、でもお嬢ちゃん今私は忙しいんだ、他の人に頼んでくれないかな？」

「でも、今まで誰ともすれ違わなかったのだけど？お姉さんは手伝ってくれないの？」

イリアが返すと女は齒噛みした、そう今は授業中生徒はもちろん教師も廊下に出てこない。つまり今、廊下は完璧な無人状態だった。

このままではあれに専念できない、そこまで考えてふと違和感を覚えた、今は授業中、生徒は勿論教師も廊下にいない、

では、目の前にいる少女は一体何なのか

「お嬢ちゃん、あんた何者だい？今廊下には誰もいない筈なのに、あんたはここにいるそんなあんたは一体何なんだ？」

私がそう言つと目の前の少女は俯いてしまった、口はまるで何かを堪えるようにきつく結ばれている、しばらく沈黙が流れたあと少女は口を開いた。

「私は、昨日までは山の中の村で平和に暮らしていたの、ちょっと厳しいけれども私を守ってくれたお父さんと私に色々なことを教えてくれたお母さん、村の人は皆優しくしてくれて、私はそれで満足だった、でも昨日私はお父さんと喧嘩してしまったの、今思うととても馬鹿みたいな理由で喧嘩してしまったと思う、その時の私は自分の部屋に閉じ籠ってしまったの、しばらくしたら、私の家のお手伝いさんのフィリンが部屋に入ってきて、私を慰めてもらったの、そのあと、私は明日になったらちゃんとお父さんに謝ろうと思ったの、そしたら目の前に光った鏡みたいのが出てきて、私は綺

麗だなんて思つて触つてしまった。その瞬間私は鏡に吸い込まれてしまった、私のあとをフィリンは追いかけて一緒に鏡のなかに入ってしまった。そして目を開けたら女の子がいてその子からいきなりキスされたの。しかもそのあとフィリンはあの子の使い魔にされてしまった。その時からフィリンの様子がおかしくなつてしまった、いつも私が一人の時も私を助けてくれたフィリンがあの子の方ばっかりみて私は一人ぼっちになつてしまつただから学院長ならなんかわかると思つて、で

も学院長室がわからなくて、周りに人もいないし、でも諦めかけていた時にお姉さんがいたの、だから道案内を頼みたくて、でも駄目みたい、だから諦め

「そこまでが私の限界だった、もともと私は盗賊なんかやっているけど、こんなかわいそうな女の子を見捨てるほど落ちぶれちゃいない、もういい、わかつた！あんたの従者はあたしが助けて見せる、例えあんたがエルフだろうが、吸血鬼だろうが、私はあんたを見捨てない、わかつた？わかつたなら大船に 乗つたつもりで着いてこい！！」

イリアは女の言葉から昔のあいつに似た雰囲気を感じた、最初は利用するつもりだったけど、気が変わった。

「ありがとう、私はイリア、イリア・フロイス、貴女は？」

「私のことはロングビルとよんどくれ、よし！イリア、学院長室まで案内してやるよ」

そう言つて歩き出した、ロングビルの後ろに付いていきながらイリアは思つた。

こいつなら信じていいかもしれぬ



## 其の七

ロングビルに案内してもらいたどり着いた学院長室ここから先は私  
は入れないと言ったロンドビルと別れてイリアは学院長室に入った。  
「失礼するわ」

イリアが学院長室に入ると高級そうな椅子に座っていた、オールド・  
オスマンがイリアを見た。

「ようこそ、イリア・フロイス君、君が来るのは見えておったぞ、  
勿論、ミス・ロンドビルとのこともな、君の身の上はこちらも残念  
に思う、村の名前を言ってくれ、ワシが責任を持って送ってあげよ  
う。」

「ああ、あれはほとんど嘘だから、唯一本当のことはフィリンの事  
かしらね、ねえ、オスマンさん貴方はフィリンを直す方法を知らな  
い？」

オスマンは少し考える素振りを見せてから口を開いた。

「僕は知らない、他の人を当たってくれないか？」

「嘘つき」

イリアはくすくす笑いながら言った、普通なら微笑ましい光景のは  
ずだがオスマンの背中から冷や汗が吹き出たイリアは笑っている、  
笑っているのだが一ヶ所だけ笑っていなかった。

目

目だけが氷の様に冷たい光を宿しながらオスマンを見ていた、

「貴方は知っているでしょう、フィリンを直す方法を、さあ早く答  
えなさい、言わないなら」

イリアがなにか呟くと、オスマンの目の前に氷の槍が現れた、

「殺す」

オスマンは目の前の槍を見ながら一つの結論に達していた。

「おぬし、メイジか！？この事についてはとてもすまなく思ってお  
る、しかし学院長の立場上今の問いに対する答えは言えぬ、分かっ

てくれぬかの？」

イリアは答ええないしかし氷の槍がオスマンの首筋に食い込むと、オスマンは慌て出した、

「ま、待つてくれ！！話す！話すから！それをどかしてくれ！！」  
オスマンが叫ぶとイリアは氷の槍を砕いた、砕かれた氷がキラキラと輝きながら消えていく。くしてオスマンは口を開いた。

「実は、知っている方法は二つある。一つ使い魔が死ぬ、二つ主人が死ぬ。しかし、ぬしに言わなかったのは別にミスヴァリエールが死ぬ事ではない。おぬしが助けたいと言ったフィリン君は使い魔のルーンのせいでミス・ヴァリエールに隷属させられている。よつておぬしがミス・ヴァリエールを殺そうとしてもフィリン君がミス・ヴァリエールを庇って死んでしまう。つまりおぬしの目的は達成できない、だからぬしは諦め

瞬間、

つい先程までオスマンの頭があつた所を氷の槍が通りすぎ、固定化のかけられた壁を軽々と貫いた。

「私は諦めるのが嫌いなものよ、オスマン一週間以内に使い魔のルーンの解除について調べなさい。無理ならば私は学院と敵対するわよ。」

それを聞いてオスマンはふと疑問に思つた事を聞いた。

「そう言えば、おぬしはミス・ヴァリエールのルーンを解除しておつたではないか、何故フィリン君に使わないのじゃ？」

イリアは苦虫を噛み潰したような表情で言つた

「あの子は私の魔法をかきけしてしまうのよ、だからあなたたちに頼んでいると言つのに……………まあいいわ、では朗報を期待しているわよ」

そう言うつとイリアは学院長室を出た。遠くから爆発音が響いていたが今のイリアは探している人物がいた。その人物はフィリンではない、廊下の向こうに目当ての人物を見つけると。その人物の後ろに近づいた。

「ロングビル〜!!」

「うわあっ!! て、あんたかい、全くびっくりして損したよ。」

「ロングビル、ちよっといい?」

「何だい?」

「貴女は今回、何を盗むの?」

「!!!」

ロンドビルはイリアを驚いたような目で見てから、しばらく動かなかったがふつと力を抜いた。

「いや、疑うのは止めよう、あんたのことは信用してるしね。それで、それがどうしたって言うんだい?」

「私はあなたの仕事を手伝ってあげる。」

暫くロンドビルはポカンとしていたがイリアが言った言葉の意味を理解すると笑い出した。

「アハハハハハハ!! 言うねえ、嬢ちゃんでもその心遣いだけで十分ありがたいから、嬢ちゃんは私が帰ってくるのを待ってな、盗み出した後には、あんたの故郷を見つけてやるさ。」

その言葉を聞いてイリアは罪悪感を覚えた。ロングビルはあの嘘を信じている、もし本当の事を言ったらロンドビルは自分を嫌いになるかもしれない、しかしイリアのプライドがこれ以上嘘をつくのを許さなかった、相手が何も知らない他人だったら簡単だったのだが、相手の雰囲気はどうしてもあいつに似ているからつい緊張してしまふ。どうにでもなれという考えでイリアは口を開いた。

「あのね、ロングビル……」

「ん?」

イリアは何も知らないロングビルの顔を見て決心が鈍るが勇気を振り絞り続きを言った。

「嘘ついてごめんなさい!!」

「は?」

「実は貴女に話したのはほとんど嘘だったの!最初は隠しておこうと思ったけれど、隠していることに罪悪感があってそれで話したの、

本当にごめんなさい!！」

ロングビルは何も言わずに聞いていた。そしてイリアが話終わると、ロングビルは一言だけ言った。

「反省してる？」

その言葉を聞いてイリアは首を縦に降った、ロングビルは目をつぶり俯いているイリアの頭に拳を落とした。

ゴツン

と音が響きイリアは頭を抑えながら涙混じりに問いかけるような視線をロングビルに向けた。

「あんたは、ちゃんと誠意を込めて謝ったじゃないか、そんなやつを許さないほど器が狭い女じゃあないよ、それに私も隠し事してるしね、だから気にすんな、」

そう言っつてロングビルはイリアの頭を撫でた、イリアは恥ずかしそうにしながら笑って言った。

「ありがとう」

## 其の八

空は茜色に染まり廊下を橙に染め上げる中イリアは学院長室に向かっていた時の雰囲気とは逆に身体中から喜びのオーラを振り撒きながら廊下を歩いていった。あの後ロングビルと話し合い一緒に盗むのを約束したのが余程嬉しかったらしい、もう授業も終わり、廊下にいる生徒達が喜色満面のイリアに見とれているのを背景にイリアは厨房に入った。

「失礼するわよ、シエスタ今日のメニューは何かしら？」

イリアは永遠を生きる吸血鬼だ、しかし彼女の性格は人間と大差は無い、そんな彼女の楽しみの一つは食事である。イリア曰く「食事とは生きていく者が出来る最大の贅沢、楽しまないと損だ。」だそう。

そういうわけでイリアはシエスタの料理を楽しみにしていた。

「今日のメニューは、ナットオです、私の故郷の料理なので、イリアさんのお口にあうかわかりませんが」

しかし、彼女にも苦手な物もあるそして彼女の前にはあの悪魔の食べ物があった。

「シエスタ、残念だけど私はこれを食べることは出来ないわ。」

思い出すのは、20年前リリスが珍しくイリアの世界に滞在していた時だ、朝起きるとリリスが何かをかき混ぜていた、イリアは好奇心からリリスに納豆と呼ばれる食べ物を分けてもらい一口、口にしたら。すると口のなかに粘ついた不快な感触が広がり慌てて吐き出すと口から恐ろしい匂いがはなをついた、普通の人ならこんなことを気にせず食べていただろう、しかし彼女は吸血鬼、普通より遙かに感覚が鋭いので普通は大丈夫な事でも、彼女には不可能な物がある。そしてそれは納豆やニンニクなどの癖の強い物も例外ではない。

「そうですか……残念です、お口に合わない物を出すわけにもいきませんから、今スープを持ってきますね。」

そう言つてシエスタは厨房に走つて行つた、その姿を見て罪悪感を覚えるが食べられない物はしょうがない。心の中でシエスタに謝りながら、イリアはスープを食べた。

イリアが食事を終わるとシエスタの手伝いをする。メイド服に着替え、今日のデザートであるアップルパイを持ちながらイリアは食堂に入った。食堂の中はかなり金が使われているのが分かるのだが、イリアからみるとただの成金趣味にしか見えなかった。と学院の装飾に厳しい評価を下しながらパイを配っているとフィリンがこちらを見ているのに気づいた、一応、念話は使わなかったらしい、が、此方を見る視線は好意的には見え、むしろ警戒するような目で見ている、イリアは胸に一抹の寂しさを覚えたが、表には出さず、笑いながらフィリン達のもとへ歩いていった。

「どうぞ、アップルパイです。」

近寄ってきたイリアを見て警戒していたフィリンだったがここが食堂なのを思い出して力を抜いた、しかし目だけは相手の動きをしっかりと捉えていつでも動けるようにしていた。

「……………何の用ですか」

「いや、フィリンが新しい主の下でちゃんと働いているかなーってね。まあ、ちゃんと言うこと聞いているみたいで何より」

「話し方が変わっていますよ、イリア」

「呼び方が変わっているわよ、フィリン」

互いに言葉を交わしながら二人はおなじ結論に達していた。

（（こいつとは敵対することになるな））

「じゃあ、私はそろそろ残りのパイを片付けるわね、また会いましょう。」

そう言つてイリアは再びデザート配りを始めた。

夜、イリアは自分が作った城の中で紅茶を飲んでいた。しかしいつ

もの茶葉を使っているはずなのに不思議と味を感じなかった。原因は分かっている、フィリンの事だ、フィリンは此方を目の敵にしているが自分はフィリンを出来る限り傷つけたくなかった、（しかし、殺ろうと思えばイリアは誰でも殺れる）そんなこんなでイリアが溜め息を吐いてると目の前の空間が歪みその歪みから小さな人数が出てきた、肩まで伸びた淡い紫色のウェーブ状の髪、髪と同色の瞳、白いワンピースを着た何処か儂げな印象を見る者に与えていた。

「どうしたの？リリス。この世界に何か用？」

リリスと呼ばれた少女は此方を見て口を開いた。

「いや、私は別に用は無いのだが、少し忠告に来た」

「それは『旅人』として？それとも私の友人として？」

リリスは世界の旅人と呼ばれ、あらゆる世界を影から支えている、しかし最近世界がリリスだけでは対処できなくなり、イリアに頼むことにしたと言うのがこの世界に来るきっかけである。

「いや、今回は貴様の友人としてだ、どうやら、この世界は貴様のことを敵視しているようだ、俗に『世界の修正力』と呼ばれるものが働く可能性がある、まあ世界を破壊するような貴様にこんな忠告は無意味かもしれないが、一応言っておいたからな」

一見無愛想に見えるかも知れないがそれがリリスなりの優しさであることが分かったイリアは小さく笑って言った。

「ありがとう、心配してくれたんでしよう。」

イリアがそう言うのとリリスは顔を真っ赤にしながらぶっきらぼうに言った。

「べ、別に貴様の為ではないからな！！」

そんなリリスの様子が面白くイリアはつい吹き出してしまった、それをめざとく見つけたリリスは声を荒げた

「おい！何を笑っているんだ貴様！！何？貴女の反応が面白かった！？ば、馬鹿にするなあ！！ええい！貴様のその口二度と開けないようにしてやる！！覚悟はできたかああああ！！！！！！」

追うリリスと逃げるイリア、そのなかでイリアの悩みが消えたのを

見てリリースはこっそり安堵の息をついた。

そして夜は更けていく。



## 其の九

翌日、イリアはいつもより早く起きた、昨日あの後リリスは帰っていった、イリアは城から出て、いつものように厨房に向かった。

「シエスタ、入るわよ。」

入ってきたイリアに向かってシエスタは笑いながらスープを差し出した、今日のスープはトマトスープだった、昨日の納豆は出てこないようにイリアはそつと息をはいた。

スープを啜っていたらシエスタが話しかけてきた。

「イリアさん、ミス・ヴァリエールの使い魔と喧嘩したらしいですね、どうしたんですか？」

イリアは本当のことを話そうかと思っただが、シエスタに知らせると後々面倒になりそうなので、適当にはぐらかしておいた。

イリアは城の中でこれからの事について考えていた、イリアは50年生きているが元々自らの能力が身を守る事に特化しているため、しかし周りの人は守れない。分かっていたが、理解できていなかった。

「はあ……………」

思わず溜め息が漏れてしまうが、それを注意する者はイリアの傍にはいない、その事がイリアを更に憂鬱にさせた。

しかし、溜め息ばかりついてはいられない、フィリンを助ける方法を考えなくてはいけないとイリアは気をひきしめた。

一時間後、イリアは幸せそうな空気を纏いながら、学院の中のルイズの部屋の前に来ていた。何故こんなところに来ているかというところ、フィリンを助ける方法が見つかったのだが、それにはフィリンの同意が必要なので、その同意を得るためである。イリアは幸せそうな空気のままルイズの部屋をノックした。

「はい、誰でしょう？」

中からフィリンの声が聞こえたのを確認するとイリアはルイズの部屋に入った。

中にはフィリンだけでルイズがいなかったがイリアはそれに気づかなかった。

「ねえフィリン、貴女は今ルーンの手で操られているの、だけど貴女が望むなら私が助けてあげる、ねえフィリン、貴女は私とルイズ、どっちを選ぶ？」

それを聞いたフィリンは言った。

「ふざけるな」

「え？」

「誰があなたみたいなの我儘なやつと一緒にいるものかふざけるなよお前はいつも私をこきつかいやがってお前みたいなやつは早く死んじゃえばいいんだいつもいつもフィリンフィリン五月蠅いんだよ、お前よりはルイズの方が100000倍まともだよああやつと離れられて清々したよ」

フィリンの口から流れる呪詛のような言葉を聞きながらイリアは茫然と立ち尽くした

（確かに私は、フィリンの事を考えていなかったかもしれない、けれどここまで言わなくてもいいのに、ひどい、）

気付けばイリアの目から涙が流れていたしかしフィリンはいつもの無表情のまま言った。

「さっさと消えるこの化け物、二度と私の前に現れるな」

その言葉がイリアの心に止めをさした、500年の孤独を支えてく

れたフィリンにイリアは自分の心を預けていた、

(けれども、それは私だけだった?)

もうなにも解らない、

ぐちゃぐちゃした気分のままイリアはルイズの部屋を飛び出した。

イリアが去っていった部屋の中で笑みを浮かべたフィリンの姿が崩れた、その黒いゲル状の塊は再び形をとっていった、そして現れた黒い髪をした美男子が現れた、男は邪悪な笑みを浮かべると誰に言うわけでもなく口を開いた。

「楽しみだ」

主のいない部屋に足音が近づいてくる、どうやら、この部屋の主が戻ってきたらしい、そう思い、『無貌の神』『這いよる混沌』の異名を持つ神、ナイアルラトホテップは姿を消した。

部屋に戻ったフィリンは床が少し濡れているのを怪訝に思ったがあまり気に止めず、隣にいるルイズの顔を見ながら思った。

昨日は主と言い争いをしてしまったが、数日間にもた主が姿を表すだろう、そうしたらこう言ってみよう。

『私は主が何より大切なんですよ』  
と

そうすればきつと主も喜ぶだろう

## 其の十

イリアは城の中で一人閉じ籠っていた。小さな体を丸め、ガタガタ震えている彼女の姿は少し前の幸せそうな姿とはまるで別人のようだった。

「フィリン」

壊れたようにフィリンの名前を呼び続けるイリア、その目はなにも映しておらず、ぼんやりと宙を見つめながら、うわ言のようにフィリンの名前を呼び続けていた。

しばらくしてイリアは突然立ち上がると手に取ったナイフを虚ろな瞳で見ながら呟いた。

「私が化け物だからフィリンは許してくれないんだじゃあ私が死ねばフィリンは許してくれる筈なんだきつとそう私が死ねば」

そう言ってイリアは自分の首にナイフを突き立てた、刺さった所からは夥しい量の血が噴水のように噴き出していた。しかし明らかに致死量のそれが出ているにも関わらず、イリアは喉が切られ、上手く声をはっせないまま謝罪を続けていた。

「ごっめん…なさ…いわたしっまだし　このま…まじゃわたりし　嫌われちゃうかも、わたしはフィリンに…もつと死ななくちやもつともつともつともつともつともつともつともつともつともつともつともつともつともつともつともつと」

呟きながら喉に何度もナイフを突き立てるイリア、いつしか瞳は狂気に染まったように緋くなっていた。

ロングビルは学院の宝物庫の壁を見ながら舌打ちをした。

「まったくあのハゲ頭、何が物理攻撃が弱点だ、こんな強力な固定化がかかってたらいくら私のゴーレムでも壊せないじゃあないか」  
その時後ろから足跡が聞こえた。慌てて後ろを振り返るとそこには予想もしていなかった姿があった。

「どうしたんだい！！イリア！何かあったのかい！？」

イリアの服は所々血に染まり深い藍色だった瞳は血に染まったように暗い緋色になっていたいつものような不敵な笑みは消えて全てに怯えているような弱々しい姿は昨日の彼女とはまるで別人のようだった。

「ロングビル……………」

「な、なんだい？」

「貴女はずっと私の味方でいてくれる？」

イリアはロングビルの顔をすぎるように見ながら言った、当然面倒見がいいロングビルは断るわけがなく

「もちろんさ、私は誰がなんと言おうがあんたの味方だ」

「私が化け物でも？」

「ああ」

「ありがとう……………」

そう言っただけイリアはロングビルに抱きついた

「ちよっと！！なにするんだい！？」

「いや……………なの？」

「いや、そうじゃないけどさ」

「ならいいでしょ？」

そう言っただけイリアは笑った。

何処か壊れたような笑みを浮かべて。

## 其の十一

数日後フィリンは戸惑っていた。あの日からイリアはフィリンの前に姿を現さなくなっていた、主であるルイズはフィリンを心配してくるがフィリンにとってはどうでもよかった。

今フィリンは主であるルイズに許可をとってイリアの城の前に来ていた、鍵はかかかっていない、フィリンは城の中に入っていた。

城の中を歩いていると血の匂いがイリアの部屋の方から漂ってきた。フィリンは無意識のうちに早歩きになっていった、イリアの身に何かあったのではないのだろうか、そう思いながら扉の前に立つと血の匂いが一層強くなっていった。フィリンは深呼吸して気分を落ち着けてからイリアの部屋に入った。

中の様子は一言で表すなら赤い部屋だった、壁も天井も床も全てが血に染まっているそんな部屋の中心にイリアはいた。白銀の髪は返り血によって所々赤く染まり、黒いゴシッククロリータは赤と黒が混ざり赤黒くなっていた。イリアはフィリンに気付かずフィリンに背を向けながら何かをしている、フィリンはイリアがなにをしているのかを確かめるため覗き込んだがその行動を理解することが出来なかった。

イリアは自分の眼球を握り潰していたのだ

笑いながら自らの眼球を握り潰すイリアの姿は元がいいから余計に凄惨な光景に見えた、イリアは立ち尽くすフィリンに気付くと手招きしてフィリンを呼んだ。

「フィリン！！会いたかった！！ああ私まだフィリンに見捨てられた訳じゃあ無いんだ！！よかった嬉しい！！ねえフィリン見て！？私フィリンに言われてからずっと頑張ってるんだ！！ねえフィリン貴女は私の傍にいてくれるの？」

血にまみれながら壊れた笑顔でフィリンを呼ぶイリア、フィリンはそんなイリアに近づくことが出来なかった。そんなフィリンの様子

を見てイリアの顔がどんどん曇っていく。

「フィリンどうして私の近くに來ないの？もしかしてまだ足りないの？わかった私もっともっと頑張るからそれまでフィリンは待ってねいつか必ずフィリンを満足さしてあげるから痛いのも気にしな  
いからだから私を捨てないで。」

別にそんなこと言っていない。そう言おうとしたが口が動かない、喉が乾く、フィリンが躊躇している間にもイリアは自分の身体を傷つけていく、愛するイリアの凶行にフィリンはその場から動く事が出来なかった。しばらく部屋には肉を断ち切る音が響いていたが不意にフィリンが立ち上がった。

「イリア、貴女が私の事を大事に思っているのならもう少し自分を大事にしてください。またいつか必ず会いましょう。約束ですよ」  
そう言ってフィリンは赤い部屋から出た。

フィリンが出ていった部屋の中心にたたずむイリアは去り際にフィリンが言った言葉を繰り返していた、

「自分の身体を大事にしてください……………」

訳が解らなかった、前に会った時はあんなことを言われたのに、今日のフィリンはあんなに優しくかった。しかしそれについてイリアは深く考えずに目玉を潰す作業を再開した。

壊れた笑顔で

一方フィリンはあんな姿のイリアを見てショックを受けていたが今では違うことを考えていた。

自分の思考についてである。

昔の自分ならあの状態のイリアを置いていく事は考えられなかった、今もイリアの所に戻りたいと思う気持ちとルイズが心配だという気持ち  
持ちが二つある。まるで自分が二人いるような気分になりフィリン

はふととてつもない恐怖に襲われた。

それは存在の恐怖

このままでは自分はいつか違う自分になってしまふのではないのか、  
そう考えながらイリアの事がどうでもよくなつていくのを感じて、  
フィリンは震えながら考えた。

（もし、私がイリアの事よりルイズの事を優先するようになってしまつたらどうしよう、私はイリアの方が大事なのにあんな姿のイリアを置いていつてしまつて良かったのだろうか、にしてもルイズはちゃんと昼食を食べただろうか、あんまり食べないようだとも私もちやんとたべさせなきゃいけないからな、イリアは後回しでいいや）  
いつのまにか収まつた震えに首を傾げながらフィリンは主の部屋に戻つていった。

ルイズの待つ部屋に。



## 其の十一・五

イリアは窓から見た光景が信じられなかった、フィリンの周囲を膨大な魔力が包み込みフィリンの精神に干渉したのだ。

そして、今の光景からイリアは悟った。

（もうフィリンは正気に戻るまで私を見ることはない）

それを理解した途端にイリアの頭のなかが冴え渡っていった、ふとフィリンの最後の言葉を思い出す。

『もつと自分の身体を大事にしてください』

今、その意味を理解した、自らの血に染まった手を浄化しながら決意する。

私は私なりのやり方でフィリンを救う、例えロングビルを使うときが来ても躊躇わない。絶対に

ロングビルは宝物庫の固さを確認しながら、イリアの事を思い出した。

（あの子は不思議なやつだ、いきなり大人っぽくなったと思ったら、甘えてきたり、でも私にはやらなくちゃいけないことがある、テファのためにも）

ロングビルは2つの月に誓う

（私は私のやり方でいかしてもらおう、土くれのフーケとしても、マチルダ・オブ・サウスゴードとしてもね、）

しかし彼女は知らない

彼女の守るものは今どこにも無いことを。

アルビオンではレコンキスタと呼ばれる、反政府組織が動いていた、その総司令官であるオリヴァー・クロムウェルはレコンキスタの団

員たちに向かって演説をしていた。

「諸君、君達にはこれから王党派の軍と戦うことになる、君達の中には死ぬのが怖いものもあるだろう、しかし恐れることはない、私達には虚無がいる！！1人はこの私、そして今日は君たちに新たな仲間を紹介しよう、2人目の虚無、ティファニア嬢だ。」

すると、金髪碧眼の美人が清純な外見に合わない妖艶な笑みを浮かべながら、クロムウエルの隣にたった、貴族達はあまりの美しさに声も出なかったが一人の貴族がティファニアを指差して叫んだ。

「こいつ、エルフだ！！」

周りの貴族はぎよつとしたようにティファニアを見つめた。ティファニアは笑いながら口を開いた。

「確かに私はハーフェルフです、しかし閣下をお慕いする気持ちではあなたたちと同じです、しかも私は虚無です、閣下の命令であれば、例え肉親であろうと手にかけて差し上げましょう。」

「このとおりティファニア嬢は私達の味方だ、それに種族の違いなど些細なことだ、私達は世界を変える、そのためには今までの常識に縛られてはいけないのだ。さあ諸君！！革命をはじめよう！！！！」

「！！！！クロムウエル閣下万歳！！！！！！！！！！」

その声を聞きながらクロムウエルは天幕の中に入っていった。

「ティファニア嬢、君は私の何だね？」

すると横にいたティファニアは微笑みながら言った。

「私はクロムウエル閣下の下僕です、クロムウエル閣下の命令は必ず果たします、それが私の全てです。」

その声を聞いてクロムウエルは1週間前の出来事を思い返していた。

あの時は、今のように天幕で自らの背負っているものに潰されそうになっていた。その時、声が響いた。

「お困りの様ですね、そんなあなたにいい知らせがあります。ウエ

ストウツドの森の中に金髪碧眼の娘がいますそれは虚無です、そして、シエフィールドは指輪の効果を防げません。後はあなた次第です。」

クロムウエルは声がした方を振り返るがそこには何もなかった。

すると天幕に黒い髪の妙齢の女性が入ってきた。シエフィールドである、入ってきた彼女を見ると、クロムウエルの中に不思議な衝動が芽生えた。

(支配したい)

そして、ガリアからの報告をしようとしたシエフィールドの目の前に指輪をつき出した。

シエフィールドは驚いたように指輪を見てから慌てて目を逸らそうとしたが指輪の効果で目を逸らすことが出来ないだんだんシエフィールドの目が虚ろになっていった。クロムウエルは自分の欲望が満たされていくのを感じていった。

「シエフィールド君、君が忠誠を誓う人物はだれだい？」

するとシエフィールドは虚ろな目でクロムウエルを見ながら、

「私が忠誠を誓うのは……………クロムウエル閣下です……………」

クロムウエルは笑いが止まらなかった。今ならこの世界の全てを手にいれることが出来ると彼は信じていた。

クロムウエルの笑い声を聞いた兵士に向かってクロムウエルは指示を出した。

ウエストウツドの森の中を調べて金髪碧眼の娘を見つけ出せ、と

運命は狂い出す。

最後に笑うのは一体誰なのか。

## 其の十二

3日後、ルイズはフィリンを連れて王都に来ていた。

昨日の夜にフィリンの武器がナイフだけだということに気付いたルイズはまともな武器がないと心もとないといい、フィリンを王都に連れていったのだ。

「にしても、随分狭い道ですね。」

歩きながら通りを見ていたフィリンはルイズだけに聞こえるようにポツリと呟いた。

「小さいってあんたね……ここブルドンネ街はトリスティンで一番大きな通りなのよ、それを狭いなんて……」

ルイズからしたら広い道らしいが、フィリンが昔見た街ではこの通りの倍ぐらいある道を見たことがあるのでどうしても狭く感じてしまう。

フィリンが昔の事を思い出していると、ルイズが裏通りの方に曲がった。

表通りとは違い裏通りは生ゴミなどが散乱しており、フィリンは顔をしかめた。

「臭いですね、こんなところにあるんですか？」

「そうよ、さっさといきましょう」

フィリン達が武器屋に入ると武器屋の店主はぐったりしながらフィリン達を出迎えた。

「い、いらっ……しゃい、」

「どうしたんですか？」

フィリンが問いかけると店主は

「いやね、さつきちっこい嬢ちゃんが店中の武器全てで試し切りしてって、ほとんどの剣が折れちゃって。あげくの果てに買っていったのが一番ボロい剣だったから、大損しちゃったんだよ。はあ、今日は店じまいだ嬢ちゃん達は出ていった。」

ルイズは不満そうだったが、この世に絶望したような店主の顔に同情したのか、返っていった。

ルイズ達が出ていった店で店主はため息をつきながら言った。

「嬢ちゃん、もういつちまったぜ、」

すると店の奥から先程までこっそり隠れていたイリアが出てきた。

「ありがとう店主さん、これは約束のお金と武器だから、受け取るときなさい。」

そう言っただけでイリアは足元に金貨の山と見るだけで業物とわかるような武器の数々をぶちまけた。

「しかしいいのかい、この金貨の量、どう見ても300万エキユーを越えてるぜ、しかもこの業物たち、こんなの何処で仕入れたんだい？」

しかし店主の問いかけにイリアは笑いながら

「乙女には、色々秘密があるってことで」

実際はイリアが能力を使い作っただけなのだが、それは店主に言わず、イリアは店を出た。

後にこの武器屋はトリステイン一の武器屋となるのだがそれはまた別のお話

ブルドンネ街を歩きながらフィリンはふとイリアの事を考えた

2日前からイリアの城が消えた、別にそれだけならいいのだが、周りの生徒たちからイリアに関する記憶が失われていることに気付いた、試しにルイズに聞いてみると、

「イリア？誰？それ」

という返事が返ってきた、フィリンは暫くイリアの行方について考えていたが、

「フィリン！！ぼさつと立ってないで早くしなさいよ！」  
というルイズの声で思考を中断した。

（まあ、大したことは無いでしょうしね）

そう考えてフィリンはルイズの後を追った。

オスマンは学院長室でイリアと向かい合っていた、ついさっきイリアがいきなり虚空から現れてから（イリアは空間を繋いだ、と言っていた）無言のまま二人は佇んでいた、

「さて、イリア君今更此処に何のようかね？君はフィリン君を助けるために動いている筈なんだが」

するとイリアは薄く笑いながら口を開いた。

「私は、フィリンを助ける。貴方はそれを邪魔しなければいい、それだけよ。」

それだけ言って、イリアは学院長室から出ていった。

そして次の日

学院の宝物庫から一つの宝が消えた。

名を覇者の剣という

### 其の十三

学院長室では昨日起きた土くれのフーケによる宝物庫襲撃事件で誰に責任があるのかという不毛な争いが続いていた。

「皆の衆静かに、この件では誰に責任があるわけでもない、この中で一度でも真面目に当直をしたものがおっただろうか、いるのなら名乗りたまえ。」

オスマンは教師たちに問いかけるが誰も前に出るものはいなかった。騒ぎが収まったのを見てオスマンは話を切り替えた。

「さて、昨日フーケを見たというものたちを呼んでおる。ミス・ヴァリエール、とその使い魔のフィリン君、ミス・ツエルシュプトー、ミス・タバサ、ミス・セベリアじゃ。」

オスマンに呼ばれて壁の方で空気になつていたルイズ達は慌てて姿勢を正した。この中で一番冷静なタバサがオスマンに事情を説明する。

「ふむ、つまりおぬしらが昨日外でしていたら怪しいフードの2人組が宝物庫の壁を壊していったという訳じゃな、」

するとコルベルがオスマンに質問してきた。

「しかしオールド・オスマンこんなことがあり得るのですか？宝物庫はスクウェアメイズが3人がかりで固定化をしかけております、例え相手がフーケでもあんな風に破壊するのは不可能です。」

コルベルは破壊された宝物庫の様子を思い出していた。あれは明らかに異常だった、宝物庫の壁が渦を巻くように捻れて穴が開いていたのだ。

「さて、諸君もしや一刻の猶予もない。誰かフーケ討伐を自ら願ひ出る者はいないか？」

オスマンがそう言うと教師達は黙り込んでしまった。誰だって命は惜しい、その中で教師の一人が期待するようにオスマンに言った。

「しかし、オールド・オスマン、フーケは逃走してしまつたらしい

ですし私たちが向かっても……………」

「その心配は無用だ。」

教師の発言を途中で遮ったのは壁の端にもたれかかった一人の少女だった。

セミロングの綺麗な金髪に深緑の瞳、年のわりには小さいルイズより更に小さい人形のような少女は外見からは想像もできない粗暴な口調で話始めた。

「土くれのフーケと思われる人物は俺のサーチャーで追っている。居場所は近くの森の廃屋だ。ヤツはどうやらそこで一休みしているらしい。しかし、もう一人の方に付けていたサーチャーは破壊されてしまつて行方が掴めない。もしかしてフーケはこの中にいるかもしれないな。」

そういつてオスマンの横にいたロングビルを睨み付けながら彼女リース・ド・セベリアは口を閉じた。オスマンはリースの最後の一言を咎めるように視線を送ったが当の本人がオスマンの方を見ないので諦めて話を進めた。

「では、フーケの居場所もわかった所でもう一度聞くが、フーケ討伐を志願するものはおらぬのか？」

オスマンの言葉に教師は全員目をそらした、その反応を見て舌打ちをして名乗りを上げた人物がいた。

「ミス・セベリア！貴女は学生でしょう！」

「最低でも、その腰抜けには言われたくないな」

「私も行きます。」

「ミス・ヴァリエール！貴女まで」

「だって、誰も志願しないじゃないですか」  
するとルイズの横にいたキュルケとタバサも同じように名乗りあげた。

「ふむ、ぬしらは本当に良いのか？これは遊びではないのだぞ。」  
そんなオスマンの言葉を鼻で笑いながらリースは言った。

「はっ、ついにボケたかクソジジイ、そんなことなんか百も承知だ



「つーの」

しばらくリースと睨みあっていたオスマンだったがやがて目をそらすと言った

「しばらく見ないうちに代わりおったな。覚悟のあるいい目をして  
おる。よからう行くがいい。」

「しかし、オールド・オスマン！彼女達は生徒ですぞ！」

「ならばミスタ・ギトー、おぬしが行くのかね？」

「いや、私は持病の腰痛が……」

水を濁したギトーは無視してオスマンは話を続けた。

「それに彼女らは優秀なメイジであると聞いている、ミス・ツイル  
シュプーは代々優秀な炎のメイジを生み出していると聞く。」

それを聞いてキュルケは恭しく礼をした。

「ミス・タバサはなんとこの年でシュヴァリエの称号を取っている」  
周りの教師達の視線がタバサに集まる。となりにいるキュルケも驚  
いたように目を開いていた。

「そして、ミス・ヴァリエールは……」

あまり良いところが無いので言葉に詰まったオスマンをフィリンは  
物凄い表情で睨んでいたので慌てて言葉を絞り出した。

「彼女の家は代々凄いメイジを輩出しておるし、座学の成績は学年  
で一位をとっている、それに使い魔のフィリン君は前代未聞の人間  
の使い魔じゃ、きつと役にたってくれるじゃろう。」

ルイズの横のフィリンは無表情のまま礼をした。

「そして、ここにいるリースは何と言ってもこのわしの孫じゃ、そ  
れに10歳でスクウェアになっており、特別に11歳で入学をして  
おる。このメンバーに不安があるものは正直に申し出るがいい。」  
オスマンの言葉に教師達はなにも返せなかった。その反応を見て満  
足そうにオスマンは頷くとルイズ達を見て言った。

「では、諸君！くれぐれも無理をするなよ。」

そして、土くれのフーケ討伐が幕を開けた

一つの異分子を加えて

## 其の十四

ルイズ達は馬車に揺られながらフーケの下に向かっていった。しかしこの中に馬車を使える人物がいないので、この辺りの地理に詳しいらしいロングビルが案内役を任せられた。

そんなこんなで馬車の中ではルイズは時折心配そうに馬車の外を眺めており、キュルケは暇そうに爪の垢を取っている、タバサは相変わらず黙々と本を読んでおり、リースは壁に目を閉じて寄りかかっている。そしてロングビルは馬の手綱を握っていた。

暫くすると単調な景色に飽き、することがなくなったらしいキュルケがロングビルに話しかけた。

「ミス・ロングビル、手綱なんて付き人にやらせばいいのにどうして自分からかってでたんですか？」

するとロングビルは優しく微笑みながら自分が没落貴族であることを話した。しかしキュルケはもっと詳しく知りたいらしくしつこく話しかけている。そんななか声をかける者がいた。

「そこら辺で止めときな、誰だつて知られたくない過去ぐらいあるだろ、其処らが潮時つてヤツさ、キュルケ。」

リースはそう言うつと、壁にもたれかかりまた目を閉じた、醒めてしまったらしいキュルケはロングビルに謝るとまた爪の垢を探し始めた。

俺は壁にもたれかかりながら考えていた。この世界に生を受けて1年、通りすがりに包丁で刺されて死んでから俺はどうやらゼロ魔の世界に転生してしまつたらしい、まあ、この世界は既に原作から離れてしまい原作知識なんて言うものは役にたたないが。まずルイズが使い魔の召喚で才人の代わりにあんなのを召喚するとは思わなかった、しかも片方はルーンを自力で消すというチートっぷりを見

せつけていた。さらにチートの方が1日で空飛ぶ城を建てたり全員  
の記憶を消したり、あの自称神が言っていた化け物ってどうやらこ  
いつのようだな、しかもなんとヤツはルイズ側ではなくフーケ側に  
まわりやがった、転生時に追加された能力（神が言うにはあらゆる  
生き物はなんかしらの能力を持っていて自覚することでその能力が  
目覚めるらしい）と生前の能力をフル活用して勝てるかどうか。

「着きました、ここからは徒歩で行きましょう。」

フーケが目的地への到着を告げる。俺は気を引き締めながら鬱蒼と  
生い茂る森の中に入っていった。

（来た）

探查結果が侵入者の存在を告げるのを感じてイリアは目を強化して  
侵入者の姿を捉えた。

（自分からやってくるなんて、手間が省けたわね）

イリアは桃色の髪を視界に捉えると口を開いて呟いた

「視線上の者を狙い打て、『氷槍』」

イリアの能力の一つである言葉を現象にして起こす能力によって放  
たれた氷の槍はルイズの脳天に向かって進んでいく、そして

「危ない!!!」

ルイズの脳天に向かって氷の槍が迫っているのを見てフィリンは声  
をあげた、しかし距離が遠い。その時ルイズと氷槍の間に炎の壁が  
現れた、炎の壁に当たった氷は一瞬で蒸発した。

「ルイズ、俺はあいつをやってくる、お前はフーケを頼む、」

そう言うトリスは氷槍が飛んできた方向に飛んでいった、

そして異分子同士の闘いが幕を開けた

## 其の十五

リースは先程氷槍を飛ばしてきたイリアの方に駆けていた、そんなリースをイリアは一瞥すると一言呟いた。

「火焰」

リースはとっさに横に跳ねるとさつき自分がいた空間を紅い炎が飲み込んだ。そして腰に差してあった細身の長剣を抜いた。

剣は黒く塗り潰されており、可憐なリースが持っているとは拭いようもない違和感があった。相手が剣を抜いたのを見てイリアは目を細めた、そして再び口を開いた。

「短剣・乱舞」

リースの回りにまるで鳥籠のようにナイフが現れた。ナイフは不規則に動きリースに襲いかかった。リースはそれを目にも止まらぬ剣捌きで撃ち落としてそのままイリアの元に向かった、

「武器顕現・太刀」

イリアは虚空から現れた血のように紅い剣を掴むとリースが振ってきた刀を受け止めた。イリアはそのままリースの首めがけ剣を振った、リースはそれを紙一重で避けるとそのまま後ろに下がった、

「葵」

その空間を詰めてリースは剣を振った、イリアは上空に逃げる、

「柳」

振った剣をそのまま上に振り上げる、イリアはその剣を受け止めようとしたが止めきれず後ろに下がった、

「鎌鼬」

そして神速の速さで放たれたリースの剣はイリアを両断した。

俺は目の前で二つに別れた体を見ながら呟いた。

「また、つまらぬ者を切ってしまった」

言ってから結構恥ずかしいことに気付き誰も見ていないか後ろを振り返った、取り敢えず誰も見ていないのを確認するとほっと息をついて前を向いた。

「つまらないなんて酷いじゃない」

さつき切ったはずの少女が立っていた、二つに分かれた黒いゴシッククロリータは自らの血に染まり、血溜まりの中に立っていた、とっさに身構えるが、イリアは太刀を投げ捨てるとその場に座った。

俺はいきなりの行動に驚いたが相手がこちらに座るのを進めたので相手に倅い座った。

「さて、まずは初めまして、私はイリア・フロイス。貴女の名前は何て言うのかしら？」

「俺の名前はリース、リース・ド・セベリアだ、それであんたは一体俺に何のようだ。」

俺がイリアに問いかけるとイリアはクスクス笑いながら口を開いた。「私が、こうしてもらったのは貴女に約束してもらいたい事があるの、単刀直入に言うと……私と手を組まない？」

暫く俺とイリアの間に沈黙が降りた、俺は今言われた事が信じられず、もう一度聞いた。

「だから、私と手を組まないかっていう話、後、拒否したら殺すから。」

次の瞬間、俺の下から無数の剣が飛び出した。俺の背中を冷や汗がつつたう、どうやら相手は遊んでいたらしい、俺は暫く黙ると口を開いた。

「いいだろう、どうせ拒否したら殺されるんだ。せいぜいお前の下についてやるうじゃないか。」

すると、イリアはくすりと笑って言った

「交渉成立、ね。」

交渉っていうより脅迫だらう、と思いながら。差し出された手を握った。

「じゃあ私はフーケの所に行って来るけど、貴女も来る？」

私がそう問いかけるとリースはゆっくりと首をふった、それを見て私は、

「なら、どうするの？」

と聞くとリースは

「ここで寝てるよ、」

と言ってリースは目を閉じた。そして私は全速力でフーケの所へ向かった。

## 其の十六

フーケの所ではフーケのゴーレムとファイリンが戦っていた、ゴーレムが振った腕を避けてファイリンが魔術の詠唱を始める、しかしゴーレムの足が地面に降り下ろされ、揺れる大地にファイリンの詠唱が止まる。そしてまたゴーレムが腕を振る、この繰り返しで戦場は膠着していた。しかしその膠着状態に終止符を打った者がいた。イリアである。

物凄い勢いで突っ込んできたイリアはその勢いのままファイリンの腹目にかけてパンチを打ち込んだ。ファイリンはそのままの字に折れて吹っ飛んでいた、イリアはふっ切れたような顔をしてファイリンが吹っ飛んでいった後を見ていた。あまりの出来事にルイズ達はポカンとした顔のまま突っ立っていた。最初に動いたのはタバサだった、詠唱をしながらイリアに杖で殴りかかる、しかしイリアは振り向きもせずに

「炎壁」

と言った、イリアとタバサを分けるように炎の壁が現れる、タバサは慌てて立ち止まったがすぐに冷静になると詠唱していたエアハンマーを壁にぶつけた、しかし、壁の向こうにはイリアの姿はなかった、タバサはイリアを探すが見当たらない、その時キュルケが声をあげた

「タバサ上！」

慌てて転がったタバサのすぐ横にイリアの大剣がめり込んだ、タバサは小柄な体には似合わない大きな杖をイリアの頭目にかけて思いっきり降り下ろした。イリアはタバサを見ながら言った

「捻れる」

ゾクツと

タバサの背筋を悪寒が走った



体勢を気にせず地面に転がる。背後で木々の捻れる音が響いた、後少し逃げるのが遅かったらタバサの体は原型をとどめていなかっただろう。しかし危機は去っていなかった、イリアはタバサに向かって大剣を降り下ろした。そしてタバサの小さい頭は地面に落ちた、

しかし、頭と胴体は繋がったままだったが

剣の腹で頭を叩かれたタバサはその衝撃で気を失っていた、啞然としているキュルケを同じように昏倒させ、残ったルイズの前にたつた、ルイズは歯を鳴らしながらイリアを見上げていた、しかし、ルイズはハツとした顔をする

「フィリン！！助けて！！！」

と言った、しかしフィリンが来る気配がない。いつまでも来ないフィリンに苛々しているのを見てイリアは一言告げた。

「フィリンは来ないわよ、いまごろフーケのゴーレムと悪戦苦闘しているをじゃない？」

今度こそ、全ての希望を失ったルイズはその場に崩れ落ちた、鳶色の瞳からは涙が溢れだしていた。そんなルイズにイリアは救いの糸を垂らした。

「助けてあげようか？」

ルイズは顔をあげた、

「本当に？」

イリアは笑いながら言った

「嘘」

希望の後の絶望ほど質の悪いものはない、ルイズの瞳から全ての光が消えた、イリアはそれを見て満足そうに笑うと、ルイズの頭に手を置いて呟いた。

「精神破壊」

ルイズは一瞬ビクリと震えるとそのまま倒れていった、ルイズとファイリンの魔力のパイプラインが切れたのを見てイリアはその場を後にした。

ファイリンはルーンが消えていくと共に今までの事を思い出した。今やルイズの事などファイリンの頭には無い、ファイリンの頭の中はイリアの事で埋まっていた。それを見たフーケはゴーレムを崩すとファイリンに言った。

「もういいかい？」

ファイリンは頷くと、フーケに目礼し、イリアの元へ行った。

イリアは走って来たファイリンに笑いかける、イリアの求めていた光景がそこにはあった。

物語はこうして幕を閉じる

はずだった

「待て」

後ろから声がした。イリアが後ろを見るとそこには白い布を纏った老人の姿があった。

「貴方は、誰かしら？」

「神だ」

序章は終わり、物語の幕が上がった

## 其の十七

神と名乗った老人はその威厳に溢れた顔をこちらに向けた。隣のフイリンが緊張しているのが伝わってくる。神は私の方を見ながら重々しく口を開いた。

「貴様達の行動がこの世界を改変してしまったのは、知っているだろう？ 貴様の能力は修正力程度では排除できん、『黒の者』は元々我々の部下では無い、つまり現状では貴様を排除する方法は無いのだ、これを踏まえた上で貴様に話がある」

神の話からすると私のせいで世界が変わってしまった、手っ取り早く殺したいけど現時点で私を殺す方法は無い、だから妥協案があるので聞いてくれて事らしい。

「いいわ、貴方の話を聞かせてもらうけど、私の機嫌をあまり損ねないでね。」

神は頷くと、ゆっくり話始めた

「貴様はこの世界の核の一つである『ルイズ ヒロイン』を精神的とはいえ殺してしまった。まあ、これは『黒の者』がもたらした事態なので我々にも非があるが。つまり、貴様はこの世界が修復するまで、『ルイズ』を守り抜いてほしい。」

私は神の説明を聞いて一つ疑問を覚えた所があった、ルイズが死んだのにはこちらにも非がある？ ルイズを殺したのは紛れもなくこの私だ、少なくとも神に手を貸りた覚えは無い。

「私は貴方の手を借りた覚えは無いけど？」

神は微かに笑うと口を開いた。

「確かに私は貴様に手を貸していないが別に私は貴様の手伝いをしたとは言っていないぞ、先程も言ったが、『黒の者』 奴はナイアルラトホテップと名乗っていたが、あいつは噂程の強さではない。せいぜい私の部下を倒せるかどうか、といったところか、しかし奴は成り代わるのは異常に上手かった。貴様は気付かなかった様だが

奴は一度貴様の従者に成り代わっていたのだぞ。」

その瞬間全てが繋がった。あの時フィリンが私を罵倒したのも、フィリンがルーンに飲まれた訳ではない、ただ単純にあればフィリンではなかったただけだったのだ。つまり、私がルイズを殺したのは無意味

「いや、貴様の従者は『ルイズ』を殺さなければ元に戻らなかった。奴は貴様らの背中を押し、Bad end へ導いただけだ、貴様だけが悪いわけではない。」

神はそういったが私がフィリンをああゆうふうにしてしまったという事実は私の心を責めていた。あの時私がフィリンを信じていればそんなもしもの世界を考えずにはいらなかった。

「もう一度問おう。この世界の為にルイズ達を守ってくれないか？もう私はその提案を断ることができなかった。しかし、ルイズは私が殺したので守るも何もないのでは？と神に聞くと。」

「心配するな、手は打つてある。」  
「ただ言ってきた、私は苦笑しながら言った。」

「いいわ、私も暇してたしね。」  
神は私の言葉を聞いて薄く笑いながら頷くと頼んだぞとだけ残して消えていった。残された私達はいつものように互いの存在を感じながらまずはルイズ達の所に向かった。

森の中を飛びながら私は隣で飛んでいるフィリンを見た、一見いつもの無表情に見えるが、付き合いが長い（250年ぐらい）の私にはわかる、今フィリンは物凄く怒っている。しかし厄介な事に何で怒っているのか私には全くわからないのだ。しかし、いつまでも気まずい雰囲気なのは嫌なのでフィリンに聞くことにした。

「えーと、フィリン？さっきから何で怒っているのか私に教えてくれないかな？」

フィリンはしばらく黙って飛んでいたが、やがてゆっくりと口を開

いた。

「私は、悔しかったんです、主はあの地獄のような場所から私を助けてくれました、私はその恩に報いようと心に決めて主のサポートをしていました。しかし、この世界で私の覚悟は只のルーンというモノに消されてしまうようなつまらない物だと知ってしまったんです、私は、主に恩を返せなかった……」

そう言っつてフィリンは俯いてしまった。私はフィリンに向かって言った。

「貴女が私と一緒にいたのは恩を返すためだったの？」

「い、いえ！そんなことはありません、」

フィリンは頭をブンブン振って否定した、私はそんな姿を見て笑いながらフィリンに言った。

「ならいいじゃない、ルーンに飲まれたならそうならないようにすればいい。もつと自分を磨けばいい。私はフィリンと一緒に居られればそれでいいのよ。わかった？」

フィリンは、はいと言っつて笑った、目の端に光るものがあったのは私の心に閉まっつておこつう。

「じゃあ早く行くわよ」

「はいっ！」

私とフィリンは森の中を加速した。

## 其の十八

神との約束を守るため、ぐったりしたルイズ達を学院に運び込むと、先に着いていたらしいリースにルイズ達を預けると認識障害の結果を私とフィリンの周りに張りながら学院長室に向かった。

学院長室に入ると、オスマンはゆっくりこちらを振り返り口を開いた。

「久しぶりじゃのう、イリア君 フィリン君、こうして二人でいるということはルーンを破壊したらしいの。まあその代わりにミス・ヴァリエールはベッドの上にいるのじゃが」

イリアはそれを聞いて顔をしかめて言った。

「私達を揺するのは諦めなさい、あれが壊れたのに対して私は後悔などしていかないのだから。」

「いやいや、わしは君達を利用しようとは思っておらんぞ、ただ一つ言いたいことがあつての。」

とオスマンは言うてから

「君達がこの学院の生徒達を利用しようとしたら僕は君達を許さない、それだけは覚えておきたまえ」

そう言つてオスマンはこちらを睨んだ、イリアはその眼を見ながら。

「わかつたわ、だけでもし、この学院の生徒が悪意を持って私達に攻撃したら……その時は容赦なくそいつを殺すわ。」

オスマンは少し笑つて言った

「まあ、イリア君は僕の孫娘と同じぐらいの歳なのじゃからあまり強い言葉を使わないでほしいのう、君みたいな可愛い子はダンスでもしていないさい、今夜はフリッグの舞踏会じゃ、よかつたら君達も参加してみたらどうじゃ？」

学院長室から出ようとしていたイリアはオスマンに見えないように表情を少し柔らかくするとオスマンの方を見ずに言った。

「まあ……出てやらないこともないわよ、」

そう、照れくさそうに言つて、素直じゃないのう、というオスマンの声を後ろに学院長室を出た。

その頃、医務室で寝ているルイズ達を見ながらリースは今まで起きていた出来事と自分が知つてる知識をくらべていた、

（まず、呼び出されたのが才人ではなく、イリアとフィリンだった、そしてギーシュとの決闘も起きなかった、今日だってマチルダは捕まったものの、ルイズ達は意識不明の重体、……………これは原作崩壊つていうかもうゼロ魔っばい何かだな。まあ俺は今まで道理死なないように努力するだけだけだな。）

頭の中を整理したリースは立ち上がつて医務室を出ようとした、そのとき

「う……………」

「!？」

うめき声と共にルイズが眼を開いた。

「此処は……………？」

ぼんやりとした眼で周りを見ながらルイズは口を開いた。それを見たりースは慌てて校医を呼びに行った。

わたしは少女が出ていった扉を見ながら自分の事について考えていた、しかしわたしは今までの自分についての記憶を全て失っていた。自分の名前もわからない

此処がどこかもわからない

わからないことだらけの頭のなかで知識だけがぐるぐると渦を巻いていた。テーブルマナーから武器の扱い方など膨大な知識の海にわたしたという透明な存在が埋もれていく感覚がしてわたしは不意に恐怖を覚えた、

このままわたしは消えてしまうのではないのだろうか。そんな漠然



とした不安に押されるようにわたしの頭には何かをしなくてはいけない。という一種の強迫観念のようなものを覚えた。

必死にやることを自分の知識から探していると一つの方法が頭の中に浮かんだ、

使い魔召喚

わたしはやつてみることにした。ぼんやりとしたまま杖を降り下ろす、そして

真っ白な光がわたしを包み。

爆発した

## 其の十九

ドン！！

その妙に懐かしい音を聞いた時俺は慌てて校医を呼びに行こうとしていた足を180度回して来た道を戻っていった。今の音は間違はなくルイズの爆発だ、しかしあの状態で一体ルイズは何の魔法を使ったのか？そんな疑問を抱えながら俺は医務室の中を見た。そこには。

黒い髪にパーカーを背負った才人（主人公）が立っていた

俺の名前は平賀才人ここ最近出会い系サイトで恋人をあさっていたら急に目の前に鏡が出てきてちょっと興味本意でさわってみるとそのまま吸い込まれてしまいましたとき。……………説明口調で誤魔化そうとしたが全く俺の精神は誤魔化されない、そんなわけで、俺は今の現状をはっきりさせるために大きく口を開いて叫んだ。

「ここ、どこーーーーー！！！！？」

いやいやいや、ここ何処だよ、気付いたらなにここ中世ヨーロッパかっつーの！しかも目の前の女の子なんて髪の毛が桃色っぽい金髪？だし なにここ？外国かよ！いやいやいや俺、落ち着け c o o 1になるんだ、素数は1、3、5、7、11って落ち着いていられるかあー！！あーもう どうしよー！

と物凄くテンパってる俺の前に小さい女の子が現れた、そこで寝ている女の子より小さく顔も幼い、しかしその深緑の瞳は年に似合わない大人びていた。

「x¢\$ - - % & ?」

しかし英語が得意と言うわけでもないので少女の英語？は全く聞き取れなかった。少女は俺を見て全く理解していないのがわかったの

かため息をつきながら首を振ると。

「あー、これなら聞こえるか？聞こえるなら返事をしてくれ。」  
と、凄く流暢な日本語を話した。一瞬呆気にとられた俺だったがな  
んとか持ち直すと少女に話し掛けた。

「えっと、言葉、通じるのか？」  
すると少女はほっと顔を緩ませた

「どうやら言葉は通じるらしいな、さて、俺はリース、リース・ド・  
セビリア。まあ適当にリースとでも呼んでくれ。君の名前は？」  
男みたいなしゃべり方をする少女　　リースはそっぴいなながら桃  
色の髪の少女を隣のベッドにのせて俺の目の前に座った。

「えっと、俺は才人　平賀才人だ、よろしくな。そういえば、リー  
ス……ちゃん？何で俺の言葉がわかるんだ？」

リースは俺の言葉を聞くと体を震わせた

「そのリースちゃんってゆうのはやめてくれ。なんか鳥肌がたつ、  
まあそれはおいといて、サイトの言葉がわかるのはこの魔導具があ  
るからなんだ。」

そういつてリースは水色の立方体っぽいものを取り出した。

「これはこの学院にいる最凶の人物であるイリア・フロイスから渡  
された物だ、いいか、奴に喧嘩をふっかけるな　いいな絶対だぞ！  
……まあ今は奴の話はどうでもいい、とにかくサイト、君は」

「何？今の音」

学院長室からでてしばらくした後、私とフィリンは適当に学院内を  
ぶらついてた。

「主、これからどうなさるおつもりですか？」

とフィリンが声をかけてきた、というよりあれほど主じゃなくイリ  
アと呼びなさいといったはずなのにまだ直せていないらしい、まあ  
それがフィリンらしさとも言えるけど、これだけは譲れない。

「フィリン、何度も言うけど主じゃなくイリアと呼びなさい、私は

貴女を従者としてではなく仲間として接していきたいの。」

するとフィリンはため息をついた。どうせ、内心 またこれか。みたいなことを考えているんでしょうね。

「何度も言いますが、この呼び方は昔 主に助けてもらった恩を忘れぬために、主とお呼びしているのです、だから私はこの呼び方を変えるつもりはありません。」

と、いつも通りの会話をしてからまた私達はお互いの存在を確かめ合いながらゆっくり歩き

「主、話をそらさないで下さい、これからどうするつもりですか？  
はあ、フィリンはまだわかってないようね。」

「フィリン、主じゃなくイリアと」

「話を蒸し返さないで下さい」

私の話に被せてきた、フィリン、でも私は自分の生き方を曲げるつもりは無いのよ。

「フィリン、私達は今まで通り、自分の道を行くだけよ。」  
今私、結構いいこと言わなかった？

「ようは、決まってるじゃないんですね。はあ、まあいいんですけどね。  
確かにいつも通りですし。」

……さつきからフィリンが冷たい気がする、気のせいかしら？

「ちよつとまってフィリン、それじゃまるで私が何も考えていないみたいじゃない。」

「そうじゃないんですか？」

ひどい、ひどいわフィリン、貴女そんな人だったのね。

と、馬鹿話をつづけていると、突然地面が揺れて 爆発音が響いた。  
「フィリン、いきましよう医務室よ。」

「結局 行き当たりばったりどころか、気分で動いてるだけなんですよけどね。」

そうして私達は医務室へ向かった。

「何？今の音？」

医務室に入るとリースと見知らぬ少年が二人で話していた。

「あー、ちよつと俺達は2人で話があるんで、ちよつと」

「あれ？リースの知り合い？」

少年がリースの科白を遮って私に聞いてきた。後ろでリースが頭を押さえているのが目にはいったけど気にしないことにした。

「ええ、私はイリア、イリア・フロイス、そこにいるリース・ド・セビリアのお友達よ。貴方の名前は？」

と、私が名乗った瞬間少年の顔がひきつったのが見えた、どうやらリースに何か吹き込まれた様ね、というわけでまず私は相手の誤解をとくことにした。

「安心して、リースに何を言われたか知らないけど、私は唯の女の子だから。」

後ろでリースが「唯の女の子が体を真つ二つにされて生きてるわけないだろ……」と呟いてたけど幸い少年の耳には届かなかったようだ。少年は私の言葉に安心したのかだいぶ緊張が緩んだようだ。「なんだ、ならいいんだ。俺の名前は平賀才人。気軽に才人って呼んでくれ。」

「わかったわサイト、フィリンもサイトって呼んで……」  
その時気付いた、いない。いつの間にかフィリンがいなくなっていた。いきなり慌て出した私を不審に思っているのかサイトは眉間にしわをよせていたがそんなことはどうでもいい。

「ちよつと用事ができたから、私はそろそろ行くわ。じゃあね。」  
そう言い残して私は医務室を出た。

## 其の二十

イリアっていう子が医務室から出て俺はリースに質問した

「なあ、あれが学院最凶なのか？普通の女の子じゃないか。」  
するとリースはため息をついた。

「お前はあいつが何歳に見えた？」

「何歳って………10歳ぐらいか？」

と俺は言った。というか、あの子が俺達より年上なわけ………

「500歳だそうだ」

「はあ？嘘だろ、冗談キツいぜマイシスター。」

「誰が妹だ、まああいつは吸血鬼だそうだが、嘘かは知らないけどな。」

マジかよ………にしても吸血鬼か、わかつちやいたがあの子が500歳と言われると改めて違いを見せつけられるな。

「さて、じゃあ本題に入るぞ。まずお前には自分が今どんな状況にいるかを把握してもらわなければいけない。」

そうして、リースは今の俺の状況を説明し始めた。

説明し終わった後才人は俺に一つ質問をした

「俺はこのルイズって子の使い魔にならなきゃいけないのか？」

「わからない、それはルイズ次第だ。」

その後、才人は黙り込んでしまったので、ルイズが目を覚ましたらよろしくな。と言いついて残して医務室を出た。

医務室の前には予想に反して誰もいなかった。あれほどの爆発なら一人ぐらい様子を確認しにきてもいいのに。そう考えながら学院の廊下を歩いていると後ろから声をかけられた。

「リース、ちょっといいかしら？」

後ろを振り返ると物陰で手招きしているキュルケがいた、隣にはタ

バサがいつも通り本を読んでいた。何故か二人そろってポロポロだった。

「ああキュルケか、どうした？そんな格好して」

「どうもこうも、あの爆発のすぐ近くにいれば誰だってこうなるわよ。まさか貴女私達の事忘れてた？」

思い出した、そういえばキュルケ達はルイズと同じ医務室にいたんだった。確かにあの爆発に巻き込まれたならこうなるよな。

「御愁傷様でした。」

「死んでないわよ」

「……………失礼…………」

「で、何のようだ？」

「そうそう、あの平民何なのよ、ルイズは人間を呼び出すのに特化してるの？」

む、キュルケが鋭いぞ、

「さあな、俺は知らないぞ。」

そう返すとキュルケは凄く不満そうな顔をしたが、諦めたように溜め息をついた。

「全く、もしあの平民もあの吸血鬼と同じ化け物じゃないことを祈りましょうか。」

「誰に？」

嫌に聞き覚えがある声がキュルケの後ろから聞こえた。タバサは咄嗟に身構えたがキュルケは壊れた人形のようにゆっくり後ろを振り返った。

「それに、私は化け物じゃ無いわ」

イリアがそこにいた。

はつきりいうとここにいる全員、イリアに良い感情を抱いていない。俺は圧倒的な戦力差を見せ付けられたし、キュルケ達にいたっては、ポコポコにやられた相手だ、いい感情を抱いている訳が無い。そんな敵意を浴びながら、イリアは笑いながら口を開いた。

「あらあら、そんなに睨まないでもいいのに、私はただ道を聞きに来ただけなのよ。」

普通なら信じてもいいのだがこいつが言うと、どうしても胡散臭く感じてしまう。俺達が警戒を解かないのを見ると呆れたのか溜め息をついてからイリアは言った。

「はあ、ま、勝手に聞くけど。……………フリッグの舞踏会ってどこでやるの?」

「え?あ、ああ、大広間でやるけど……………」

「何処?」

「ここを右に曲がって真っ直ぐいくとそうだけど……………何?舞踏会での?」

正直、凄く意外だった。というか何かこいつが踊っている姿が想像できない。

それ以前にこの学院の舞踏会は基本的に生徒と教師しか参加できないのにならしてこいつは参加できるのだろう?そう考えているとイリアはもう用はないと言わんばかりに大広間に向かって歩いていった。



## 其の二十一

少しぼんやりする頭を起こしながらわたしは目を開けた。どうやら、あの後気絶してしまっただけらしい。

「起きたか？」

知らない声が聞こえた。声の方向をむくと黒い髪をした少年がいた。わたしとおなじぐらいの歳に見える。少年は顔をしかめながらこちらを見ていた

「あなた、だれ？」

少年はむすつとした表情のまま口を開いた。

「平賀才人。お前に召喚されたんだって。お前は？」

答えられなかった。さつきからわたしは凄い虚無感に襲われていた、漠然と何かを失ってしまったという感じがした。わたしはぼんやりとしたまま口を開いた。

「わかんない、なまえはわすれた。」

少年はそれを聞いた瞬間、しまったという感じの顔をするとそのまま下を向いてしまった。別に気にしなくてもいいのに、と思いがながらわたしは少年に言った。

「べつに、わたしのことはきにしないでいいよ。きみはじぶんのことだけかんがえていればそれでいいの。」

どうも、呂律がまわらない、起きたばかりだからか、それとも記憶を失ったばかりだからか。それとも

「あのさ、さつきはすまなかった。色々混乱していて。実はさつき君の名前を覚えてもらったんだ。君の名前はルイズっていうらしいよ。」

ルイズ、その名前は凄く懐かしい響きだった。しかし、今のわたしは違う。ルイズではない。

「わたしはわたし。ルイズはむかしの私。いまのわたしはルイズじゃないの。」

「じゃあ君の事を何て呼べばいいのかな？」  
わたしが考えても何もいい名前が浮かばなそうだから、  
「きみがかんがえてよ」

いきなり言われた。しかも名付けという凄く責任重大な事を任せられても困る。

ただこの今にも消えてしまいそうな女の子を放っておくことも出来ない。普段なら気にすることも無いのに何故気になるのか？答えは出ないが悪い気分では無かった。

「そうだ。リンっていうのはどうだ？」

少女はぼんやりとしたままこちらを見るとしばらく「リン、わたしのなまえはリン………」と呟くと。

「ありがとう、さいと」

そう言って笑った。俺はその笑顔に見とれていた。

「ああ、そうだ。この後フリッグの舞踏会っていうのがあるらしいぜ。一緒に見に行こう。」

すると、リンは少し考える素振りを見せてから

「いいよ」

と言った。

「じゃあ、早くいこう。」

そう言ってリンの手を握った。

『私は、まだ死にたくないの。』

そう言って私は目の前の人間を殺した。初めての殺しだった。  
「っ……！」

いきなり頭の中に映像が流れた。慌ててリンから手を離す。いきなり手を離されたリンは凄く不思議そうな顔をして

「どうしたの？」

と言ってきた。俺は首をふって何でもないと言ってリンを起こすためにおそるおそるリンの手を握った。

……なにも起きない。やっぱり気のせいだったのだろうか  
？表情に出さないように気を付けながら俺はリンの手を引いて医務  
室を出た。

しかし頭にはさっきの赤い荒野の風景がこびりついていた。

## 其の二十二

夜、学院の大広間ではたくさんの生徒たちが踊っていた。

その中で壁の端のほうに黒いゴシッククロリータを纏っている人影が赤ワインを飲みながら舞踏会を眺めていた。

イリアである。

隣にフィリンの姿は無い。なぜならフィリンは今、厨房で働いているからだ。実は昼にイリアがフィリンを探し回っていたころ厨房のマルトーに働かせてほしいと言ったらしい。

そんなわけで今イリアは一人でチビチビワインを飲むしかないと言っただけである。最初は他の人と踊ろうとしたが踊りたい相手がいなかったなので独り寂しく端で舞踏会の様子を見ているのだ。

「はぁ………暇ね。」

そう呟くイリア、その少し離れた所にはリースがイリアを見ていた。確かに自分が大広間で舞踏会をやることを言ったが、本当に来るとは思っていなかったのだ。そして意を決したようにリースはイリアに話しかけた。

「なぁ、何でお前はここにいるんだ？」

そう声をかけてきたリースをイリアは横目でチラリと見た。

「別に、何も無いとつまらないでしょう？独りだと暇なのよ、だからここにいるの。まあ、見ていただけだね。」

そう言っただけで視線を前に戻した。つまらなそうな顔だったがリースにはそれが寂しそうな顔に見えた、おそらくそれはその目が遠い夢を見ているようにみえたからだろう。

決して届かない遠い夢をそれでも掴もうとしているように、イリアは舞踏会の様子を目を細めて見ていた。

その頃大広間のテラスではリン ルイズ と才人が二人で空を見上

げていた。

「なあ、リン。俺の世界では月は一つなんだぜ。」

「そうなんだ」

「そうだよ、それにビルが沢山あって星がほとんど見えないんだ。」

「そう、もったいないね。こんなに綺麗なのに。」

「……………ああ、そうだな」

そう言つて。再び才人は空を見上げた。

異世界の空はもといた世界と違う星たちが煌めいてとても新鮮に感じ、それとともに此処が異世界だという事を明確に表していた。

「なあ、リン。」

「なに？」

「……………星が綺麗だなあ。」

「……………そうだね。」

そのまま二人で空を見上げていた。

「ミスタ・コルベール。」

「はい、何でしょう？」

学院長室　ここでは二つの人影が話をしていた。

「あの、覇者の剣は何処にいったのかのう？」

しわがれた声が学院長室に響いた。

「フーケが盗んでから、追っ手を仕向けましたが。見つからなかったとの事です。」

「フム、よい。それより例の事じゃが……………」

「それより、一つ言いたいことが。」

「？」

細い影　コルベールは杖をふつて周りのランプに灯りを着けた。

「なんじゃ、せっかくの雰囲気が台無しじゃろう。」

オスマンは不服そうな顔をしてコルベールを見ていた。

「私は目が悪いんです！あんなに暗いと周りが見えません。」

まだオスマンは不満そうだったが諦めたように首をふった。

「まあ、いいかの、それで例の件じゃが、どうかの？」

「予定道理、明後日には着くそうです。」

「わかった。出迎えは丁重にの。」

オスマンがそう言うのとコルベールは顔を引き締めた。

「わかりました。大事な客ですからね。」

「うむ、宜しく頼むぞ。」

オスマンの言葉に頭を下げるとコルベールは学院長室を出た。

その頃、遠く離れた道では豪華な馬車が学院に向かって走っていた。周りにはグリフォンに跨がった護衛の兵士がいる。その中の一人が馬車に近付き声をかけた

「様子は？」

「今は眠っておられる。そのまま警戒を続ける。」

護衛の兵士は頷くとそのまま馬車の周りを警戒した。中にいる老人はそのまま目を閉じようとしたが、後ろから聞こえた声に嫌そうに目を開けた

「あらあら、寝てしまったのかしら？残念ね、もつとお話したかったのに。」

その声をかけたのは16歳ぐらいの少女だった。

白い髪は足まで伸び、肌は雪の様に白く、肌と同じ色のワンピースを着ている、宝石の様な赤い目をした少女、しかし彼女を見たときにまず目を引くのは顔に刻まれた薔薇の紋章だろう、血のようなその薔薇は右目に覆い被さるように刻まれ、整った彼女の顔を歪めていた。

「ローズ、貴様は外で護衛をしている。」

するとローズと呼ばれた少女はつまらなそうに口を尖らせた。

「えー、だって私はグリフォンなんかに乗れないもん。ばっかじゃないの？」

老人は額に青筋を立てながら震える声で言った。

「貴様は使い魔があるだろうか………」

「私の使い魔は上で偵察中ですー、それに、呼ぶの面倒臭いし」  
ローズはダルそうに言った。

「それに私は傭兵だよ？ 気楽にやらせてもらうからね。」

老人はため息をつくと疲れたように言った。

「はあ、まあいい。それ相応の働きは見せてもらおう、貴様の仕事は向こうに着いたら知らせるからな。期待しているぞ『神焰』」

ローズは露骨に嫌そうな顔を見ると老人に向かってこういった

「あんたはお姫様のおもりでもしてな鳥の骨。」

このあとも姫が起きるまで論争は続いた。

二日後

## 其の二十三

私は朝早く起きる。昔の私は遅く起きていたらしいが今の私には関係ないことだ。

私は背伸びをしてベッドから出る、着替えるのが面倒臭いので私は制服のままだ、才人はそれを汚いと言うけれど。才人も同じ服を着たままなのでお互い様だと思う。

才人はまだ床で寝ている。私はベットで寝ていいと言っただけ。才人は顔を赤くして床で寝ると主張した。どうやら才人はベットが嫌いらしい、なので何故かあった藁束をしいて才人の寝床にしている。近い将来なにか藁束の代わりを買おうと心に誓った。

私は才人を揺すりながら起こす。才人はしばらく後五分などとぶつぶつ言い続けるがあらかじめ用意してあった冷水を顔に掛けると途端に床から飛び起きる。そして私の方を見ると状況を理解したらしく溜め息をついた、

「またか、水はやめてくれって言っただろ。」

「そうでもしないと、才人は起きないでしょ。」

才人はぶつぶついいながらぐっしり濡れたまま藁束から出た。私は才人の手を引きながら部屋を出る。そしてそのまま前のドアに突撃した。

「キュルケ、起きてる？」

すると中からキュルケが眠そうに目をこすりながら出てきた。

「はあ、朝から元気ねえ。また使い魔を濡らしたの？」

「使い魔じゃないよ友達だよ、ねえ才人。」

「あ、ああ。そうだな。」

そんな会話をしてキュルケに才人を乾かしてもらおう。才人は気持ち良さそうにキュルケが出す温風に当たっていた。

「ありがと、キュルケ。」

キュルケは驚いたように目を開きながら口を開いた。



「あなたに礼を言われるとわね。今日は雨かしら。」

今の言葉からして昔の私は礼儀を知らないらしい。昔の自分の人間性を疑ってしまう。不思議そうにしているキュルケを置いて、私達は廊下に出た。私は自分の首にかかっている物を見た。紅い綺麗な球状のペンダントだ。一昨日イリアに記憶喪失なのがばれたくないと言っただけの物だ。皆から恐れられているが、案外優しいのかも知れない。イリアが言うには軽い認識障害の結界を回りに張っているらしい。

「才人、じゃあね。厨房は向こうだからシエスタにご飯貰ってね。」  
「おうっ、またな。」

私は手を振りながら才人を見送った。そして才人の姿が見えなくなると食堂の中に入った。

遠くから馬車が学院に近づいて来る。常人には米粒程にしか見えな  
いだろうが、私は人では無いので関係無い。何もすることがなく、  
私は学院の屋根の上で寝転んだ。初夏の暖かい風が私を撫でていっ  
た。

「主、学院長の仕事はしなくてよろしいので？」  
ふと隣にいるフィリンが声をかけてきた。どうやら仕事が一段落し  
たらしい。

「例の監視でしよう？いいのよ別に、私は今そんな気分じゃないの。  
それにあれはあいつが思っているほど危険じゃないわ。」

「死人が憑いていても、ですか？」

沈黙がおりた。確かにあの子からは死の香りがする、が。

「フィリン、分かっているでしょう？あの子は死んだの、その脱け殻  
にさまよう意識が憑いただけ、例えその意識を取り除いても何も残  
らないのよ。」

フィリンはそれを聞くと、納得のいかなそうな顔をしていたが礼を  
すると下に降りて行った。おそらく給仕の手伝いに行ったのだろう。

「……………寝よ。」

空はどんよりと曇っており、私の周りは冷やしてある。  
絶好の昼寝日和だ。

……………まだ朝だけど。

## 其の二十四

どうやら今日の授業は中止らしい。ギトー先生の授業中にカツラを被ったコルベル先生がつっこんできてお姫様が来るから授業は中止などと言ってきた、ついでにその後カツラが滑り、タバサから滑りやすいとの言葉をもらっていた。

そして今、才人をつれて学院の前でお姫様を出迎えている、皆の歓声を浴びながら手を振っているお姫様を見ていた。

「へえ、中々可愛いじゃない。」

と、いきなり後ろから声をかけられた。後ろを振り返るとイリアが立っていた。

「ああ、イリアか。」

「あら、あまり驚かないのね。大体の人は驚いてくれるのに。つまらない」

そう笑いながら言っただけで私の隣に来た。すぐ近くの才人が気付いていないのを見ると認識障害でもしてるのかもしれない。

「で、何しに来たの？お姫様の冷やかかし？」

「冷やかすまでもないわよ、所詮お飾りだし、それより、貴女に忠告しに来たの。」

私は改めてイリアの顔を見る、イリアは飄々とした笑みを浮かべながら私の胸のペンダントをつついた

「あまり認識障害を過信しないようにね。場合によっては記憶喪失の事を話した方がいいときもあるのよ、それだけを覚えておきなさい。」

「でも、私の親が悲しむでしょ、誰かに言えばその人が他の人に漏らすかもしれないじゃない、だから私は誰にもこの事を言わないようにしたいの。」

イリアの忠告はもつともだ。しかし私はこのルールは守りたい、そう決めた。そんな私にイリアは小さく笑った。

「優しいのね、私はそういうの嫌いじゃないわよ。……………まあ相手から喋らしておけば大体の関係がわかるから、頑張りなさい。」  
そう言っただけでイリアは学院に戻っていった。私は再びお姫様の方を見た、その時彼女の隣にいる護衛の人と目があつた。

まず目に飛び込んでくるのは白い顔に刻まれた紅い薔薇だった、その薔薇がその端正な顔を歪めていた。さらに他の護衛は鎧を着ているのに彼女は白いワンピースを着ていてどこか浮世離れた印象を見る人に与えていた。よくみると周りの男の中にも何人か見とれている人もいた。彼女はクスリとこちらに笑いかけるとそのままお姫様と一緒に学院の中に入ってしまった。私と彼女は知り合いなのかと少し疑問に思ったが隣の才人が彼女の笑みにやられてだらしない顔を緩めていたので正気に戻すべく頭の上におもいきり拳を降り下ろした。

## 其の二十五

夜、今までであったいらない家具を全て取り除き、殺風景になったリンの部屋にノックの音が響いた。ノックの音で浅い眠りから起こされたリンは才人に出てもらおうとしたが、才人は昨日リンが藁なのは可哀想だと買ってあげたベッドでノックの音を気にせず横になってぐっすり寝ていた。しかたないので眠い目を擦りながらリンはドアを開けた。

「はい、なんででしょう？」

ドアを開けた先にいたのは黒いフードを被った人だった。フードを被った人物は杖を取りだしてふった。確かこの魔法は

「デイテイクトマジック？」

リンの独り言にフードの人物は頷く。

「どこに目があるかわかりませんから。」

そう言つてフードの人物はドアを閉めた。リンはこの声に聞き覚えがあった。

「もしかして、あなたは」

その言葉に頷きながらフードの人物はフードを取った。

「お久しぶりね、ルイズ」

トリステイン王女、アンリエッタはそう言つてリンに笑いかけた。

久しぶりという単語はリンにとっては禁句に等しい。はつきりいつて目の前の人物の事をリンは全く知らないし、知り合いになった覚えも無い。しかし記憶を失ったことがわかると顔も知らない家族が悲しむだろうからリンはとりあえず愛想笑いで乗り切ることにした。

「ねえルイズ、私の話聞いてる？」

不審そうなアンリエッタを見てリンは慌てて口を開いた

「ああ、はい。何でしたっけ？」

アンリエッタ口を膨らませながらこちらを睨んだ。

「やっぱり聞いてなかったのねルイズ、宮廷で蝶々を追いかけた時の話よ！私と貴女で泥だらけになって走ったじゃない！」

もちろんリンがそんなことを覚えているはずもないので、適当に当たり障りの無いような返答を返した。

「確かに、あの時は大変だったわね」

アンリエッタは少し眉を寄せたが気にせず続きを話始めた。

「そうよルイズ！あの時は本当に大変だったわ。」

アンリエッタは幼い頃の思い出を語っているがリンには心当たりが全くなく、このように自分には無い物を持っているアンリエッタを少し羨ましく思った。

「思出話はこちらまでにして、姫様は一体何をしに来たんですか？」  
急な話題の切り替えにアンリエッタは少し戸惑っていたが、すぐに気を取り直すと芝居がかった口調で話始めた。

「ああ、ルイズ！わたくしはもう駄目なのです！ルイズ、あなたはわたくしが同盟を結ぶ為にゲルマニアの王と政略結婚させられるのはご存知？」

そのことについてもリンは全く心当たりはなかったが、政略結婚というのは政治の世界ではそう珍しくないのでは、とリンは思った。  
そんなリンの様子には目もくれずアンリエッタは自分の不幸を語り続けた。

「ああ！愛するウェールズ様は今、戦火の最中にいるのです！しかも、レコンキスタはわたくしがウェールズ様に出した恋文をゲルマニアとトリステインとの同盟を妨害するために狙っているのです。

ああ！愛しのウェールズ様！今にも会いに行きたいのですが残念ながらわたくしは王女の身、わたくしに出来るのはウェールズ様にお逃げになるように手紙を出すことです！」

そう言っつてアンリエッタはリンを期待に満ちた目で見つめた。どうやらその手紙を届けて欲しいのだが自分から言い出すわけにもいかないのでリンが自分から申し出るのを待っているらしい。と、リン

の後ろからがさがさと音がした。

「ん……………ああ、何？どちら様？」

才人はベッドから起きあがりアンリエッタの方を向いてそう言った。アンリエッタは才人の方を向いて驚いたように目を開いた。

「ルイズ、この人はなんなんですか？あなたの知り合い？」

リンはアンリエッタの方を向いた。その目はあまり好意的ではなかったがアンリエッタはそれに気付くことはなかった。

「アンリエッタ、彼は平賀才人。私の友人よ」

それを聞いたアンリエッタは才人の方を驚いたように見た。才人はそんなアンリエッタを見ながら口を開いた

「で、リン。この人は誰なんだ？」

その言葉にアンリエッタが反応した

「リン？」

「私の愛称よ、アンリエッタ。才人、紹介するわ、彼女はトリステイン王女のアンリエッタよ。」

才人は具体的に王女というのがどれほど偉いのか見当がつかないらしく、きよとんとしていた。リンはあまり説明するのが面倒らしく、アンリエッタの方を向いた。

「それで、アンリエッタの申し出の事だけど

その言葉を聞いてアンリエッタの顔がぱつと輝き

「断らせていただくわ」

そのまま固まった。

## 其の二十六

「……………え？」

沈黙の中最初に声を出したのはアンリエッタだった。そんなアンリエッタを冷たい目で見ながらリンは口を開いた

「当たり前でしょう、あなたは私に戦争中の国に行つてこいつて言つてるのよ。あなたに戦争中の国に行くことがどれほど危険な事か分かつているの？」

アンリエッタは首を横に振った。その様子をリンは苛ただしげに見ていた

「そんな事もわからないでよくそんなことが言えたわね。まったく、何悲劇のヒロインぶつてるのよ、貴方みたいな幸せな人間が政略結婚ごときでグチグチいつてんじゃないわよ！」

リンの口から放たれた言葉にアンリエッタは固まっていた。まさかアンリエッタもこんな事を言われるとは思わなかっただろう、シヨックをうけた表情で固まっていた。後ろにいる才人も、リンの勢いに若干押されていた。痛い沈黙の中才人がリンに声をかけた。

「えーと、まずなんの話かはよくわかんないけど、一回落ち着こう、な？」

その言葉を聞いてリンはふうと息をつくつと、俯いたままのアンリエッタに声をかけた「まあ、その話を受けてあげてもいいわよ。」

その瞬間俯いていたアンリエッタがバツと顔をあげた。

「本当です「だけど！条件があるの。」 え？」

喜びの声を遮るようなリンの声にアンリエッタは顔を曇らせた。

「なに、そんな難しいことじゃないわ。ただ向こうは危険だろうから貴女の護衛の中から一人、優秀な護衛を私達につけてほしいの。

私達だけじゃ不安だからね」

アンリエッタはすぐ頷いた、そして顔をふつと綻ばした。「あなたは変わったわねルイズ、それに比べてわたくしはまったく変わって



いないわ。」

自嘲するようなアンリエッタの言葉にリンは苛立ったように言った。「何いつてるのよ、これから変えればいいでしょう。」  
それを聞いてアンリエッタは小さく笑った。

翌日、朝早く、うつすら霧がたちこめる中リンと才人は学院の門の前に立っていた。才人はリンに朝早く叩き起こされて少し眠そうにしていたが、早朝の空気にすっかり目が覚めてしまったらしく今では暇そうに門に寄りかかっていた。

「なあ、そういえば昨日なんで依頼を受けたんだ？別に嫌なら断ればいいじゃないか。」

それを聞いたリンは呆れたようにため息をついて答えた。

「確かにこの依頼はアンリエッタの単なる我が儘よ、だけどこの依頼を受けないとアルビオンにあるアンリエッタの手紙が原因でこの国が危険にさらされるのよ、だからこの依頼を受けたのは別にアンリエッタの為じゃない、この国の国民の命の為なのよ。」

そう言ってからリンは学院の前に広がる森に目を向けた。つられて才人もそちらを見ると向こう側から誰かが歩いて来るのが見えた。アンリエッタの周りにいた護衛と同じ羽帽子が特徴的な服を着ている男だった。年は20ぐらいだろう刈り揃えられた髭が凜々しさをその男に与えていた。

「あ、昨日いた護衛の一人だ。」

才人がポツリと呟いた、男はリンの姿を見ると笑顔になりながらリンを抱き抱えた

「おお、僕のルイズ！元気にしてたかい？君の元気な姿が見られて僕はとても嬉しいよ！」

全身で嬉しさを表す男と対称に才人達は呆気にとられていた。何しろ見知らぬ男がいきなりリンを抱き抱えたのだ。リンはとりあえずこれを止めさせようと男に声をかけた

「あの………………。離してください。」

すると男ははつとした表情をして、リンを地面に下ろした。横にいる才人は男をなんとも言いがたい表情を見ていた。

「すまないね、僕のルイズ。僕としたことが再開の嬉しさについて我を忘れてしまったようだ。改めて自己紹介をしよう。グリフォン隊長、ワルド子爵だ。君達をアンリエッタ王女の命令でアルビオンまで護衛する事になっている、まあ、よろしく頼むよ」

そう言っつてワルド子爵は笑った。リンもワルドにならつて自己紹介をする。

「私はルイズ、愛称はリンです。よろしく、ワルド子爵」

そう言っつてリンは手をワルドの方に伸ばす、ワルドは一瞬難しい顔になつてからすぐに爽やかな笑顔に戻つて握手を交わした。

校門から出ていくリン達を屋上から見つめる一つの影があつた。

「これは、面白い事になりそうね。」

そう言っつてイリアはクスクス笑いながら一言呟いた、すると目の前の空間がバキッと音を立てて割れた。イリアは満足そうに頷くと割れ目の中に入つていった。

誰もいなくなつた屋上で音もなく割れ目は閉じ、再び屋上には静寂が戻つた。

## 其の二十七

リン達は森の道に馬に乗りながらゆっくり進んでいた、ワルドはグリフォンで向かう事を提案したがグリフォンには二人しか乗れないと聞くとリンは才人が可哀想だと言ってその案を却下した。だからこうして馬に乗っているのだが……………

「なんか、馬って乗りにくいな。尻が痛てえ」

始めてから一時間程で才人が早くも音をあげ始めた。リンは才人を横目で見るとワルドの方を向いた。

「ワルド、才人を貴方のグリフォンに乗せてあげて」

ワルドは驚いたようにリンの方を見た。リンはワルドを振り返らずに前を見ていた。何かを言おうとしていたワルドは諦めたように口を閉じるとグリフォンを呼んだ。

「サイト君これに乗りたまえ、ああ、馬はそこに置いておいていいんだ、ちゃんと元の馬小屋に戻っていくようになってるから。」

置いていかれる馬を心配そうに見ていた才人はワルドの言葉に安心したように息をはくと、グリフォンに乗った。ワルドも才人が乗ったことを確認してから軽やかにグリフォンの上に乗って手綱を握った。

「さあ！加速するから気を付けたまえサイト君！」

そう言つてワルドが手綱を引くとグリフォンが一瞬で加速して前の方にいたリンをたちまち追いついてしまった

頭上をグリフォンが自分に平行して滑空しているのを見ながらリンは静かにため息をついた。リンはまさかあんなに早く才人が疲れるとは思っていなかったのだ（まあ、足を引っ張っていたようなものなのでむしろ都合なのだが）しかし才人の早さに合わせる必要がなくなつたので、リンは馬を加速させた。

（才人には悪いけどいいないほうが早く進むな。にしてもあのグリフ

オン早いな、こっちは出来る限り早くしているのに軽々着いてくるなんて)

そんな事を思いながらグリフォンを見るとワルドと偶然目があつた。一瞬なにか違和感を覚える、ワルドはそんなこちらにふつと笑いかけると再び前を見た。

(……………何だつたんだろ?なんか一瞬……………)  
ガタンツ!と考え事をしていたせいで石に馬が躓いた、幸い転ぶこととはなかったがリンの疑問は躓いた時の驚きでどこかへ行ってしまった。

日が傾き、空が赤くなってきた。森の動物もそれぞれの住みかに戻り始めていた。と、それを見ていたリンの目の前にグリフォンが降りてきた

「今日はここで野宿をしよう。」

ワルドの提案にリンは頷いた。ワルドはリンが頷くのをみると薪を取りに森の中に入っていった。残されたリンと才人は無言で夕焼け空を見上げていた。

「なあ、……………俺って足手纏いかな?」

リンの横で才人がポツリと呟いた。リンは黙って才人の方を見た、その視線に促されるように才人は言葉を繋いだ。

「俺さ、今日も助けてもらってばかりだし、皆の足引っ張ってばかりでさ、ちよつと自分が情けなくてさ」

ポツポツと流れてくる才人の言葉をリンは黙って聞いている。才人の顔は夕日の影になってわからない。ただ、こころなしかリンには才人が泣いているように見えた。

「……………確かに才人は足を引っ張ってたよ、けど才人はまだ諦めてないじゃない。ならそれでいいんだよ。今は追い付かなくてもいつの日かその努力は報われるんだから」

才人はゆっくりと頷いた。日はくれて顔もよく見えないが才人が笑

っているのが確かにリンにも伝わった、それに答えるようにリンは才人に向かって笑いかけた。二人の後ろからワルドの声が聞こえる、リンはワルドに返事をする才人を連れてワルドの所へ走った。

## 其の二十八

リン達は焚き火を囲んでいた、才人は今日の疲れが出たのか既に地面に横になって寝ていた。リンはそんな才人を見ながらくすりと笑った。

「先程から君はその平民を見ているが、どうなんだ。君はその平民に恋心を抱いているのか？」

近くの木にもたれかかりながらワルドは言った。リンは顔を上げてワルドを見たがワルドの表情は夜の闇に隠れてよく見えなかった。

「別に、好きとかそういう訳では無いわ。ただ才人は私の隣にいてくれる、だから私は彼の隣にいるのよ、それ以外の理由はいらないわ」

リンの言葉にワルドは少し笑った気がした。闇に隠れて見えないがワルドの方からクツと笑いが漏れた気がしたのだ。真面目に答えたのに、とリンは眉を寄せた

「クツ、いや、すまないね。君は変わっているなと思ったんだよ。

隣にいてくれるから隣にいる、か」

そうかそうかと一人で頷きながらワルドはリンの方を見た。その微笑ましい物を見るような視線にリンは顔を逸らした、

(調子狂うな、いつもは )

……………いつもは？

「さて、そろそろ寝ようか。明日も早く行くからルイズも体を大事にしたまえよ」

ワルドの声がリンの考えを遮った。リンは思考の糸を手繰ろうとしたが、糸はぶつとり切れてしまっていた。リンはしばらくもやもやとした気持ちを抱えていたが焚き火を消されると今日の疲れが出たのかゆつくりと瞼が下りていった。

(まあ、あまり気にしなくていいか)

そう思い、リンの意識はまどろみの中に落ちていった。

ワルドはルイズの安らかな寝顔を見て顔を綻ばした、ワルドははっきり言つてこの少女が嫌いだった。自分では何もできないくせにプライドだけは一人前、自分の立場にしがみつき自分より優れた相手がいると嫉妬する。拳げ句のはてにそんなやつが婚約者だと知らされた日には思わず顔も見たこともないブリミルに悪態をぶちまけてしまった。

しかしこの変貌ぶりは何だろう？自分の知っているルイズとは全く違う、立場を気にせず相手を助けたり、自分に対して媚びるところか、単なる護衛として扱うなど、昔の彼女からは考えられない変貌ぶりだった。そして厄介なことに計画に利用するつもりだった彼女にいつの間にか自分が恋心を抱いてしまったのだ。ワルドは今、ルイズをどう扱うか迷っていた。

「……………どうすればいいんだ……………」  
ワルドは夜空を見上げる。黒い夜空にはいつもと同じように双子の月がワルドを見下ろしていた。

命の枯れ果てた荒野をリンは漂っていた。リンの視線の先では一組の男女が対峙しているのが見えた。

女の方は紺色の軍服を身に纏い、その白い手には不釣り合いな無骨な拳銃を持っていた。その表情は悲しげに歪められており、目の前の男を見ていた。

男の方は女と同じ紺色の軍服を着ていたが女のと比べ、酷くぼろぼろだった、手にはナイフが握られており、女の方を穏やかな表情で見ている。

どちらの顔もぼやけていて細かい所まではリンにはよく見えなかった、なのに表情はわかるのだから不思議な物である。

夢だ、とリンは思った。

リン視線の先、夢の中の男が口を開いた。

「どうした？俺を殺しに来たんだろ？早く撃つたらどうだ？まあ

らしいと言えばらしいんだろうけどな」

対する女は悲しげな表情のまま男に語りかけた。

「……………だって、そんなの出来るわけじゃないじゃない　　だっ

て分かるでしょ？私は貴方を殺したくないのよ、おとなしく投降して」

女は泣きそうな表情になりながら男を説得しようとしている。男は首をふった

「駄目だ、俺は軍に戻る気はない。お前だって分かるだろう、今の軍は間違ってる。それを元に戻したいだけなんだ」

その言葉から説得は無理だと悟ったのだろう。女は今にも泣き出しそうな表情で男に震える手で銃をつきつけた。

「……………お願い……………投降して……………」

女の必死の懇願にも男の決意は変わらないらしく再び首を横にふった女は引き金に震える指をのせた。

「じゃあな、……………愛し」

女の叫びと共に銃声が荒野に響いた。



## 其の二十九

夢を、見ていた気がした。

どこか懐かしく悲しい夢を。

早朝、小鳥のさえずりと共にリンは目を開けた。ふと顔に違和感を覚えて目元を拭くと湿っていた。いつの間にか泣いてしまっていたらしい。自分が泣いていた姿を見られてしまったかと慌てたが幸い朝の早い時間だったためまだ全員寝ていた、それを確認したリンはほっと胸を撫で下ろすと、自分の記憶の手がかりになるかと夢の内容を思い出そうとするが頭にもやががかかったように全く思い出せなかった、わからないならしょうがないとリンは伸びをして気持ちを切り替えると眠りこけている才人達を起こし始めた。

朝食を味気ない携帯食料（それでも高級な物らしい）を腹に収め、リン達再びアルビオンに向かっていった。才人も少しは馬に慣れてきたようだが昨日よりスムーズに進み、この調子なら昼にはアルビオンへの中継地のラ・ロシエールにつくとワルドは言っていた。

そのまましばらく道を進むと、周りの景色が変わった。緑の生い茂る森から荒々しい岩のつき出す山岳へと、それを横目で確認しながら

らワルドはそろそろ襲ってくる奇襲部隊を待っていた。

しかし、ワルドはこれでいいのかと心の中で自分自身に問いかけた。このままいくともしかしたらルイズが死んでしまつかもしれない。それだけは避けなければいけない、ワルドはそこまで考えて違和感に気付いた。

(何故奇襲がない…?)

とつくに奇襲が来てもいい頃である、実際そろそろラ・ロシエールがはつきり見えてきており、これ以上進んでしまつと襲つたとしてもラ・ロシエールの見張り番に見つかつてしまつ、なのに奇襲部隊は影すら見せない。ワルドがさうこつ悩んでいる間にリン達がラ・ロシエールに着いてしまひ、複雑な気持ちのままワルドはラ・ロシエールの門をくぐつた。

時は少し戻り、リン達が奇襲部隊の前を通る三十分前、ワルドが雇つた傭兵達の中の一人は目当ての獲物が目の前を通るのを待ちながら暇そうに欠伸を漏らした。

「あゝあ、こりや暇すぎるわ、早く殺してパーつと酒でも飲んでえな」

隣で同じように見張りをしていた男も頷いた。

「ああ、そもそも俺はこんなことやってないでそこから遊び歩きたいのによ」

そう言つた男の脳裏に浮かんだのは気味が悪い白い仮面だった。おとといアルビオンを見限つてラ・ロシエールの酒場で酒盛りをしていたときに白い仮面の男が現れて金貨の詰まつた麻袋を置いてこつと言つたのだ。

「お前らにやつてもらいたい仕事がある」普段なら断つても良かったのだが白い仮面から覗く鋭利な刃物のような目線がそれを許さなかつた。仮面の男は無言で傭兵達に言つていたので。

断れば殺すと

そして今に至る。仮面の男の話によると昨日の夜には通る筈なのが未だに目当ての獲物が通る気配は無い。いつもならこの時点で帰っていいのだが、未だに半数以上は残っているその理由は一重に仮面の男からの報復が恐ろしいからだ。そのとき獲物を待っている男の後ろで悲鳴が弾けた。

「どうした!!」

リーダー格の男が声を張り上げる、慌てて男も振り返ると背が低い男の隣の男の頭がなかった地面には脳の欠片や頭蓋骨が飛び散っていた。そして襲撃者は隣の腰を抜かした背の低い男めがけて二メートルちかい大剣を降り下ろした、背の低い男は恐怖の表情のまま左右対象に倒れていった、一瞬遅れて断面から血が吹き出す。その血を浴びながら襲撃者　イリアは奇襲部隊に向かつていった。奇襲部隊の人数は20人程度、1対20ならば奇襲部隊の方が圧倒的に有利のはずだった。

が

イリアを止めようとした長身の男は首と胴体が泣き別れして、後ろから不意打ちしようとした男は虚空に現れた無数の氷の槍に貫かれ、左右から同時に仕掛けた双子の兄弟は大剣の一閃で仲良く上半身と下半身がさよならした。

圧倒的、今のイリアを表す言葉はまさにそれだった。元々長時間の待ち伏せで磨耗していた奇襲部隊の精神は一瞬で殺された味方の無残な死体を見て脆くも崩れさった、リーダー格の男が必死に纏めようとするとともに寄せ集めの集団なためリーダーの声を無視して四方八方に逃げ惑った。もちろんそんな致命的な隙をイリアが見逃すはずもなく背中を見せた者から空気の球で頭蓋を砕いていった。残ったのはリーダー格の男と歴戦の猛者らしい隻眼の男である。イリアは二人を一瞥すると無防備に背中を見せて二人とは反対の方向に歩いていった。しばらく呆然としていたリーダー格の男は、はつと気を取り直すとイリアの後ろ姿に声をかけた。

「おい!一つだけ聞きたい、お前は何で俺達を邪魔したんだ!」

リーダー格の男の声にイリアは立ち止まると振り返り答えた。

「私の暇潰しを邪魔したからよ、あの子にはまだ死んでもらっては困るからね」

そう言っただけで今度こそ振り替えることなくイリアは去っていった。残されたリーダー格の男はラ・ロシエールに帰っていきもう一人の隻眼の男は傭兵達の死体を一瞥してから後ろに声をかけた。

「見ていたのだろうか、どうだった？あの小娘の力は」

すると隻眼の男の後ろから男装の女が現れた、年は20前半だろうか長い紫色の髪をポニーテールにしており堅物といった印象をうける、そして彼女の目は左右色が違っていた、血のように紅い右目と綺麗に澄み渡る空色の左目。それこそが隻眼の男が彼女を側においている理由である。彼女の右目は見たものの本質を捉える。それを使った彼女は男が求める情報を視るのだ。

「はい、彼女は517年生きている人間です。能力は口にした事を物理現象に再現する能力、そして彼女には死という概念が存在しません。いかがなさいますか？ 陛下」

そう言っただけで彼女　ゲルマニアの皇帝直属秘書官のアリシア・ハーネスは隻眼の男　ゲルマニア3代目皇帝ゲルマン三世を見た。ゲルマン三世は少し考える素振りを見せてから口を開いた。

「ほっつておけ、私達には関係無い」

そう言っただけで彼は森の中に消えていった。彼女も彼の後を追いつつ、後には傭兵たちの死体が残った

## 其の三十

ラ・ロシエールに着いたリン達はとりあえず女神の杵という宿に泊まることにした、貴族用の宿なのでとても居心地が良さそうだから長旅で疲れた体をやつと休めることができるかと才人は思った。現代人である才人には野宿がさうとう堪えたのだろう、一方リンはあまり疲れた様子を見せず、才人を労るような目で見てから視線をワルドに移したこの宿を予約していたワルドに対してリンがお礼を言うと言わなかった。そんなワルドの後ろ姿を少し嫌そうに見ながら才人はリンに話しかけた

「何か嫌味な奴だよな、気障っぽいっていかいちいち行動がムカつくってどうか」

リンはそれを聞いてから才人の方を向かず話しかけた

「本当にそう思っているの？」

そう言われて才人はうろたえた、リンが話しかけてきただけなのに何故か取り返しのつかないことをしているような気分になっていた、リンはしばらく才人の返事を待っていたが何も返ってこないの痺れを切らしたのか女神の杵に向かって歩いていった。才人は声をかけようとしたが何を言っているのかわからず独り立ち尽くしていた。

女神の杵の一階は食堂になっているらしく夕飯を食べる貴族達で溢れ返っていた。

その中に異彩を放つ物が二つあった

一つ目は漆黒のゴシッククロリータを纏った少女イリア・フロイス、こちらは優雅に紅茶を飲んでローズの方を見ている

そしてもう一つは白のワンピースを纏った少女ローズこちらは目の前にびっしり並んだ料理をすごい勢いで食べている

二人は丁度ここに入る前に出会った。イリアは傭兵達の血で汚れた服を能力で落とすと丁度目についた宿に入ろうとしたら前に見たような顔を見つけて声をかけたらローズだった、それでローズはこちらを覚えていたらしくすぐくフレンドリーに話しかけられ女神の杵に入ったら食べ物の匂いに興奮したローズが全てのメニューを注文して今に至る。

イリアは目の前に並んだ料理をものすごい勢いで胃の中に入れていくローズを見て一言呟いた。

「言っておくけど、私、お金持ってきてないわよ」

その瞬間、ローズの動きがピタツと止まった。ギリギリと音をたてながらイリアの方を見る。

「ほんほひほふはひひはひほっへはひほ？」

口の中にスパゲティを含みながらローズは言った。勿論言葉が伝わらずもなくイリアはローズに口の中の物を飲み込むように促した。ローズはスパゲティを飲み込んでからパンツと机を叩き立ち上がった。もう一度言った。

「だから、ほんとに銅貨一枚も持っていないの？って言ったの！」

ローズの声に周りの客が迷惑そうな顔をするが二人が気にする様子はない。イリアは手でローズに座るように促すとローズはしぶしぶ座った。イリアはローズが少し落ち着いたのを見ると紅茶を一口飲んだ

「私は別にお金を持ってないと言っただけでお金が払えないとは言っていないわよ」

微妙に得意気にイリアは言うが、ローズには意味が伝わらなかった。ようで首をかしげていた。イリアはそれを無視して話を続けた。

「見つけた」

そう言ったイリアの視線の先には丁度入ってきたワールドがいた

## 其の三十一

ワルドは女神の杵に入った瞬間ゾツと背筋に悪寒がはしった。例えるなら巨大な蛇が目の前で舌なめずりしているような、そんな感覚。そしてその気配の出所はすぐに見つかった。そう

テーブル一杯に料理を並べ、カモを見るような目でこちらを見ている少女から

「ねえ、お金かしてくれないかしら？」

そう声をかけてきた少女の微笑みがワルドには悪魔の笑みに見えた

イリアは内心でほくそ笑みながら目の前のワルドを見ていた。ワルドは知らないだろうがワルドの後ろにはイリアが創った一ミリほどの監視用の蟲がついており、その蟲のおかげでイリアはリン達の位置がわかり、常にその行動を知ることが出来るのだ。

勿論ワルドはそれに気付かず目の前に並んだローズの料理を嫌そうに見ている。ワルドに全ておごってもらうことにして安心したのかローズはシヨックで止まっていた手を凄く速さで動かしてみる内に目の前の料理がローズの胃の中に消えていった。そんな彼女を見てワルドはイリアにそつと話しかけた

「どうやったら彼女の体にあんな量の料理が入るんだ？」

イリアはそんなワルドを見て笑いながら言った

「気合いじゃないの？」

ついでにこのあとローズがおかわりを注文しようとしたのをワルド

が止め、イリアの方を泣きそうな目で睨みながら店員に手元の財布から金貨を50枚ほど出していった。そのときの店員は凄く哀れむような目でワルドを見ていたという。

ローズが満足そうにお腹を叩きながら宿の二階に消えていくのを見送ってから、ワルドはイリアに向かって愚痴を漏らし続けていた。その愚痴をイリアは右から左に聞き流していたがふとリンの姿が見当たらない事に気づいた。

「あら、あの子はどうしたの？」

そう言われたワルドは愚痴を言っていた口を閉じて辺りを軽く見渡した。イリアも周りを見てみるがリンとおぼしき人影は見当たらなかった。

「さあ、僕達が見ていない間に部屋に行ってたんじゃないか？」

そうかもしれない、とイリアは頷いた。部屋の場合ぐらい従業員に聞けばわかるので、おそらくリンもそうしたのでだろう。

そこまで考えていた時、女神の杵の中に見知った顔を見つけた、向こうもこちらに気付いたらしくこちらに駆け寄ってきた。

「やっと見つけた」

平民の男物の服を着ている少女　　リースはイリアの服を掴むとそのままワルドを置いて女神の杵の外に出た。

「あんた、あいつがどんなやつかわかってんのか？」

イリアを物陰に引つ張り込んで発した言葉がそれだった。いきなりそんな事を言われてイリアは思わずリースに聞き返してしまった

「あいつとは、誰の事を言ってるの？」

リースは苛々したように地面を叩きながら口を開いた

「ワルドだよ、あんたと一緒にいた」

それを聞いたイリアはわざとらしく手を叩いてなるほど、と言った  
「で、ワルドがどうしたの？」

その瞬間、イリアの顔の横をリースの拳が通った



「ふざけるなよ、お前は知ってたらあいつが  
」  
リースは言葉を止めた、特にイリアに変わった様子はない、ないの  
だがイリアから見えない何かがりースに警告しているような気がし  
た。

「あまり、相手を知らないのに知ったような口をきかな  
いほうが良いわよ」

そういつてイリアはリースを置いて、女神の杵に戻っていった。  
後に残されたリースはふとこちらに来る途中に見たものを思い出し  
た。

山岳の岩陰に倒れていた20人あまりの死体を

その頃リンは女神の杵の部屋のベッドの上に座っていた。才人のことが頭をよぎったがあれは才人の自業自得なので気にすることはな  
いと思ひ、思考を切り上げた。

その後、特に何も考えずぼんやりしたまま天井を見上げていると、  
突然扉をノックする音が部屋に響いた、リンは顔を扉に向けた  
「失礼するよ」

そういつて部屋に入ってきたのはワルドだった、ワルドはリンの姿  
を見ると口を開いた

「隣に座つてもいいかい？」

リンは頷いた、ワルドはそれを見てふつと笑うとリンの隣に座つた。  
リンは急に部屋に入ってきたワルドを見ていた、ワルドはその視線  
に気付かず黙つて天井を見ていた、リンもそれにならつて天井を見  
る、豪華な宿であつて部屋の天井も細かい彫刻が刻まれていた。リ  
ンには芸術というものはよく理解が出来ないがそれでもこの彫刻を  
彫るのにはそれ相應の腕が必要なのはわかつた。

「……………ルイズ、話がある」

沈黙を破り、ワルドがリンに声をかけた

リンは黙つてワルドの話の聞く体勢に入る、ワルドは緊張した顔を  
隠す為リンから顔を反らし壁際の化粧台を見詰ながら話した。

「僕はレコンキスタのスパイなんだ」

リンは少し驚いたようにワルドを見る、しかしワルドの顔は反対側  
を向いていて、その表情を伺うことはできなかった。

「といつても、今はレコンキスタのスパイではないよ、レコンキス  
タとは利害が一致しただけであつてレコンキスタ自体に思い入れは  
全くないからね」

ワルドはおどけた様に言つたが実際はそんなに軽々しく辞めたわけ  
ではないだろう、レコンキスタからの報復があるかもしれないし、

ワルドの今の地位にも影響があるかもしれない、何より仮にも自分の居場所だったレコンキスタから離れる事には相当の勇気を使ったはずだ。

それをワルドは笑って話す。一体何が彼を変えたのかは知らないが、彼にとつてその人物は少なくとも自分の居場所を捨ててしまつてもいいとワルドに思わせる程には大事に思っている事がリンにも伝わってきた。

「……………何でワルドはレコンキスタに入つていたの？」  
それを聞いたワルドは遠い目をしながら話始めた。

「何でだろうな、自分にもよくわからない」  
そう言つてワルドは長くなるけど聞くかい？とリンに聞いた、リンはその言葉に頷くとワルドの話に耳を傾けた。

「昔の話だ。もちろん僕にも親がいた、だいぶ昔の事なのであまり覚えていないが母が僕に優しく接してくれたのは覚えている、父は僕に厳しく接していたがそれが優しくさからきてるのが幼い僕にも理解ができた、しかし僕が7歳の時に父が死んだ。その頃からかな、母が研究室にこもり始めたのは、父を取り戻したい一心で研究に打ち込んでいた母だった。母は心何処かでは気付いていたのだらう、僕が10歳ぐらいの頃に母は研究を止めた。それからの母は脱け殻のようだった、食事もろくに摂らず一ヶ月後母は静かに死んだ」

ワルドはそこで一回話を切った。リンはワルドを見ようとしたがやめた、ワルドはおそらく今、過去の両親の事で悲しんでいる、その心を癒す事は自分には出来ない。ワルドはしばらく黙っていたがリンの方を見て笑つて話を続けた。

「当然子爵領は後継ぎである僕に任された、幼いけどそれなりの知識はついていたのでなんとか領地を切り盛りできた。それからしばらくたつた頃に隣のヴァリエール公爵から領地に招待された、その時に出会つたのが君だ、ルイズ」

リンはその時の事を思い出そうとしたが無理だった、ワルドはそれに気付かず話を続ける

「最初に見た君の印象はお世辞にも良いとは言えなかった。プライドばかりが高くて気持ちばかりが先走って周りに迷惑ばかりかけている、しかもそんな人と婚約を結ばれるからその時は始祖を呪ったよ」

ワルドはハハハと笑った、リンは思い出せない昔の自分に対する評価を少し下げた

「その2年後あたりだったレコンキスタに誘われたのは、その頃の僕はトリステインの政治に絶望していた、……………今もそれは変わらないけど、そうして僕はレコンキスタに入った、しかし聖地の奪還とは名ばかりで実際はガリアの操り人形だったのさ、トップのオリヴァー・クロムウェルは虚無を使えるらしいが、元々が平民の出身らしいからそれも怪しい。しかも最近アルビオンの何処かにいる虚無を探していて、聖地の奪還には毛ほどの興味も示さない。

そんな時、僕にトリステイン王女がアルビオンの王子に出したと言われている手紙を回収を命じられた、それに従って王女の護衛を務めていた事を活かして王女が誰かに手紙の回収を依頼するのを待っていた、そしてその依頼を受けたのが君だ、ルイズ。久しぶりに会った君はずいぶん変わっていたよ、以前の君とは違って人を思いやり、必要以上に目上の相手に敬意をはらうこともない。そんな君を見ていて僕は気付いたんだ。僕が君の事を好きになっっている事に、そう、君の為なら自分の居場所を捨ててもいいと思うくらいに「そう一息つくともワルドはリンの目を真っ直ぐ見つめた。

「……………僕と結婚してくれ、ルイズ」

## 其の三十三

ワルドの発言の後リンは黙っていた、リンはワルドの告白を受けて混乱している気持ちをどうにか抑えようとしていた。そんなリンの内心を見抜いたのかワルドは安心させるように笑って言った

「まあ、僕もいきなり返事を貰えるとは思っていないからそう返事に焦らなくてもいいよ、ゆっくり考えて答えを出してくれ。僕は返事がどうであれ君の意見を尊重するからね」

それじゃ、おやすみ。と言い残してワルドは部屋から出ていった、

リンはベッドに横になって気持ちを整理しようとしていた。

自分には記憶が無い、だからワルドと婚約していた幼い頃の自分の気持ちは全く知らないし解らない。

今、一番解らないのは自分の気持ちだ。

ワルドの告白を受けてリンは自分が動揺しているのに気付いた。

しかし、もし自分がワルドの事を気にかけていないのならワルドの告白など気にしないはずだ。

しかし今の自分はワルドに告白されて揺らいでいる。

つまりそれは

「……………まあ、まずは寝てから考えよう」

リンはそう独り呟いて目を閉じた。

宙に浮かびながらイリアは夜空を見ていた。

暗い夜空に輝く星たちや淡く光る月を見るのがイリアの唯一の趣味だった。

何も考えず、ただ星を眺めている。

何もせず、ただ月を眺めている。

夜の空気を味わいながらイリアは夜空を見ていた。

「自然と口から歌が漏れた。」

歌詞は無い、ただ音だけを流す。

その歌は昔イリアに教えてもらった歌だった

まだイリアが私だった頃、いつも隣にいたイリアが口ずさんでいた歌

イリアは夜空が好きだった

私も夜空が好きになった

あの頃はイリアと一緒にいらればそれでよかった。

私にはイリアしかいなかったから。

だけど

「……………」

歌が止んだ。

ずいぶん長く夜に浸っていたらしい

すでに東の空が明るくなってきた

イリアは溜め息をついて今の思考を振り払った。

今は自分がイリアだ。

それ以外の何者でもない

それでももしかしたら

夜空を見ていれば彼女はいつか

そう思ってしまう。

しかし夜は明けてしまった。

明るくなってきた空を見ながらイリアは小さく呟いた。

「……………姉様……………」

東の空から太陽が顔を出してきた

## 其の三十四

朝、リースが朝食をとり、食堂に降りるとワルドがいた、何のつもりかと思わず身を強張らせるがワルドはそんなリースを安心させるようににこりと笑って話しかけてきた。

「初めまして、僕はジャック・ド・ワルド子爵だ。気軽にワルドとも呼んでくれたまえ」

最低でもここでいきなり戦うはめにはなりそうにないのでリースは肩の力を抜いた

「初めましてワルド子爵、私はリース・ド・セベリアと申します。

それでどういったご用件で？」

丁寧にリースがワルドに尋ねる。口調が女言葉なのは単にワルドが初対面だからいきなりこの外見で男言葉なのは驚かれるからだ。

「いや、そんなたいしたことでは無いのだが、イリア嬢とはどんな関係なのかな？」

「は？」

思わず声が漏れた

「いや、昨日あんな勢いでイリア嬢を連れていくので友人なのかと思っただが………違っただかな？」

リースは危うく違う！と叫びそうになった、友人なんてとんでもないむしろリースはイリアの事を嫌っていた。リースにはイリアが何を考えているかが全く解らない、それがリースがイリアを嫌う理由だった。

しかしこんな事を言えるはずもなく

「只の知り合いです」

と曖昧に笑ってごまかしてワルドの横を通ると、リースは朝食をとりに行った

才人は寝不足の目を擦りながら食事をとり、下に降りていた、昨日あのあとリンの事で悩んでいたら結局眠れなかったのだ。

そんな感じで才人が食堂に入るとリンが朝食をとっていた。

「あ」

思わず声が漏れてしまった。その声で気付いたらしくリンがこちらを見た。

「何？そんなところで突っ立ってないでこっち来れば？」

才人は驚いてそのままの姿勢で固まってしまった。

（あれ？昨日喧嘩したんだよな？でも期限悪そうに見えないし、あれ？）

そんな才人をリンは不信げに見ていたがああ、とうなずくと

「別に昨日の事はもう怒ってないわよ、反省したんでしょ？」

才人は頷いた

「それならいいじゃない、私は反省した人を責めることはしないから」

そういつてリンはまた朝食を食べ始めた。

才人はリンの視界から外れてやっと動きだした。

「えっ………と、許してくれるのか？」

「そう言ってるじゃない」

才人は安心したように少し笑うとリンの目の前の席に座って朝食をとり始めた

丁度天気も晴れているので、早くアルピオンに向かおうとワルドが言った。

特に異論があるはずもなくそのままリン達は船着き場と呼ばれているらしい木の前に来た。

船着き場の無数の枝の先に木舟がぶら下がっている姿は確かに船着き場としか言いようがなかった。

幹の中にある螺旋状の階段を登りながら才人はあれでどう移動する



のかを考えていた。

特に問題もなく上までかけ上がる、ワルドが予約しておいたらしい舟の中に入るとそこには既に先客がいた

「また会いましたね、ワルド子爵」

リースがひきつった笑みを浮かべて立っていた。

## 其の三十五

予想外の人物の登場にリンは驚いていた。確かに宿ではちらりと見かけたがまさか付いてくるとは思わなかったのだ。

「なんでいるの？」

疑問が口から出た。リースは苦々しい顔をしながら説明を始めた

「実は私の知り合いであるイリアが『用があるから後はよろしく頼んだわよ』と言い残して行ってしまい　　ってこの話し方面

倒臭いんだよ！！」

説明途中で切れた。ワルドは突然口調が変わった事にびっくりしていた

「とにかく、そういわれて無視しようとしたら後ろを振り替えて

『もし、無視したら………ね？』とか言うからしようがなく言うこと聞いてやったんだよ」

わかったか？と言ってリースはリンを見た。リースはリンが頷いたのを見るとリンの隣にいる才人には目もくれずそのまま舟の中へ行ってしまった。リン達もハツと気をとり直すと舟の中に入っていた。

リン達は船長に舟の個室に入ってアルビオンへの到着を待つように言われた。しかし特にすることも無いので少しすると最初に飽きっぽい才人が音をあげた。

「暇だ」

丁度話題が尽きて黙っていた時に言われたのでリンはまるで自分の話がつまらなかつたみたいじゃない、と軽く才人を睨んだ。一緒に話していたワルドも自分が好きなリンの話がつまらなかつたと言われた気がしたので才人を睨んだ。

「いや、別にリンの話がつまらなかつた訳じゃないぞ、ただ流石に

アルビオンに着くまでこの部屋にいるっていうのもどうかなって思っただんだ」

「……つまらなかったって言っていないのにその言葉が出るって言うことは少しはつまらなかったって思ってたって言うことなんじゃない……まあいいや、少し引つかかるけど気にしないようにしよう。」

「まあ、確かにアルビオンに着くまでこのままっていうのは流石に嫌だけどね」

「そう思うよな、リンの話は面白いけどそれでも長々と言われると飽きちゃうしやっぱり外の景色でも見てみたいと思わないかな？」

「……別に傷ついてなんかないから。ていうかそんな古傷をえぐるような事を言わないでほしい」

そんなリンの内心を知らず、才人はワルドに外に出てもいいか聞いてOKをもらうとそのまま外に飛び出していった。

「……いつの間にかワルドと二人つきりになってしまった。はつきり言うどと気まずい、昨日の告白宣言の後ワルドとは二人つきりになっていない。リンは先に出ていった才人を恨んだ。」

「……ごめんなさい、返事、まだ決まってるないの」  
ワルドはふつと笑って言った

「気にしてないよ、焦らずゆっくり考えて答えを出すといい。それより外の景色でも見に行こうじゃないか、空の景色は初めてかな？」  
そういつてワルドはリンの手を引っ張りながら外に出た。  
ワルドの手は大きく暖かった

## 其の三十六

才人が外に出るとそこには先客がいた、  
リースである。リースは才人を見た。

「ああ、才人が」

リースはそう言うのと目の前に見えるアルビオンをみた、才人はリースにならってアルビオンを見た。しばらくして才人が口を開いた  
「すげえな。あんなの見たこともねえ」

リースは才人の方を見た

「……………なあ、才人はワルドの事をどう思う？」

「どうって……………なんでいきなり？」

リースは苛立たしげに眉をひそめる。

「いいから！」

才人はびくつと肩を縮ませた。

「えーっと、まあ、気に入らないやつ……………かな？」

リースはそれを聞いて少し安心したように息をはいた、  
が

「……………でも、やっぱりいいやつみたいだよな、俺達の心配とかして  
くれるし」

リースはそのまま凍りついた。

才人はそれに気付かず話を続けた

「やっぱりリンに言われて思ったんだよ、俺は自分が嫌いなやつは  
皆から見ても嫌いなやつ、逆に自分が好きなやつは皆も好きなんだ  
って思っていた」

才人は憑き物の落ちたような表情で続けた

「でも、そんなことはなかったんだ。俺が嫌いなやつでもそいつの  
事を好きなやつだっているんだよ。だから」

「わかった。……………もういい」

才人の言葉をリースが遮った。リースはそのまま才人の横を通り船

内に向かって歩いていった。

「お、おいっ！」

才人が慌てて呼びかけるがリースは振り返らずに中に入っていった。

船内を苛立たしげにリースは歩いていた。リースは自分の原作知識が役にたたなくなってきた事に焦燥感を覚えていた

ルイズは性格ががらりと変わったしワルドは丸くなった

しかもキュルケとタバサは全く関わってこない

唯一原作通りに動いていた才人も原作から外れてきた

リースは苛々していた。

しかし、リースが今一番苛々していたのは自分の事だった、リースは自分の考えていることが酷く自分勝手な事に気づいているのだ。

ルイズは性格がガラリと変わった、しかし以前より遥かにまともな性格になった。

ワルドは丸くなった、が、それはむしろありがたいことだ

才人も原作から外れてきた、しかしそれは良い方向に外れてきていた。

キュルケとタバサは全く関わってこない、しかしまず女神の杵の襲撃自体が消えた

そんな良いことばかりなのにリースは原作通りに進まない事に焦っているのだ。

それがリースの苛々の原因だった。

そんな事を考えていたら自分の部屋の前にいた、リースはため息をつくとそのまま部屋に入っていった。

その頃アルビオン王党派の最後の砦ニューカッスルの回りを貴族派を率いるレコンキスタの兵士達が取り囲んでいた。

その中の一際目立つ天幕の中にレコンキスタの元帥、オリヴァー・

クロムウエルが伝令を前に座っていた。

「……………ふむ、わかった。引き続き包囲網を崩さずに待機してくれ」  
伝令は顔を上げずに返事をする。他の部隊に連絡を回していった。  
クロムウエルはそのまま後ろに声をかけた。

「そちらの首尾はどうだ？」

クロムウエルの声に応えるように後ろの闇からクロムウエルの秘書であるシェフィールドが姿を現した

「はい、ガリアの方はこちらの動きにあまり注目しておらずジヨセフも我々の事を気にかけていません」

シェフィールドは無表情のまま抑揚のない声で話していた、クロムウエルはその様子に満足するように頷くと自分の隣に控えているティファニアに話しかけた

「君はレコンキスタの一員としてこの戦いをどう思う？」

ティファニアは笑顔で答えた

「とても素晴らしいと思います、愚かな王党派どもに私達レコンキスタの理想の素晴らしさを思い知らせる……………まさに聖戦のように思います！！」

熱っぽく目を潤ませながらティファニアは言いきった、その言葉にクロムウエルは満足そうに頷く

「ふむ、ならば君の虚無の力を愚かな王党派に教えてやりなさい」  
そう命令されたティファニアはクロムウエルに敬礼すると天幕から出ていった。

その時ティファニアと入れ違うように小柄な少女が入ってきた。

その少女は少し俯きながらゆっくりクロムウエルに歩み寄った。

「貴方が、レコンキスタのトップかしら？」

クロムウエルはまるで今気づいたかのように少女の方を向いた、いや、実際見えていなかったのだ。少女は認識阻害の結界をはってここまで来たのだから。

クロムウエルは内心驚きながらもそれを顔に出さずに言った

「そうだ、私がレコンキスタの元帥。オリヴァー・クロムウエルだ。」

お嬢さん君の名前を覚えてくれないか？」

少女は顔を上げた、

「私はローズ。傭兵よ」

その薔薇の刺青が刻まれた顔を笑顔で歪めながらローズは楽しそうに言った。

## 其の三十七

リンたちは今、がらの悪い二人の男に囲まれていた。

「おい、その兄ちゃんたちよお、少しおとなしくしてくれねえかなあ？」

それを聞きながら才人はどうしてこうなったのかを思い返していた。

「く、空賊だあ！」

そう言つて才人と雑談していた船員は船長を呼びに船の中に入つていった。才人が上を見るとこちらの舟より格段に大きい戦艦がこちらに向かつて降りてきた

「う、うわあ！」

才人は慌てて部屋の中にいるリン達に声をかけた。

「た、大変だ！な、なんか大きな船がこの舟向かつて降りてきた！」

「何だつて!？」

そう驚いたのはワルドだった、リンは何を言っているのかわからな  
いといった顔をしている。

「?どうしたの、ワルド？」

ワルドはリンを見た

「空賊だよ、奴等は僕達が乗っている舟の荷物を狙っているんだろ  
う」

しかしこの舟はワルドが予約していた舟なのでめばしいものは無い  
のだが。

「とにかく、僕達も逃げよう。ここにいてもしょうがないだろう」

そう言つた直後舟が揺れた、リン達が慌てて通路に出ると外の方か  
ら空賊とおぼしき男達の怒鳴り声が響いてきた

「こつちだ！」

ワルドが通路の向こうから声をあげた、リン達が走っている後ろか



らこちらに気づいたららしい空賊の怒鳴り声が聞こえた、急いでスピードを上げるが空賊はまるで軍人のように無駄なく距離を詰めてきて

「今にいたると」

「誰に言ってるの？」

回想を終わらせた才人をリンは気味悪そうに見ていた。そんな才人達の中には不服そうな表情のリースがいた。走っていた最中にさりげなく紛れていたらしい。

「ワルド、私が何とかする」

リンがワルドに囁いた

「ルイズ……………」

ワルドが疑問を口にする前にリンは地面を蹴って二人の空賊に突っ込んでいった。

「なっ！」

空賊は驚いたような声をあげた、まさか唯の少女が向かって来るとは思わなかったのだらう。しかしリンの耳は単なる雑音としか捉えずそのまま突っ立ったままの空賊の一人の顎に勢いよく回し蹴りをたたきこんだ。

「あ」

と空賊は呻いて白目をむきながら倒れた、

「お、おい？」

となりにいた空賊の一人が声をかけるが倒れた空賊は白目をむいたままだった、そんな空賊にリンは豹のようなしなやかな動きで呆然としている空賊との距離を詰めた、

「ッ！！」

慌てて空賊は頭を両腕でしっかり固めた、しかし空賊の腕には思っていたより小さい衝撃が響いた。

「？」

訝しげにリンの方を空賊が見るとリンは既に間合いを取り直して空賊の出方をうかがっていた。

空賊は気付いた、今のこの少女の一撃は弱めに打ったわけではなく、ただ単純に今のが全力だったのではないのか、と、その時ふと少女の後ろにいた男が一人減っているのに気付き

「後ろが空きだよ」

その声と共に来た衝撃を最後に空賊は意識を手放した。

そんな激闘が空の上で繰り広げられている頃、イリアはニューカッサルの中でゆっくり誰にも気付かれず歩いていた。

「にしても、誰にも気付かれずに歩いてみるのも飽きてきたわね」  
そう言っただけイリアはその場でぐるりと一回回った、

そこは大きな部屋だった、豪華な装飾がびっしりと部屋全体に施されていて高級な部屋独特の空気を醸し出していた。その部屋の奥にある一際豪華な椅子に座っている老人に向かってイリアはゆっくり歩み寄っていった。老人はイリアを見ると隣の警戒している騎士に警戒をとくように促した。

「君は　何だね？」

老人　アルビオン皇帝ジェームス一世は穏やかな口調でイリアに問いかけた。

「貴方達を助けに来た者よ」

イリアは笑いながら言った

## 其の三十八

あの空賊を倒したあとリン達はリースの提案で船長室に向かっていた。リースが先頭に立って走っているとふと疑問に思ったらしく走りながら才人はリンに問いかけた

「なあリン、あんな動き何処で覚えたんだ？」

確かにあの動きを見た後にリンの走りを改めて見ると自分のとは違い無駄がなく綺麗な型で走っているように見えた。

「さあ？」

リンの返答は素っ気なかった。

「いや、さあって何だよさあって」

「しょうがないでしょ、体が勝手に動いちゃったんだから」

そう言っただけでリンは才人から視線を外した、どうやら機嫌を損ねてしまったらしい。

「はあ、結局なんだったんだろうな」

才人はそう呟いてリンと並んでリースの後を追った

しばらくすると船長室のドアが見えた、ドアには警備が二人ついていて油断なく回りを警戒しているのが見えてリースは慌てて身を隠した

原作知識を元にするならここだと思っていたがビンゴだったらしい、このままウェールズ達を空賊だと誤解させておくと大変なことになりそう（リンの体術とか）なので、船長室に突っ込んでネタばらししないといけないのだ（理由は適当に後付けでいいだろう）リースは息を整えると扉にいる護衛に向かっていった。

護衛はリースに気付くと腰の剣を抜いて構えた、リースはそれを見るところで腰に差してある太刀に手を添えて護衛と睨みあった。

その時護衛を空気の塊が横殴りに吹き飛ばした。

護衛が動かないのを見るとリースの後ろの通路の角からワルドが杖がわりである細剣を構えながら出てきた、そう、リースは事前にワルドと打ち合わせをしてリースがなるべく分かりやすく登場して護衛に注目させて膠着状態で動かない護衛をワルドが狙い打ちするといった作戦をたてていたのだ。

リン達がついてきているのを確認しながらリースは床にのびている護衛が起き上がらないか警戒しながら船長室のドアを開けた。

船長室の中では先程の物音が聞こえていたらしく空賊のリーダーを守るように空賊が固めながら入ってきたリース達を睨んでいた。

「おお、姉ちゃんよお。よくも俺達の部下をやってくれたじゃねえか」

そう言つてリーダーはリースを睨み付けた

「フンツ、随分様になつていないか、まるで別人だな？」

リーダーは怪訝そうな表情をした

「はあ？」

リースは得意気な表情でリーダーに言った

「おい、いいのか？髭がずれてるぜ」

リーダーはハツとした表情をして髭に手を当てて全くずれてないのに気付いて苦笑いした。

「参つたな、いつから気付いてたんだい？」

「体の動きが訓練されてるやつ独特の動きをしてたんだよ。一目でわかる」

もちろん嘘だ、軍人を見たこともないリースにそんな細かい所を見分けられる訳がないようは原作知識の後付けだ。しかしウェールズはそれを信じたらしく感心したように頷いてから髭を剥がした、ビリビリと音を立てながらウェールズは変装をといった

「さて、改めて自己紹介をしようか。僕はウェールズ・チェイダー、アルビオンの皇太子だよ」

リース以外は驚いた。なんせアルビオンの皇太子が空賊の振りをしていたのだ。貴族のことに詳しくない才人ですらそれが異常なことが分かるので貴族に詳しいワルド等にはすごい衝撃だっただろう。

「とりあえず、アルビオンの城まで来てくれないか？君たちの話を聞きたいんだ」

リース達は頷いた。ウェールズはそれを見ると隣に控えていた部下に指示をだしてワルド達を自分たちの船、イーグル号に案内させた。

ローズは杖がわりの短剣を腰から出すと素早く詠唱して魔道具を出そうとしていたシェフィールドを壁に張り付けた、そのまま笑みを浮かべたまま動かないクロムウエルの心臓目掛けて短剣を突き刺した。

(……………手応えが軽い?)

そう思った瞬間、クロムウエルの体が大きく膨れ上がり大きな音を立てて爆発した。ローズは舌打ちをして回りを見渡すと張り付けられていたシェフィールドの姿は何処にもなく、代わりに爆発音を聞き付けたレコンキスタの兵士達が集まってきた。

(今から認識障害は……………無理か)

ローズはため息をついて両腕から隠していた剣を抜いた。短剣を呼び戻して腰にしまうと剣を構えて兵士の中に入った。

「『旋風』のローズ。まあ、楽しく殺りましょう」

反応の遅れた兵士達を両腕の剣でなぎ払っていく。まさにその姿は二つ名の通り旋風の様だった。

## 其の三十九

イーグル号に入った後護衛に案内されたのは豪華な装飾が施された客室だった。

「しばらくお待ちください」

短く言い残して護衛は扉を閉めた、扉には鍵が掛かっていた。

客室と言っても2人部屋らしく4人もいるワルド達をもてなすつもりは無いことが伺えた。

「どう見ても4人部屋じゃないしあまり歓迎されて無いみたいだな」  
そう言つてリースはベッドに座った、もてなすつもりは無くても客室のベッドなので座り心地は良かった。

「まあ、流石にすぐ信用されたら僕は驚くよ、今のアルビオンは戦争中だし貴族派のスパイだっているかもしれないから警戒するのも無理は無いんじゃないかな？」

「その台詞、お前が言つと説得力あるな……………」

リースは呆れたようにワルドを見た

「おつ、なんかあるよ」

そう言つた才人の方を見ると才人は小さな黒い立方体のような物を持っていた。

「……………何処からそんな物が出てきたんだ？」

リースが胡散臭げに才人の持つている立方体を見た。リンも興味を引かれたらしくしげしげと立方体を見ていた

「なんか見れば見るほど変な感じね、部屋の中に転がってたのに傷ひとつ付いてないし」

その時ノックの音が部屋に響いた。

「やべっ」

咄嗟に才人は立方体をポケットの中に入れた、扉を開けて入ってきた護衛には見えなかったらしく才人はこっそり息を吐いた。

「失礼します、ウェールズ殿下がお呼びです」

そう言つて護衛はリン達に付いてくるよう言つと船長室向かつて歩きだした

船長室につくと、豪華な服に着替えたウエルズが入つてきたワルド達を見ていた。部屋の回りには兵士達がワルド達を監視して、少しでもウエルズに危害を加えようとしたら即座に動くことができるようにしていた。

「君達を呼んだのは言つまでもない」

そう言つてウエルズはリースを見た。

「単刀直入に言おう、君達は何者だ？」

「トリステインの大使だ、アンリエッタからの手紙を届けに来た」

リースは即答した。ウエルズは胡散臭そうにリース達を見た。

「その手紙は？」

ウエルズに言われて手紙を持っているリンが前に出た、ウエルズは近付こうとしたリンを止めると横の護衛に取りにいかせた。

「ずいぶん警戒してんな」

リースは呟いた、ウエルズは手紙を見るとそれをたたんでリース達を見た

「確かにこれはアンリエッタの手紙だ、だが、君達の疑いが晴れたわけではない、何かトリステインの者だと証明する物はないか？」

リースは舌打ちした、リンの騒ぎのせいだろうかウエルズの警戒心が強すぎる、会つた時の親切さは自分たちを逃がさないためか、今更ながらに気づいた。

「ルイズ、アンリエッタから何か貰つてないか？」

リンは首を振つた、原作解離の影響がここで裏目に出たかとリースは原作を引つ掻き回したイリアを恨んだ、すると後ろで黙っていた才人が痺れを切らしたようにウエルズに向かって言った。

「いちいちうるさいんだよ！証拠つて言つても何を渡したらあなたは納得してくれるんだ？その手紙でも十分証拠になるんじゃないの

か!？」

才人の言葉に乗るようにワルドが前に出た。

「私はグリフォン隊隊長『閃光』のワルドだ、身分の証明には僕のグリフォンを確かめれば分かるだろう、それでも僕達を疑うのかい？」

ウェールズは黙った、才人はウェールズの反応を見ていた、と

「ウェールズ殿下!ニューカッスルが!」

伝令の言葉に反応して弾かれたようにウェールズが立ち上がった。

「ニューカッスルがどうした!？」

「レコンキスタに襲撃されているとの情報が!」

「なんだって!……… わかった、君達、話は後だ。これから私達はニューカッスルに向かう!君達にはニューカッスルについてから指示を出させてもらう。いいな?」

リース達は頷いた、ウェールズはそれを確認すると回りの護衛達に指示を出し始めた。

そのころ、ニューカッスルでは激しい攻防戦が繰り広げられていた、王党派と貴族派が入り乱れている中でイリアは貴族派の兵士達を大剣で切り刻んでいた、圧倒的重量を誇る大剣の重さを能力で軽減しているのがイリアの細腕でも楽々振るうことが出来た。

イリアは先程ジェームス一世に逃げるよう提案したが王党派の誇りを貫くらしく徹底抗戦すると言われた。なのでせめて手伝わせてもらおうと提案したところに貴族派が攻めてきて返事をもらわずに飛び出して今に至る。

「はあ、暇ねえ」

振り返り血を浴びながらイリアは呟いた。視界に逃げようとした兵士を見つければ氷の槍で貫きながらイリアは大剣を振り回し続けていた。



其の三十九（後書き）

返事を返すの忘れてました……………

## 其の四十

ニューカッスルについたウェールズ達が見たのは戦争そのものだった。

城内では貴族派と王党派が入り乱れておりお互いに大量の返り血を浴びていた。ウェールズは始めて見た戦争の風景に呆然として何もできないでいた。ワルドはそんなウェールズを横目で見るとリン達に指示を出して戦争の渦の中に入っていった。

「いいのか、ウェールズ置いてって？」

リースがワルドに問いかけた。

「別にいいだろう、依頼は果たした」

そう言いいいながら表情を動かさずにリンに斬りかかってきた兵士を『ブレイド』で切り裂いた、リースはその軍人らしい姿を見て対抗心を燃やしたのか腰の刀を抜いて目の前の貴族派らしき兵士に向かつて一閃した。

リンは血を浴びながらワルドの後ろで走っていた、その隣で震えながらリンに手を引かれて走っている才人は人が死んでいく光景に心身喪失状態に陥っているようだった。

「ルイズ！大丈夫か！？」

ワルドが心配そうに声をかけてきた。

「大丈夫！ワルドも無理しないでね！」

実際は先程血を見てから頭痛がするのだがワルドに心配をかけないようにあえて言わなかった。

乱戦地帯をくぐり抜け、ワルド達は兵士達がいなくてあろう部屋に入った。

「みんな、怪我はないか？」

そう言いながらリースはリン達を見回した、ワルドは軍人だからと

もかく、只の一般人である才人は当然ながらショックを受けたらしく震えていたので思いつきりリースは頬を叩いた、

「……………痛え」

才人はビンタが効いたのか頭を振ると顔を上げた、その顔はまだまだ恐怖の色を残していたがそれを押し殺しているのも読み取れた、リースは才人から目を離してリンの方を見たこちらは才人と違い落ち着いていたが痛みをこらえるように顔をしかめながら頭を押さえていた、隣には心配そうにリンを見つめるワルドの姿があった。

「大丈夫かい？」

心配そうにワルドはリンに言った、リンはぎこちなく首を縦に振ったが大丈夫ではないことは一目瞭然だった。案の定リンは立ち上がろうとした途端にバランスを崩して床に座りこんだ。

「おいつ、大丈夫か！？」

慌てて才人がリンに駆け寄る、ワルドが一瞬才人を憎々しげに見たがすぐに目を反らした、幸いそれには誰も気付かなかった。

「まあ、くらくらするけど大丈夫、ちゃんと歩けるから」

そう言っリンは立ち上がった、少し足元がおぼつかないがちゃんと歩けることを示していた。

「わかった。リンが歩けるのはよくわかった、……………だけどあんな戦いの中を歩きながらは無理だろ？」

才人の言葉に全員驚いた顔をして固まっていた。

「あれ？……………もしかして気付いてなかった？」

全員が目を反らした、才人の背中に嫌な汗が流れた。

「……………じゃあ、まさかとは思っけど、これからどうするか考えてる？」

その言葉に答える者はいなかった、嫌な沈黙がおりた部屋で沈黙に耐え兼ねたリースが咳払いして注目を集めた

「よしっ、……………とりあえず何するか考えよう」

リース達が思わぬ事態に陥っていた頃、イリアはジェームス一世の部屋にいた。

ジェームス一世は忙しく部下達に指示を出しながらイリアと話をしていた。

「つまり君はここから逃げろと言っているのかね？」

ジェームス一世は眉をひそめながらイリアに聞き返した。

「逃げろ、じゃないわ。戦略的撤退よ」

イリアが訂正した。

「どちらでも同じだ！この私に国を放って逃げ出せと言うのか！今ここで逃げ出したら国民はあの蛮人どもに苦しめられることになるんだぞ！！」

ジェームス一世は玉座を叩きながらイリアに言った、イリアはそんなジェームス一世の剣幕に吞まれることもなく平然と言り返した。

「あなたが逃げなくても同じよ、まさかあなた勝てると思ってる訳じゃないでしょう？」

ジェームス一世は黙りこんだ、本当は彼も分かっているのだ、このまま戦っても負けることは。

それでも何故戦うかと聞かれたならば結局彼はこう言うのだろう。誇りの為だと。

「あなたは良くて国民は良くないのよ。あなたが誇りの為に死んでも国民にはそんな事どうでもいいのよ、わかる？」

ジェームス一世は一言も返すことは出来なかった、しかしだからといって誇りを捨てることも出来ずにジェームス一世の天秤は忙しく揺れていて答えを出すこともできなかった。

結局、ジェームス一世に会いに行くことにした。

リース達はそつと扉を開けると兵士がいないのを確認して通路に出た、ワルドと才人でリンをどちらが背負うか言い争った結果リンは結局才人に背負われていた。

それにしても、通路を歩いていて未だに生きている兵士に一度も会っていなかった。戦いが終わったのかと思っただが先程から大きな何かを叩くような音が響いてくることからそれは違うと思った。

そうこうしている間に立派な装飾が施されている扉を見つけた。扉の横には兵士が見張りをしていることからここにジエームス一世がいることは容易に予想できた。

「どうする？」

リースが聞いてきた。確かにこのまま近付いても兵士達にやられてしまうだろう、だからといって身元を示すような物は持っていない。その時才人が口を開いた。

「誰か俺達を知ってる人がいればな」

そんな都合がいいことがあるわけない。………と言おうとしてその都合がいい人物が一人いることに気付いた。悔しいが何故か今は才人の頭の切れがいい。

「ウエールズがいる」

そう言って立ち上がった、あの時見捨ててから生きていければいいが、思いながら兵士達に近付いた。

「すまない、トリステイン王国グリフォン隊長『閃光』のワルドだ、確認するならウエールズ王子に聞けばわかる。彼にはアンリエッタ姫からの手紙を渡した借りがある」

兵士は顔を見合わせると片方が扉を開けてウエールズを呼んだ。しばらくウエールズと話をしたあと兵士はワルド達の方を向いた。

「許可が出ました、お入り下さい」

兵士に促されて入ると中ではウエールズが待ち構えていた、ウエールズは何を言うわけでもなく黙々とワルド達を連れていった

部屋の中には王党派の兵士達が集まっていた。兵士達の大半は重症を負っていて苦しそうに呻きながら横になって体を休めていた。そんな兵士達を水のメイジが治していた。

そんな中にジエームス一世は玉座に座りながらワルドを待っていた。慌ててワルドは礼の形をとる。

「ワルド君、君がトリステインからの使者なのかな？」

「はい！」

「そうか……………実はこれから私達は撤退するんだ」

「はい？」

思わず聞き返した、保守的貴族ののジェームス一世がまさかそんな事を言うとは思わなかったのだ、ジェームス一世はその様子を見て笑った。

「見ての通り兵士達は満身創痍だ。このまま戦っても結果は見えて  
いる、なら一時撤退してから英気を養い、準備を整えてから戦った  
方が良いと思っただよ

そう言ったジェームス一世の顔は少し晴れ晴れとしていた。

顔をあげたまま固まっているワルドを置いてジェームズ一世は王党  
派の兵士達に説明を始めた

## 其の四十一

その後、王党派の兵士達を説得したジエームス一世はイリアにトリステインに送るよう頼んだ。

イリアは頷くと小さく何かを呟いた

瞬間。イリア以外のこの部屋にいた全員が消えた

残されたイリアは誰もいないのを確認してから玉座に座った

その時、ニューカッスルの城門が破られる音が城中に響いた。

しばらく座りながら待っているとバタバタという足音が響いてきて、扉が勢いよく開かれた。

「ジエームス一世は何処だ!!!」

目をぎらつかせながら傭兵が入ってきた、イリアは笑いながら傭兵に言った。

「ジエームス一世はいないわ、あなたたちの相手は私がしてあげる」傭兵達はイリアを見てポカンとしていたがどうやらイリアに価値を見いだしたらしく下卑た笑いを浮かべながらイリアに近付いていった。

「ちょうどいいや、嬢ちゃんよおあんたみたいな女を殺すのは俺達もあまりしたくねえんだ。そこで、今ならあんたを殺さねえから大人しく俺達についてこねえか？安心しな、変なことはしないからなあ」

そう言いながら傭兵はイリアの目の前に立った。イリアのような子供が自分を傷つける事は出来ないと思っていたのだから、イリアはそんな傭兵を見ていつの間にか現れた大剣を無造作に振るった。

最期まで下卑た笑いを浮かべながら傭兵の上半身は下半身から離れて下に落ちた、切断面から吹き出す血が服に付くのを嫌そうな目で見ながらイリアは傭兵の上半身を蹴り飛ばした。

傭兵達はあまりの出来事に茫然としていたがやがて仲間が殺されたということが理解できると理解ができない雄叫びをあげながらイリ

アに突っ込んできた。

自分に向かつてくる十数人の傭兵達を見てイリアは言った。

「潰れる」

瞬間。傭兵達は地面に押し付けられた、自分に何が起きてるか理解する前に見えない圧力に潰されて床にへばりつく汚れになった。

もはや原型を留めていない汚れを見ながらイリアは自分の失態に気付いた。

「あ、城を汚したらいけないんだった」

まあいいかと思つて再び次の侵入者を待った。

ローズが城に入った瞬間、城の回りに白い霧が立ち込めた。

一寸先も見えないような深い霧の向こうにはローズの後ろに付いてきていた貴族派の傭兵がいたはずなのだが今は影も見えない。おそらく霧に吞まれたのだろうとローズは思った。

これをした奴の見当はついている。

ローズは中にいる傭兵達を切り刻みながら玉座のある大広間に向かった。

大広間に着くとそこには血の海が広がっていた、部屋全体が血の色に染まつていて異界じみた雰囲気を出している、部屋の奥にはやはり真っ赤な玉座がありそこに座っている者だけがこの部屋で唯一血が付いておらず、黒いゴシッククロリータを纏いながら静かに目を閉じて座っていた

ローズはそんなイリアに声をかけた。

「すごいね、この部屋」

イリアは目を開けた、名の通り薔薇のように真っ赤な返り血を浴びながらそれを気にする様子をみせず平然としているローズを見て呆れたようにため息をついた。



「貴女の姿の方が凄いけど？ 仮にも女の子なんだから身だしなみには気をつけないと」

ローズは自分の服を見て首をかしげた。

「結構、綺麗じゃない？」

イリアは諦めたように首を振った、小さく血をとるように言つと、ローズの服に付いていた血が全て弾けて床に散らばった。

それを名残惜しそうに見ているローズを無視してイリアはローズを学院に転送した。

「……………もう誰もいないわよね？」

異常なほど静まり返った城の中でイリアは誰に言つわけでもなく咳いた。音がしないのを確認するとイリアは緊張の糸が解けたようにへなへたと玉座に崩れ落ちた。

「ああ、疲れた」

今なら誰も見ていない。イリアはそれを意識したとたんこの部屋の惨状を改めて見てしまいそのまま床に向かって吐いた。

「オエツ！…………ゴホツ、ゴホツ」

もはや人とはわからない肉塊を、人の中に納まっていたとは思えない程の大量の血を、今では何も見ることの出来ず虚空を見つめている眼球を。この部屋を彩る全ての物に囲まれていて先程まで堪えていた吐き気が安心した瞬間吹き出てきた。

「はあつ、はあつ。…………ゴホツ」

今までこの世界に来てからずっと被っていた『イリア』という仮面を外してしまった彼女はただのか弱い少女にしか見えなかった。

「はあつ、嫌だ、嫌だ、気持ち悪い、怖い、怖い、はあつ、怖い、怖い。誰か、はあつ、助けて、怖い、嫌だ、誰か……………」

うわごとのように眩きながら少女はよろよろと赤い部屋を出た。

廊下にもたくさん死体が転がっていた。

「ひっ、怖い、怖い、怖い。何か、部屋っ、部屋に、入りたい」

少女は近くのドアを開けると部屋の中に転がり込んだ。どうやら誰

も入っていないらしく、客室らしき部屋は荒らされた形跡を残さず、少女はほっと一息ついた。

「やっと安心できる」

そう言っつてベッドに倒れこんだ。

今までの疲れがどっと出てきてイリアは急速に眠りの中に落ちていった

少女が『イリア』の仮面を被り始めたのはあの事故の頃からだった。

## 其の四十二

少女は村にいた。

先程までとても恐い場所にいたような気がする、そう首をかしげていると隣から声をかけられた。

「どうしたの？ボーっとして」

隣を見るとそこには少女にそっくりの少女が立っていた、彼女はその蒼い目に少女を映していた、少女も彼女を見つめる。しばらく見つめているとやがて笑った。

「相変わらず可愛いね、流石私の妹だ！」少女は照れて顔を赤くしてぷいっと顔を背けた。

「……お姉ちゃんのいじわる」

彼女はごめんごめんと笑いながら言うと、少女の頭を撫でた。

「でもよかったよ。なんか暗い顔してたからさ、心配したんだよ」

少女は彼女の方を向いた、その顔は既に嬉しそうに緩んでいた。

「……ありがとう」

少女はにこっと笑った。その笑顔は曇りのない太陽のように眩しいものだった。

「で、どうしてぼんやりしてたんだか説明してくれないかな？」

彼女に言われ、少女は少し悩んでから言った。

「……………別に、恐い夢見たの」

彼女は呆れたようにため息をついた。

「歩きながら寝てたんだ……………じゃあ、私の話も聞いてなかった？」

少女が頷くと彼女は残念そうに頭に手をあてると、気を取り直して話を最初から始めた

「実は隣の家の子供がさ、あの子が実は入っちゃいけないって言われている山の中に入っちゃったらしいの……………」

そんな彼女の様子を少女は幸せそうな表情で見ていた。

しかし少女はこれが夢だということに気付いていた。

当時、『イリア』はまだイリアという名前ではなく、アリスという名前だった。

アリスには双子の姉がいた、頼りがいがありいつも近所の子供にいじめられていたアリスを庇ってくれる強くやさしい姉だった。

アリスはそんな姉のことが大好きだった、いつも姉の後ろにくっついていて二人が離れているのを見るものは村の中には誰もいなかった。

あの頃の私はとても幸せだった、姉も幸せだった………と思う。隣に姉がいて、家では母親が笑顔で出迎えてくれて、その素晴らしい日々が永遠に続くとの頃の私は信じて疑わなかったそんなことはなかったのに。

その姉の名前はイリアといった

リンは目が覚めた。

夢の中の少女は誰かに似ていたような気がしたのだが、思い出そうとしても手のひらからこぼれ落ちるように夢の内容をわすれていく。リンはまあいいかと諦めるとベッドから起き上がり、隣で寝ている才人を起こし始めた

少女は目を覚ました。とても懐かしい夢を見た、その幸せに浸っていたかったがそろそろ学院に帰らなければフィリンにも心配をかけてしまうだろう。憂鬱そうに顔を曇らせながら少女は学院に戻った

### 其の四十三

イリアが学院に戻った頃には既に王党派の面々はいなくなっていた。少し複雑な気分になりながら学院に入るとそこにはいつも通り生徒たちが楽しそうに騒いでいる光景が広がっていた。

生徒たちの間を静かにくぐり抜けながらイリアはいつもの定位置である屋上へ向かった。

屋上には軽い風が吹いており、イリアの白銀の髪をゆっくりとなびかせていた。

イリアはその風の心地よさに目を細めながらいつものまにか後ろに立っていたフィリンに声をかけた。

「久しぶり、フィリン」

フィリンは何も言わずにイリアの隣に座った。

しばらくの間、二人は黙って空を見ていたがやがてフィリンがゆっくりと口を開いた。

「少し心配したんですよ」

イリアはほんの少し意外そうな顔をした、フィリンの事だからどうせあまり心配しないで待っていきそうだったので、今の言葉はイリアにとつて意外だったのだ。

「あら、貴女からそんな言葉が聞けるとは。……熱でもある？」

実際は心配してくれた事は嬉しかったのだが、つい照れ隠しのように皮肉で返してしまった。フィリンはぶすつとしていたが、何かに気づいたように目で笑いながらイリアに言った。

「主、実は嬉しかったりします？」

イリアはそれには答えずに空を見上げた。フィリンは表情をやわらげるとイリアの隣で同じように空を見上げた。

フィリンが去ったあとイリアは学院の庭に降りた。イリアが来たのを見たローズは笑いながら口を開いた。

「ありがとね、私の依頼を手伝ってくれて」

イリアは黙ってその言葉を聞いた。

そう、イリアが王党派を助けた理由はこれだった。もちろんイリアもただでこの依頼を手伝った訳ではない。

「礼は要らないわ、それより約束を忘れた訳じゃないわよね？」

ローズは苦笑しながらイリアに言った。

「もちろん。……まあこんなことで手伝ってくれるなんて思っ  
てなかったんだけどね」

一拍おいてローズは言った。

「この依頼をしたのはゲルマニア皇帝ゲルマン三世よ」

イリアの頭になぜかあの隻眼の男が映った。

「じゃあ、また縁があったら会いましょう」

そう言い残してローズは去っていった。

王党派がトリエステイン王家に引き取られて学院から去っていった、もちろんアンリエッタも帰ってしまったので自然とワールドも帰ることになったので才人は少し機嫌がよかった、確かに少し寂しいような気がしなくもないがやはり嬉しさが勝っていた。対するリンはいつもとあまり様子が変わっていないので才人はさらに機嫌がよくなった、まあかといってそれをリンの前でそれを口にするほど才人は馬鹿ではないのだが。

そんなこんなで他愛もない雑談をしながらリンと才人は食堂の中に入った。生徒たちはざわついており、思わずリンは身構えたがそれが自分達の事ではないのに気付くとほっとしたように息をつくと席に座った。

どうやら話は自分達の欠席の理由ではなく新任の教師が入ってくる

ことらしい。話を聞く限り、その教師は風のスクウェアでさらに現役の魔法衛士隊らしく、ギトーの立場も危ういのでは。という内容だった。

「……………」

何か嫌な予感がした、才人がリンの方を見ると、やはりリンはいつもと同じように才人に言った。

「ああ、ワルド教師になったから」

才人はほんの少し安心した、やはりなんだかんだで少しワルドがないことが寂しかったのだ。

しかしリンがとられるという気持ちの方が大きく、才人は一気に暗くなった。

そうして、物語は別のものへ変わっていく。

はたして、それが吉とでるか凶とでるか。

それは誰にもわからない。



## 其の四十四

レコンキスタの打倒アルビオン王家の目標はひとまず達成されたと見ていいだろう。

しかしニューカッスルは落とせず、強力な手駒の一人であるワルド子爵は失い、城攻めには傭兵を使ったとはいえローズのせいで多くの兵士達を失い、傭兵達からの信頼を無くしてしまったのを考えるともむしろアルビオン戦はレコンキスタにとってマイナス効果にしかならなかったと思われ、レコンキスタの勢いも衰えると思われていた。

しかしレコンキスタの勢いは衰えることはなく早急な対応が求められる。具体例をあげると

その報告書をほつり捨ててからガリア王のジョゼフはため息をついてから玉座にもたれかかった。

ジョゼフは全てが自分の予想通りに動いている事に飽きていた。勿論クロムウエルがシエフィールドを操っていることもわかっていたし、その裏で動いている存在が次に何をすることも予想がついていた。ジョゼフには回りの人間達が低劣で愚かな物にしか見えなかった。しかし、一人だけ行動がわからない奴がいる。

そいつが関わると、その物達はジョゼフの予想に反した動きを見せる、奴だけがジョゼフの理解を越えていた。

ジョゼフは机から取り出した部下からの報告書に目を通し呟いた  
「イリア・フロイス」

その頃学院でリースを誘ってお茶を飲んでいたイリアは急に走った背筋の悪寒に思わず身震いした、嫌々着いてきたリースはフィリンの紅茶を飲みながらそろそろ緑茶が恋しくなってきたな。と思っていた時にイリアが身震いしたのでびっくりしながら声をかけた。

「おい、大丈夫か？」

「ええ、……何でもないわ」

イリアは深呼吸しながら気持ちを落ち着けると悪寒のせいで思わず緩んでしまった顔をこっそり引き締めると顔をあげて言った。

「フィリン、お茶を淹れ直してくれないかしら？」

イリアの言葉にフィリンは黙って紅茶をさげると、紅茶を淹れ直し始めた。

それを見てからイリアはリースに言った

「さて、まあゆっくり話し合しましょう」

リースは胡散臭げな目をイリアに向けながら言った。

「なあ、回りくどい話は嫌いなんだ、はっきり言ってくれないか。

……いったい何で俺をこんなところに呼んだんだ？」

イリアはフィリンが淹れ直してきた紅茶を一口飲んでからリースに言った

「ズバリ言うけど……貴女は私の事が嫌いなのかしら？」

リースは口に含んでいた紅茶を吹き出した、紅茶がかかったイリアは能力で服についた紅茶を取りながら非難がましくリースを見た。

リースははとが豆鉄砲食らったような顔をしながら言った。

「まさかお前が人の目を気にしてるとは思わなかった」

イリアは顔をしかめた

「失礼ね、……で、どうなの？」

リースは視線を泳がせながら言った

「ん……まあ、普通かな？」

「ふうん」

イリアはそれを聞いて少し黙ると、フィリンに汚れてしまったテールブルクロスを取り替えるように言った。

「まあ、ゆつくりしていきなさい」

それを聞いてリースは少し居心地が悪そうに肩を竦めた。

## 其の四十五

授業が終わり早くも騒ぎ出した生徒達を見ながら、リンは教科書をかバンにしまつて次の教室に行こうとしていた。

だが、その前に教師のギトーがリンを呼び止めた。

「ヴァリエール君、学院長が呼んでいる」

教室の生徒達が一旦騒ぐのをやめてリンを見る、久々に家名で呼ばれたので一回聞き流してしまつたリンは周囲の視線に居心地の悪さを感じながら返事を返した。

「えーと、何ですか？」

ギトーは同じことを聞き返されてもあまり嫌な顔をせずリンの質問に答えた。

「さあ、私はあまり詳しくは知らないが、急用ではないというのは確実だ、だがあまり待たせても悪いだろうから早くいつてきた方がいいだろう、行きたまえ」

リンはギトーに礼を言つて席を立つた、周りの生徒達は既にリンを見ておらず学院長に何故呼ばれたのかについて様々な憶測を話していた。

リンが教室から出るときにギトーがリンを呼び止めた、何かと思ひ振り返るとギトーはいつも通りの仏頂面でリンに言つた。

「最近の君は教師の中でも中々評価が高い、この調子で頑張りたまえ、始祖ブリミルはきつと君の努力に応えてくれるだろう」

それでは、と言い残しギトーは教室を出た、リンはしばらく固まっていたがやがてあれがギトーの遠回しな励ましたと気付くと廊下を歩くギトーに礼を言つてから学院長室に向かって歩き始めた。

学院長室に入るとオスマンは朗らかに笑いかけてきた、リンはとりあえず曖昧に笑い返した

「オスマン先生、何で私を呼んだんですか？」

オスマンはほっほっほと笑ってからリンにとりあえず椅子に座りなさいと促した、リンはそれに従って椅子に座った。

「さて、お茶でも飲むかね？」

「遠慮しておきます、それで話とは何ですか？」

リンはそう言っただけで断ったがリンの言葉を無視してオスマンの新しい秘書（もちろん美人）がお茶をリンの目の前に置いた、リンが非難がましい視線をオスマンに向けるがオスマンは気にした素振りを見せずに話始めた。

「まあ、大したことはないのじゃが、簡単に言うと王女から君にアルビオンの件の礼で渡したいものがあり、それを儂が預かってるので君に渡そうと思っただけでな」

リンはアンリエッタの名前が出た時に少し顔をしかめたがオスマンは気付かなかった、リンは出されたお茶を少し飲んで気持ちを落ち着けた。

「それで、それがトリスティン王家の宝、『始祖の祈祷書』と『水のルビー』なんじゃ」

オスマンの言葉にリンは固まった、まさかアンリエッタが自分に国宝をあげるなんて馬鹿な事をするとは思わなかったのだ、自分が管理すべきものをアルビオンの件程度の事であっさりよこすとは思わなかったのだ。

改めて思った、あの女想像以上の馬鹿だ。

「今すぐ王家に返してください」

「残念ながら無理じゃ、国宝は簡単に持ち運べる物ではない、運ぶのに必要な護衛も学院にはおらんしな」

「……………はあ、気が重いな」

リンが言つとオスマンもオスマンで思うところがあるらしく、苦笑いしていた。

「まあ、気楽にしてくれ、どうセルビーは指にはめていれば無くなることはないじゃろうし祈祷書など白紙じゃからな、無くしたとこ

るで向こうも気にせんじやろう」「  
オスマンは笑うとリンに下がってよいぞと言った。  
リンはお茶を一気に飲むとありがとうございましてと言って学院長室を出た。

とある酒場でローズは情報屋と会話をしていた。

「  
と言うわけだ」

相も変わらず無機質な声で情報を聞き終えたローズは改めて情報屋の姿を見た。

服は体を覆い隠す程の大きさのマント、マントで隠れていない腕や足のしたの方を見る限り、下に着ているのは礼服だと思われる、だが情報屋の特徴的な部分はその格好ではなく顔だった、と言っても特に絶世の美女なわけでも、恐ろしい武人というわけでもなかった。情報屋は仮面をかぶっていたのだ。

しかも目の場所に穴を開けただけの白い面をかぶっており、少し不気味なイメージを回りに出していた。

「ありがとう、しかし相変わらず不気味ねあなた、その仮面の下は何があるの?」

「知りたいか?」

魔法で変換された声で情報屋は聞き返した、ローズは苦笑しながら返した。

「嫌よ、どうせお金とるんでしょ?」

「よくわかってるな、高いぞ」

くっくくくと喉を鳴らして情報屋は笑った、恐ろしい事にこの情報屋、会うたびに性格を変えてくる、病的な程の秘密主義だった、結局ローズが知っているのは目の前にいるのが情報屋をやっているということだけだった。

「それでは、用があつたらまた呼んでくれ」

「じゃあな、と言いつつ残して情報屋は酒場から去っていった。

## 其の四十六

休日、リンは昨日後回しにしてしまった祈祷書について考えていた。あまりいい返し方が思い付かず一人悶々としてしていると後ろから声をかけられた。

「ヴァリエール先輩、おはようございます！」

リンが後ろを振り返ると短髪の下級生が笑顔でリンの方を見ていた、確か前に使い魔がいなくなってしまったと言っていたのを一緒に探した下級生だ。

今日もいつものように元気が溢れている姿を見てリンは自然と頬を緩めると返事を返した。

「おはよう、今日も元気ね」

「はいっ！」

元気よく走っていく背中を見ながらリンは最近生徒達から話しかけられるようになったなと思った。

声をかけてくるのは主に下級生が多く、おそらくリンの面倒見のいい性格が下級生達に好かれたのだろうと思う。

もちろんリンに優しくしてあげた覚えはなくあたりまえの事をしたと思っただけでただ周りが声をかけてくるようになったとしたか思っただけだった。

変わったといえば学院の給士達もリンに話しかけるようになってきていた。

元々リンはあまり平民と貴族の違いなどあまりに気にしておらず学院の給士達にも特に平民の壁を気にせず接していた、もちろん最初は給士達も貴族から声をかけられて迷惑そうだったが最近では慣れてしまったらしく普通に話しかけるようになってきた。

周りから見ればルイズ（リン）に起きた変化は大きいものだったがリン本人からすれば特に自分が変わった自覚がないので、周りにすこし釈然としないものを残しながらリンの変化は少しずつ日常にな

っていった。

前のルイズを忘れさせるほどに。

祈祷書の事はとりあえず後回しにして朝食でも食べにいこうかと  
思い食堂に向かった。

ちなみに才人はアルビオンの戦いで自分の無力さを思いしつたらしく  
イリアの所でちょっとした訓練を受けていた、まあそれで強くな  
れる保証はないらしいがそれでもいいのだろう。

とにかく才人はアルビオンの事を思い出さないよう何かに没頭して  
いたのだろう、それを止めるつもりはリンには無いので才人の好  
きにすればいいと思っっている。

食堂に着くと、どうやらまだ準備が出来ていないらしく給士達が食  
堂内を忙しく動き回っていた。

リンは給士達を避けながら自分の席についた、そういえばと腰に差  
してある杖を引き抜いて思った、何故自分は記憶を失う前は魔法が  
使えなかったのだろうか？話を聞く限り別に魔法を勉強していなかっ  
たわけでもなければ、魔法使いの血が入っていないわけでもない、  
別に魔法が使えない理由など無いのだ、それでも使えなかったとい  
うことは……………

「まさか……………虚無？」

だとすれば辻褃は合う、しかしならば何故今のリンには魔法が使え  
るのだろうか？基本的に虚無の担い手は変わることはなく、代がかわ  
ると王家の血を継ぐ人に虚無の力は受け継がれると言われているが

そこまで考えてリンはある可能性を考えた。

まさか、いや、だが確かにそう考えると全て辻褃が合う。

だが、それは

「ヴァリエールさん？聞こえていますか？」

隣からかけられた声にリンは思考の中から引きずり出された、顔を

あげて横を見ると黒髪の給士がこちらを見つめていた。

確か名前は、シエスタだったか。

「えっ……と、何かしら？」

リンが言葉を返すとシエスタは少し躊躇うように視線を泳がせてから言った。

「いえ………もしよければ次の休日に私の故郷に来てほしいんです」

予想外のシエスタの言葉を聞いてリンは固まった、そのリンの表情を見てシエスタは勘違いしたらしくわたわたと手を振って言った。

「あつ！や、やっぱり無理ですよね！すみませんいきなりこんなこといって！」

若干涙目なシエスタにリンも慌てて言った。

「いや、別に嫌な訳じゃないのよ。ただいきなり言われたものだから………」

「あつ！でもやっぱりいいです！すみませんほんとに！」

「落ち着いてシエスタ！いいから落ち着いて！」

「いやいいんですすいませんこんなこといって！」

「お願いだから落ち着いて！行くから！行くから落ち着いて！」

「えっ………いいんですか！？ありがとうございます！」

「ええ………それより仕事はいいの？」

すごい早さの言い合いの後冷静になったリンが指摘するとシエスタはまた慌て出した。

「あつ本当だ！ありがとうございます！休日楽しみにしています！」  
そう言つてシエスタは厨房へ戻つていった。

後に残されたリンはしばらく呆然としていたが、やがて休日にシエスタの故郷に行く約束をしたのかと気付くと大体こういうことがあるとまたなにか事件に巻き込まれるんだよなあと思つた。



## 其の四十七

シエスタがリンを自分の故郷に誘っている頃、才人は学院の周りの森のなかにいた。

才人の手には練習用の模擬刀があり、それを構えながら上下に降り下ろしていた。

もちろん練習用の刀といっても本物の剣に板を噛ませただけで重さは変わらない、それを才人は振っていた。

才人は変わりたかった。

アルビオンの戦いで才人は単なる足手まといだった、戦場の悲惨さは話には聞いていたがそれは才人の想像を越えていた。

そして、アルビオンから出たときに決心したのだ。

『もう、リンに迷惑をかけないくらい強くなる』と。

帰ってすぐ戦い方を教わる人を探した、もちろんワルドは駄目だ、同じリンが好きな奴から教わるのは才人のプライドが許さなかった。結局成果は出ず、次の日に学院をぶらぶらしていたらアルビオンから帰ってきたイリアがいた、その瞬間才人の頭にひとつの考えが浮かんだ。

『アルビオンから生還したイリア 大量の兵士たちに勝つくらい強い イリアは強い 自分は強い人を探している イリアから教われればいい!』

そうして今、才人は模擬刀を振っている、イリアが言うには「日々の積み重ねが大事」らしい。確かに始めて数日だが、最初は模擬刀の重さに振り回されていたがだんだん振るのが楽になってきた。分かりやすい変化を感じて才人はもつと頑張ろうと思った。

素振りが一段落した才人は木の幹にもたれかかって休んでいた。

一旦集中を切らした瞬間今まで忘れていた空腹感が才人を襲った、

才人が空を見ると既に太陽は真上を通り過ぎていた。

「そろそろ飯食うかな」

残ってるかわからないけど、と呟きながら腰をあげた才人の目の前にイリアが立っていた。

「!!!!!!!!!!」

あまりの驚きに声も出ない才人の姿を見て笑いながらイリアは手から下げている箱を渡した。

急に渡されてきよんとする才人にイリアは笑った。

「差し入れよ、お腹すいたでしょう？」

才人は信じられないものを見るような目でイリアを見つめた。

「え?.....食べるのか？」

「くれるのか、じゃなくて?失礼ね」

まあ、食べるわよ。と言い残してイリアは学院の方に向かって歩き出した。

残された才人は手の中の弁当箱をまじまじと見つめると、やがて意を決したように弁当箱の蓋を開けた。

中は予想とは違い普通の弁当だった、いやむしろ盛り付けの配色が鮮やかでなおかつスタミナをつける肉が多めに入っているのも才人にとって嬉しいことだった。

空腹感に突き動かされるように才人は箸で（何故箸が？）肉を口に運んだ。

なんか凄く美味しかった。

もう肉汁が溢れ出すと言うか、焼き加減が絶妙と言うか、味付けがシンプルなのがいいと言うか、今まで食ったどの肉よりもいいと言うか。才人の貧相な語彙ではその味を表すことは不可能だったがこれだけは言えた。

「美味い！」

五分後、あまりの美味しさに才人の箸は止まらず、弁当箱の中身はきれいさっぱり無くなっていった。

その後、人が変わったように猛烈な勢いで素振りを日がくれるまで続けた才人が部屋に入るとリンが蠟燭をつけて勉強をしていた。

邪魔をしてはいけないと思ひ静かにドアを閉めると自分のベッドの中に入るうとした、その時リンが才人に言った。

「ああ、次の休日にシエスタの故郷に行くから」

才人は ああと生返事を返した、そんな才人をリンは訝しげに見た。

「?……何かあった?」

才人は何かを悟ったような顔をしながら言った。

「人は見かけによらないんだなあ」

そうして頭の上に?を浮かべたような顔をしているリンにお休みと言ってベッドに潜り込んだ。

## 其の四十八

そして、才人が衝撃の事実を知った次の週、丁度レコンキスタからの宣戦布告のおかげで休みになった学院からの許可もえてリン達はシエスタの故郷、タルブに着いた。

「……………で、結局付いてくるわけね」

諦めたように呟いたリンの後ろには困ったような顔をしたシエスタと、辺りの景色を見回している才人と、その才人を少し睨んでいるワルドと、後ろの方で不機嫌そうにしているリースと、いつもの笑みを浮かべているイリアとその横に影のように立っているフィリンがいた。

何故かはしらないが、学院を出ようとしたリン達を待ち伏せているかのようにこの五人は立っていたのだ。  
それぞれの言い分は

才人「いや、リンが心配で……………」

リン「あなたが心配」

ワルド「学院長に羽目を外さないように見ておけと言われた」

リン「いいけどそれだけじゃないでしょ？」

ワルド「……………」

リース「何か嫌な予感が……………」

リン「変な事言わないで」

イリア「わかるでしょう？」

リン「確かにね」

フィリン「私は主についてきただけです」

リン「それもわかるから」

といったものだった、その後、結局リンが折れて、今に至る。  
「はあ、まあゆっくりしましようか、人数は多いほうがいいし」  
前向きに考えるとそこまで悪いことではないような気がしてきた。  
あくまで気がしてきた、だが。

タルブに着いたリン達はシエスタの両親の家に挨拶にいった。

「おお、シエスタ！元気だったか？」

「うんお父さん、あつ紹介するね、こちらが私が勤めている学院の  
友達のリンさん達だよ」

「これはこれは、こんなところまでわざわざご苦労様です。さあこ  
ゆっくりして行ってください」

出迎えてくれたのはシエスタの父親だった、父親もシエスタと同じ  
ような黒髪黒目でシエスタとの血の繋がりを感じさせた。

リン達はシエスタの父親に挨拶をしてからシエスタの家にはいった。  
シエスタの家は父親がタルブの有力者らしく広々とした部屋がいく  
つつあった作りをしていた、飾り棚にはタルブの伝統工芸品と思わ  
れる焼き物がおいてあり田舎の素朴な雰囲気をつくっていた。

「落ち着く家ね、シエスタありがとう」

リンがシエスタに礼を言うのとシエスタは手をぶんぶん振って言った。

「べ、別にいいんですよ、礼を言われるほどの事じゃありませんっ  
て！」

リンは納得できなさそうな顔をしながらシエスタを見ていたがどう  
せまた謝っても同じ事を繰り返すだけなのはわかりきっていたので  
なにも言わずに椅子に座った。

「じゃあ、ちよつとお昼御飯つくってきますね」

そう言っつてシエスタは礼をして台所に向かった、それを見送りなが  
らリースは口を開いた。

「しかしのどかな所だな、昼飯食ったら一回村でも回ってみるか？」

「いいわね、私は賛成よ」

リースの提案にすぐイリアが乗った、リン達も賛成のようなのでリースはほっと一息ついた。

リースはタルブに零戦があることを知っていたのでそれとなく話を振ってみたのだがどうやら特に疑問に思われずにすんだみたいだった。

その後、他愛もない雑談をしながら時間を潰していたらシエスタが昼御飯を持ってきたのでリン達はシエスタに礼をしながら食べ始めた。

## 其の四十九

シエスタの料理は美味しかった。シエスタがいうに、タルブの郷土料理のようなものらしく、『ニクジャギヤ』と言つらしい、それを聞いたときにリースが小さく「惜しい、ちよつと違う」と言っていたがよくわからないのでリンは聞き流した。

その後、腹も満たされたリン達は、リースの提案でシエスタにタルブの名所案内のようなものをしていた。

「そんなに見所なんてありませんよ？」と謙遜しながら、目が本気だったシエスタはタルブの特徴などの説明を一時間ぐらいぶつ続けた。

「更に、私のひいおじいちゃんなんですけどこの村に形見が残ってるんですよ。『竜の羽衣』っていうんですけどまああまり見ても面白いものでもないんで後で見に行きましょう、後、そのひいおじいちゃんは色々な事を知っていたらしくてこの村にその知識を教えていたんです、さっき食べた『ニクジャギヤ』もそうなんですよ。更にタルブのぶどう酒はもうそれはそれは美味なんです。

このあたりでぶどう酒といえばタルブの名前が一番最初にあがることは間違いないです。トリストインの皇女マリアンも様も飲まれたほどですからその素晴らしさがわかるでしょう？更に

「この調子だと日がくれてしまうと思ったんはシエスタに話を切り上げて一応村を案内してくれないかと言った。シエスタはまだしゃべりたりなさうにしていたがそくに何をいうわけでもなく案内を始めた。

「これが『竜の羽衣』です、ひいおじいちゃんが持ってきたらしいんですけど結局全く動かなかったのでここに置いたらしいです、有名なメイジの皆さんに固定化の魔法をかけてもらったらしくて錆ひ

とつありません。ひいおじいちゃんが言うには空を飛べるらしいですけど皆誰も信じていません、勿論私もです。ひいおじいちゃんも死んじゃって今ではお年寄りの方が参拝しに来るぐらいです」  
そんな説明をしているシエスタに案内されたのはタルブの森の中にある寺院だった。鳥が翼を広げたような鉄の物体を見て、リンは確かにこれは飛ばないと直感した。

『

』

どこかで声が聞こえた。慌ててリンが後ろを振り返るがそこには薄暗い森が広がっていた、いきなり振り返ったリンを不審に思ったのかワルドがリンに話しかけてきた。

「どうした？何かあったのか？」

「今、声が……………」

「声？」

「いや、何でもない。気にしないで」

心配そうな顔をしているワルドに気にしないでと繰り返しながらリンはさっきの声は幻聴だと思ふことにした。

( だけど…………… )

何処かで聞いたような

リースは寺院にある鉄の物体      零戦を見て安心したように口元を緩めた。

今までイレギュラーな事が続いていたのでつきりこの零戦も無くなっているかもしれないと心配していたのだがどうやら杞憂に終わったみたいだ。

「なあ、シエスタ。この機械を残したシエスタのひいおじいちゃんは何が残したりしてないのか？」

出来る限り自然に話を振ってみた、シエスタは特に不審に思ふこと



もなくリースの疑問に答えてくれた

「ああ、ありますよ。この寺院を建てたのも私のひいおじいちゃんですから、ひいおじいちゃんのお墓もこの寺院の裏にあるんです。そこにひいおじいちゃんが遺したものがあるんですけど………見に行きますか？」

リースは頷いた。シエスタはそれを見ると寺院の裏に向かって歩き始めた、リン達もそれに続く。

「才人、行くわよ」

『竜の羽衣』を見つめたまま固まっていた才人に向かってリンは声をかけた。

「えっ、ああ今行く！」

才人は慌ててリンの後を追った。

## 其の五十

寺院の裏にある墓地では聖具の形をした墓の中に一つだけ珍しい形をした墓が異彩を放ちながらたっていた。

シエスタに案内されたリンだったがその不気味な墓地の様子に怯えていた、まあそれを表に出すようなことはしなかったが。

「こんな所に勝手に入っちゃっていいの？」

「大丈夫ですよ父さんには村のどこ回ってもいいって言われてますし」

いや、ここ（墓地）までは予想してないだろうとリンは思ったがこれ以上言っても無意味だろうと思いつつのを止めた。

「にしても、何かでそんな雰囲気だよな」

薄暗い森の中にひっそりとあり墓地の様子を見て才人が何気無く言った言葉聞いてリンはびくつと肩を震わせた。

「？リン、どうかしたか？」

リンの様子を不審に思ったのか才人が声をかけた。

「別に何でもないわよ、うん。早くしましょう」

そう早口に言い切ったリンの様子に才人が何かに気付いたように顔をにやけさせて言った。

「まさかリン、怖いのかな？」

「！違うわよ、別に怖くなんかないわ！」

そう言ったリンの後ろからこっそり忍び寄っていたイリアが声を上げた。

「わっ！」

「いやああああああっつっつ！！！！」

飛び上がらんばかりに驚いたリンは大きな叫び声を上げてその場にぺたんと座り込んだ。

流石に気の毒に思ったのか才人はリンにおそるおそる声をかけた。

「えーっと、……………大丈夫か？」

声をかけられたリンはイリアの方をキツと涙目で睨んだ。睨まれたイリアはリンの視線を受け流しながら墓地の中にステップを踏みながら入っていった。

とりあえずふらふらしながら立ち上がるとリンはさっきの醜態をなかつたかのように振る舞ってシエスタに墓地を案内するように頼んだ、シエスタはリンの方を心配そうに見ながら墓地の案内を始めた。

「えーっと、ここが寺院の墓地です。見ればわかるようにひいおじいちゃんのお墓はあの黒いお墓です、勿論碑文が刻まれているんですけどどうやらひいおじいちゃんの故郷の文字……ああはい、ひいおじいちゃんは元々この村の人じゃなかったんです、大怪我しちゃってふらふらだったひいおじいちゃんは近くにあったこの村に来たらしいんです、そこでポロポロのひいおじいちゃんを助けてくれたのが私のひいおばあちゃんです、その後ひいおじいちゃんはこの村に住むことにして自分が死んだ後には自分のお墓の碑文が読める人に自分の遺産を渡すように言ったららしいんです」

そんなシエスタの話聞き流しながら才人は食い入るように碑文を見つめていた。

「えーと、才人さん？」

「シエスタさん、あなたのひいおじいちゃんってあなたと同じ黒髪だった？」

「！え、ええ、でもなんで？」

シエスタは驚いたように言った、才人は感動したように目を細めながら呟いた。

「空軍少尉佐々木幾三、異国の地に眠る。」

シエスタはその言葉を聞いて、信じられないような顔をして才人を見た。

「読めるんですか……？」

才人は無言で頷いた。

そんな才人の横でさっきまで震えていたリンはその碑文のしたにある小さな文字を凝視していた。

『  
その文字を見た瞬間リンはひどい目眩に襲われた。  
そして

暗転

## 其の五十一

いきなり倒れたリンをワルドと才人で運んだ後、リンとイリアとフイリンはタルブを適当にぶらついていた、シエスタもリンの看病に行ってしまったのでタルブを案内する人はいないのだが元々リースは零戦が目的なので案内は必要ないし、イリアは暇が潰せれば良かった。

そんなこんなでタルブの村の回りにある森の中をリース達は歩いてきた。といつても森の中は薄暗いだけで目新しい物も何もなくイリアは早々にこの暇潰しに飽きてきた。

「ねえ、何か面白いこと無いかしら？私もう暇で暇で死んでしまいたいぞ」

「むしろ死ねばいいのに」

イリアの言葉にリースは吐き捨てるように言葉を返した、勿論リースもイリアのように只の暇潰しにこんな森の中に来たわけではない、あの零戦の燃料は原作によると底を尽きているらしいので出きるだけ燃料の解析をしてから錬金で燃料を創っていきたいと思っているのだ。

まさかこんなおまけ（イリア）が付いてくるとは思わなかったが。

「はあ、暇ね。フイリン、何か面白いことない？」

「さあ、私はそういうものは苦手です」

「そういえばそうね、はあ暇だわ」

隣で交わされる会話に苛々しながらリースは歩みを進めた。と寺院の方から誰かが歩いてくるのが見えた。女性もリースに気付いたのかリースを見た、肩で切られた薄い灰色の髪の毛がリースから見えたが何せ相手は遠くにいたので顔の細かいところは見えなかった。近くに来ると女性は美人だった、薄い水色をした鋭い目をしていて冷徹な印象を見るものに与えている、深緑の軍服が更に女性の印象を強めていた。

「こんにちは、参拝の方ですか？」

リースが挨拶をする。女性は少し笑いながら挨拶を返した

「いや、私は墓参りだよ。死んだ私の友に花を手向けたんだ」

そう言つて女性は村の方に向かって歩いていった。リースはそのまま前に歩き出した。

そのまま少し歩くと寺院が見えた、零戦の燃料を確認すると少しは残っていたがどう見ても飛びそうには見えなかった。

「ちっ、おいイリア、何かこれの解析　　っていねえ」

いつの間にかイリアの姿が消えていた、フィンも勿論いないので暇潰しにまた何処かについてしまったのだろう。リースは一回舌打ちすると解析を始めた。

「ねえ貴女。少しいいかしら？」

イリアは女性に声をかけた、女性は振り返るとさっきと同じように少し笑った。

「何かようかな？小さなお嬢さん」

「いえ、少し暇なので話し相手になつてもらいたくて、いいかしら？」

「あまり長くは無理だよ、私には時間がないんだ」

女性は少し困つたように言った、イリアは満足そうに頷くと話を始めた。

「貴女は何か趣味でもあるかしら？」

「そうだね、回りからは意外と言われるのだがガーデニングが好きだね、君は？」

「私は料理が好きなの、意外かしら？」

「いや、すごく似合っているよ、素敵な趣味だね」

「ありがとう、貴女の名前は？」

「残念ながらそれは教えられないな、職業上それはまずいんだ」

「そう、残念ね」

「ああそろそろ時間だ、さよなら、可愛いお嬢さん」

「ええ、さよならお姉さん」

そう言つて二人は別れた。

その頃、レコンキスタはアルビオンの武器庫をあさつて手にいれた大量の舟でトリステインに向かつていた、できればもっと大型の舟がよかつたのだが、そういった舟はニューカッスルに置いてあり、そのニューカッスルは謎の霧に阻まれて入れない状態なのでしようがなく少し見映えが悪いが少し大きい程度の舟で妥協していた。

まあ、それを差し引いてもこのアルビオンは元々空に浮いており、そのため回りの国と貿易するために舟の技術は他の国と比べて格段に優れている。

なので、少し大きいと言つても他の国から見れば十分な大きさだった。さらにそれが何隻もあるのだから戦力としては十分だろう。

そんな艦隊の中の一番大きい舟にクロムウエルは乗っていた、左右にはティファニアとシエフィールドが控えており他にも数名レコンキスタの重鎮が立っていた。その中でクロムウエルはシエフィールドに言った。

「じゃあ、シエフィールド君。例の作戦で頼むよ」

「はい、閣下」

シエフィールドが部下に命令を下していくのを見ながらクロムウエルは静かに笑みを漏らした。

そしてクロムウエルが笑みを漏らした直後、トリステイン王家にレコンキスタからの降伏宣言が届いた。

急な降伏宣言に一部の家臣は注意を促したが大多数の家臣はそれを否定し、会議の結果トリステインの空軍の一部隊をレコンキスタの身柄拘束に向かわせた。

## 其の五十二

「ッ！ー！」

リンはベッドから飛び起きた、酷い悪夢を見ていた気がする、これも墓に行ったからだとしてリンは決めつけた。

一回深呼吸して気持ちを落ち着ける、どうやらあのあとシエスタの家には運ばれたようだ、何故あんなところで倒れてしまったのかわからないが、おそらく墓が怖くて緊張のあまり気絶してしまったのだろうと思う。

隣を見ると、シエスタが座ったまま寝ていた、窓を見ると暗いのでどうやらシエスタは夜まで付きつきりで看病してくれたらしい、リンは目を細めてシエスタの頭を優しく撫でた。

「ありがとね、シエスタ」

まあ、本人が起きていたら恥ずかしいのでやらないが、寝ているならいいだろう。

さて、どうしようかとリンは思った。

あまり眠くないので何か暇潰しになることがあればいいのだが、と考えていたらあることを思い付いた。

「そつだ、散歩いこう」

何処かで聞いたことがあるような台詞を呟いてリンはベッドから降りた。

服は白い長袖のワンピースのようなものを着せられていた。おそらくシエスタが制服のままでは寝心地が悪いだろうと着せてくれたのだろう。

そんなシエスタの心遣いに感謝しながらリンは静かに外に出た。

外は静かだった、静かすぎて耳鳴りがするほど静かだった。

そんな静まりかえった村でリンは『ダンゴ』を売っていた店のベン



手に腰かけていた。

リンは星空を見上げていた、満天の星に双つの月、素直にリンは綺麗だなと思った。

「少し、いいかしら？」

ふと、隣から声をかけられた。リンは驚いて隣を見るとそこにはイリアが同じように空を見上げていた。イリアはリンの方を見ずに咳く。

「綺麗よね、星って」

「そうね、私もそう思う」

「空を見ていると今までであった嫌なことが全部とるに足りないことに思えてくるの」

「そう？私はただ綺麗だなんて思うただけだよ」

「それでもいいのよ、ただ星には何か不思議な魅力があるってだけだから」

「……………そうね」

「……………月が綺麗ね」

「……………あなた、いつもと雰囲気違うわね」

「そうかもしれないわね」

「本当にイリア？」

そう言っただけでリンが横を見るとイリアの姿は跡形もなく消え去っていた、椅子の上にはイリアが残したと思われる封筒が置いてあった。リンはやっぱり何時ものイリアだったなと思いつつ封筒を破いた。いや、破こうとした。

しかし破こうとした瞬間、封筒を握る手から力が抜けてしまい、封筒は地面にひらひらと落ちた。

「え？」

拾ってまた破こうとした瞬間、また力が抜けてしまった、折り曲げようとしたら折ることは出来たのだが折り目が付かなかった。

「何これ？怖っ」

封筒を不気味に思ったのかそのままベンチに置こうとしたときリン

は封筒の表面に何か書かれていることに気づいた。  
リンが顔を近づけるとそこにはこう書かれていた。

『イリア・フロイス様へ』

「……………」

イリアがイリアに手紙をだす。

違和感をおぼえたのかリンは封筒を拾った。

そうしてそろそろ眠くなったリンはシエスタの家に戻った。

## 其の五十三

朝、リン達はシエスタの家で朝飯を食べていた。

食卓に並んだ料理は全てタルブの料理らしく、薄く味付けがしてあってあっさりとした味わいが特徴だった。

朝だからか、あっさりとした味付けが美味く、食卓の上はすぐ空になった。

勿論イリアはいない、もともと来ている事すら村人に気付かれていないイリアはシエスタの家に泊まれるはずもなく、周りの森の中の何処かに住居をかまえているらしい。

イリア自身もそれでいいらしく。リースが確認した時もあまり文句を言わなかった。

食事を終えたリン達はさっそく各々好きなところに向かった、今日は自由行動らしく、タルブの中をすきなように回るらしい、リースはさっそく零戦を見に行った。

零戦の燃料は何故原作でコルベールがてこずっていたのかわからなくなるほど簡単に解析できた、確かに量が多いので創るのにはてこずるがそれもスクエアクラスのリースの手にかかれば楽に精製できるだろう。

時間はかかるだろうが。

にしても、リース自体何故自分がスクエアになったのかがわからなかった。

確かに物心ついた頃から魔法の勉強はしていた、家族から心配されるぐらい魔力を鍛えたがそれでもせいぜいトライアングル程度だろうと思っていた、両親は確かにスクエアで血筋も良かったがこれ程急に魔力は増えることはないはずなのに、もしこれが俗に言う『都合主義』ならばリースは

それを憎むだろう。

もともとリースのモットーは『欲しい物は自分で手に入れる』だから、そんな『ご都合主義』なんかで自分の努力を評価されてしまうのは我慢ならなかった。

欲しい力は自分で努力して手に入れる、それが『ご都合主義』ならば自分の努力はなんなのか。

「別にたいした努力をしなくても『ご都合主義』でどうにでもなる」  
そんなことは自分の誇りが許さない。

だが、いまリースのまわりには『ご都合主義』の塊のような奴等がうじゃうじゃいる。

死んだ筈なのに生きている、しかも以前よりましになっているリン  
しかり

もともと呼ばれていないにも関わらず、不自然なタイミングで呼ばれてきた才人しかり

言葉を現実にするというふざけた能力を持っていて、さらに死なないイリアなんてまさに『ご都合主義』をそのまま表すような存在だ。そして、若くしてスクエアクラスになり、全属性を不便なく使える  
自分も

殺してしまいたくなるほど嫌いだった。

その頃、リンはシエスタと一緒に村を回っていた。

本当は自分一人で回れたかったのだが、シエスタに「また倒れてしまった時に誰かが側にいてあげないと！」と言って付いてきてしまったのだ。

それを断るわけにもいかず、しょうがないのでリンはとりあえずシ

エスタと一緒に行動することにした。

「ヴァリエールさん、行きたいところとかありますか？」

「……………前から言おうと思っていたのだけど、ヴァリエールさんってやめて欲しいの」

シエスタはそれを聞いたとたん固まった。リンがそれを不審に思っ  
てシエスタを見てみると、シエスタがポツリと呟いた。

「やっぱり、貴族のヴァリエールさんに私みたいな平民が話しかけるなんて馴れ馴れしいですよ、すみません」

リンはまた誤解させてしまった事を察すると手をわたたと振ってシエスタに言った。

「いや、そういうわけじゃないのよ！？ただ……………リンって呼んでほしいなって」

シエスタは呆けたような顔をしてリンを見上げた。

「え？」

「リンって呼んでほしいの、ヴァリエールさんじゃ堅苦しいでしょ？」

シエスタはその言葉を理解するとやがて感極まったようにリンの手を握って言った。

「あ、あ、あ、ありがとうございます！ヴァリ……………リンさん！わ、私、とても嬉しいです！」

そのシエスタの気迫に吞まれたようにリンは「は、はあ」と生返事しか返せなかった、ただそれでもシエスタには生返事すら嬉しいらしく凄くハイなテンションで言い続けた。

「リンさん！タルブの名所という名所を回りまくりましょう！私に任せてください！」

「え？……………ちよっ」

何かをいいかけたリンを引っ張ってシエスタは走った、引っ張られるリンはなんだかなあと思いつつも少し笑みを浮かべた。

## 其の五十四

リンがシエスタに引つ張られているころ、才人はイリアと一緒にタルブを回っていた。

本当はリンを誘って二人で回ろうとしたのだが、シエスタが才人が誘う前にリンを誘ってしまったのであまり度胸のない才人は誘う機会を逃してしまい、ふらふらとタルブを歩いていたら暇そうにしていたイリアに捕まり今に至る。

イリアが暇そうに才人に言った。

「ねえ、何か面白いことないかしら？」

「ないよ」

「はあ、暇ねえ」

才人は隣を見てため息をついた、流石に歩き始めてまだ十数分しかたっていないのにイリアが「暇」と言った回数ばかりく三十回は越えていた、どうやら話しかけることで僅かにでも退屈をまぎらわそうとしているらしい。

才人にとっては迷惑きわまりないので話題を違う方向に変えようとイリアに話しかけてみた。

「な、なあ、今日はあの隣によくいる女の人はいないのか？」

「いないわよ、今日はタルブの料理を教わりに行くらしいの」

よし、と才人は思った。話の内容はともかくイリアの退屈をまぎらわせることはできそうだった。

「そうか、あ、何処かで何か食べていかないか？」

「無理よ、私お金ないから」

「え？………そ、そうか。んじゃ」

イリアは必死に次の言葉を探そうとする才人を笑いながら見た。才人はイリアの視線に気付くと顔をしかめた、イリアはその顔を見て言った。

「面白かったわよ、貴方の狼狽えっぷり」「……………そうかよ」

才人は機嫌を損ねたように横を向いた、とその時才人の視線の先の団子屋にリンの姿が見えた。

「あ、リン」

才人はそう呟くとリンのいる団子屋に入ってしまった、そんな才人を見てにやにやしながらイリアも後を追った。

リンはシエスタと一緒にタルブの名産品の『ダンゴ』を食べていた。彼女が言うには彼女のひいおじいちゃんは色々村人達の知らない事を教えてくれたらしい、この『ダンゴ』もその一つらしい。

「美味しいわ、シエスタ」

リンがそう言うのとシエスタは顔を真っ赤にして手を振った。

「い、いえ。そんな、恥ずかしいです」

別にシエスタが作ったわけでもないのに照れているシエスタを不思議に思いながらリンはあえてそこには触れなかった。

と、そんな事をしていると『ダンゴ屋』の扉が開いた、そのあと入ってきた客を見てリンは驚いた。

「才人、何でここに？」

入ってきた才人はリンの方を見てから口を開いた。

「たまたま貴女の姿を見かけたからよ」

才人の後ろから声が聞こえた、口を開いたまま固まっている才人の隣からくすくす笑いながらイリアが出てきた。

才人は自分のセリフを取ったイリアを避難がましく睨んだが、そんなことで一々怒るのもどうかと思いやめた。

「まあそういう訳だから」

一応リンにそれだけ言っておく、リンは納得がいった顔をしててに持った団子をイリアに渡した、イリアは目を丸くして団子を見た。

「あ、ありがとう」

意表を突かれたようなイリアの声が面白かったのか才人は口元をひくひく痙攣させていた。

イリアは気をとりなおすように咳払いしてからリンの方を見ていった。

「で、何か言いたいことがあるのでしょうか？」

リンは少し考えるように黙ってから言った。

「ええ、渡したい物があるの」

そう言っただけでリンは自分の服のポケットに手を入れるとその中から昨日拾った封筒をイリアに渡した。

「これよ、昨日貴女に貰ったの」

イリアは封筒を見たまま固まっていた、それを不審に思ったのか才人がイリアに話し掛けた。

「どうかしたか？」

イリアは才人の言葉に我にかえるとリンの手から封筒を取った。

「渡してくれて、ありがとう。私はちょっと用事があるから、さようなら」

そう言うがはやいかイリアは団子屋から出ていった、しばらくイリアの行動に固まっていたがやがてさっきまで一言も発しなかったシエスタが口を開いた。

「なんなんですかね？」

リンはさあ？と言つと団子を食べた。



## 其の五十五

その頃、ワルドは一人でお茶をすすっていた。

初めはタルブの緑色をしたお茶に慣れなかったが、飲んでみると意外と美味しかった、隣に出された茶菓子と言うものをつまみながらお茶をのんびり飲んでいると目の前を沈んだ空気を出しながら歩いているイリアが目に入った。

普段の偉そうな姿勢ではなく、猫背で半目のままふらふらと道を歩き、さながら夢遊病患者のようにも見えた

ワルドはそんなイリアを見て、あの自由気ままに生きていそうな奴でもあんな風になるんだなと思った。

だからだろうか、何となくイリアに声をかけてみた。

「何があつたんだい？よければ僕が話を聞いてみてもいいよ」

イリアはゆっくりワルドの方を見るとため息をつきながら口を開いた。

「はあ……………わかつたわ」

そう言つとイリアはふらふらとワルドの隣に座ると地面を見つめたまま動かなくなった。

気まずい沈黙がおりた。沈黙に耐えきれなくなりワルドはお茶のおかわりを頼んだ、店員は気まずい空気を感じ取ったのかワルドのカップを取ると店の奥に消えていった。

と、言つてもお茶のおかわりを頼んだ程度でこの空気は変わるわけがなく、ワルドはついに沈黙に耐えかね話をふつた。

「な、何があつたんだい？話してくれないと気まずいんだが」

そう言われてイリアはポツポツと話し始めた。

「まあ、会いたかつた人から手紙が来たのよ、でもその内容がね、ちよつといいものじゃなかったのよ」

それだけ、とイリアは言った。

確かに言葉にすると短いかもしれない、ただワルドは言葉にされて

いない部分にイリアの悩みの種があると思った。

特に慰めるわけでもなくワルドは黙っていた、イリアは少しは気は  
はれたのか表情を直すと席をたった。

「じゃあ、また」

そう言つてイリアは行きとは違い確かな足どりで歩いていった、イ  
リアとすれ違いでワルドの後ろから店員がお茶のおかわりを持って  
きた。店員は首をかしげる。

「あれ？ワルドさん、あの女の子は？」

「行つてしまつたよ」

そう言つて店員から差し出されたお茶をすすつた。淹れたてなだけ  
あつて、熱かつた

イリアはそのまま適当な店のなかに入つて先ほどリンから貰つた封  
筒を取り出した。

封筒は先程イリアが開けと呟いたら開いた、やはり姉が封をしてい  
たらしい。

姉が生きてる

その事がイリアにとって凄く嬉しいことだった。

しかし、ならなぜ姉は自分の前に姿を見せてくれないのか？その答  
えが封筒の中に記されていた。

『親愛なる私の妹へ』

私がいなくても頑張つていますか？

私は元気です、確かに色々不便なところもあるけど、私は今貴女が  
生きているだけで幸せです。

今、貴女の回りには素晴らしい友達があります

その友達に支えてもらえばいいでしょう

姉の事は忘れて生きなさい

貴女の姉より』

これを見たイリアは姉が生きていたという安堵と姉から私の事は忘れて生きると言われたショックに板挟みにされて沈んでいたのが先程のイリアだった。

さて、そんなイリアは今、ソバヤにいた。店の主人は小さい少女が一人で暗い雰囲気を出しながら店にいるという明らかに訳ありなイリアを気遣ってか無言で蕎麦をイリアの前に置いた。

蕎麦と一緒にメモ書きが置いてあり、そこには『何があつたか知らないが、これ食って元気出せ』と書いてあり、イリアはそれを見て少し元気が出てきた。

とにかく、イリアは目の前にある蕎麦を食べてみた、どうやら手作りらしく主人の腕のよさがわかる味をしていた。

そんな蕎麦を食べながらイリアは思った。

姉を忘れる事なんて出来ない、やっぱり私姉がいないと駄目なんだと

## 其の五十五・五

その頃、タルブの村より少し離れた上空にレコンキスタの舟とトリステインの舟は向かい合っていた、トリステイン側の舟はレコンキスタに投降を呼びかけていたが、レコンキスタ側から来た返事は大砲の玉の嵐だった。

なすすべもなく蹂躪されて地に落ちるトリステインの舟には目もくれずクロムウエルは一部の艦隊を近くの村に送った。

その時、クロムウエルの部屋のなかに部下たちが入ってきた。クロムウエルは部下達に何故ここに入ってきたかを聞くと部下は引きずっていた物を前に出して言った。

「閣下、艦内に侵入していた怪しい女を捕まえました、至急閣下のご指示をおおごうと思ひまして」

「わかった、下がれ」

はっと言い残し部下は部屋から去った、手枷足枷を嵌められてクロムウエルを親の仇を見るような目で見てくる女を見ながらクロムウエルは笑みを浮かべ言った。

「やあマチルダ嬢、こんな所になんのようかな？」

フーケ いや、マチルダはクロムウエルに向かって、敵意を隠そうともせずに行った。

「しらばつくれるな！！あんたがティファを連れ去ったのは分かっているんだ！ティファを返せ！！」

クロムウエルは笑みを崩さずにマチルダを見下しながら言った。

「はたしてティファニア嬢はそれを望んでいるかな？」

何を、とマチルダが言った時にクロムウエルの後ろから恍惚とした表情を浮かべたティファニアがクロムウエルの腕に自分の腕を絡めながらマチルダに言った。

「姉さん、私はクロムウエル様の忠実な下僕よ、クロムウエル様から離れるなんて……」

マチルダはそんなティファニアをみて呆然としていた、クロムウエルはそんなマチルダに勝ち誇るように言った。

「分かったかな？君のいうティファニア嬢は私の部下だ、一緒にいたいというのならレコンキスタに入らないか？君ほどの者を捨てるには惜しい」

マチルダは吐き捨てるように言った。

「死んでも嫌だね！」

クロムウエルの横にいるティファニアはゴミを見るような目でマチルダを見た。

「……………何なんですかこいつ？クロムウエル様に向かってそんな口のききかた、…………人間とは思えません、こんなのが私の姉だなんて…………吐き気がします」

クロムウエルは信じられないような顔をしているマチルダを見て言った。

「ああ！何て悲しい事だろう。残念ながらマチルダ嬢、仲間にならないというなら私は君を殺すしかないようだ！」

クロムウエルは大袈裟に悲しむジェスチャーをすると隣にいるティファニアに目配せした、ティファニアは頷いた。

「ティファ……………？」

ティファニアは壁に立て掛けてあった斧を手にとるとそれを引きずりながらマチルダのすぐ横に立って倒れたままじたばたて暴れるマチルダを蹴りつけた。

「動かないで、当てにくいじゃない」

ティファニアはそう言ってマチルダの体に斧を降り下ろした、やはり狙いが定まらず、斧はマチルダの腕に突き刺さった。

痛みに叫び声をあげながら暴れた、ティファニアは舌打ちをしながら斧を引き抜いた、マチルダの腕からどくどくと血が溢れてくる、マチルダは血の気を失った顔をマチルダに向けて懇願した。

「なあ頼むよお、いつもの優しいティファに戻ってよお……………」

泣きながらしがみつくマチルダの手を蹴り飛ばしてティファニアは

言った。

「さよなら、姉さん」

そうして、ティファニアは斧を降り下ろした。涙でくしゃくしゃになったマチルダの顔が胴体から離れて床を紅く染めながら転がった、ティファニアはそれを見ずに恍惚とした表情で何度も何度もマチルダの体に斧を降り下ろした。

何度斧が降り下ろされただろうか？ティファニアはふらふらとクロムウエルに近付くとすがるようにクロムウエルに向かって言った。

「クロムウエル様、どうですか？ティファニアはやりましたよ」

クロムウエルはいつもの笑みを浮かべて言った。

「ええ、……………よくやりましたね」

ティファニアはそれを聞いて泣いた、感激して泣いたのか、それとも他の理由があつて泣いたのか。

ティファニアにもそれはわからなかった。

## 其の五十六

夜、タルブの村は灼熱の炎に包まれていた。

レコンキスタの兵士たちはタルブの村で暴虐の限りを尽くしていた。火をつけ、人を見かけたら容赦なく襲いかかる、人は簡単に残虐になれるという言葉肯定する光景がそこにはあった。

タルブの自警団も応戦していたが、やはり訓練を受けている兵士達には勝てずには今は物言わぬ骸となって地面に横たわっていた。

そんな中、リンはワルドと一緒に燃え盛る村の中を走っていた。敵に出会った場合はワルドがすぐにエアカッターで切り裂いていた、時々ちらりと視界の端に襲われている人を見かけたらリンは迷わずかけよって蹴り倒して襲われた人を助け出していた。

そんなことを繰り返している中、リンがワルドに言った。

「……………ごめんね」

ワルドは丁度家の中から出てきた兵士の首を飛ばしながら言葉を返した。

「何がだい？」

「私が襲われている人を助けているからあまり進めなくて……………ごめんなさい」

ワルドは表情を柔らかくして言った。

「じゃあ僕が止めてくれって言ったらやめるかい？」

リンは迷わず首を横に振った、それを見てワルドは笑って言った。

「ならいいじゃないか、君のやりたいことをすればいい、僕はそれを応援するよ」

リンはそれを聞いて安心したようにため息をついた、そしてワルドに笑いながら言った。

「ありがとう」

ワルドも嬉しそうに笑った。

リースはあらかじめ決まっていた避難所である寺院にいた。  
リースの他にはまだ誰も来ておらず、リースは早く才人がこないかとやきもきしていた。

リースが一日を費やして製造したガソリンは零戦を動かすのに十分すぎるぐらいの量になっていた。

後は才人が来れば零戦は動き、レコンキスタの艦隊を打ち破れるはずだ。

しかし、そこでリースはあることに気付いた。

才人はガンダールヴではない

つまりそれは才人が零戦を動かせないことを指していた。

その時、下から階段をかけた音が響いてきた、リースはそちらに顔を向けると視線の先に階段をかけたのぼってくるリンとワルドが見えた。

リン達はリースの前になると走ってきたからか、荒い息をつきながら口を開いた。

「はあつ、リースつ、貴女は、無事なの？」

リースは軽く頷いた、そして冗談混じりに後ろの零戦を指差して言った。

「なあ、誰かこいつを動かせる奴はいねえか？これさえ動けば上にいる艦隊を蹴散らすことができるんだけど」

ワルドは首を振った、リンも俯いたまま黙っていてリースは予想できていた展開にため息をついて言った。

「まあ、しょうがねえ。とにかく上にいる艦隊をどうにか」

「私が乗る」

リンはリースの言葉を遮って言った。リースとワルドは目を丸くしてリンを見ていた。

「本当か？」



リースの言葉にリンは頷くと、つかつかと零戦に近付いてコクピットを迷いなく開けると、中にある色々な機械を動かし始めた。

予想外の事態に固まっていたリースはリンの機械を動かす音で正気に戻ると慌ててリンに言った。

「おいっ、俺も一緒に乗せてくれないか？ 援護ぐらいはできると思うんだ」

リンはリースをちらりと見て頷いた、リースは載せてくれたリンに礼を言うと、後部座席に座った。

リンはヘルメットをかぶって外で啞然として見ているワールドに向かって言った。

「ワールド！ 貴方に頼みたいことがある！ 私達は空の艦隊を殲滅してくるから貴方は村にいる兵士達を片付けておいてほしい！ あと、もし才人を見かけたらどうか助けてやってくれ！ 頼んだぞ」

そう言っただけでリンはエンジンをかけた。爆音が夜の静寂を破ってタルブの森に響き渡りそして

飛んだ

その頃、森の中にひっそりと建てられた倉の扉をレコンキスタの兵士が開けた。

兵士は仲間達が村を荒らしまくっていたのを見て、仲間に見つからないような場所に目も眩むようなお宝が隠されているかもしれないと考えて歩いていたら、見事読みが当たり森の中にひっそりと建てられていた倉を見つけたのだ。

兵士が中にはいると、予想に反して中には何もなかった、兵士が無駄足だったかと落胆しかけた時にそれを見つけた。

それは少女だった、暗くてよく見えないが体のラインはそれなりにメリハリがあり、兵士は思わぬ掘り出し物があったなと下卑た笑いを浮かべながら少女に近づいた、近付いてくる兵士に気付いていないのか少女はぼんやりと近付いてくる兵士を見ていた。兵士は無防



## 其の五十七

才人は森のなかを走っていた、シエスタの家で皆が帰ってくる前にうとうとしながらベッドに横になろうと思った瞬間爆発音が響き、そして半狂乱になったシエスタが外を飛び出したのを慌てて追いかけてよとしてそしてシエスタを見失った才人の後ろから兵士が走ってきてそれから逃げているうちにこんな所まで来てしまっていた。一体ここは何処なのだろう、と才人は辺りを見渡しながら思った。逃げている時は必死だったので気付かなかったが避難場所である寺院の場所は把握しているのでそこに逃げればよかったと今更ながらに後悔した。

しょうがないので、起きたことはしょうがないと前向きに才人は考えることにした。

とにかく、まずは避難場所である寺院を目指すべきだと才人は考えてから今の場所だと全く現在地が分からないことに気付くと溜め息をついてとりあえず適当な方向へ向かおうと歩き始め、

才人の前に何かが現れた。

それは少女だった、漂白されたような白く足首まで伸ばした髪に白い陶器のような肌、眠たそうな半眼の瞳は灰色で白い布を体に巻き付けただけ、そして右の手の甲には十字に刻まれた傷痕という、おそろしく非常識な外見だった。

その少女は目の前にいる才人を緩慢な動作で見上げるとぼんやりとした口調で言った。

「あなたは、わたしをたすけてくれる……?」

意味がわからず少女に聞き返そうとした瞬間に前の方の茂みを勢いよくかきわけて影が転がり込んできた。

それは少年だった、目の前の少女と対をなすように闇に溶け込むような黒いショートカットに黒い目、肌の露出が目元だけという極端過ぎるぐらい肌を隠した漆黒のローブ、少年は少女の近くにいた才

人を見つめると大声で言った。

「ちっ！またよくわからない奴に絡みやがって！！おいっ！その兄ちゃん！命が惜しけりや今すぐそいつから離れなあ！！じゃなきやこんな風になっちまうぜ！！！」

そう叫ぶと少年は近くにあった木に手をかざした、するて木は一瞬で半分になつてしまった、断面はのつぺりと異常な程綺麗に斬れていた。才人は戦慄する。

「おいっ！まずはここから逃げなきゃ！」

そう言つて才人は少女を掴んで少年の反対側に逃げようとした、その瞬間、才人の右手が吹き飛んだ。

才人は一瞬呆然としたが、すぐに少年の方を向いた。少年は舌打ちすると才人の目の前の少女に向かって手を突きだした。

あの木を半分に切り取つた手を。

それを見た瞬間、才人は手の射線上に少女を庇うように立ちふさがつた。

何故だかは才人にはわからない、目の前の少年は才人の行動に驚いたように目を見開くと素早く突きだした腕を才人から外した、運悪く射線上にあつた木はやはり右半分を残して消え去つた。

だが、すでに才人の顔色は真つ青だつた。右手首の断面から出てくる血はどくどく溢れ出して下に血溜まりを作つており、貧血のせいか目眩が起きてそのまま地面に倒れこんだ。

それに気付いた少年は気遣わしげに才人の方に目をやり、頭の右半分が消失した。

少年は残つた左目で才人の後ろにいる少女を睨み付け、そのままぐらりとよろめくと地面に倒れた。

才人はそれをぼんやりと見ると、少年が最後に見ていた少女を見た。

血が抜けすぎて目の前が霞始めたが、それでも少女の口元が三日月のようにつり上がっているのを見て

その後ろから忍び寄る兵士の存在に気付いた。

慌てて才人が少女に知らせようとしたが、弱ったからだには力が入らず弱々しい吐息が出ただけだった。

才人はこの瞬間、自分の無力さを呪った、もし自分に漫画の主人公のような能力があれば目の前の少女を助けることができるかも知れないのに

『力が欲しいか？』

声が、聞こえた。才人はぼんやりとした意識のなか、その声を聞いていた。

『力を欲するなら望め、生を望むなら祈れ、我はそのためにある。弱き者が強き者と並び立つために作られた我ならそれが可能だ』

才人はその声を聞きながら漠然と思った。

(嫌、だな……………)

『ん？』

(死ぬのも嫌だし、まだ告白したい人もいるけど、それよりも一拍おいて才人は呟いた。

「目の前で……………人が……………死ぬのは……………なによりも。嫌だな……………」  
暗く世界が闇に包まれていく。

だが、声が聞こえた。

『ならば我が助けてやろう、目を開けるがいい。貴様は動けるはずだ』

いつしか、体の疲労感はとれていた。右腕を見てみると手首から先がついていた。

そして、右手には古典的な装飾が施されていた漆黒の単発式のクラシックな銃が握られていた。

『我が貴様の手首の断面を癒着したのだ、さあ、早く貴様の目的を果たすがよい』

才人は頷くと少女の後ろの兵士に向かって引き金を引いた。

思ったより軽い反動と、ポンツという軽快な音が響き 兵士はそ

のまま後ろに吹き飛んだ。

才人は少女に駆け寄った。

「えーっと、大丈夫か？」

少女は才人の方を見ると不思議そうな表情で言った。

「なんで……たすけたの……？」

「何でって……目の前で殺されそうな人を放っておけないだろ？」

少女は才人の言葉に目を丸くすると、花が咲くように笑った。

「ありがとう」

## 其の五十八

才人は少女を助けた後、適当に森の中を歩いていた。少女は才人の後ろをてくてくついてきていた。

ある程度歩いてから、流石に疲れが出てきたのか、才人は近くにある木を背もたれにして座った、少女も才人にならって才人の前に座った。

「なあ、君の名前は？」

唐突に才人が少女に聞いた、少女はいきなりの質問に少し考えるそぶりを見せてから口を開いた。

「ぱれんと、わたしのなまえ」

「俺は才人、平賀才人だよ。よろしく、パレント」

パレントは才人の言葉に頷いた。会話ができた事が嬉しいのか、才人はパレントに質問した。

「そういえば、さっきの男の子は何なんだ？パレントの知り合い？」

「あれはらふういっち、わたしのかたわれ」

パレントの言葉が理解できず、才人は聞き返した。

「片割れ？」

「そう、あれとわたしはもともとひとつのにんげんだった、ふたつになるまえのわたしはきぞくのすてごだったらしくて、このむらにすてられていたらしい」

淡々とパレントは言葉を紡いでいった。

「せんだいのそんちようはわたしをかわいがってくれたけど、そんちようがしんじやったとき、わたしをあるがくしゃがじっけんしたいとあたらしいそんちようにたのんだらしい」

才人はだまつて聞いていた。

「あたらしいそんちようはわたしのことがきにくわなかったらしくてふたつへんじでおーけーをだしたらしい、そしてがくしゃさんはわたしからいろをぬいてそれをかためあらたなせいめいをうみだ

した」

パレントは一拍おいた

「それがらふういっち、わたしのいろをかたちにしたもの、かれはわたしのついになるものとしてうみだされた、かれはわたしのかみだからかれをころすならわたしをころさないとしなない、ぎやくにわたしはかれのかみじゃないからわたしをころすのはかんたんにできる」

そう言ったパレントの後ろの方から音が聞こえた、才人は慌ててパレントを掴むと近くの茂みのなかに隠れた。

才人の視線の先から茂みを掻き分けながら現れたのは少年　　ラ  
フウィッチだった、ラフウィッチはさつきまで才人がいた木の辺りを睨みながら舌打ちをした。

「おい！さっきの男！いるんだろー！！今すぐ近くにいますの女からはなれるおー！！」

才人は首をかしげた。ラフウィッチはそのまま喋り続ける。

「そいつは俺の半身だあ！捨て子だった俺を捨ててくれた村長が死にしまったその日に現れた学者が新しい村長と交渉して俺で実験したんだあ！！」

ラフウィッチは続ける。

「そして学者は俺の体から俺を切り離しやがったあ！形が無くなった俺は学者によって形を決められてそれで作られたあ！あの女は俺の鏡！奴を消せれば俺は奴の虚像じゃなくなるんだあ！！」

ラフウィッチはそう言って才人がいた木を半分消し飛ばした。

「これは俺の半身を恨む心を形にしたものお！当たった奴の半身は消し飛ばう！！」

ラフウィッチはそう言ってそこらの茂みに向かって手をつき出し始めた、だが、一度に対象として選べるのは一つだけらしく、茂みの草の一つ一つが地味に半分になっていくだけだった。

パレントはそんな彼の様子を見てため息をついた。

「あれはわたしのいろをかためたそんざい、ちせいはあまりない。



いまならにげられる」

その瞬間、タルブに爆音が響いた。

ゴオオオオオオオオ！！！！

そしてその方向を見ると赤い光を放ちながら空に舞う鉄の固まりを見つけた。才人は自分の運のよさを喜んだ。

「よし！あれが飛んだ方向に行けば寺院だ！！」

そして、その声にラフウィッチが反応して、才人と目があつた。

「……………」

才人はパレントの手を掴むと全速力でラフウィッチから逃げ出した。

「あつ！待ちやがれえ！！」

ラフウィッチも追いかけ始めた。

その頃シエスタは兵士に捕まつて森の中に連れ込まれるとありとあらゆる暴行を受けた後、ぼろ雑巾みたいになつたシエスタを兵士は馬車の中に突っ込んだ。

中に投げ込まれたシエスタはこの荷台に自分と同じような状態の少女達が三人乗っているのに気付いた。

少女達はみな一様に涎を口元から溢しながらしまりのない笑みを浮かべ虚空を見つめていた。シエスタはなんだかおそろしくなり、その恐怖で思考力を取り戻すと何とか荷台から逃げ出そうと体を動かした。

（逃げなくちゃ…………！私はあんな風にはなりたくない…………！！）

そんなシエスタが外に転がり出ると、幸い、外には誰もいなかった。シエスタは自らの幸運に喜ぶと、そのまま駆け出そうとして

後ろから首を掴まれた。

理解不能な状況を理解しようとシエスタは自分の首を掴んでいる人を見ようとした。

その時。

プスッ

と首筋に何かが刺された。

嫌がるシエスタを無視して全ての中身をいれ尽くすとそのままシエスタは馬車の中に投げ込まれた。

いつしかシエスタは抵抗をやめ、しまりのない表情を浮かべながら周りの少女達と一緒に薬の快感におぼれた。

レコンキスタの侵略に紛れた奴隷商人達は、商品に乗せて馬車を動かし始めた。

## 其の五十九

リンは零戦を動かしながら、敵の舟を攻撃していた、敵の舟は大砲や乗っているメイジ達の魔法を飛ばしてくるが零戦はそれを最小限の動きで回避した、そしてお返しとばかりに装備してある銃器で舟を破壊した。

そんなプロ級の腕を持っているリンにリースは驚愕していた。

「す、凄いな。この機械に乗った事があるのか？」

「ある、といつてもこつちではこれが初めてだ。すこし動かしづらい」

そう言つてリンはまた一つ舟を沈めた。リースは回りにいる竜騎士達にライトニングクラウドを撃つ、剣先から迸る雷はまわりの竜騎士達に当たると竜騎士達を真つ黒な炭にした。

既に何隻か沈めたリン達をまわりの舟は集中して狙つてきていた、しかしリンは四方八方から飛んでくる弾や魔法にも動揺せず急降下してから上にある舟に弾を撃ち込んだ。

リースは下に逃げた零戦の行方を探している舟にバーンリベルを使った、すると舟の底に火の球が勢いよく弾けた小さな火の粉が舟やまわりの竜騎士達に当たると爆発的に炎上した。もちろん舟は木製なのでごうごうと燃えながら地面に墜ちていった。

「なかなかやるじゃないか」

「ふん、ほめられても嬉しくないな、所詮これは俺の努力の結果じやなくて生まれ持った才能のせいなのだからな」

そう言つてリースは半分ぐらいに減った舟を睨んで言った。

「んじゃ、後半分頑張つてごうかあ！！」リンは頷くと零戦を混乱している舟達に向かって飛ばした。

その頃、才人はパレントを抱えて後ろから叫びながら追ってくるラ

フウィッチから逃げていた。

「その女を置いていけえ！！！」

「やだね！流石にか弱い女の子をおいて逃げられる程俺は酷い奴じゃないんだよ！！！」

ハイになつてゐるからだろうが、才人はいつもなら口にしないようなセリフをラフウィッチに返していた。

その時。

「中々面白い事を言うじゃありませんか」

声が聞こえた、ラフウィッチはその声が出た方を向いた瞬間、ナイフが自分の額めがけて飛んでくるのを見て慌てて身をひねった。

才人は森の中から現れた人物を見て言った。

「イリアの横にいる人……………」

フィリンは才人にナイフを投げた、うおっと才人は日頃使っていない反射神経をフル稼働してナイフを避けた。

「フィリンです、確かにあまり目立たないからって忘れないでください」

少し涙目になりながらフィリンは言った。どうやら影が薄いことを気にしていたらしい、才人は悪いことをしたな、と思つてフィリンに言った。

「あの、すいま「よくもやってくれたなあ！てめえ！！」　　ッ！！」

謝罪の言葉の途中でフィリンの様子を伺っていたラフウィッチがしびれをきらしてフィリンに手を向けた。フィリンはその行動に危機感を感じたのか、手の射線に入らないように半歩避けた、と、避けた瞬間自分の横を小さな針が通り過ぎるのをフィリンは見た。そして後ろにあつた木に針が刺さつた瞬間、木は半分になった。

フィリンはラフウィッチを睨みながら、才人達に言った。

「逃げてください、私がこいつを片付けます」

才人は何かを言おうとしていたがフィリンがナイフを構えると慌ててパレントの手を引いて逃げた、ラフウィッチは後を追おうとしたが自分の文字通り目の前をナイフが通りすぎると苛立たしげにフィリンを睨んだ。

「ちっ！邪魔くさい女だなあ！！」

「一々叫ばないでください、耳が穢れます」

そう言つてフィリンは指の間にナイフを挟んでラフウィッチの口にめがけて投げつけた、ラフウィッチはそれを長い袖の中に隠れていた短剣で弾いた。

「俺はあ！あの女と違つて倉のなかじゃなくて外で働く暗殺屋なんだよお！！なめてかかるなあ！！」

「全く、暗殺屋らしくない暗殺屋ですね、ちゃんとばれないで殺せるんですか？」

「よけいなお世話だあ！！」

そう言つてラフウィッチは短剣を握っていない方の腕を振つた、フィリンは咄嗟に屈むと、頭の上を黒い針がとおつて行くのが見えた。(厄介ですね、黒い針とは……)

フィリンはとりあえず木の裏に隠れた、ラフウィッチはそれを見て笑いながら言つた。

「馬鹿かあ！？んなもんで俺の攻撃が防げるかあ！！」

そう言つてフィリンが隠れている木に向かって手をつきだした。袖の中に仕込んだ俺の血を塗つた針を高速で打ち出す。

ラフウィッチの能力である半身を消し去る力は自分の一部を相手に打ち込むことで力を発揮する、つまりこの針が当たった相手は体の半分が吹き飛ぶ。

実戦で使つたのは今日のあの倉が始めてなので少し力加減が分からなかったがもう慣れた。

そして針が木に当たり、木の半分が吹き飛んだ後には。

何もいなかった

一瞬ラフウィッチはもう半分隠れているのかと疑ったが残った木はどうみても人間が隠れられる太さではなかった。

そこまで考えたラフウィッチの背中に何か刺さった。

ラフウィッチが振り返ろうとした、その間にも次々と何かはラフウィッチに刺さっていく。ラフウィッチはその内の一つを引き抜くとそれを見た。

それはナイフだった。

そしてナイフが飛んできた方向を見ると、先程まで木に隠れていたはずのフィンがいつのまにか反対側の木の裏に隠れていた。

「馬鹿なあ！何をしたあ！！」

「速く静かに動くのは私が得意な事なんですよ、ではさようなら」  
そう言つてフィンが指を鳴らすとラフウィッチに刺さっているナイフが発光して

爆発した。

## 其の六十

才人はようやく寺院についた、横にいるパレントを見ると、息をあまりくすることもなく、ただぼんやりと空を見ていた。会話がなく、どうしたものかと才人が悩んでいるとパレントがあいかわらず舌つたらずな声で喋り始めた。

「らふういっちはわたしのきょぞう、つまりあのおんなのひとはあれをこらすことはできない」

「それは知ってるよ」

「……………つまりあれをこらすにはわたしをこらすしかない、あれはいきているかぎりわたしをこらすとおってくる」

空気が凍った、才人はパレントの言葉を三回ぐらい頭のなかで反復してやっとな理解した。

「嘘だろ、な、何か方法があるはずだ」

「わたしのうりよくはあくいをかえすのうりよく、べつにわたしがしなくてもあれのうりよくでわたしをこらすことはできない、だからさいとはきにしないでいい」

「そういう問題じゃない!!」

才人は怒鳴った、パレントは目を丸くして才人を見る、才人はそういえばパレントのこんな表情見たの初めてだなあと思いつながら言った。

「パレントはそれでいいのか!? 常に誰かから悪意を向けられて、それを耐え続ける。そんな人生でいいのか!?」

「わたしは……………」

「それにあいつがもし物を使ってきたらどうするんだよ!! お前はそれを防げるのか!?」

「……………」

パレントは俯いてしまった、才人は頭が冷えたのか、もう少し言い方ってものがあるだろうと自分をせめた。

「あー、すまない。少し言い過ぎた」

「……………うっ……………」

「パ、パレント？」

「うっっ……………ひっく……………うっ……………」

俯いたパレントの下の地面にポタポタと涙の跡がついていくのを見て、才人の頭から血の気が引いた

「パレントっ、な、泣き止んでくれ、な？俺も強く言い過ぎたから

……………」

「……………うっ、ち、ちがうの……………」

「パレント？」

「こ、こんなこといわれたの……………はっ、はじめてで……………だれかにしんぱいされるのが、すごくっ……………うれしくて……………」

「……………」

才人は無言でパレントの肩を抱いた、パレントは才人に抱かれながら嗚咽を漏らしていた。

「随分あつつあつじゃねえかあ！！おい！」

慌てて才人が声がした方を見ると、ラフウィッチが木の上に座って才人達を見ていた。

「随分あの女には殺られちゃったが俺は死なねえ！！さあ！殺しに来てやったぜえ！！」

才人はパレントを庇うようにして立った、と瞬間。

世界が固まった、才人は何が起きているか分からず、回りを見渡すと、才人の前に和服をきた女が立っていた。

夜の空のような黒く長い髪に同色の目、偉そうな表情をした女は木の上にいるラフウィッチと才人の隣のパレントを見比べた

『ふむ、面白いのう。虚像が二つとは』

「誰だ？」



『貴様の服の袋の中に入れておる者じゃ』

才人がズボンのポケットを探ると中から前に拾った黒い立方体があった。

『ようやく我を見つけたか、待ちわびたぞ』

才人は手の上の立方体と頭に響く声からあることを結びつけた。

「まさかこれは……」

『そう、貴様が先程使った銃は我だ、念じれば銃に変わるはずじゃ』  
才人が頭で銃になれと念じると、一瞬で立方体は銃に変わっていた。  
『さて、貴様が望めば貴様の隣にいる娘を助けることが可能なのじやが』

「本当か!？」

『落ち着け、この銃は元々不死の化け物を殺すために造られた物、虚像など少しの血があれば十分ことたりる』

「血………?」

『そうじゃ、血を使うと言うことは　とそんな事を説明してもわからんよな、まあ相手に自分を打ち込むということじゃ』「はあ?」

意味不明な言葉に才人が声を漏らすと、女はあからさまに馬鹿にした顔で才人を見下した。

『一から説明せんとわからんのか?』

「う、うぜえ………」

『さて、貴様が殺すと思いながら引き金を引けば血弾は射たれる、安心せよ、精度は我が調整してやる』

「………わかった」

『では、進めるぞ』

その瞬間、女は消えて、ラフウィッチは急に才人の手に現れた銃を見た。

「なんだそりゃあ!?!?!」

才人はラフウィッチの言葉を無視して銃口をラフウィッチに向けると、引き金を引いた。

ラフウィッチは咄嗟に防御した。ように見えた。

しかしラフウィッチが胸寝当たりには違和感を覚え、見てみると服に小さな穴が空いていた。

「な……………」

そのままラフウィッチは死んだ。

才人は自分が殺してしまった事について、心を痛めながら才人は地面に落ちたどこか安らかな顔で死んでいるラフウィッチの目を閉じさせ、黙祷した。

地面のラフウィッチはそのまま空気に溶けるように消えていった。

## 其の六十一

イリアは村の巡回をしていた、森のなかで手紙を読んでいるときに爆音と共に村が燃えていたので何事かと村に行きそして今に至る。

既に、生きている村人はだいたいイリアが作ったシエルターに避難させた、シエスタやワルドのいた店の従業員など少数は見つからない。

後、イリアを慰めてくれた蕎麦屋のおじさんもいない、イリアはその事に少し心を痛めていた。

とにかくイリアは村人がいればシエルターに避難させ、兵士を見ればそのまま殺した、更に壊れている家は片っ端から修復していった、まさに神業である。

そんな事をしながら村を歩いていると、見知った人影が前の方から歩いてくるのが見えた。

「……ああワルド、どうかしたのかしら？」

ワルドは声をかけてきたイリアの方を見た、その表情は明らかに面倒くさそうだった。

「ああ、いや、ルイズに頼まれたのだけどね、才人君を捜してほしいそうだ、明らかに恋敵なのに捜させるということは彼女は僕達の気持ちに気付いていないよね」

「ああ、とワルドは溜め息をついた。

「まあ、それは置いておくけど……貴方ルイズじゃなくてリンって呼んであげたほうが喜ばれるわよ、彼女自身が自分の事をそう呼んでいるし」

イリアの言葉にワルドは固まった。

「まさか、僕の告白について一切触れてこないのは僕がリンと叫ばないでルイズと呼んでいたからなのか……？」

ワルドは少し悩むそぶりを見せてからイリアに礼を言った。

「ありがとう、イリア君」

「どういたしまして、ワルド」

ワルドとイリアは笑ってから通りすぎようとした、しかしワルドは前を向くと笑顔のまま固まった。

「え？………何で君の後ろはそんな綺麗なんだい？」

「……………今更気付いたの？………まあ私が直しているのよ」

ワルドは何かもう色々なれたよと言いたげな顔をしながら言った。

「やっぱり何でもありだね」

そう言っつて、ワルドはイリアの横を通っつていった、イリアも、ワルドの言葉に少し不満気だったが、気を取り直して巡回を再開した。

あの後、才人は消えてしまったラフウィッチの体があった場所に土を盛っつてパレントと一緒に簡単な墓を作つた、あの銃は才人が念じると元の立方体に戻つた、あの説明してきた女は何も言っつてこない、まあまた何かあつたら出てくるだろうと思ひ才人は下にいるものを見た。

墓を作つた後、パレントは疲れが出たのか、才人が座つて休んでいるときに才人の膝の上に頭を乗っつて寝てしまつた。

自分の膝の上ですやすやと寝息をたてるパレントの穏やかな寝顔を見て、動くに動けない才人の後ろから声がかけられた。

「おやおや、随分仲良くなりましたね」

才人が慎重に後ろを振り向くとそこには傷ひとつないフィリンが立っつていた。才人は安心したように息を吐いた。

「よかつた、ラフウィッチがこつちに来たからフィリンさんが殺されちやつたかと思ひましたよ」

「そんなに弱くありませんよ」

フィリンは少し不満気に言つた、確かにあのイリアの近くにいるから生半可な強さではないことはわかつた、と、そこで才人は少し疑問に思つた事を口にした。

「そう言えばフィリンさんつてイリアのメイドさんですよね？」

「はい、そうですね」

「フィリンさん以外にイリアのメイドっているんですか？」

「いや、いません。主は自分の気に入った者しか近くにおきませんから」

フィリンは何処か誇らしげに言った、イリアに気に入られていると  
いうことがフィリンには嬉しいらしい、ある意味理想の主従関係と  
いうやつなのかもしれない。

「やっぱりフィリンさんは凄いですね」

「そうですね？ありがとうございます」

「そういえば、フィリンさんからみたイリアってどんな感じですか？」

フィリンは少し考えてから答えた。

「偉そうで、わがままで、臆病で、それでいてやるときはちゃんとやってくれる。最高の主です」

そう言いきったフィリンを見て才人は素直に感動した、中々こんなことと言える人はいないだろう、やはりイリアとフィリンの関係は素晴らしいものだ、才人は思った。

「そうですね……ありがとうございます、フィリンさん、俺の所にいないでイリアの傍にいてあげてください」

「……ではお言葉に甘えて」

そう言っただけでフィリンは村の方に駆け出していった、常人離れた速さを見て、才人はああはなれないなと思った。

所で何故フィリンはイリアが村に居ると思ったのだろう、村の方をちらりと見てみた才人はその理由がわかった。

「……改めて凄いなと思うよ、……ていうかあんなのよくできるよな」

才人の視線の先には、みるみるうちに元に戻っていくタルブの村の姿があった。

やはり誰から見ても神業らしい。

## 其の六十二

空に浮かぶ艦隊の全てを破壊し終えて、リンとリースはほっと一息ついた。

リンは離陸に適している場所を探してみると、あの寺院の近くにそれらしきものがあるのが見えた。どうやらこれを持ち込んだ人がちゃんと離陸のことも考えて作ったらしい、そいつに心のなかで礼を言いながら、リンはゆっくり高度を下げていった。

そして、離陸に成功すると、二人はコクピットを開けて外に出た、リースは外の空気をおもいきり吸っているリンの方を見た。

「なあ、……お前性格変わってなかったか？」

「え？、変わっていたかしら？」

どうやらリンは全く自覚がなかったらしい。リースは首を傾げた。

「いや、なんと言うか……しゃべり方が少し無愛想になってたよ  
うな気がするんだよな」

「そうかしら？あんまりわかんなかったけど」

それに、と前置きしてリースは一番気になっていた事を聞いた。

「なんであれの使い方がわかったんだ？俺でもよくわからないのに

……」

「………何でかな？、あれを見た瞬間に動かし方がわかったんだけど……」

リースは釈然としないものを感じながらも、とりあえず言っておかない事があるのに気付いた。

「リン」

「何かしら？」

「………ありがとう」

顔を赤くして言ったリースを見て、自分も照れくさくなったのかりんは顔を赤くした。

「……………とりあえず、寺院に向かいましょう」  
「そうだな」

そう言つて、リン達は寺院に向かって歩いていった。

才人は寺院の前でパレントに膝枕をしたまま固まっていた、才人の視線の先には同じように固まっているリンとリースの姿があった。とりあえず、言っておきたい事がある。

「……………勘違いするなよ？」

「……………」

才人の声を聞いてリン達はさらに胡散臭げな視線を向けてきた、才人は慌てて事情を説明しようとした。

「あつ、あのな、別に俺はパレントにやましいことをしたわけじゃないからな。色々あつて疲れて俺の上で寝ちゃったからそのまま動くに動けないだけだからな！」

「パレント？」

「ああ、こいつの名前だよ、パレントっていうらしいんだ」

「……………色々つて？」

「えーと……………話せば長くなるんだが」

いいわよ、とリンに言われて才人が話始めようとした時に、才人の膝の上のパレントが目を開けた。

「ああ、さいと。……………なに？このひとたち……………しりあい……………？」

いつもど通りのぼんやりした表情でパレントはリン達を見た。

「まあ、とにかく……………俺が村から避難して森に入るとパレントがいて

と言つわけだ、わかつた？」

才人は説明を終えるとリン達を見た、リン達は流石に才人がやましいことをしていたことにできなかつたらしく、少しつまらなそうにしていた。

「まあわかったわ、才人をいじめなかったのは残念だけど。……初めましてパレントさん、私はリン、よろしくね」

パレントはリンが近くに來るとびくつとして才人の背中に隠れてしまった、リンは固まった。

「まあ、俺はリース・ド・セベリア、リースって呼んでくれ」

パレントは更に怯えたように才人の服の裾をぎゅつと掴んだが才人が優しく前に出すとおずおずと自己紹介を始めた。

「……ぱれんとです……じゅうごさい……よろしくおねがいます……」

そこまで言った後、顔を赤くしながら才人の後ろに隠れてしまった。リースはパレントが15歳の事について驚いていた。

「15歳?…とてもそうには見えないな」

リンはリースの言葉に同意するように頷いた、そして、今まで誰も触れていなかった事に触れた。

「……で、何で着ているのが布切れ一枚なの?」

「……あ、確かにそうだな」

「いまきづいたの?」

「でも、何で服を着てなかったんだ?」

「……いままでずっと……くらのなかですごして……でるときにふくがすこしよこれちゃったから……しかたなくこれをきたの……」

「色々凄いよな、服が汚れたから布切れに着替えるって」

パレントの言葉にリースが言った、パレントはリースの言葉に答えずに才人の後ろにしがみついていた。

「はあ、とにかく皆が集まったらシエスタの家に集まりましょう、そこで色々話をしましょう」

才人達は頷いた。



## 其の六十三

その後、イリア達が才人を見た瞬間おきまりの行動にでてから、シエスタの家に行った。

シエスタの家は来るときと比べて凄く静かに感じた、もちろん理由は明白だった。

「……………シエスタは？」

シエスタが帰って来ないのだ、敵兵が全員タルブからいなくなつてから三時間がたっていた、生きている村人達がそれぞれの家の中に戻り生きている喜びを噛みしめているなか、シエスタや一部の村人は帰ってくることもなく、おそらく死んでしまったのだらうと村人の中で結論がだされた。

そして、シエスタもやはり死んでしまったのだらうとリン達は思った。

「……………少し、外に行つてる」

リンはそう言つて、シエスタの家を出た、それに続くように才人達も次々に外に出た。

イリアは後ろに誰もついてこないのを確認すると勢いよく蕎麦屋に向かつて走つた。

イリアはあのあと蕎麦屋のおじさんを見たかと村人に聞いて回つた、村人達は村を助けた張本人であるイリアの質問に真剣に考えてくれたが誰もが見ていないと言つた。

そう、そんな人は見ていない。この村にそんな人はいない。そう答えただの。

だからイリアは走つて蕎麦屋に向かっている、村人の事は疑いたく

ないが確かに蕎麦屋のおじさんに慰められたのは確かなのだ、もしかしたら村人がおじさんのことをあまりしらないだけかもしれない。しかし、そんな考えも蕎麦屋の前についた瞬間全て消えた。

蕎麦屋はそこにあつたのだ

やはり村人は蕎麦屋の事を知らなかったただけなのだ、村の端にある蕎麦屋の事を村人が知らなくても別に不思議ではない。そう考えながらイリアは蕎麦屋に入った。

「……いらつしゃい」

蕎麦屋の中には渋い顔をしたおじさんがイリアを出迎えてくれた、店内には誰もいない、前に来たときにも誰もいなかったのでおそらく人が無いのだろうとイリアは思った。

「おじさん、いつもの下さいな」

「……嬢ちゃんはまだ一回しか来てないだろう？」

おじさんは苦笑しながら蕎麦をイリアにつきだした、今回は熱い蕎麦をだつたので猫舌なイリアは息を吹きかけながら一口食べた。

「おじさん、よく生きてたわね。死んじゃったかと思つたわよ」

「……死なねえよ、この蕎麦屋があるかぎり俺は死ねねえ」

おじさんは少しかっこつけて言った。イリアはそれをスルーして蕎麦を食べた。

熱い蕎麦を冷ましながらイリアとおじさんは他愛もない話を喋っていた、やがて蕎麦をイリアが食べ終わるとイリアは立ち上がったおじさんに背を向けた。

「じゃあ、おじさん。また会いましょう」おじさんは頷いた。そしてイリアがのれんをくぐる瞬間に呟いた。

「アリス嬢ちゃん……また会おうな、」

イリアはぱつと振り返った、しかしそこには民家の壁だけがあり、蕎麦屋の影は何処にもなかった。

リンはその頃村の団子屋のベンチに座っていた。

思えば半日にはここでシエスタと一緒に笑いながら団子を食べていた、そのことがリンにはもう数ヶ月前のことのようにひどく遠く感じられた。

「……………シエスタ……………」

そう呟いたリンの目から、透明な涙がポタポタと地面に落ちた、リンは慌てて涙を拭うが、次から次にシエスタとすごした思い出が蘇ってきてそのたびに涙が勝手に溢れ出してきてリンにはそれを止めることが出来なかった。

「うっ……………うっ……………ぐすっ……………」

そして何よりも哀しいのは

その時、涙で歪んだ視界の端に誰かがこちらに近付いてくるのが映った、リンはこんな顔を誰かに見せるのは恥ずかしいので服の袖でぐくぐくと涙を拭くと何事もなかったように隣を見た、隣には見慣れた少年が座っていた。

才人はそわそわしながらリンの横で何を言うわけでもなく座っていた。

「……………」

「……………」

「……………なあ……………リンはシエスタが死んじゃって……………どう思った？」

「……………」

「……………ごめん、不謹慎だったよな」

才人はそう言って俯いた、リンは才人の言葉に首をふった。

「……………私はね、確かにシエスタが死んじゃって悲しいの、次から次にシエスタとすごした思い出が頭に浮かんできて泣きたくなくなっちゃうの」

でも、とリンは言った。

「でも、心の何処かで自分が死ななくて良かったなって思ってる自

分があるの、酷いわよね結局私は自分が一番大事なのよ……」  
才人は首をふった。

「…………… 本当に酷い奴はそいつのために涙なんか流さないよ、それに俺はもつと酷い奴だよ。俺はシエスタが死んだときに真っ先に思ったのはリンが無事かどうかだったんだ」

リンは息を飲んだ、才人はそう言って、リンをまっすぐ見つめた。

「そう、俺はリンの事が好きなんだ」

そう言って、呆然とするリンに抱きついた、リンは才人の腕の中で色々な感情がごちゃごちゃになって、泣いた。

「リン……………」

「……………ごめんなさい、まだ決められない……………」

才人はそれを聞いて頷くと、そのままリンを抱き続けていた、リンも才人に抱かれたまま泣き続けた。

## 其の六十四

イリアが直した村の家や道も完璧に戻ったわけでもないので所々欠けていたり無くなっていたりする場所もあった、現代の日本人ならここで直したイリアにここが直っていないと直してもらおうとところだろう。

しかし、この村人達は底なしにお人好しらしく、直してもらったのにこれ以上迷惑をかけるわけにもいかないといリアに頼まずに自分達で助け合いながら直していた、他にも子供の落とし物を一緒に探してあげたり、家族を失って独りになってしまった人を家族に迎えたりしていた。

リースはそんな村人たちの中に混ざって村人の手伝いをしていた。いつもは回りなど気にせず自分がよければ良いと言った感じのリースだが、それは別に回りの奴らがみんな強すぎるから心配してないだけで、普通の人に対してはとても優しく接しているのだ。

まあ、恥ずかしいのであまり知り合いに見られたくないのだが、やはり困っている人を見るとつい声をかけてしまうのだ。

「ありがとねえリースちゃん、手伝ってくれて」

「いえ、気にしないでくださいおばさん。私が好きでやっていることですから」

「本当にありがとねえ、おばさん本当に助かつちゃった、これあげる」

そう言うとおばさんはリースに手作りのように見えるお守りを渡した、リースにとって馴染み深い形をしたお守りを差し出されリースは慌てて手を振った。

「いや！いいですよこんなのもらえませんかっ！」

「いや、受け取ってくんないかなリースちゃん、これは実は娘にあげようと思ってただけだねえ、……………いなくなっちゃったからねえ」

そう言っておばさんは表情を暗くした、それを見て、リースはおばさんに向かって言った。

「いや、でも受け取れません、……………だけど預かっておきます、もしかしたら娘さんに会うときがくるかもしれないから、その時に私が責任を持って渡します」

そう言っただけでリースはおばさんに笑いかけた、おばさんはそんなリースを見て涙を拭って笑った。

「……………そうよね、まだ死んだってきまつたわけじゃないものね、わかったわ、リースちゃんに任せちゃいます」

リースは気休めにしかならないとわかっていながらもおばさんに聞いた。

「ああ、もし会ったとしても何も知らないと分かりませんね、名前と特徴を教えてくださいませんか？」

「レイトよ、金色の長い髪に緑色の目、右目の泣き黒子が特徴なの、私の自慢の娘なの……………ありがとね、リースちゃん」

リースはそのありがとに込められた気持ちを受け取り、おばさんに任せてください、と言った。おばさんは礼をするとそのまま家中に入ってしまった。

その頃パレントとワールドは村の服屋にいた、この比較的被害が少ない服屋は村の活気を上げるために店の運営が危ぶまれる程の安値で服を売っていた。

そんなかんじでいいところでセールをやっている店があったのでワールドはパレントの服を買いにこの店にやってきた、ワールドが気分転換に村をぶらついていたら丁度同じようにぶらついているパレントを見かけてそのパレントが布切れ一枚しか身に纏っていないのを見るやいなやそのまま服屋に直行した。

布切れ一枚しか身につけていないあどけない少女をつれているワールドを少し奇異な目で見ながらも営業スマイルを崩さない店長に他人

事の様に感心しながらワルドは物珍しそうに回りの服を見ているパレントに好きな服を選んでくるように言った。

パレントはてくてく歩きながら回りの服を見ながら店内を歩いていた、そんなパレントをワルドは不安げに見ていた、才人からパレントの事についてはある程度説明されていた、だからパレントは服屋でちゃんと服を買ってこれるかワルドは心配だった。

「決まったかい？」

「……うん」

そう言っ出てきたパレントは縫う前の純白の絹を纏っていた。

「……………服じゃないじゃないか、他にいいのは無いのかい？」

「……………あるよ」

「ちゃんとした服だよね？」

「……………」

ワルドの問いかけに答えず、パレントは試着室でこそこそ着替え始めた、そして出てきたパレントの姿を見てワルドはため息をついた。パレントは紳士服にあっただであろう白いシャツを着ていたのだ、しかも薄い生地なので色々な所がうっすらと見えていたので目のやり場にこまったワルドは顔をそらしてパレントに着替えるように言った。

「……………もうないよ、そんなにいうならわろどがえらんで」

「……………え？」

パレントはワルドの反応を待たずに店の外へ出てしまった、とりあえずワルドはパレントが着たままのシャツを店に返すように言った。ワルドは試着室に入ったパレントを見ながら何がパレントに合うか考えていた、先程迄の服のチョイスからして好きな色は白だろう、しかも無地の服ときた、流石にそんな服はほとんどなかった。

こうなったら、あの手を使うしかない。

「すいません」

「何ですか？騎士さん」

いきなり声をかけられた店長はそれでもなお営業スマイルを崩さな

かった、ワルドは店長の営業スマイルに改めて感心しながら要求を言った。

「今、試着室に入っている少女の服を頼みたい、純白の絹を使ったシンプルな服であれば店主の好きに作ってくれ、金はこれだけやるから」

そう言つて、ワルドは袋に詰めていた金貨を机の上に全て置いた。

「嫌、遠慮しておきますよ、一枚もらえれば十分です。セール中ですから」

完璧な営業スマイルを崩さず店長はワルドに金貨を返した、ワルドは首を振ると店長に金貨を押し付けた。

「この店に対する僕の気持ちさ、それにこの分の働きは期待していないだろう？ シンプルに頼むよ」

「……はい、わかりました。素晴らしい出来に仕上げてあげましょう。それまでお嬢さんをお借りしますね」

「いいですよ、じゃあ向かいの茶屋にいるから出来上がったら呼んでくれ」

かしくまりました、と店長は頭を下げた、ワルドは頷くと茶屋に向かって歩いていった。



## 其の六十五（前書き）

そういえば、この小説も一周年です。

まさかこんなに続くとは思いませんでした。

これからも、この小説をよろしくお願いします。

## 其の六十五

イリアは村のおじいさんの手伝いをしていた、おじいさんは最初は遠慮していたがイリアは半ば強引におじいさんの手伝いをした、直したりするものならイリアは一瞬で出来るのだが、こういった探し物は普通に探すしかなかった、だが、その方がやくにたっているという実感があるし、今はこういった集中するような事をしていくかった。

あの蕎麦屋のおじいさんの言葉が耳に残っていた、あのあとあらゆる手を使って蕎麦屋があった場所を調べたが何もわからなかった。アリス。その名前を呟いてみる、しかしそれが昔の名前だとはどうしても実感できなかった。

それもその筈だろう、アリスはあの時に死んでしまったのだから。そんな事を考えていると足元に十字のネックレスが落ちているのに気付いた、おそらくこれがおじいさんの探していた物だろう、イリアはネックレスを拾い上げると、少し離れた所で地面を探しているおじいさんに渡した。

「おお、ありがとう。これは僕の妻から貰った首飾りでのう」

「よかったじゃない、大事なネックレスなんでしょう？」

「ああ、そうじゃ。本当にありがとう」

「いいのよ、お礼なんて」

そう言っただけイリアはおじいさんに手を振って他に困っている人がいないか探し始めた。

その視線の先に何かを探してきよるきよるしている女の子がいるのを見つけて、イリアは女の子に近付いた。

「何か、探しているの？」

女の子は涙目でイリアを見上げた。イリアは女の子に笑いかけた。

「大丈夫よ、私が探せばすぐ見つかるわ」

「……………ありがとう、おねえちゃん」

「じゃあ、私は向こう側を探してるわね」  
「……………いや、向こうはもう一人のおねえちゃんが探してるから、おねえちゃんは向こう探して」  
「手伝ってくれてる人がもう一人いるの？わかったわ、じゃあおねえちゃん向こう探してるから、見つかったら教えてね」  
そう言っつてイリアは女の子の指さした方向に歩いていった。

「見つけたよ、はい」

そう言っつて、リースは女の子に水色のビー玉を渡した、女の子は暗かった顔を一気に明るくしてビー玉を受け取った。

「ありがとう、おねえちゃん」

女の子は礼をすると、リースに背を向けて走り出す、その時おもいだしたように手を叩くとリースの方を振り返った。

「あつ、あつちに私のお手伝いしてくれた人がいるから、おねえちゃんが私のビー玉見つかったって言っつていて」

そう言っつて、リースの返事をまたずにそのまま走っつていった、リースは女の子が指さした方向に視線を向けた。

視線の先には黒い服を着た少女が地面に屈んで何かを探しているのが見えた。

……………誰かに似ている。

リースはそんな事を考えながら前に進み、黒い服がゴシッククロリータなのに気付くと嫌そうな顔をしながら声をかけた。

「おい、見つかったつてよ」

「……………ああ、リースなの。こんなところで会うなんて奇遇ね」  
イリアはリースを見て、一瞬口元を哀しげに歪めた、リースはイリアの顔の一瞬の変化に気づき、顔を戻してから聞いた。

「どうした？」

「……………何でもないわ、……………そう、何でもないので」

イリアは自分に言い聞かせるように言った、リースは不審げに俯い

ているイリアの顔を除き込もうとした、その瞬間イリアは顔を上げた、その顔はもういつものイリアの顔だった。

「で、何のようかしら？無いなら私は帰るけど？」

「……………いや、用はないが……………ただ、お前がこういうことをしているのが意外だっただけさ」

「そう、　じゃあ、また」

そう言っただけイリアはリースに背を向けた、リースは少し釈然としな顔をしながらその場を後にした。

ワルドが三杯目のお茶を飲んでみると、向かいの服屋から店員がキョロキョロしながら出てきた、ワルドの名前を呼んでいるので遂に服が出来たのだろう。

ワルドは茶屋の店員に代金を払うと服屋の店員に近付いた、店員はワルドに気付くと安心したように笑った。

「ああ、よかった。ワルドさんですね、店長がお呼びです」

「わかった」

ワルドは店の中に入った、店の中には店長が相も変わらず完璧な営業スマイルを浮かべていた。

「できましたよ」

店長はそう言っただけで試着室のカーテンを開けた。

試着室の中にパレントはいた、しかしワルドは一瞬、それがパレントだとわからなかった。

素人目に見ても高級品だとわかる純白のワンピース、所々に花を模した飾りが控えめについていた、更に長年倉の中にせいか、伸び放題になっていた髪の毛も長さは変わらないものなだらかなウェーブ状にセットされていた、肌もまるでそれじたいがワンピースの一部のようなくらい綺麗になっていてまさに別人のようになっていた。

「……………どじっ？」

「……………ああ、とても素晴らしいよ」

ワールドは店長の方を見た。店長は営業スマイルを浮かべたまま言った。

「残念ながらお客様にもらった分の働きは出来ませんでした、私なりに全力を尽くさせてもらいました。もしご不満がございましたらなんなりと申し付けください、全額を返金させていただきます」

「いや素晴らしい出来だ、ありがとう。しかしこの村に君のような男がいるのにはびっくりしたよ、君ほどの腕なら王都でも十分活躍できるだろうに」

「……………まあ、それには色々あるんですよ、お客様」

店長は短く答えた、それだけで何か触れられたくない出来事があった事を悟ったワールドは店長にお礼を言うとパレントをつれて店を出た。

「てんちようさん、またね」

「ええ、さようならお嬢さん」

店長は最後まで営業スマイルを崩さなかった。

## 其の六十五（後書き）

タイトルを変えましたが、他にいいタイトルがあったら感想かメッセージボックスに意見をください。

## 其の六十六

才人とリンはシエスタの家に帰っていた、あの後、泣き止んだリンをシエスタの家に連れていったのはよかったが誰もいないシエスタの家に先程告白したリンと一緒にいるのは才人には精神的にキツかった。

いや、実際はあと一人いる。

その一人は台所で鼻唄を歌いながら夕飯を作っていた、その鼻唄の主、フィリンは才人とリンの間に流れる気まずそうな空気を敏感に察知するとすぐに台所に行くと、そのまま鼻唄を歌って夕飯を作り始めた。

完璧に面白がってやっているのが才人にはわかったが、だからと言って何を言うわけにもいかなかった。

「……………ごめんね、だけど、気持ちに整理がつかないの」

「別にいいよ、ワルドからも言われたんだろう？別に今すぐ決める必要はないよ、確かに俺を選んでほしい気持ちはあるけど、リンにそれを押し付ける訳にはいかないからね」

「才人……………ありがとう」

リンは少し笑った。才人はそれを見て安心した、二人の間に漂っていた気まずそうな空気はある程度無くなっていた。

しばらく才人がリンと他愛もない雑談をしているとがらからと音をたてて家の扉が開いた、リンが音がした方向に目を向けると障子を開けてリースが部屋に入ってきた。

「ああ、もう立ち直ったのか」

リースはいつものように眉を寄せて不機嫌そうにしながら部屋の壁にもたれながら座った、そのまま黙り込んでしまったリースに才人とリンは顔を見合わせた。いつもよりリースが不機嫌な気がする、まあだからと言って才人達には相手を元気付ける方法などわからないが、このままほっておくのも気まずいので才人はリースに話しか

けてみた。

「なあ、何かあったのか？」

その瞬間、横にいたリンに叩かれた、声を出すことは控えたがちらりと横目でリンを見るとしたの方に指で小さくばつ印を作って才人を見ていた。どうやら今の質問はミスだったらしい。

そんなやり取りに気付かずにはリースは顔を上げないまま答えた。

「……別に、何でもないさ」

そう言って、リースは台所にいった。おそらく才人の質問から才人達に気を使って台所の手伝いにいったのだろう。

少し悪いことをしてしまったなあ、と才人は思いながらリンとの雑談を再開した。

その頃、台所でフィリンは夕飯を作っていた、シエスタに教えてもらったタルブの郷土料理だ。

フィリンはシエスタがいなくなった事について特にショックを受けていなかった、確かに少し隣に今までいたシエスタがいなくなったのは物足りないような気がするが、それだけだった。

フィリンが生きている時間は328年、別に不死になった事を悔いては無いが、そのせいで自分が時間においていかれているのは少し残念だった。

イリアと違い、フィリンはイリアの食料を確保する必要があるので定期的に街に行き、そこで人と触れていた。

その中で色々な人が死んでいくのも見てきた、そして、最初は流れていた涙も流れなくなり、最初は痛んでいた心も、いつしか痛まなくなっていた。

別にそれを哀しいとは思わないが、まわりの人が死に悲しんでいるのを見ると、少し羨ましい気持ちにはなる。

そんな事を考えながら、フィリンはヨシエナブエをかき回した、普通なら適当な材料を入れるだけなのだが、フィリンはまず適当な材



料を入れてから、その材料に合わせて味を調整するという、作り方をしていた。

「……………少し塩が薄いでしょっか？」

そう呟いて塩を振りかける、そうして再び鍋の中をかき回しながらフィリンは言った。

「いつまでも見てないで出てきてください、視線がくすぐったくて」

「気付いていたのか……………いや、覗き見をするつもりは無かったんだが、集中してるようで邪魔をしては悪いと思ったんだ、すまない」

そう言つて、リースは台所に入ってきた、フィリンは振り返らないまま鍋をかき回す、リースはフィリンの横で邪魔にならないように立つと、鍋の中身を覗いた。

鍋の中は色々な具材が混ざっていた、きのこもあれば肉もあり、野菜もあれば魚もある、味付けは白味噌らしく、鍋からは味噌汁のような匂いが立ち上っていた。

「美味しそうだな」

「ええ、シエスタの家族の皆様は亡くなってしまったのでこの家の物ももう使われることはないだろうと思つて、保存されていた食材を全て使つたんですよ」

ああ、とリースは言った、しばらくフィリンが鍋をかき回す音だけが響いていたが、やがてリースが沈黙を破った。

「なあ、イリアの性格つてわかるか？」

「はい？」

突拍子もないリースの言葉に思わずフィリンは振り返った、リースは何かを考えるような顔をしながら言葉を重ねた。

「いや、今日イリアにあつた時に何かあいつの様子が変わったからさ。なんとなく聞いてみたんだ」

答えたくないなら気にしないでいいから、とリースは言った。フィリンは再び鍋の方を向いた。

「……………まあ、主は少し寂しいのかもしれないね」

後ろでリースが驚くような気配がした。無視して話を進める。

「主の城がある世界では主は忌み嫌われる存在でした。たまに旅人から他の世界に移されることもあります。行く先々で主は同じような仕打ちを受けていました。時には死なないと知った瞬間、親しくしていた友人が裏切った事もありました」

「……………」

「だからですかね、この世界のように主に優しくしてくれるような人がいるのが主には嬉しかったのでしょうか」

「……………」

「だから、貴女に嫌われている事が主には哀しいのです、だけど主には貴女に好かれたいと言うことが出来ないんです」

「……………どうしてだ？」

「……………貴女にこれ以上嫌われたくないからだと思います、主は人に嫌われることを極端に嫌がるのです、普段はそんな素振りを見せませんが、私はそう思うんです」

「……………わかった。ありがとう、教えてくれて」

「いえ、…ああ、主には私が言ったことを言わないでくださいね」  
わかった、と言ってリースはリン達がいらないシエスタのお父さんが使っていた書斎に入っていった。

フィリンもそれを感じるとヨシエナブエを少し味見していい感じな味になったのを感じると蓋を閉じて、他の具を使っておかずを作り始めた。

## 其の六十七

フィリンが食後の羊羹という料理を作っていると、玄関の扉が開く音が聞こえた。声からイリアとパレントだということがわかったのでフィリンはヨシエナヴェと同時進行して作っていた物を居間に運んだ。

居間では新しく二人が加わったので花札を止めて双六を始めていた、人生双六と書かれているボードを広げているリン達にフィリンは差し入れを持ってきた。

「はい、センベイです。お茶と合わせて食べると美味しいそうですよ」

はい、とちゃぶ台にお茶を4つ置いてからフィリンは一人欠けていることに気付いた。

「あれ？ワルドさんはいないんですか？」

「わかるのはわたしにおかねをわたししてからどっかいつちゃったよ」

「私に会ってからね、ワルドはパレントを一人にするのは不味いけど私がいるならパレントが何かしても私が止めてくれるから大丈夫だと思ったのでしょね」

イリアの言葉を聞いて、リンは首をかしげた。

「で、ワルドはどこにいるの？」

「知らないよ、てきとうにまわってくるっていった」

結局、ワルドが今どこにいるのかは全くわからないが、とりあえずフィリンは礼を言うておくことにした。

「わかりました、答えてくれてありがとうございます」

フィリンはそう言って、居間から出た。

あとに残されたイリア達はとりあえず、じゃんけんで人生双六の順番を決め始めた。

準備を終えてから、じゃんけんで一番になったイリアは賽を振った、肆の目がでたのでイリアそっくりの人形が四マス進む、そこに書い

である指示に従い、人形は近くにある宿に泊まる。

「なんかすげえな、イリアの能力ってこんなことも出来るんだ」

「まあ、最初に指定しとけばあとは自動だしね」

そう言っただけでリンは賽を振った、三マス進むといきなり表れた馬車がリン人形をはね飛ばした。自動的にリンの手にある偽金貨が十枚減った。

治療を受けている人形を見て、リンは複雑そうな顔をした。

「なんか……リアルすぎる感もあるけどね。なんか腕が曲がってるし」

しかもリン人形は痛そうにしくしく泣いているからリンも気のせいか手が折れてしまったかのような感覚を覚えた。

「何か、リアルすぎるかな……？」

苦笑いを浮かべながら才人は賽を振り、駒は一マス進んだ、そこで才人人形は悔しそうに舌打ちをして一マス戻った。

「おもしろいとおもうよ、わたしは」

そう言っただけでパレントは六マス駒が進むのを見た。そこで天使っぽいのが降りてきて、パレント人形の前に金貨が降り注いだ。

「私は一回休みね」

イリア人形は幸せそうな寝息をたてながら寝ていた、リン人形はその横を痛そうに右腕を抑えながら通り抜け、五マス進んだ辺りで何かに躓いて転んだ。

リンは『石に躓いて一回休み』の表示を見ながらついてないなあと思いた。

「まあ、まだ始まったばかりだからさ、あんまり気にしないでいいと思うよ」

そう言っただけで才人は五マス進んだ時に才人人形の前に犬がやってきて犬がいる辺りを才人人形が掘り返すと金貨が見つかったのを見てガッツポーズをとった。

パレントは賽をふる、一マス進むとパレント人形は迷子の子供を拾った、子供はパレントを見て泣き止むとパレントの後ろについてき

た。

「このこ、かわいいね」

パレントはそう言って賽をイリアに回した、イリアは賽を振り、起きたてで眠そうなイリア人形を六マス進めた。イリアは突如表れた馬車に乗ると、四マス進んだ。

リンは賽を振った、リン人形は進んだ先で例のごとく落とし穴に落ちた。

泣きながら穴から這い上がるリン人形を見ながらリンは言った。

「絶対負けない！後で逆転してみせる！！」

人生双六も終盤に差し掛かり、大体の勝敗も見えてきた。

イリアは既にゴールしている、何故か移動系のマスに止まりまくり、まだイリア以外が半分ぐらいしか行っていない状態であってしまっただ。イリア人形はゴールにある豪邸で札束で顔を扇ぎながらいまだにゴールしていない他の人を見下していた。

才人は全くと言っていいほど普通に進んでいた、取り立て何もなくて地味に駒を進めていた、才人人形はたつた今くじ引きで三等を引き当てたらしく、地味な配当を貰っていた。

パレントはおそろしくついていた。既に金貨は七桁を突破していた、更にお供がついてくるマスにも全部止まり。パレント人形は後ろに付いてきている様々な人形の群れと仲良く話していた。

リンはと言うと、結局あのもとツキが回ってすることもなく赤い借金手形がリン人形の回りにうずたかく積まれていた。

リンは泣きそうな顔をしながら賽を振る、その時玄関の扉が開く音がした、がらがらという音と共にワールドが居間に入ってきた。

「やあ、……………何してるんだい？」

ワールドは人生双六を見た、双六ではリン人形が金の像を拾っていた。「ああ、ワールド……………ちょっと集中してるから黙ってて」

リンの必死な声色にワールドは慌てて口を閉じた。パレントは賽を振

り、パレントの駒がゴールした。

「やった！ごーるしたよ」

才人は鬼気迫る表情をしたリンを気にしないようにして賽を振った、才人人形の下からバネが出てきて人形をゴールの目の前に飛ばした。「リアルだな……………」

ワルドは苦笑いしながら飛ばされて足を挫いたらしい才人人形を見ていた、リンは凄く必死な表情をしながら賽を振り、決算と書かれたマスに止まった、決算マスに止まったリン人形は大量の借金手形を悲壮な表情で見ながら金の像を置いた、あれはお宝アイテムらしく賽を振り、出た目によつて配当が来るらしい。

リンはぶつぶつと何かを呟きながら賽を振る、壱の目がでるとリン人形の目の前の像が輝きだし瞬間に借金手形が金貨に変わった。

「……………え？」

今までたまっていたリンの借金はパレントの金を持ってしても返済できないほどだった、それが全て金貨になったということとは

「やったあ！私の勝ちね！」

そう飛び上がりばかりに喜んでいいるリンを微笑ましげに見ながら才人はゴールした。

リンもそれに続こうと賽を振る。まるでリンの心を代弁するかのようになり意気揚々と歩いたリン人形がマスに止まった。

すると回りにあった金貨が消えた、ついでにリンの表情も消えた。リン人形はギクシャクとした動きでしたに書かれた文字を見る。

『破産、全ての金貨を失う』

結局パレントが優勝した

## 其の六十八

思いつきり沈んだ顔をしていたリンも、フィリン自信作のヨシエナ  
ヴエを食べると明るくなった。

そんな感じで和気藹々と皆で鍋をつついている中ワールドが話を切り  
出した。

「実は、村の中を話を聞きながら回ってみてある旅人が言っていた  
んだが、どうやら今、レコンキスタとトリステインで戦争が起きて  
いるらしい、幸い今はトリステイン側が優勢だが、いつレコンキス  
タが盛り返してくるかわからない」

そこでワールドは一泊おいて言った。

「だから僕はトリステインから一旦逃げることを提案する」

ワールドの言葉に最初に反応したのはイリアだった、イリアは鍋の中  
から野菜をかき分けて肉を取ると取り皿によそいながら言った。

「私は賛成よ、危ないのは嫌いだからね」

そう言つて肉をかじる、横にいるフィリンはイリアの意見に同意ら  
しく頷きながらイリアの取り皿に野菜を入れた。イリアはフィリン  
を睨んだがフィリンは何処の吹く風と無視しながら自分の分を取り  
皿によそった。

「俺は反対だ、流石に知り合いを置いていくのは気がとがめるから  
な」

リースはそう言つて鍋の中を適当に取つた、リン達も同意見らしい  
がワールドは気まずそうに嫌な情報を話した。

「いや、君達の知り合いは既に助けられる状況ではない、学院は土  
地の関係上王都に近い、そこを狙われたのだろう、レコンキスタの  
軍は全艦で学院を制圧した、と言つても被害はゼロだ、やられる前  
に学院長は降伏した、賢明な判断だろう、事実余計な事はされずに  
ただ食料の提供を求められただけで終わつたらしい」

ただ、今から戻るのは無意味だとワールドは言った。リースは悔しそ

うに唇を噛んだがそれは自分が間に合わなかった事に腹を立てているのか、それとも自分の祖父が降伏してしまったことが悔しいのかそれとも他の何かか……………  
それを計ることは出来なかったが、結局逃げるしかないことは誰もが感じていた。

その頃、学院では生徒達の間には嫌な緊張感が漂っていた、レコンキスタに占領されてから生徒達はレコンキスタの兵士たちから何をされるか戦々恐々としていたが、兵士達はなにもせず淡々と与えられた食事を食べていた。

ある意味不気味な感覚を覚えた生徒達は無表情な兵士達から逃げるように自室に隠れていた。

そんななかクロムウエルは誰もいない廊下を歩いていた、左右にはシェフィールドとティファニアが控えていて、更に後ろには十数名の兵士達が足並みを乱すことなく歩いていった。全員無表情で後ろを着いてくるのは最初の頃は不気味だったが今ではすっかり慣れてしまった。

クロムウエルはふと昔のことを思い出していた、昔はクロムウエルも小さな村の小さな教会にいるしがない神父だった。

しかし、ある時いきなりシェフィールドがやってきて訳もわからなのままレコンキスタの頭に祭り上げられた、それからは生まれつきの才能のたぐいまれなる演技力を発揮してレコンキスタの頭に相応しい役を演じた。

そして、ある日いつもと同じようにレコンキスタの天幕に戻ると自分の天幕に黒い男が立っているのが見えた。

その時の事はあまり覚えていないが、その時から自分の行動が演技ではなくっていったのはわかっていった。

シェフィールドを支配し、虚無の娘を捕まえて、更にはアルビオンを滅ぼした。



そして、今トリステインと戦っている、勝つ気であるが勝てるかはわからない。

しかしもう進むしかない、後ろには下がれない、それにクロムウエルにはある兵器がある。

「あの人には感謝しないとな……………」

そういえば彼に何故自分を助けるのかと聞いたときよくわからないことを言っていたのを思い出した。

「……………興味があるやつがいるんですよ」か……………まあ私には関係ないことだ」

そう言つてクロムウエルは学院長室に入つていった。

そして、その頃タバサは部屋のなかで本を読んでいた、友人のキユルケは故郷のゲルマニアに里帰りしているので何もすることがない学院がレコンキスタに制圧されてもタバサがすることは変わらなかつた。

そんなとき、窓ガラスが軽くノックされた、タバサが窓ガラスに目をやると久々に見た白い鳩が窓にとまってタバサを見ていた、タバサが窓を開けても鳩は微動だにせず、足にくくりつけてある手紙をタバサが受けとるとすぐさま飛び立っていった。

とりあえず手紙を開けてみる、手紙の一番上にはガリアの王族であることを表す青い薔薇の印が押ししており、これが王からの命令であることをタバサに示していた。

手紙にはこう書かれていた。

『この人物を監視しろ、手段は問わない。次に連絡が来るまで任務を続ける』

手紙と一緒に写真も入っていた、その白銀の髪と藍色の瞳を見て、下に殴り書きされている名前を読み上げた。

「……………イリア・フロイス」

タバサは手紙と写真を暖炉に放り込むとそのまま使い魔のシルフィ

ードに乗って学院を出た、レコンキスタの兵士達も攻撃をしたが、  
タバサの魔法によって全て弾かれてしまった。

## 其の六十九

逃げるとしても急ぐ必要はない、という結論が出て、とりあえずヨシエナヴェエを食べ終えたリン達は静かに寝静まっていた。

そんな夜、家の外では一人の女が歩いていて、灰色の髪に青い切れ目、軍服に身を包んだ女はベンチに腰掛けながら星空をぼんやりと見つめていた。

そんな彼女の隣に腰まで伸ばした白銀の髪と深い藍色の瞳、ゴシツクロリータを身に纏った少女がいた、先程までいたわけではない、瞬きをした瞬間に現れたというよりは今までいたのに気づかなかつたといった印象があつた。

二人は星空をぼんやりとみながら無言で星空を見ていたが、不意に女が少女に問いかけた。

「君は、イリアか？ 雰囲気が違うのだが」

少女は横にいる女を少し驚いたように見つめた

「驚いたわ、妹は私にそっくりだからわからないと思つたのに……

……まあ、嘘をついてもしょうがないから言うけど、私はあなたが知つているイリアではないわ」

「ふむ、まあ難しい事情がありそうだ、私は首を突つ込まないでお

こう……君の名前は？」

「そうね……とりあえず名無しでいいわ」

「……………流石にそれで呼びたくないよ」

女はそう言つたため息をついた、少女は女を見た

「そう言えば、貴女の名前は何かしら？」

女はその言葉に少し考える素振りを見せてから、口を開いた

「じゃあ、エレナでいいよ、名無しさん」

「わかつたわ、エレナ」

そんな事を話した後、エレナと少女は少し雑談をした。しばらく雑談してからエレナは軍服のポケットの中に入っていた懐中時計を取

り出した、それが示している時間を見て、エレナはベンチから立ち上がった。

「ふむ、こんな時間だ。そろそろ帰らせてもらうよ」

「……………そう、少し残念ね。もう少し話していたかったのに」

「ははは、まあどうせまた会えるさ、その時に話し合おうじゃないか」

「……………そうね、ありがとう」

そう言って少女はエレナに向かって小さく手を振った、エレナはそれに気づくと笑って手を振った。

早朝、リースは目を覚ました。

起きたてでぼんやりする頭を五分ぐらいかけてゆっくり覚ましてからリースは立ち上がった、そして大きく伸びをしてまだ眠っている皆に配慮して静かに障子を開けた。

すると、外に出ようとするリースの後ろにある台所から声をかけられた。

「何処にいくんですか？」

リースが振り返ると台所の扉からフィリンが顔を出していた。

「起きてたのか？」

「ええ、皆さんに食べてもらう料理なので、ちゃんと美味しく作らないといけませんから」

フィリンは笑って言った、リースはフィリンに対する評価を少し上げた。

「へえ、凄いな。……………まあ、ちょっと素振りしてくるんだよ」

「そうですか、行ってらっしゃい」

ああ、と言ってリースは玄関の扉をゆっくり開けた、からからかと控えめな音をたてて扉が開く、リースは早朝の冷えた空気を肺いっぱい吸って完璧に目を覚ますと腰に差してある小さな剣を抜いた。

この剣は縮小の魔法がかけられているので任意で縮ませる事ができる、普通、縮小は固定化と相性が悪いのだが、リースは試行錯誤の末に両方効果を損なわずにかける事に成功した。

ある意味、これはリースが本当の自分の力で出した数少ない結果の一つであるので、愛着がある一品である。

そんな剣を逆手に持ち、重心を低くする独特の構えでリースは少し固まった。そして日が登り、朝日が村に差し込んだ瞬間、リースが動いた。

右下から刀を左上に切り上げる、そして左足を前に出し相手の足を払うように動かし、刀を一瞬で順手に持ち変えるとそのまま勢い良く地面に突き刺した。

そして突き刺してある刀を軸に空中で相手を蹴るように足を回しながら半回転してそのまま刀を抜いて飛び上がる、そして真下に『ウインドエッジ』を使って相手を足止めしている間に刀を突き刺すそのまま刀を引き抜きバグ転をして後ろに逃げるようにしてからすぐに地面を蹴って先程の相手がいた場所に肉薄すると空気を叩き斬るように刀を振り抜く。

ゴウツという風切り音聞きながら軸にしている右足で地面を蹴ると左足で勢い良く相手を蹴る、そして休むまもなく刀が相手を切り飛ばす、そしてそのまま遠心力がかかった莫大な威力の蹴りを相手に叩き込んだ。

飛ばした相手との間を一瞬で詰めると左足で天高く相手を蹴りあげる、そしてすぐさま下ろした左足で地面を勢い良く蹴りあげると空中の相手を切り上げ、左手に持ち変えると重力に従い相手を地面に叩きつけるように切り下げた。

「フッ！」

バックステップで下がった後リースは肺にたまっていた空気を吐き出した、そしてうつすらかいた汗を拭いながらまた刀を構えた。

ハッ、という掛け声と共にリースは勢い良く地面を蹴り、次の型を通し始めた

## 其の七十

リースが練習を終えて、シエスタの家に戻ってもまだ起きている人は少なかった、刀の手入れをしているワルドと朝の挨拶を交わしてから、体にかいた汗を流すために風呂場に向かった。

脱衣室で服を脱いだ、はじめの頃は慣れなかった下着も今ではさつとつけはずし出来るようになった、リースはそんなどうでもいいことを考えながら風呂場に入った。

風呂場はまさに和を感じさせる造りをしていた、木製の湯船に桶、地下水を引いている簡易的なシャワー、微かな檜の匂いがリースの日本心を癒した。

とりあえずシャワーは水が冷たいので魔法で作った上にふよふよ浮いている温水が降り注ぐ自前シャワーを浴びながらリースは石鹸で泡立てたタオルで体を擦った、そして泡立った体を水で流すと次は髪にシャンプーをつけて洗い始めた。

最初は男の時のように豪快に洗おうとしたのだが、せっかく綺麗な髪なんだからとわざわざ面倒臭いやり方を教わった、髪を短くするのも反対されたが流石に伸ばしていると後ろの髪の毛がうっとおしいので無理やり切った、今では豪快にやるうとするより丁寧に洗った方が精神的に楽になるぐらいだった。

髪を流しながらふと自分の体を見してみる、磁器のように白い肌に貧弱そうな細い体、小柄な背だけに加え遺伝なのか運動しても体力がついても筋力はあまりつかない、しかし、そんな体にももう十分慣れた、今では前の体があまり思い出せない、そしてその事自体がリースにとってもはやどうでも良い事だった。

リースは湯船に浸かる、檜の香りをかいで全身の力を抜いてリラックスしていた、リースはそのまま沈んでしまいかもしれないぐらい体を沈めた。

しばらくそのままくつろいでいると、がらがらという脱衣室の

ドアが開く音が聞こえた、誰だか来たのか知らないがリースは一応自分が入っていることを伝えた。

「入ってるぞ」

すると一気に慌てる気配が脱衣室の方でした、声からしておそらく才人だろう、いたずらのつもりでリースは声をかける。

「別に一緒に入ってもいいんだぞ？」

「え……………」

「嘘だよ、まあそろそろ出ようかな」

そう言つてリースは立ち上がる、才人はそれを見て慌てて外にでた。脱衣室にあるバスタオルで髪の毛などを拭きながら普段着に着替える、平民用の素朴なつくりの服にローブを羽織った服装はリースのちよつとしたお気に入りだった、リースは華美な服よりこういう質素な服の方が好きだった。

それに、トリストイン魔法学院の知名度は高い、一目で学院の生徒だとわかる制服は逃げるときに人目をひくのだ。

リンにも後で言っておこうと思いつながらリースは脱衣室を出た、外では才人が一瞬リースだとわからなかったようで、見た瞬間ビクツとしてからリースだとわかるとほつと一息ついて脱衣室の中に入つていった。

リースはそんな才人を見ながら、居間に戻った、リースが風呂に入っている時間は30分ぐらいだったが、その間にリンと才人が起きたらしく、まだ寝ているのはパレントとイリアだけだった。

「この風呂はいいよね、僕はこの村の文化が気に入ったよ」

「……………年寄りくさい事をいうな」

「まあいいじゃない、私も好きよ、ここ。何か落ち着くの」

リンはそう言つて暇そうに杖をいじった、おそらく一回精神的に死んだのが原因だろうがリンは魔法が使えるようになっていた、リン自身は別に魔法が使える事について思うことは無いが、以前の自分が魔法の勉強をちゃんとしてくれていたのには感謝していた。

ついでに系統は風のラインである、杖と一緒に買ったのかはわ

からないが片刃のナイフを何本か体に仕込んでいるらしい、本人にナイフはちゃんと使えるのかと聞いたら、体が勝手に動く。と言っていた、リンはワールドに声をかけるといつもの訓練に行った、風のスクエアであるワールドはリンが同じ風の系統である事を知ると、リンの魔法の指導を願い出たらしい、少し嬉しそうなワールドの横顔を見ながらリースは自分の刀の手入れを始めた。

鈍く光を反射する黒い日本刀はリースが作った物である、前世の知識からミスリルを錬金してみたら本当にできてしまい、それをちよつといじって黒くした物である、一日一日固定化を重ねがけして既に刃溢れは心配しなくてよくなった。

しかし、前世の癖でなんとなく手入れを毎朝欠かさずやっている。それにやっているとなんか無いらぬ輝きが増していく感覚があるので、リースは止められないのだ。

そんな感じでリースが刀を磨いていると、風呂から出た才人が少し出掛けてくると言つて玄関から外にでた、リースは才人にいつてらつしゃいとおざなりに言つてからシャツ、シャツ、と音をたてながら刀を研いだ。



## 其の七十一

才人は人気のない森の中に入っていった、そして誰も着いてきていない事を確認してからポケットから黒い立方体を取り出した、才人は試しに銃の形をイメージしてみた。

すると立方体はぼこぼこつと泡立つような音をたてながら少し大きめの銃に変わった、銃身は長く、茨のような装飾がされている、しかし何処を見ても弾を入れるべき場所は見当たらない、どうすればいいのかと才人が悩んでいると隣から声をかけられた。

「なんじゃ、おこまりか？」

才人が慌てて横を見るとそこにはあの時の女がいた、夜を意識したような柄の十二単に闇のように暗い黒をした長い髪、底がない穴のような瞳に月のように白い肌、そんな女は優雅に笑いながら才人を見ていた。

「い、いつからいたんだ？」

ひきつったような声で才人は言った。

「最初からじゃ、貴様は我をいつも服に入れて持ち歩いているではないか、で、なにか私の事でおこまりかの？」

女は可愛らしく小首をかしげた、才人は内心似合わないなあと考えながらも女の言葉に頷いた。

「ああ、これは一体何なのかわからないんだ」

女は呆れたようにため息をつく

「はあ、貴様は一から説明せんとわからんのか？」

といわれても、才人は血を使うと相手を殺せるとしか聞いていない、それだけでわかれと言われても困るんだよ、と才人は思った。

「まあいい、我は元々この銃を作った者じゃ、当時、喰らう者と呼ばれる怪物がいての、奴を殺すために作られたのがこの銃じゃ、しかし喰らう者は不死での、それを殺すには血が必要なんじゃ、血とというのは体の一部じゃ、我はそこに目をつけて血が当たるとその血

は瞬時に身体中を巡る、つまり相手の体に自分の一部が入っており、ということになる、あとは自分の血＝自分の一部という方式を使って相手を瞬時に死に至らしめる。というわけじゃ」

なにがなんだかちんぷんかんぷんだったが才人はとりあえず適当に愛想良い顔をして頷いた。

「うんうん」

「……まあ、そんな感じで作った我が喰らう者を殺し、代価として失血で死んでしまった我は最期の力を使って魂をこの銃に映したのじゃ、その後は喰らう者もいなくなり、不要になったこの銃は封印され、地面に埋められた、そしておびただしい年月が流れいっしか私の存在が忘れ去られた頃に我は見つけられた、発掘屋というらしい男は封印された我をじろじろと見つめると巾着の中に我を入れたのだ、それから我はしばらく人の手を渡りに渡って今、貴様の手にある」

「へえ、そうなのか」

「……とにかく、そんな歴史をもつ我なのだが……」

最初に言っておくが、我が血の弾を撃てるのは一日に一度だけじゃ

「へえ………え？」

才人は聞き流していた言葉の中に聞き流せない言葉があったのに気付いた才人は非難がましい視線を向けてくる女を見た。

「なあ、一発しか撃てないのか？………って何見てるんだ？俺の

顔になんかついてるか？」

「気になるならもう少し私の話を聞くんじゃな、まあいい、別に血の弾を撃てるのは一日に一度と言ったが他にも弾は撃てる、空気砲は相手を吹き飛ばす時に使える、殺傷力はゼロじゃがな、他には空気中の魔力を打ち出すという物もある、最近できた銃よりは強い威力じゃろ」

「わかった」

「本当にわかったのか？貴様は私の話を全く聞かんかったらう？本当にわかっておるのか？」

「ああ、わかつてる、ありがとう。あなたの名前は？」  
「忘れた、いや、正確には思い出せぬ、まあどうでもよいじゃろ？  
貴様は我を存分に使えばよいのじゃ」  
それでは、と言いつつ残して女は消えていった、しばらく才人はそれを見ていたが朝日を見て、しばらくしたらシエスタの家に入らないと朝飯が貰えなくなると思いながらためしうちを始めた。

シエスタは暗い牢屋の中でぼんやりとしていた。

そろそろ薬の時間だ、シエスタはあの快感を思い出して思わず身震いした。

もはやシエスタは逃げる意思を無くしていた、まわりにいる人達もそうみたいでぼんやり涎をたらしながら注射の跡が残っている右腕をぼりぼり掻いていた

汚いなと思いつつもシエスタは自分もそうなっている事に気付かなかった、ぼたぼたたれている涎に気付かないままシエスタは隣にいる少女に声をかけた。

「あの、あなたは、何処の、人ですか？」

薬のせいで少し呂律が回らない声で少女に声をかける、金髪に緑色の目をした少女はだらしがない姿をしたシエスタを見て顔をしかめると仕方なさそうに答えた。

「私はタルブの出身よ、貴女がまさかこんな風になっているなんて思わなかったけど」

そう言った少女は他の人とは違って凜としていた、シエスタは右目の泣き黒子が特徴的な少女の右腕を見るとそこにある筈の薬の注射の跡が無かった。

つまりこの少女は薬を使われていないのだ、そんなときに上から薬の注射をしにきた男がやってきた。既に全員中毒になっていると思っっているのか呼びに来る事はしなかった。

少女達はゆらゆらと男に近寄り、シエスタも男に向かおうとした時

になんともなく後ろを振り返った。

少女は醒めた目でシエスタ達を見ながら一歩も動かなかった、シエスタはなんとなくだがこの状況に抗ってみようかなと思った。

シエスタの足は止まっていた、幸い男は最早近づいてこない女はいないとたかをくくっていたのでシエスタに気づく様子もなく少女達に薬を配っていた。

自分の方に近付いてくるシエスタを少女は目を丸くして見た。

「へえ、びっくりした、あんたみたいな奴もいるんだ」

シエスタは笑った。

「いや、わたしも、頑張つて。みようかなつて」

少女はにやりと笑うとシエスタに名前を聞いてきた。

「あんた、名前は？」

「シエスタ。です、あなたは？」

「レイトよ、仲良くしましょう」

そう言ってレイトは手を差し出してきた、シエスタも手を差し出してレイトと握手した。

## 其の七十二

フィリンが朝食を用意していると、美味しそうな匂いを嗅ぎとったのか、パレントとイリアが寝ぼけ眼で食事部屋に入ってきた、まだ半分寝てそうなイリア達にフィリンは顔を洗ってくるように言った。イリア達は眠たそうに生返事を返しながら洗面所に向かった。それを見てからフィリンは盛り付けを再開した。

瑞々しい色をしたサラダは朝市でしいれたタルブの野菜だ、味付け玉子というらしい斬新なアイディアの食べ物がサラダの端に置いてあった、フィリンはしあげにサラダの中心に真っ赤なミニトマトをちよこんと置いた。

フィリンはサラダを見直してから満足そうに頷くと味噌汁を人数分用意し始めた、具はトウフとアブラアゲというものを使った、味見をしてみても少し刺激が欲しいなと考えたフィリンはポンツて手を叩くとキムチを持ってきた、それを味噌汁に入れてから味見をして少し笑うとキムチを食卓の端に置いた、その後ご飯をよそいながらフィリンは全員を呼んだ。

「皆さん、朝ごはんが出来ましたよ！」

フィリンの声を聞いて扉の向こうでこちらに歩いてくる気配を感じながらフィリンは朝ごはんのメインになる牛肉の煮込みをよそいはじめた。

味付けは塩とレモンですました、まずステーキみたいな大きさの肉を沸騰した塩水に人数分入れてしばらく待つ、実はその間にフィリンは村の朝市に行っていた。

しばらく煮込んだ牛肉をいったん取り出す、塩の味が染みている牛肉はそのまま食べても不味いだけなので次はレモンをすりつぶしたものの中に漬ける、少し上から砂糖水を入れる、そうすることでほどよくさっぱりとした味わいに仕上がるのだ。

そのまま漬けている間にサラダをつくる、切って盛り付けるだけな

ので片手間で作れるのだ、同じ要領で味噌汁もつくる。

そしてフィリンはすりつぶされたレモンの中から肉を取り出す、人数分皿によそって上からごまだれをかければ完成だ。

盛り付けが終わった頃には皆は席についていた、フィリンは食べたそうにしている皆を見ながら少し笑った。

「では、皆さん。いただきます」

「………いただきます！」

そして真っ先に動いたのは才人だった、才人は牛肉をナイフで勢いよく切るとそのまま口に運んだ、肉を咀嚼して飲み込むと才人は目を見開いた。

「うまい！」

リン達はそんな才人を微笑ましそうに見ながらサラダをゆったりと食べていた、パレントは昨日ヨシエナヴェで使った箸と違う形をしたスプーンとナイフをまじまじと見つめながらナイフでサラダを刺して自分の皿によそいはじめた。

リンはサラダにフィリン手作りらしいドレッシングをかけて食べていた、ユズと呼ばれる実をすりつぶしたものを混ぜたらしいそれはとてもあつさりしていてリンは満足そうに頬をほころばせた。

ワルドはただ黙々とサラダを口に運んでいた、そこでテーブルの端にあるキムチに気付くとサラダの葉でキムチを包みながら食べた、美味しかったのかもうひとつ食べた。

リースは先に味噌汁をすすっていた、素晴らしい味噌汁の味に思わず感動しかけたのを慌てて隠しながら味噌汁を飲み終えた。リースは肉を上品に切り分けて口に運んだ、肉は煮込んだおかげで柔らかくなっていてそれにさっぱりとした味付けがされていて朝にあうように作られていた。ごまだれが肉に染み込んだ塩やレモンの味とマッチしていて素晴らしいできになっていた。

リンはリースやワルドの食べ方が上品なのを少し羨みながら肉を食べ始めた、噛んだ瞬間口の中ですりつぶしていく肉のときに驚きながらリンはご飯の上に肉をのせて食べた、美味しかった。

ワルドはサラダが半分ぐらいなくなってきたのを見計らって肉を食べ始めた、やはりこの村にきて思ったがワルドは自分自身が貴族の食事によくあるようなこつてりとした物よりこういったあっさりしたものが合うことに気付いていた。

イリアはそんな中、ゆっくり優雅に食べていた、口に入れた食べ物はちゃんと噛んでから飲み込んでいた、相変わらずフィリンの料理は最高ねと思いつながらイリアは笑った。

パレントは肉にナイフを刺しながらかぶりついた、隣の才人でリンが慌ててちゃんとした食べ方を教える、パレントはぼんやりと視線をリンに定めると首をかしげながらフォークで肉を押さえながらナイフで切り始めた。

才人は既に食べ終えていた、そういえば初めてこんなに朝ごはんを食べたような気がする、と才人は思った。

フィリンはそんな美味しそうに自分の作った料理を美味しそうに食べてくれるリン達を笑みを浮かべながら見ていた、そして自分も味噌汁にキムチを入れて食べ始めた。

### 其の七十三

朝ごはんを食べ終えて、フィリンが食後のお茶を配っているなかワルドが話をきりだした。

「さて、朝食もとったところで昨日の続きを言おう、今のところ逃げるのに一番適しているのはゲルマニアだ、ここから二時間ほどでつくというのはとても素晴らしいと思う、さらにゲルマニアは基本的に外部の人間を受け入れやすい、まさに身を隠すには最適だろう」  
そこまでいってワルドは一旦言葉を切ってリン達を見回した、その中でリースはワルドを見て口を開いた。

「まあ、確かにそうだろう、しかしゲルマニアはトリステインに反感を持ってしていると聞いています、あまり長居は良くないと思うが？」  
ワルドは首を振った。

「いや、ゲルマニアがトリステインに反感を持っているというのはトリステインがゲルマニアに反感を持っているからうまれたはなしだ、実際はそれほど反感を持たれていない、せいぜい少し避けられる程度だろう」

リースはそれを聞いて納得したように頷いた、ワルドはそれを見て話を進めた。

「さて、少し休んだら馬車があるからそれに乗っていこう、向こうの宿に予約もしてあるから何もありませんと終わると思うよ」

ワルドはそう言ってリン達を見回した、特に誰も意見をいうでもないので確認して話を終わらせようとした時にイリアが口をはさんだ。  
「そういえば、ワルド。貴方は騎士団長なんでしょう？ならゲルマニアに逃げるのはいけないんじゃないの？」

「ああ、それはいいんだ。辞めたから」

「へえ、わかったわ」

さらりと凄いことを言ったワルドの発言をさらりと流したイリアのせいでリン達は驚くタイミングを逃してしまった。



「では、まずは準備をしよう。しばらくしたら馬車が来るからそれまでに終わらせておいてくれ」  
そう言っただけでワルドは部屋を出た、リンは自分の荷物をまとめようと席を立とうとしたが、それをリースがひきとめた。

「ちよつといいか？」

「ん？」

リースはリンに手招きしながら隣の部屋に入ってしまった、リンもリースを追いかけて部屋に入る。

リンが部屋に入るとリースは部屋の外にいる男達に入ってこないように言った。

リースは才人が頷くのを見て部屋の扉を閉めた。

「さて、何で呼んだのかって顔をしてるな、簡単だ、ゲルマニアがトリステインにあまり反感を持っていないといっても有名な魔法学院の制服だと流石に目立つだろう？だから目立たないような服に着替えてくれないか？」

リンは事情を飲み込んだように頷いた。そして部屋のタンスのなかに入っていた白い服を取り出した。

それはシエスタに着せてもらったあの白い服だった、長袖のワンピースでユリの花が書かれていた。

「これでいいかしら？」

リースは結局目立ちそうだけど流石にシエスタからの思い出の品なのでなにも言わずに頷いた。

「じゃあ、それに着替えてくれ」

わかったわ、と言ってリンはワンピースに着替えた、ワンピースを着ると先程の制服姿とはまるで別人のようになっていた。

リン自身は特にそれを気にする様子はなく、普段通りの少しおっとりしたような表情でリースを見ていた。

「うん、似合ってるな。少し目立ちそうだがいいんじゃないか？」

「そう？………ほめてくれてありがとう」

リンは少し照れくさそうに笑った。

情報屋は学院の中を歩いていて、学院内にはレコンキスタの兵士達がうろついていたが情報屋は兵士達の配置や巡回ルートを熟知していたので見つかることもなく目的の場所についた。

学院長室についた情報屋はあらかじめ持っていた合鍵を差し込むと中に入った。

「ふむ、ノックは無しかね？」

オスマンは入ってきた情報屋をじろりと睨んだ、その迫力は並みの人間なら目を合わせられない程だったが情報屋はオスマンをつまらなそうに見ると溜め息をつきながら言った。

「気が立っているのは解るが、呼んだのは貴様だ、つまらぬことをするなら帰るが。いいのか？」

オスマンは情報屋から視線を外した、情報屋はそれを見ながら淡々と話をすすめた。

「さて、貴様が欲しいのは学院の抜け道だろうか？」

「ああ、生徒達をこっそり逃がすにはそれしかないと思つての、しかしかんじんの抜け道の場所がわからんのじゃ、主は知っておるか？」

「知っているに決まつてゐるだろう？ 抜け道は一階の始祖の像のしたにある窪みに覇者の剣の柄についてゐる聖石をはめ込めばいい」「覇者の剣はフーケに盗られてしまつたのだが」

「ここにある」

情報屋はマントの中からシンプルな形状の剣を取り出した、オスマンはそれを見ると目を険しくして情報屋を見た。

「まさか、貴様がフーケか？」

「それこそまさかだ、そんなつまらないことをするわけないだろう？」

確かにそうだ、情報屋は金に困るような奴ではない、オスマンはそう思つて覇者の剣を受け取るうとした、情報屋は仮面のしたで薄く

笑うと柄にはめ込まれた聖石だけを投げた。

「貴様は言ったよな、報酬は好きに選んでいいと、これが報酬だ」  
オスマンは苦虫を噛み潰したような顔をしながら聖石を受け取った、  
情報屋はその様子を見ながら宙に消えた。

オスマンは情報屋の消えた場所を睨んでいたが、やがて諦めたように溜め息をつくと逃げる準備を始めた。

## 其の七十四

馬車に揺られながらリースは前を走るもうひとつの馬車の方を見た。向こうの馬車にはフィリンと才人とワルドとリンがいる、当然向こうは険悪な雰囲気になっていいるだろうと思うが向こうにはストツパー役のフィリンがいるので大丈夫だろう、リースはそう思いながら視線を隣にやった。

隣にはリースと同じように少し気まずそうな表情をしたイリアがいる、元々リースはイリアの事が嫌いというか苦手な感じだったがフィリンに言われた事のせいでちょっとは仲良くしてみようかなと思っていた。

しかし、仲良くといっても何をすればよいのか全くわからない、とりあえず話してみようかと思ってみたが話題が浮かばない。

リースが話題探しに悶々としていると、後ろの席に座っているパレントがぼんやりと話し始めた。

「そういえば、いりあってどういうひとなの？」

そのイリアはいきなり話しかけられた事に戸惑いながら話し始めた、  
「そうね、私はまずこの世界の人では無いわ、私がいた世界では大きな城に住んでいるの、といっても住んでいるのは私とフィリンだけなんだね」

「なんで他にいないんだ？」

思わずリースはイリアに質問していた、質問されたイリアは少し悲しそうに言った。

「私は死なないからまわりの人達から嫌われているのよ、私も怖がられるのは好きじゃないから城からでないようにしているの」

「へえ、リースはどうなの？」

なんとなくこちらにも振られる事がわかっていたリースは特に戸惑うこともなく答えた。

「俺は普通に生まれたぞ、トリステイン魔法学院ってこの学院長

の孫なんだ、両親は俺はどこにいるか知らないんだが、時々連絡をよこしてくるから嫌われてはないんだろうな」

「貴女の親は何をしてるの？」

「確か東方の調査に行っているらしい、親はずいぶん人に好かれやすい性格らしくてな、エルフとの外交役選ばれているらしい、エルフも親の人のよさにあてられたらしくて親には友好的に接してくれているらしい。本人達も楽しいらしいし、まさに天職ってやつなんだろうな」

「わかった、おしえてくれてありがとう」

そう言っただけでパレントはまた馬車の天井を見つめた。再び静かになった馬車の空気にいこごちの悪さを感じたリースはフィリンが言っていた事を思い出してイリアに言ってみた。

「そういえば、イリアって料理が好きなんだって？」

それを聞いた途端、同じようにいこごちの悪そうにしていたイリアの表情が急に明るくなった。

「そうなのよ！よく知ってるわね、まあフィリンには負けるけどそれでも並みの人よりは上だと自負してるわ。得意な料理はデザート全般ね、最近は和菓子にも挑戦してみてるけど中々上手くいかないのよ。和菓子っていうのはまず (中略) とい

うかんじでとにかく難しいのよ、作るだけなら簡単なのよ、ただそれは料理とはいえないと思うの、温度、時間、力加減。そういった色々な物を満たして初めて料理が生まれるの。例えばケーキで例えると (中略) というわけ、……………ん

？話が長い？、ごめんなさい、もう少し待って。すぐ終わるから

(略)

そんなイリアの話はゲルマニアに着くまで続いた。

リースは料理の話を今後一切イリアに振らない事にした。

イリアの話が始まった頃、もうひとつの馬車の中ではリースの予想

通り険悪な雰囲気があった。

しかし、それは後ろの才人とワルドの間だけにあり、前の席のリンとフィリンには届いていなかった、もちろんフィリンはその雰囲気には気付いていたが何をすることもなく笑いながら雑談をしていた。

「ワルドさんは騎士団を辞めてしまっただけよ、よかったんですか？」

「ああ、学院の教師だから金には困らないし、それにリンの傍にいられるじゃないか、それだけで僕には十分だよ」

「流石ワルドだな、俺には真似できないよ」

「そんなこと言われると少し恥ずかしいわよ」

リンは頬を染めて言った、才人達は相手をけなすと自分の評価が下がることを知っているのか相手を誉めて自分の評価も上げる作戦らしい。

それを見抜きながらフィリンは話を進めた。

「ですよ、そういうえば才人さんはリンさんに召喚される前はここにいたんですか？」

「こことは違う世界にいたよ、俺の世界はこっちとは違って空気は澱んでいるし星は見えないしでやなところだった、だからこの世界に呼んでもらってよかったと思っっている、リンにも会えたしね」

「サイト君、君は素晴らしい男だ、僕は素直に尊敬するよ」

「……………ありがとう、才人」

そんな会話をしながらフィリンは才人の言葉に嘘を見つけた、自分の世界の事をけなしているが、話している才人は自分の世界の話しになると何処か寂しげになるのだ。

おそらくリンやワルドも薄々気付いている、しかし言葉に出さないのはやはり二人の優しさだろう。

そうして他愛のない雑談に見せかけたアピールタイムはゲルマニアに着くまで続いた。

## 其の七十五

ゲルマニアの国境にいる兵達の検閲でOKをもらってからリン達はゲルマニアに入った。

ゲルマニアは工業や商業で栄えており、そのせいで国の中にある建物の七割が工場や商館などで占められていた。

鉄を叩く音や未熟な小僧を叱る怒鳴り声、商人の客寄せの声などで溢れかえっている道の人混みをかきわけて歩きながら才人はぼやいた。

「うるさいなあ、元気なのはいいけどさ」

しかし、そのぼやきもまわりの喧騒にかき消されて誰の耳にも届かなかった。

だが、才人の後ろで才人の服の裾をつかみながらついてきているパレントには少し聞こえたらしく、首をかしげて才人を見上げた。

「？」

「なんでもないよ」

「……そう」

そう言うとパレントはまた下を向いた、パレントはゲルマニアの人混みを見た瞬間才人に近付くとぎゅっと服の裾をつかんだのだ。どうやらあまりに沢山人がいたので怖くなっただけらしい。

才人は前を見た、ワールドが先頭に立ちその後ろをリン、リース、才人、パレント、イリア、フィリンの順に並んでいる、イリアは回りにある店に目移りしていたが、後ろにいるフィリンに注意されてからは我慢しているようだ。

そのまましばらく歩いているとワールドが予約していたらしい旅館に入っていた、才人も後に続く。

中はきらびやかな飾りがしてあるホールだった、貴族用の旅館にしては成金趣味の様に映るがそれも仕方無いのかもしれない。

ゲルマニアは他の国とは違い金さえあれば誰でも貴族になれる、つ

まり一種の成金だ。中には先祖の財産を引き継ぐ貴族もいるが、大多数はたまたま興した商会や工場が売れただけの成金ばかりだ。そんな成金の為の旅館なので過度の装飾が施されているのだろう。リースはそう冷静に観察してからワルドを見た、ワルドはあまりの人混みの多さに辟易としていたようで疲れた表情をしながらリース達を見ていた。

「じゃあ、とりあえず昼御飯を食べにいこう、人混みを通るのに体力を使っただろう？」

リン達は頷いた、実際に疲れていたし、先頭で頑張っていたワルドに対する感謝も含めていた。

ワルドは外の喧騒を見て出口に向かおうとした足をリターンさせるとフロントの従業員に質問した。

「この旅館に食堂は？」

従業員はワルドの鬼気迫る表情に顔をひきつらせながら、ありますと答えた。

食堂で一息ついたリン達は頼んだコーヒーを口に運びながらくつろいでいた。

パレントやイリアは苦いコーヒーが飲めないらしく、砂糖やミルクを大量に入れていた。

そんな光景を見ながらリースは話を切り出した。

「じゃあ、俺達はしばらくここに匿ってもらうのか？」

「泊まるんだ、比較的この旅館は安いからね、それに静寂の魔法がかかっているだろう、通りの騒音が聞こえないんだ。とても素晴らしい場所だとは思わないかい？」

皆も賛成らしく、特に何を言うわけでもなくコーヒーを飲んでいった。

「という訳で、まずは部屋を決めよう。一応七部屋とってあるんだが、どうする？誰かと同じ部屋になりたいという人はいないか？」  
ワルドの言葉を聞いて真っ先にイリアが反応した。



「私はフィリンと一緒にいいわ、ねえフィリン？」

「ええ、主を一人にしては不安ですから」

「ありがとう、でも主じゃなくてイリアって呼んでほしいわ」

そんな仲睦まじいことをしているイリアとフィリンにワルドは頷いた。

「じゃあ、君達は25号室で頼むよ。他にいないかな？」

すると、おずおずとパレントが話始めた。

「……わたしは、だれかといっしょがいい……」

パレントが送った視線を才人は受け止めることなく流した、確かに気持ちはわかるが流石に部屋に男女二人つきりはまずいだらうと思っただ。

すると見かねたリンがワルドに言った。

「パレント、私と一緒にいいのなら一緒にいてあげられるけど？」

パレントは嬉しそうにリンを見た。

「……ありがとう……」

恥ずかしそうに俯くパレントを微笑ましそうに見ながらワルドは話を進めた。

「じゃあ、リンとパレントは26号室にいつてくれ、僕は28号室に、才人は29号室に、リースは27号室ということになるが、それでいいか？」

やはり、反対はいなかった。

ゲルマン三世は部下が持ってきた情報を見た。

『イリア・フロイスを発見。メローネ通りの旅館『静寂の籠』に宿泊しています』

ゲルマン三世は髭を撫でながら傍に控えていた影に言った。

「いけるか？」

「はい」

影は頷くとそのまますぐに消えた、ゲルマン三世は隣にいるアリシ

アに言った。

「やはり、危険なものは早めに摘み取るべきか……」

「ええ、あの者が持つ力は陛下の計画の支障になると思われます」  
ふむ、と頷いてから誰に言うでもなく呟いた。

「しかし、奴が言っていた事が気にかかるな……」

## 其の七十六

クロムウエルは苛立たし気に机を叩いた。

「生徒達に逃げられただと!？」

クロムウエルに怒鳴られた兵士は眉ひとつ動かさずに抑揚の無い声で答えた。

「はい、朝になり気づいたらもぬけの殻でした、出入口は塞いであるので何処かに抜け道があると思われませう」

クロムウエルは舌打ちをしたが、それ以上何かを言うことはなく、兵士にさがるよう言った。

兵士はやはり眉ひとつ動かさずにわかりましたとだけ言うと部屋から出た。

ドアが閉まるのを確認するとシエフィールドはクロムウエルに言った。

「閣下……どうなさいますか？」

「……とにかく、計画通りに進める。お前はトリステインの内通者に話をつけて情報をかき乱すように言っておけ」

「はい」

「ティファニアは早くそれを読め、可能な限り早く虚無を覚えろ」

「はい、閣下」

そう言ったティファニアの手にあるのは始祖の祈祷書だ、兵士達に部屋を物色させていたら学院の女子の部屋にあったのだ。白紙なのを訝しく思ったクロムウエルがオスマンにかまをかけてみるとあの始祖の祈祷書だということがわかったのだ。

まさか仮にもこのトリステイン魔法学院のオールド・オスマンがこつも簡単に情報を漏らすとは思わなかったが、おそらくそれほど余裕がなくなっていたということだろう。

そんなことを思っているとティファニアがあつと声をあげた。

「ん?どうした？」

「閣下……新しい呪文が見えました」

クロムウエルは始祖の祈祷書を覗きこんだ、とうぜん虚無ではない  
クロムウエルには呪文は見えなかったが、それを知っているティフ  
アニアはクロムウエルの為に彼女にだけ見える文字を読み上げた。

「ここに虚無の呪文を印す

印すは『爆発』最も初歩的な呪文である

全てを無に還す威力は担い手の精神力に作用される

故に幾度も使うことはできぬ

そして、この爆発は虚無の全てを表すとも言える

それについてはまた、後々語っていこう」

と、書いてあります。と言ってティファニアは祈祷書を閉じた。

クロムウエルはその爆発の説明文のどうでもいいはずの一ヶ所が気  
にかかった。

「虚無の全てを表す……？どういう事だ？」

ティファニアが答えを知るはずもなく、小さく、首を傾げた。

ナイアルラトホテップはトリステインの城下町を歩いていた、黒い  
スーツを着ているナイアルラトホテップは周囲の風景から浮いてい  
たが、何故か目立たずまるで影のように人混みをすり抜けていった。  
実際はナイアルラトホテップは本名ではない、紙の使いであった彼  
はある世界で『ナイアルラトホテップ』に出会った。

その世界は他の世界とは明らかに違う雰囲気を纏っていた、普通な  
ら人々を管理する筈の神々がここでは人々で遊び、人々を弄び、人  
々から全てを奪っていた。

人々には神々に抗うすべもなく、人々はただ神々の狂気に飲み込ま  
れていくだけだった。

普通ならこのような世界はすぐに上位の神々が修正して、よい世界  
に変えていくのだが、最上位に位置する神の四の内の一であるアザ  
トースが管理している世界なので並大抵の神ではかすり傷一つ負わ

せられない、残りの三の神はそれぞれなにもせずに傍観の構えを取っている。

そんな狂気の世界に彼が行ったのは、上司である神にこの世界の神の一であるヨグ・ソトースへの使いを頼まれたからだ。

普通ならこういう神々同士で助け合う事は無いのだが、実は色々な世界の神がこの世界の神の力を借りに来るとするのはよくあることだ。この世界の神は比較力が強い神が多い、神が集まって各々好きなように遊んでいるこの世界では自然の摂理にしたがって弱い神はすぐに消える。

つまり、残っている神は例外なく強い力を持っている神なのだ、助けを借りに来る神の用件はだいたい、最近増えすぎた種族を適度に潰してほしい、知恵をかしてほしい、一度全てを無に還してほしいなどのものが多い。

元々、一般的な神々の力はそこまで強くない、せいぜい自然現象を操るぐらいだがそれでも限度がある、特に進んだ技術を手に入れてしまつと、神々が起こす災害でも被害がでない可能性がでてくる。

そんなときにこの世界の神に頼むのだ、根絶やしにする力を持った代表的なのはクトゥルフ、クトゥグア、ハスターなど。知恵を授けるのはヨグ・ソトース、ヴルトウーム、ツアトウグアなど。特定の物などを破壊するのはナイアルラトホテップ、ティンダロスの獵犬、クアチル・ウタウスなどの神が有名だ。

彼の上司の神はヨグ・ソトースに知恵を借りに来ていた、ある一人の人間が力を持ってしまったのだが、どういう方向に誘導するのが一番いいだろうか、と。

話は二言三言で終わった、子孫を残させてそのまま血を薄めれば簡単に事が収まるだろうと言われ、目的を果たした彼が帰ろうとする時、後ろから声をかけられた。

後ろにいたのは代表的な神の一であるナイアルラトホテップだった、この神は比較的行動理由が人間に近い、ナイアルラトホテップも自覚しているのだろう、だいたい人間の男の姿をしていることが多い

らしい。

ナイアルラトホテップは彼をじっと見つめてから手を打った。

「君に力をあげよう」

その結果、彼は変身能力と地上に降りる能力をもらった。そして彼は後に、地上に降り、自らをナイアルラトホテップと呼びながら時々人間を弄りながらそれなりに楽しく生きていた。

何故こうなったのかはわからない、しかし、別に後悔はしていなかった。

すんなり城に入ると、あらかじめ消しておいた議員の一人に変身すると、議会の中に紛れ込んだ。

## 其の七十七

イリアは夜、フィリンと一緒にベッドの上で寝ていた。すやすやと穏やかな寝息をたてているイリアの体に影がかかった。

次の朝、目が覚めたフィリンは隣にイリアがいないことに気付いた、少し寝ぼけた頭で随分早く起きたんだなあ、と思ってからすぐに事の重大さを知り、跳ね起きた。

イリアがいたはずの場所のすぐそばの窓が少し開いていたのだ、もちろん身の安全の為に窓は閉めた。

つまり、侵入者がいた事になる。

フィリンはそこまで考えを巡らせてから、一度気持ちを整理した、おそらく犯人は寝静まってからイリアをさらったであろうから今さら闇雲に探そうとしても見つからないだろう。

とにかく今は冷静に情報を集めるべきだ、そして、犯人が見つかり次第殺す。

フィリンは握っていた椅子の背もたれを握り潰しながらいつもより無表情で開きかけの窓を覗んだ。

食堂では重苦しい空気が流れていた。

シエスタがいなくなってからイリアまでいなくなるとは、しかもよりにもよってあのイリアがさらわれるなんて誰が考えただろうか。各々が暗い考えにはまっている食堂で、リースが口を開いた。

「どうする？」

それは誰もが考えていることだった、それでいて、誰もが話したく

ないことだった。

このまま待つていればイリアがふらりと帰ってくる、そんな感じがしてならないのだ。

しかし、リースはうじうじ考えても無駄だと考え、この話題をだしたのだ。

「まずは情報を集めたいと思うんですが……」

フィリンの言葉にワルドは首を振った。

「おそらく無理だろう、深夜は外出禁止令がしかれている、仮に犯人が夜中や早朝などの起きている人がいる時間帯にさらったとしても、君に気付かれずにさらった犯人が誰かに見つかるようなへまをするとは思えないんだ」

フィリンは悔しそうに眉を寄せた、しかし自分でも正論だとわかっているので言い返さずにそのまま黙った。

と、食堂の扉が開いた。

全員の視線が集中する、扉から入ってきたのは意外な人物だった。

白い髪に白いワンピース、真っ赤な瞳に顔の右に刻まれた真っ赤な薔薇の刺青。

アルビオンの時に出会った傭兵、ローズがそこにいた。

ローズはこちらを見つめる視線を感じてそちらを向いて、一瞬驚いたような顔をしてから笑いながら言った。

「……どうしたの？」

「へえ、そんな事があつたのね」

フィリンから一通り説明を受けてからローズはそう言った、突然現れたローズにワルドは不審そうな目を向けた。

「そろそろ答えてもらいたいね、一体どうしてこの宿に入ってきた



「この宿は僕達の貸し切りのはずなんだが」

「「え？」」

ワルドの言葉にリンと才人は驚いた、確かに食堂に自分達しかいなかったり廊下で誰にも出くわさなかったのは不思議に思っていたが、まさか貸し切りなんて事をしているとは思っていなかったのだ。

それを聞いたパレントは首をかしげて言った。

「でも、おかねはもうないんじゃないの？」

リンはワルドを心配そうに見た、ワルドは苦笑いしながらパンパンに膨れた財布を振った。

「見ての通り、金は卸してきたよ。騎士団の隊長というのは必要以上な給料を貰えるからね、金はありあまつてるんだ」  
ははは、ワルドは笑った。

「さて、お前はイリアの情報を知ってるのか？」

少しだけ和んだ空気をリリースは切り裂くように言った。ローズは笑いながら答えた。

「私は知らないわ」

「なら、出てって」

「「だけど、知ってる人は知ってるわよ」」

ちよつと着いてきて、とローズは言ってから食堂を出た、リン達は着いていっていいのかと迷ったが、このまま待っていても何も変わらないと、ローズに着いていった。

## 其の七十八

ローズに案内されたのはゲルマニアの雰囲気にぴったりな騒々しい怒鳴り声で溢れる酒場だった。

そんな中、ローズはワルド達を引き連れて隅の方の席に向かった、見た目麗しいローズなどに酔っぱらいの下世話な視線が集中するが、どうやら何処かのギルドだと思われたらしく、すぐに視線が消えて各々好き勝手に騒ぎ始めた。

リースは辺りを見回してから眉を寄せた。

「……どこにいるんだ、その情報屋とやらは」

「いるんじゃない？あいつはそういう奴だからね」

ほら、と後ろを指差す。つられてリース達が後ろを振り返ると後ろのテーブルで商人風の優男と会話しているローブで身をすっぽり覆っている人が見えた。

優男と情報屋は二言三言言葉をかわしてから別れた、情報屋は後ろを振り向いた。

ローブで顔はよく見えなかったがかるうじて見える顔の下半分を見る限り、女、しかも結構若いことがわかった。口元は笑みの形を作っていた。

情報屋の方を見ているリース達は気付かなかった。ただろうが、ローズは小さく眉をひそめた。

普通なら情報屋は顔を全て隠している筈だ、これでも情報屋とは長い付き合いだが、一度も情報屋が仮面を外した所を見たことがない。しかし、ローズその表情をすぐ消した。

「さて、久しぶりね。セレ……………ローズ」

はじめて聞く情報屋の肉声の驚きよりも、自分にとって不快な響きを聞いて、ローズは口だけで笑いながら情報屋を睨んだ。

「今日は私が聞くんじゃないわ、この子達が聞くのよ」

「知ってるわ、アリ……………いや、貴方達にはイリアね。その子の行

方でしょう?」

少女の様に軽やかな情報屋の声にフィリンは目の色を変えて詰め寄った。

「知ってるなら話してください、下手な事を言ったら今すぐ首がとびますよ」

情報屋はくすくすと笑った。

「熱くならないで、知りたいならそれなりの代価が必要でしょ?」

フィリンは喉元に押し付けてあるナイフを喉に食い込ませた、ナイフの端に血が滲んでいるのがフィリンに見えたが、全く動じる気配が伝わらずフィリンは眉をひそめた。

「簡単な事よ、貴女の髪紐が欲しいの」

フィリンは情報屋の喉元のナイフを突き刺した。

それでも、情報屋はそのまま話続けた。

喉が裂けているのに続けられた。

「あげたくないならいいけど………貴女の主は助けられないわね」  
フィリンは唇を噛んだ、この髪紐にはイリアとの大切な思い出がある。フィリンは後ろに髪を纏めている古い髪紐を撫でながら貰ったときの事を思い出していた。

イリアに拾ってもらってから、一ヶ月ほどたったある日、フィリンが淹れた紅茶を飲みながらイリアは頷いた。

「うん、中々上手くなってきたじゃない」

「あ、ありがとうございますっ!」

フィリンは嬉しくて頭を下げた、今までフィリンを責めることはなくとも、褒めることもなかったので初めて褒められたのはとても嬉しかったのだ。

そんなフィリンを見ながらイリアは少し悩むとフィリンの長い後ろ髪を触った。

「……………やっぱり、何かでまとめた方がいいわね……………」

イリアはそう言って一言呟くと、深い藍色の髪紐を作って、戸惑う

フィリンの漆黒の長い髪をポニーテールに纏めた。

「うん、似合ってるわね」

フィリンはいきなりのイリアからのプレゼントに呆然としていたが、やがて感極まったように泣き始めた。イリアはいきなり泣き始めたフィリンを前におろおろしながら言った。

「えっ、な、何も泣くほど嫌がる事ないじゃない、いいのよ、嫌ならつけなくても」

フィリンは首を振った。

「ひつく…………ち、違うんです。うっ、わ、私、誰かにぶ、プレゼントなんて、ぐすっ、貰ったことないんで…………嬉しくて」

イリアはその言葉に目を丸くしてから、嬉しそうに笑った。フィリンもイリアが笑っているのを見てイリアと同じように嬉しそうに笑った。

その後も髪紐をフィリンは色々な人に貰ったが、全てを断り、イリアから貰った藍色の髪紐をつけていた。

確かに髪紐を差し出せばイリアを助けられるかも知れない、しかし、今から探せば見つけられる場所にあるのかもしれない。

決まりかねているフィリンに対して、情報屋はにやにやしながら一石投じた。

「貴女は主を助けたくないのかな？」

一瞬の出来事だった。

フィリンは髪紐をすぐにほどくと情報屋に突きつけた。あまりの決断の早さに情報屋は固まった笑顔のまま口を開いた。

「ほ、報酬を頂きました。じゃあお望みの情報はこの紙に書いてありますので」

では、と言いつつ残して情報屋は酒場の喧騒の中に消えていった。去り

際にちらりと見えた喉元に、傷は残っていなかった。

フィリンは紙を見る、そこにはこう書いてあった。

『ゲルマニアの城の右塔、五階、右の突き当たりの壁にある肖像画の裏にある部屋にいる』

フィリンは内容を確認した瞬間に、その紙を粉々に破り捨てた。

## 其の七十九

とりあえず、ワルドにはリンと才人とパレントを宿に連れていかせた、彼らは確実に足手まといになる、そうして残ったのはローズとリースとフィンだけだった。

城に着くには全力で建物の屋根から屋根へ飛び移りながら走って1日かかった、1日の間にいったいイリアへ対してどんな事を犯人がしているかと考えるとフィリンは気が気じゃなかった。

と言ってもいくら頭に血がのぼっているフィリンでも、国の城に突撃するような愚はおかさない、とりあえず遠巻きに城を観察した。

「警備が多すぎますね……………」

「ふうん、抜けられないの？」

「抜けたとしてもその後また兵士が集まってくるぜ、やるだけ無駄だろ」

「私なら抜けられるわよ」

「どうやるんですか？」

「私も聞きたいわね」

「私の能力を使えばいけるわよ」

「能力……………ん？誰の能力だ？」

リースはそう言って今隠れているメンバーを見る、右からフィリン、ローズ、イリア、自分……………。

イリア？

「……………初めまして」

フィリンは驚きすぎて声が出ないようだった、今から取り返そうとしていた本人が目の前にいるのだから無理もないだろう。

それよりリースはイリア（？）の言葉にひっかかる物があった。

「初めまして？」

「ええ、私は貴女達に会うのは初めてよ。私はあの子の姉よ、名前は無いけど」

リースは信じられないような目でイリアの姉を名乗る少女を見た、確かに髪をポニーテールにしているのはイリアと違うがそれ以外は瓜二つだった。

「私の能力は存在感を操る事ができるの、私もあの子を助きたいし貴女達もあの子を助きたい、利害の一致って感じかしら」

少女はそう言っ城に向かって歩き始めた、フィリン達も後を追うが兵士達は誰一人としてリース達に気づく様子は見えなかった。

「いくわよ、何処にいるかは知ってるんでしょ？」  
フィリンは頷いた。

イリアは目隠しと猿轡を噛まされて床に転がされていた。

真つ暗な視界の中で、自分をさらったらしい男の声が聞こえた。

「さて、あれを頼む」

はい、と違う男の声がする。命令するということは自分をさらった

男は何かの組織の上の立場にいるらしい。

そんな事を考えていると、両耳に何か付けられた、耳の穴から何かが入ってくる感覚に眉を寄せ

急に強烈な痛みが頭から全身に痛い痛い痛い痛い体が意思とは無関係に痛い痛い痛い痛いひくひく痙攣しはじめ痛い痛い痛い痛い痛い勝手に涙が痛い痛い痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛イタイタイタイタイタイタイタイタイタイタイ

ッ

プツンという音と共に、イリアの意識は闇に堕ちた。

目の前で涎や涙を振りまきながら死にかけの虫の様にひくひく痙攣

している少女を見下ろしながらゲルマン三世は部下にイリアを右塔の隠し部屋に放り込む様に命令した。

部下は痙攣しているイリアを哀れむ様な目で見ながら部屋から出した。

イリアに使ったのは拷問道具の失敗作だ、壊されない限り周囲の魔力を喰い永久に相手に痛みやその他の精神的な痛みを与え続ける道具だが、あまりの威力に情報を吐かせるより先に相手の精神が崩壊してしまうという、悪魔の拷問道具だ。

なんでそんな物を使ったのかというと、ゲルマン三世から見ると、恐ろしい能力を使い、各地で猛威をふるうイリアの存在ははつきりいって邪魔だった。

しかし、アリシアが言うにはイリアには死の概念が存在しないらしい、そんな化け物をどうやって無力化しようかと悩んでいた時にふと、この機械が目についた。

そう、肉体を殺せないなら精神を殺せばいい。

更に、能力の発動条件が声を出すことだとわかると、実行部隊にイリアの誘拐を指示したという話だった。

ゲルマン三世は床に残った水滴を拭き取るように部下に言うてから、次の仕事を始めた。

イリアが目を覚ますと再び目の前が真っ赤に染まるほどの激痛が襲ってきた、どうやらこれはイリアの意識が無いときは活動を止めるらしい。

そんな分析をするのにすら、凄く精神力を使った、痛みは少し収まってきた気がするが、それは痛みを感じなくなってきただけだということには、イリアは気付かなかった。

と、目隠しを外された。

目の前の風景は殺風景な所だった。白一色の部屋、扉の位置すらわからない。長くいると頭がおかしくなりそうだった。



と、指先辺りに違和感を感じた。イリアは痛みでチカチカ点滅する視界に指先を入れてから、目を疑った。指先が腐っている。

イリアが気付くと同時に指先からの腐食は緩やかに進んでいった、慌ててなんとかしようとするがそんな無駄な事をしている間に肘辺りまで腐食が進んでいた。

イリアは混乱しながら腕を壁に叩きつける、すると、指や手のひらがべちゃっと嫌な音と共にイリアの体から離れた。

半狂乱になりながらイリアは腕を叩きつける。

べちゃっべちゃっべちゃっべちゃっべちゃっべちゃっべちゃっべちやっべちやっべちやっべちやっ。

いつの間にか、イリアの腕は無くなっていった、あまりの事に、呆然としながらイリアの右目が腐っていき

ふと目が覚めた、どうやら夢だったらしい。手を確認してみると、特に異常は見当たらない。

安堵したイリアの見る指先が再び腐り始めた。

## 其の八十

廊下を歩きながらフィリンはふと少女に質問した。

「そういえば、貴女は主の姉と言いましたが、なぜ主の前に姿を見せてあげないのですか？」

そう言ったフィリンの横を兵士が通る、しかし存在感が限りなく薄いフィリン達に気づく様子はなく、暇そうに欠伸をもらしながらすれ違っていった。

窓からは朝日が差し込んでいる、その眩しさに目を細めながら少女はフィリンの質問に答えずに唐突に語り始めた。

「私達は元々小さな村に住んでいたのよ、お父さんは科学者でお母さんはその助手。何処にでもあるような平凡な家庭だった。でもある時、お父さんは国の偉い人から不死の薬を作るように言われた……」

どうやら少女は一応フィリンの質問に答えているらしい、少女は寂しそくに続けた。

「普通なら断れるんだけどお父さんはお母さんを人質に取られてしまった、頭が悪ければ無理だと言えたのだけれど、お父さんはそれが出て来るだけの頭脳を持っていた。世界中から様々な実験台を集めたけどどれも失敗した、しかしお父さんは気付いてしまった、素晴らしい実験台の場所を」

右塔の扉を見つけて、開ける。ギイツという音が響いたが、幸い、誰にも気付かれなかったらしい。

「妹はお父さんの願いをことわることが出来なかった、だって自分が犠牲になればお母さんが助かるかもしれないから。そんな理由で実験を受けた」

右塔は暗くて湿気が溜まっていた、綺麗に掃除されていた城とは大違いだった。

「実験は成功した、けれど不死などという異物を世界が認める筈も

なく、妹の存在は消されそうになった。けれど、存在というものは名前があればなんとかなる、私は咄嗟に私の名前を妹にあげた」少女は階段を登る、誰も使っていない絨毯は踏むと、スツと音も立てずに静寂の空気をたてていた。

「私は名前が無くなったから、能力だけでいきのびた、しかし誤算が一つあった。双子でそっくりな妹に名前を渡したから世界が私達が近くにいと私を消そうとするの。だから私は妹の傍にいられない」

しばらく沈黙がおりた、フィリンは一つ聞きたい事があった。

「……………一つ、はつきりさせたい事があります、貴女にとって主はどういう存在ですか？」

「守るべき、大切な存在よ」

即答だった、フィリンは当然の事を言ったといった表情の少女を初めて「仲間」だと感じた。

もちろんそんな事は言葉にしない、するまでもなく少女にもフィリンが仲間なのはわかっただろうから。

イリアは既に限界だった。

先程から見せられている幻覚はイリアの精神を容赦なく蝕み、夢と現実の境界線が曖昧になっていくのを感じた。

今腹を突き破って大量の蛆が湧き出てくるのをイリアはぼんやりと見つめた、恐怖は麻痺しており、そのまま身体中から蛆が湧いて体を喰い破られていくのも、たちの悪い夢のようだった。

事実、夢であり。次の瞬間にはまた目が覚めるのだが、この時は少し事情が違った。

まず、今までイリアを苦しめていた激痛が無くなっている。

そのまま立ち上がり忌々しげに耳についた機械を放り捨てる、そして、口にはめられた猿轡を剥がすとそれも捨てた。

白い扉は開かなかったが不思議と不安は感じなかった、きつとフィ

リンが助けに来てくれる。そう信じていた。

急ぐような足音が聞こえる、期待に胸を高鳴らせながら扉を見たイリアを助けに来てくれたフィリンが抱きしめる。

そして閉じ込められていた部屋から出された、後ろを振り返って今まで自分がいた建物が小さな小屋だったのを見て、イリアは特に何も思わずにフィリンの後ろを着いていった。

学院に戻ったイリア達を出迎えてくれたのは今までイリアと出会ってきた様々な人々だった。

リン、リース、才人、ワルド、パレント、フィリン、オスマン、フーケ、ローズ、リリス、そして最愛の姉。

みんながみんな笑顔でイリアの帰還を祝ってくれた、そしてイリアが作った料理を皆で仲良く笑顔で食べ始めた。

パチンツ。

目が覚めた、相変わらず激痛がイリアを襲う、いや、自分はイリアではなくアリスだ。痛みのせいか、自分の精神が限界に近づいているせいか、アリスは自分がアリスだと500年ぶりに実感していた。しかし、そんな事はアリスにとってはどうでもよかった。

アリスは痛みのなかぼろぼろと涙を溢した、どうしてこんなめに逢わなくてはいけないのか。自分が何か悪いことをしたのか、自分はまだ、皆と仲良く生きていきたいのにどうしてそんな夢も叶えられないのか。

指先が泡立つ、皮が弾けては消え弾けては消えていく。

そんな光景を何もできずに見ていると、扉が開く音が聞こえた。

## 其の八十一

フィリン達は右塔の五階の廊下の突き当たりの肖像画の前に立っていた、情報屋の言った事を信じるならこの中にイリアがいるはずだ。フィリン達は互いに頷いてからフィリンが肖像画を蹴り飛ばした。中は真つ黒な部屋だった。そして、イリアの姿も無い。

まさか騙されたのかと思った瞬間フィリンは自分の視界に小さな違和感を覚えた。壁によく見なければわからない程の小さな溝がある、それだけなら問題はないのだがその溝の形がフィリンには扉に見えるた。

ダメ元で手をかける、ギイツという音と共に扉が開いた。

ピツピツピツピツピツピツピツピツ

焦燥感を煽るような警報が響いた、慌てて少女が音の存在感を消そうとしたが時既に遅し、突然の警報に固まっているフィリンの後ろからドタドタと慌ただしい足音が響いてきた。

「来るぞ！早く開ける！」

リースが怒鳴った、フィリンが弾かれたように扉を開けると目の前には無限に続くように見えるクリーム色の通路があった。

恐らくそんなスペースは右塔にはないので幻覚の類いだろう、しかし長さがわからない以上、直線ルートだと後ろから狙い撃ちされる可能性がある。

そんな風に通路を走ること躊躇したフィリンを見てローズが言った。

「安心しなさい、所詮はただの通路よ。兵士たちなら任せて、私が片付けるから」

フィリンは申し訳なさそうにローズに目礼してから通路を走っていた、少女もフィリンに続いて通路に入る。

残ったリースはローズを見てから真剣な目で言った。

「死亡フラグを立てるな、まあ、こういうときはこういう物をもつてれば役にたつだろ」

そう言つてリースはローブの中から小さな布で出来たお守りをローズに渡した、村の手伝いをしていたときに貰った物で、それなりに愛着もあるが、こういった展開では大体あんな台詞を言つたら死ぬだろう、現実と小説は別だがこの世界がまず小説みたいな物だから一応やるだけやったほうがいいだろう。

ローズは目を丸くしながらリースをみたがリースも時間がない、後で返せよと言い残して通路の中に入っていった。

フィリンが通路を走っていると途中で壁に当たった、まさかの扉かと思ひ押してみたが開かない、少女が後ろから来て壁を押しているフィリンを呆れた目で見た。

「焦つても意味はないわよ、ほら」

そう言つて少女は扉を引いた。

アリスが顔を上げるとそこには軍服を着た男がいた。

片目に眼帯をつけてあご髭を適度な長さ刈り揃えている男は自分を見上げているイリアを見て驚いたような顔をした。

「まだ自我を保っているのか、素晴らしい精神力だ」

涙はもう流れていない、アリスは泣きたいのを必死で堪えながら気丈に笑った。

「あらあら………こんなか弱い………レディを誘つておいて自分は………名乗らないのかしら？」

男はふつと笑った。

「惜しいな、貴様のような者が我が軍にいればよいのに。私の名前はゲルマン・フォン・ド・ジャック・ゲルマニアだ、人と話すのは最期になるだろう、言いたいことは何かあるか？」

アリスは思った、今うまくやれば助かるのではないのか？確かに目

の前の男に従うことになるだろうがそれでも死んでしまうよりはましだろう。

しかし、姉ならそんな事はしない、かわりにこう言っただろう。

「また会いましょう」

ゲルマン三世は目を丸くしてからふっと笑って部屋からでようとした。

「ああ、そうだ。まだ貴様が来てから四時間しかたっていないぞ、せいぜい頑張るんだな」

そうして、扉は閉じられた。

意識が遠くなつていく、四時間しかたっていないと聞かされたからか、それとも緊張の糸が切れてしまったからか、それとも今のチャンスを逃したからか。

それでもアリスは後悔していない。

姉のようになりたかった、いつも自分を助けてくれた姉、幼い自分は背中に隠れていたがそれでもいつかは姉の様になりたいと思っていた。

だから姉のようにふるまっていた、内心ではびくびくしながらそれでも自分のやりたい事をつらぬいた。

いつの間にか自分は目指していた物になれた気がした、しかしやはりこういつた状況になるとほろが出る。

右目が弾ける、白くなっていく意識の中、アリスは小さく呟いた。

「さよなら……………イリアお姉ちゃん」

目を閉じたアリスの頬を涙がつつた。

アリスは夢を見る、その夢はすぐく満たされていた。幸せな気分になりながらアリスは楽しそうに笑った。

夢が覚めることは、無い。

## 其の八十二

少女　　イリアは目の前の光景が信じられなかった、いや、信じたくなかった。

後ろからフィリンが中を見て同じように息をのむ音が聞こえた。

部屋の中は気が狂いそうな真っ白な部屋だった、その中でぺたんと座っているアリスがいたのだ。

しかし、イリア達が迎えに来てても反応しない、それどころかその目はあらぬところに向けられており、とても正気を保っているとは思えなかった。

「……………あ、アリス？」

アリスは反応しない、イリアはよろよろとアリスに近付いていった。

「私よ、イリアよ。私、ずっと貴女に会いたかったのよ、ほら、早く帰りましょう」

答えは無い、イリアはアリスの肩に手を置いた。

「……………？」

アリスは肩に触れられた事を感じたのか小さく身動きした、その反応を見てイリアが期待するようにアリスを見たが、アリスの焦点はイリアにあつておらずイリアは落胆した。

「……………主……………」

イリアの横でフィリンがアリスの手を握る、しかし反応を見せないアリスの姿を見てフィリンは泣きそうな顔になった。

そんな風景を茫然と見ながらリースはあることが気になった。

一体誰が

「誰がこれをやったんだ？」

その瞬間、リースは己の失敗に気付いた。イリア（いや、アリスだろつか？と先程イリアに言われたのをリースは思い出す）をこんな風にさせられた二人にそんな事を言ったらどうなるかは火を見るより明らかだ。



リースの予想通り、フィリンとイリアは立ち上がったからぞつとずるほど冷たい声で呟いた。

「誰か……?」

「決まってるじゃないですか……」

「この城の中の誰かにね」

振り返った二人は完璧な無表情だった。

二人はそのまま通路に走っていった、おそらく今から城中の人間を皆殺しにしようとしたのだろう。

止めたい様な気がするのだが、フィリン達の気持ちほど激しくないが、やはりアリスがこんな風にされてはらわたが煮えくり返るぐらゐに怒っている。

しかし、それでもすぐに動かなかったのはポツンと取り残されたアリスが可哀想だからだ、確かに敵討ちをしたい気持ちはわかるがこんな状態のアリスを残して敵討ちに行くのは気がとがめた。

しかし、やはり敵討ちはしてやりたいので、とりあえずアリスに一言言ってからこの部屋を出ることにした。

何処も見えないアリスの視線に向き合う形でリースはしゃがみこんだ、どうせ聞いていないなら無駄なような気がしたがそれでもやはり唯の置物の様になっているアリスがあまりにも不憫なので声をかけてやった。

「また、帰ってくるから。待っていてくれよ?」

そう言っただけでリースはアリスに背を向けて歩いていった。

その時、アリスの焦点がリースに合った、ほんの一瞬、それは気のせいだったのかはわからないがアリスの顔にさつと恐怖の色がよぎった。

リースはローブの裾が何かに引っ掛かったようになっていてのを不審に思ったのか何に引っ掛かっているのかとローブを見た。

そして小さな白い手がローブをぎゅっと握っているのを見て、ため息をついた。アリスの目は相変わらず何処を見ているのかわからないが、ローブを握る力は強かった、リースはアリスの近くに座った。

どうせ、敵討ちはフィリン達がやってくれるだろう、それまで自分はアリスの傍にいてやろうと思った。

ゲルマン三世は自分の仕事部屋で机の書類を片付けていた、している作業は判子を押しただけだが、手を抜くとんでもない書類に許可を出してしまうこともある、よって、見た感じでは判子を押しだけのように見えていても、早く読み、早く決め、早く押すという作業を高速でしているのだ。

ゲルマン三世は先程壊れた少女の事を思い出す、別にしたこと以後悔が無いわけではない、むしろ後悔だらけだ、しかし自分の理想を叶えるためにはさまざまな犠牲を踏み越えなくてはいけない。

殺した少女に黙祷を捧げながらゲルマン三世は最後の書類に判子を押し、仕事が片付き、後は部下に書類を持っていつてもらえば終わりだ。

ピッピッピッピッピッピッピッピッ

そう思った矢先にあの少女を隔離してある部屋を開けられた時のために用意してあったサイレンの音が響いた。

もちろんあの部屋は二重三重にカモフラージュしてあるのでこんなすぐに見つかることなどありえない、つまり

「情報屋か……………」

舌打ちしてゲルマン三世は立ち上がる、彼の仕事がまたひとつ増えた。

十中八九少女を助けに来たのは報告にあった仲間たちだろう、彼らには少女は大切なものだったに違いない。

それを壊してしまったゲルマン三世を憎んでいるだろうがゲルマン三世もゆずるわけにはいかない。

自分の夢、魔法の無い世界の実現のために。

### 其の八十三

ローズが兵士たちを片付けて暇そうにしていた時、後ろから殺意のこもった足音が聞こえた。

ローズは俗にいう戦闘狂というやつで、手応えがある相手と殺し会うことに快感を見いだしている。そのてんではさっき片付けた兵士たちはあまりに手応えがなさすぎた。

しかし、これほどの殺気を放つ者ならいい戦いになりそうで、思わず胸が高鳴り剣を構えて切っ先を後ろに向けるがその先にいる者を見てため息と共に剣を降ろした。

剣を向けられたフィリンはそんなローズを視界にも入れずに固い表情で横を素通りすると廊下の方に向かって歩いていった、後ろからフィリンと同じような表情のイリアがローズの横を通った。

これから始まるのは自分が楽しめるような戦いでは無いと直感したローズは暇そうに腰を下ろすと剣をくるくると回し始めた。

そういえば、とイリアの後ろでまとめてあるポニーテールを見てローズは思う。

イリアとアリスの見分け方は髪型なんだなあと。

フィリンは城内を歩いていた、廊下の曲がり角から出てきた男を見つけると目だけをギョロリと動かして男を見た。

男は殺気を隠すことなく近付いてくるフィリンに向けて槍の矛先を向けたがフィリンは腕に隠していた短剣を抜くとそれを使って最小限の動きで槍を弾いた。

弾かれた槍を見て慌てて構えようとした男の手のひらを腰から抜き取ったナイフで突き刺した。

「ギヤアツ!!!」

叫び声をあげた男の首もとにフィリンはナイフを突きつけた、男は

一瞬で黙った。

フィリンは触れたら切れそうな声音で男に話しかけた。

「……………ある少女がこの城に運ばれたそうですね？それを命令したのは誰ですか？」

男は必死に恐怖で震える声を出した。

「しっ、知ってるっ。それっ、それは多分陛下がめっ、命令したとおもっ、思う！」

本当だ。と言つて男は泣きそうな目でフィリンを見上げた、フィリンは既に男に興味を無くしたらしく、突きつけていたナイフを無造作に降りおろした。

そして、体を痙攣させている男には目もくれずにフィリンは前に進んだ。

誰がしたかはもうわかった、この城の構造はわかっているの、後はそこまで歩いていくだけだ。

フィリンはそう思いながらホールの扉を開けた。

ホールは不思議な形をしていた、柱が不規則に乱立していて、壁は窪みや角が多く、白系統の色が混ざりあっていて今までの古い城の雰囲気からは明らかに浮いていた。

流石に頭に血が上ったフィリンでも明らかに今までの部屋とは異なる部屋に思わず立ち止まってしまった。

「ふむ、貴様は確かあの少女の従者か」

フィリンは声のした方にナイフを投げつけた、しかし柱の影にたっているらしい声の主には届かず、ナイフは柱にあたって跳ね返って床に軽い音を立てて転がった。

「ナイフか、中々の腕まえらしいが残念ながらここではその利点は活かせない」

銃声が響いた、ゴワンゴワンとホールに音が反響するが、フィリンの方には弾が飛んでこない。

しかし視界の端に黒いものがよぎったと思った瞬間フィリンは咄嗟に伏せてそれをかわした。

しかし、後ろから飛んできた銃弾がフィリンの肩を吹き飛ばした、突然のことに反応できずにフィリンは地面に転がる。

倒れた姿勢のままフィリンは何故ありえない方向から銃弾が飛んでくるか考えていた。

「逃げるなら今のうちだぞ、まあ、生きているならの話だがな」

相手の挑発に乗ってしまったフィリンがナイフを投げた瞬間に再び銃声が響きわたり様々な角度から銃弾がフィリンにめがけて飛んできた。

辺りの惨状はまさに地獄と呼ぶに相応しいものだった。

イリアの歩みを阻む兵士達は次々と捻れ、砕け、弾けていき、通路の色を赤く塗り替えていた。

後ろから不意打ちをしかけようとした兵士は振り向き様のイリアの斧で切り裂かれていった。

もはや恐怖の権化と化したイリアを襲う者は誰もおらず、イリアが歩く通路も静かになっていた。いや、もう誰も襲える者がいないのかもしれない。

怒りで熱くなっている頭でそんな事を考えながら進むうちにイリアは疑問を覚えた。

先程から全く進んでいない、通路の奥を見てみると何処まで続いているのがわからないほどに通路が伸びていた。後ろを振り返って見たら案の定先程潰した兵士たちの死体が見当たらず、かわりに何処までも続いている通路だけがあった。

カツンツ、と音が響いた。

イリアがそちらを向くと、そこには女が立っていた。男装をした紫色の髪をしている秘書風の女で、イリアから十数歩離れた所からこちらを見ていた。

イリアは能力で女を殺そうとしたが、女は微動だにせず、平然としながら口を開いた。

「 さあ、考えなさい 」

そう言つて女が姿を消した途端にイリアの右側の壁が消えた、イリアがそちらに目を向けるとそこにも果てが見えない通路があり、その側面には穴が所々開いていた。

おそらく、迷路のような物だろう。

面倒くさい物にひっかかったなとイリアはため息をつきながら通路を歩き始めた。

## 其の八十四

イリアは舌打ちをした。

イリアが予想したより迷路ははるかに難しかった、通路を曲がればさつきと同じような通路に出る、しかも全く同じというわけでもない。なのでおそらく違う通路なのだろう。

苛立つて壁を破ろうとしたが、びくともしなかった、おそらくこれは幻覚のたぐいだろう。

入ってからおそらく一時間はたっている。勿論、幻覚では一時間が一瞬だったり、逆に1日もあるときがあるので参考にならない。

あの女は考えろと言っていたがあ言葉自体がブラフの可能性もある、実際は逃げられない類いの物かもしれない。

しかし、それなら幻覚ではなく結界の可能性の方が高い、しかし結界ならイリアは破れるのでやはり幻覚だろう。

しかし、一つ腑に落ちないことがある。

この幻覚で出来ることはせいぜい時間稼ぎ、まさか時間があれば自分を殺せると思っっているわけではないだろう。

イリアはアリス程ではないが不死の概念を持っている、あの事故が起きる前に父親にアリスを見守ってくれないかと薬を渡されたのだ。アリスようだったので少し効果が薄かったのだが、それのお陰か存在を消される事は無かった。

再生に少し時間がかかるが、再生は出来る、つまり死なないということだ。

そんな事を考えながら走っていると通路の角から三十センチ程度の太さの指が出てきた。

ギツギツギツギツと鳴きながら出てきたのはこの通路を作ったあの女の美的センスを疑ってしまうような物だった。

本来指紋があるべき場所には芋虫の足のような物がびっしりと生えていた、第一関節は普通だが第二関節は曲がる方向が決まっていな

いらしく獲物を探すように動いている、指の付け根から先は無く切れている場所の回りには色鮮やかな眼球が不規則に付いていた、断面には口があり尖った歯が一つ一つバラバラに動いていた。

グギャリヤギギイイアと奇怪な声を上げて指は見た目からは想像できない俊敏な動きでイリアに飛びかかった。

「きゃっ」

思わず声を上げながらイリアは目の前で口を大きく開けた指を串刺しにした、指はギョエエアと鳴きながらどろどろと溶けていった、溶けた液体は通路の床に染み込むように消えていった。

思わず出てしまった可愛らしい声に顔を赤くしてから回りを見回す、勿論誰もいないのでほっと一息ついてから、イリアはまた走り始めた。

意気揚々とトリステインの城に入城しながらクロムウエルは内心笑みを隠せなかった。

死を恐れないレコンキスタの兵士たちの異様な気迫におされたのか、元々たいした訓練もしていないトリステイン軍はすぐに瓦解した。

一部の隊長達は元々トリステインに愛想を尽かしていたのか、いつの間にか煙のように消えていた。

そんな事を考えながらクロムウエルは謁見の間に入った、トリステインの重鎮達はクロムウエル達を見てこれからどうなるのかといった表情をしていた。

クロムウエルは回りの重鎮に堂々と宣言した。

「このトリステイン城は今から我々の支配下に入った！我々は君たちに危害を加えるつもりはない！私が求めている物はただひとつ！エルフに奪われた始祖ブリミルの聖地を奪還する！唯の理想ではない！私達が力をあわせれば必ずや聖地を取り戻せるだろう！！！」  
「素晴らしい終えたクロムウエルが小さく合図を出すと元々レコンキスタに寝返っていた何人かが拍手をした、それにつられた回りの重鎮



も拍手を始め、アリエッタ王女も拍手をすると、全員が拍手した。クロムウエルは満足気に頷くと後々に今後の方針を話すから、一時間後にこの城の会議室に来るようにいった。

重鎮達はその言葉を聞いてぞろぞろと謁見の間から出ていった、クロムウエルは出ていこうとするアリエッタ王女とマリアン又皇后を呼び止めた。

逆らう訳にもいかずに立ち止まった二人を置いて重鎮達は謁見の間からいなくなった、クロムウエルは二人に近くに来るようにいった。その顔にありありと恐怖の表情を浮かべながら近づいてきた二人にクロムウエルは笑みを浮かべながら話しかけた。

「そう怖がる必要はありません、貴女達には私の虚無を見せてあげようと思ひまして」

それを聞いて二人は目を丸くした、噂には聞いていたがまさか本当にクロムウエルが虚無を使えるとは思っていなかったのだらう。

確かに虚無では無いが。

クロムウエルはアリエッタ王女に声をかけた、恐怖のあまり動けないアリエッタの背中をマリアン又皇后が押す、別に親切心ではなくアリエッタが無理なら自分に回ってくるのがわかっていたからアリエッタを差し出したのだ。

クロムウエルはそんなマリアン又皇后を見ながらアリエッタにアンドバリの指輪を見せた、ぽうつと光がアンドバリの指輪に灯ってかすすぐに光は消えた。

アリエッタは虚ろな目をしてクロムウエルを見ていた、クロムウエルは笑みを浮かべながらアリエッタの耳元で指示を出した。

「君は私の僕だ、レコンキスタの一員として忠誠を見せなさい」アリエッタは頷くと膝をついて頭をたれた。

娘がいきなりクロムウエルに膝をついたのを見てマリアン又皇后は目を丸くした。アリエッタは臣下の誓いをクロムウエルにしてから立ち上がるとマリアン又皇后の手を引いてクロムウエルの前に持ってきた。

褒めてもらいたそうなアリエッタの頭を撫でてやるとアリエッタは目を細めて喜んだ、自分の娘の豹変に恐怖したマリアンヌ皇后は叫び声をあげて謁見の間から逃げ出そうとした。その瞬間、マリアンヌ皇后をアリエッタのブレイドが貫いていた。最期まで怯えた表情をしたままマリアンヌは倒れた、アリエッタがまた褒めてもらいたそうな顔をしていたので、クロムウエルは笑みを浮かべながらアリエッタの頭を撫でた。

## 其の八十五

フィリンはホールの中を走っていた、既に恐ろしい量の弾丸がフィリンの回りを飛び交う。

圧倒的不利な状況に撤退も考えたが、扉は固く閉ざされていて出られそうになかった。

フィリンはアリスに不死にしてもらったが、傷の治り具合はあまり早くない。大きな怪我なら一週間程度で塞がるが、流石に体をミンチにされたら一ヶ月は治らない。

一応フィリン自身の魔法で傷を直しているがいつまで続くかわからない、治癒の魔法は強力だが使い勝手が悪く、かすり傷でも大怪我でも治癒するのにすべて同じ魔力を使う。しかも無差別に治癒するので銃弾が掠めるだけでフィリンの魔力がガリガリと削られるのだ。走り回っていてわかったことだが、どうやら撃っている男は元々ホールにいないようだ。逃げている間にほとんどの場所を回ったが影すらもうつらないので、ホールにいるとするのならよほどの幸運かそれか一流の隠密技術を持っているのだろう

頭にのぼっていた血が流れていくからか、だんだん物事を冷静に考えることができてきた。

全方位から次々に襲ってくる銃弾の正体だが、おそらく相手は壁を使っているのだろう、この鏡のような壁や柱には物を弾き返す魔法でもかけられているのだろう、そして壁にある凹凸にあてる角度を調整していれば一ヶ所からでもあらゆる場所に当てる事が出来るだろう。

と、ある程度の予測をたてたものの何もできなければ意味はない、とりあえずナイフをそれらしい場所に投げてみるが手応えはなかった。

反射を使っているとしても、これほど正確な射撃をするにはどの壁に当たるとどの位置に弾がとぶのかを記憶して、その位置に寸分違

わずうちこまなくてはいけない。

並大抵の努力ではこうはならないだろう、その事については素直に敬意を表しながらフィリンは冷静になった頭で考え始めた。  
今の状況をどう打開するか。

だんだん感覚が麻痺してきているのがイリアにはわかっていた。  
既に体感時間で半日はたっていた、通路の壁は煤がついていたりほこりが積もっていたりしていて最初の通路と比べると明らかに汚くなっていた。

そんな通路を歩いていると角から村人風の男が斧を持って飛びかかってきた、イリアは数本の氷の槍で男を壁に縫い付けるとじたばたと暴れる男の頭を槌で打ち砕いた。

血が壁に広がり、男を中心にした花火のようになっていた。男の死体は指先からどろどろと溶けていき、骨だけが残った。

その骨も、ピキツと音がした瞬間に砕け散った、後には壁の血花火だけが残った。

最初はあからさまな化け物が襲ってきたのだが、時間がたつと共にだんだん人間らしい形になっていき、今では唯の人間の形になっていた。

溶けて崩れるのでかろうじて人間ではないとわかるがもし死体が残っていたらもはや本物と区別がつかないだろう。

しかし、仮にも人間の形をした物を殺してもイリアは何も感じなかった。

かたかたかたと音がする。

何時からかこの音が耳からはなれない、たしか最初に人間らしい形の化け物を殺したあたりからだとおもつ。

かたかたかたかた

リース達はとりあえず城から出ることにした、こんな危険な所でフィリン達を待つているよりは旅館に行つてフィリン達の帰りを待つ方がいいと思つたからだ。

アリスに何と云つて連れていくかと考えていたが、リースの手をぎゅつと握りしめながら黙つて後ろから着いてきたのでとりあえず樂に進めてよかつたとリースは思つた。

前ではローズが暗い雰囲気歌を明るくくちずさみながら歩いている通路の角からたまに兵士が飛び出してきたがローズは兵士の方には見向きもせずそのまま無造作に剣を振つて兵士を二つに分けた。床には奇怪な形をした死体が散らばつていた、壁は赤黒い血で染められており踏むたびにネチャツと嫌な音がする。

アリスはやはり夢心地な表情をしていたが、死体を踏むと肩が怯えるように動くのをリースは見逃さなかつた。

やはり、アリスは精神が死んだわけではないのかもしれない、おそらく極度のショックを受けて現実から逃げてしまつたのだろう。

どんな仕打ちを受ければこんな風になつてしまうのだろうか、と考えても嫌な気分になるだけなので早めに考えるのをやめた。

しかし、来るときは焦つていたのでわからなかつたが、城は中々広かつた。

更に道を覚えていたフィリンがいないので何度か変な場所に出てしまふこともあつた、一番の戦力であるイリアは一緒にいないのだが、イリアは道を知らないはずなので迷つてないか少し心配だつた。

と、前からふらふらとこちらに歩いてくる人影を見つけた。

## 其の八十六

通路は既にほこりまみれだった、床を踏むとさながらクッションのような感覚がした。

壁は最早黒く染まっております、通路は不潔の一言に尽きる状況だった。イリアはそんな中を無表情で歩いていて、体感時間で二日はたっている、しかし実際に二日もたっているはずがない、と思う。

だんだん角も減ってきた、既に一直線になり始めた通路の角から現れる人影があった。

気弱そうな女の子だった、まわりをキョロキョロと不安気に見回している、女の子はイリアを見つけるとたまったと駆け寄ってきた。そして腹をナイフで突き刺した。

イリアはそんな女の子を能力で壁に縫い付ける、じたばたと暴れて抜け出そうとしているがやがて諦めたように力を抜いた。

角から現れるのも遂に消えなくなった、それはただ単純にそういうものなのか、それとも本物の人間なのかわからなかった。

とりあえず、縫い付けている杭も時間がたてば消えるようになっていたのでもし本物でもちゃんと助かるだろう。

かたかたかたと音がする、頭に直接響くような音だ。

イリアは前に進む、その時目の前に扉が現れた。

いきなり虚空から現れた扉にはO U Tと書かれている、その言葉を信じて扉を開くと中は城の外の森だった。

まさかと思つて後ろを振り返ると入ってきたはずの扉はどこにもなく、ただ森が広がっていた。

嵌められたと思ひながら前を見ると、先程までなかったテーブルに腰掛ける女がいた。

女は気のない拍手をイリアに送っていた。

「……………貴女が、私を閉じ込めたの？」

欠々にする会話の相手が会話が出来なくなった原因とは皮肉かな？

と思いながらイリアは女に問いかけた、女は左右目の色が違う瞳をイリアに向けると拍手を止めた。

「そうよ、私が閉じ込めた。といっても精神世界にだけど」

イリアは氷の槍を女に投げつけた、槍は女の体をすりぬけるとそのまま地面に刺さった。

女はそんなイリアを哀れむように目を細めると立ち上がってイリアに向かつて歩き始めた。

「可哀想に」

「何が可哀想なの？」

女はイリアの頭に手を置いた。

「こんなに震えてる、怖かったのでしょうか？」

「あつ……………」

女の声は優しくかった、イリアの迷路で荒んだ心が緩やかに溶かされていくような感覚をイリアは覚えた。

つい、甘えるように女に抱き着いてしまう、女はそんなイリアの背中に手を置いて語りかけた。

「怖かったでしょう？大丈夫、私が貴女を助けてあげる」

イリアは女の体にしがみついた。

そしてそのまま地面から出した槍で女の体を突き刺した。

わずかに女は驚いた表情を見せた、まさかこんな事をされるとは思わなかったのだらう。

もちろん槍は体をすりぬけていた、女から離れたイリアは複雑そうな表情をしながら女を見た。

「まさか、あの状態から攻撃が来るとは思わなかったよ、油断した」  
「じゃあ、また会おうと言って女は虚空に消えた、そして、パリンとガラスの碎けるような音と共に風景が碎けた。

イリアは城の外にいた。

クロムウエルはアリエッタを連れて会議室に入った。会議室の埋まり具合は九十%ぐらいで、まあまあといえた。

アリエッタには先程殺したマリアンヌの首を持たせており、会議室に集まっている面々は目を疑っていた。クロムウエルはそんな面々に向かって宣言した。

「皆さん！ご覧の通りマリアンヌ皇后は私の理想に賛同していただけなかった様なので私の同士になったアリエッタさんに殺してもらいました、悲しいことですが仕方がありません。もちろんここに来ていない方達は今頃はマリアンヌ皇后の後を追っているでしょう、私は今ここにいる皆さんとはお別れをしたくありませんから、私に協力してください」

クロムウエルの宣言に重鎮達は皆、静まりかえった、クロムウエルはそれを確認してから咳払いを言った。

「さて、アルビオンの皆さんを出してください」  
重鎮達はぎょっとしたように目を開いた、察しのいい何人かはクロムウエルの隣のアリエッタを見たがアリエッタはそしらぬ顔で熱っぽくクロムウエルを見つめていた。

少し、ざわざわとしている重鎮達の一人が立ち上がった。

「あ、アルビオンの皆様は地下の隠し部屋にいます、そ、その兵士に聞けばわかるでしょう」

クロムウエルは笑顔で重鎮に座るように促してから護衛の一人に探してくるように言った。

護衛が会議室から出ていくのを見ながらクロムウエルは今後の方針を話始めた。

「とりあえず、国境の回りに検問を建てます、逃げようとした人は容赦なく殺すように言っておきますから、そして、検問を建て終わったらレコンキスタに従う意志があるかを領主達に聞きます、従わなければ殺します」

異論は？とクロムウエルは回りを見る、もちろん反論など出るはず



もなく、会議は終わった。

## 其の八十七

フィリンは立ち止まった、止まったフィリンを弾丸が何個か当たるが、フィリンは何もしないで放っておいた。

そして、先程から詠唱していた魔法を解き放つ。

フィリンの前から大量の水がまるで津波のように出ていく、その波はホールの柱を全てなぎ倒し、少しの隙間があればそこから一気に流れ込んでいった。

魔法の効果がきれて水が消え去った頃にはホールはまっさらな状態になっていった。

しばらく回りを警戒していたが、なにも攻撃が来ないのでほっと一息ついてから治療術を使い傷を直してから扉にてをかけた。

開かない、押してみたが開かない。試しに引いてみたり左右に動かしてみたが開かない。鍵がかかっているような感覚ではない、扉自体が固定されているようにびくともしないのだ。

その時フィリンはあることに気付いた、扉は木製なのだが全く湿っていない、それ以前に木製の扉がはたして先程の魔法をくらって無傷でいられるだろうか。

つまり、この扉は固定されている。

「わかったか？この扉は固定してある。貴様では開けることすら叶うまい」

不意に後ろからあの男の声が聞こえた、ぱつと後ろを振り返るが何も無い、ありえない現象に戸惑いながらフィリンは声のする方に問いかけた。

「貴方は何者ですか？この城の主人ですか？」

声は苦笑するように声を漏らしながら答えた。

「答えても、君は信じるか？それに私は質問されてはいはい答えるような奴ではないんだ」

フィリンは聞いてみたところで返事が返ってくるはずがないな、と

思っていたのでそうですかとだけ言った。

「では、これを開けてください」

「無理だ、君は帰れ」

フィリンは声のする方にナイフを投げつけた、もちろん当たるはずもなく、壁にカツンと音をたてて当たった。

「私はこの城の主人を殺さなくてはいけないんです」

「諦めろ、君には無理だ」

フィリンは言い返そうとしたが、その時、いきなり足元の感覚がなくなつた、一瞬の無重力感の後に落ちていくのを感じながら声が聞こえた。

「さようなら」

リースは先程から城に攻撃しているイリアを見ながらため息をついた、城の通路で夢遊病患者のようにふらふらと歩いてきたイリアの後ろを着いていったら城の外に出てこれてほっと一息ついたら身体中から怒オーラを放ちながら城に向かって八つ当たりのような攻撃を仕掛け始めたのだ。

城には何かの結界でもはつてあるのか、イリアの猛攻にもかすり傷ひとつつけられずにいた、城の回りが攻城用の槍のようなサイズの氷の残骸や、地面から造り上げたとほうもないサイズの鉞の残骸や、小規模の太陽のような熱の余波で燃えている草木など、大変な自然破壊が行われていた。

しかし、それほどの攻撃をうけて無傷でいるのは余程の防御力ではないとそうならないだろう、それについてはリースは凄く疑問に思った。

そんなことを考えながらリースは後ろでしがみついてくるアリスの頭を優しく撫でた、イリアの猛攻はアリスにとって恐怖の対象なのだろう。

というか、姉であるイリアよりリースになつているのかがわから

ない。

別に悪い気はしないが、結構気になることではあるのだ。ついでにローズは何処かに行ってしまった、残されたリース達は木陰で涼みながらリースを見ていた。

流石に疲れたのか、大きく息を吐きながらイリアはリースの近くに來ると、リースにしがみついているアリスを見てからリースに言った。

「なついでるわね、羨ましいわ」

「そうか？まあ、悪くはないけどな」

イリアはアリスの頭を撫でようとしたが、アリスは怖がるように身をすくませた。

「…………… 本当に羨ましいわ」

イリアは少し殺気が混じっているような目でリースを見た。それを感じたのかアリスが更に怯えるように身を縮めた。これが原因ではないかとリースは思ったがなにも言わないことにした。

それにしても、イリアはアリスの姉で、アリスがイリアになっていて、イリアはそれで名前が無くなって……………

「ややこしいな」

まあ、前から接してたのがアリスで、新しく入ってきたのがイリアと考えれば簡単だよな、とリースは考えた。

その時、後ろの茂みからドサツという音がした。

リース達は咄嗟に後ろに向かい合って警戒していたが、茂みからほぼ無傷のフィリンが歩いてくるのを見て力を抜いた。

フィリンは無表情で木を思いつき殴り付けた。

あまりのことに固まったりリースを置いてイリアがフィリンに話しかけた。

「その調子じゃ、駄目だったみたいね」

「はい、やられました」

イリアとフィリンはそう言いながらアリスに近づくがアリスは怯えるように後ろに下がっていった。

身を縮ませて軽く震えているアリスを優しくあやしているリースを  
フィリン達は羨ましげに見ているがどうやらその原因が自分達にあ  
るということを知らないらしい。

リースは小さくため息をつきながら、落ち着きを取り戻したアリス  
を膝の上のせてうとうととしているアリスを見ていた。

## 其の八十八

宿にいたワルド達は、もう三日近く戻ってきていないイリア達を心配しながら食堂にいた。

一応、あのイリア達だから大丈夫だろうという話にはなっているがやはり心配なのだろう。特にリンは心配しており食事もろくに取れないらしく、気のせいか少し痩せたようにも見えた。

いつも通りなのはパレントであり、いつも通りにぼんやりとした顔をしながらぱくぱくと食べていた。

才人は物憂げなリンを気にして時折話しかけながらカチャカチャと音をたててスプーンを動かすが、それは口に運ばれずにそのまま皿に戻している。もちろん才人はそれに気付いていない。

そんなリン達の様子を見ながらワルドはため息をついた。

ワルド自身ははっきりいうとイリア達が戻ってくるかについてはあまり関心がなかった。ワルドはリンがイリア達が戻ってくるかについて悩んでいるから早く戻ってきてほしいと思っているが、別にそれはイリア達が心配なわけではなく、リンが悩んでいる姿を見たくないだけなのだ。

それに、あんな化け物じみた力を持っているイリア達がやられるところなど想像もできなかった。

スパゲッティをくるくると絡めて口に運びながらワルドはリンを見る、最近ではもう才人がリンを支えるのが当たり前になってきた。

ワルドにはリンを慰めることは難しい、やはり年が離れていると相手の感情もよくわからなくなるのだろうか。

しかし、不思議とくやしくはない、やはりあるべきものはあるべき場所に収まるのだろうか。

では、自分のあるべき場所は何処なのだろうか？

ワルドにはわからない。

そんなことを考えていたら食堂の扉がゆっくりと開けられた、貸し

切り状態のこの旅館に入れる人間はイリア達しかいない、喜びに溢れた目で扉から現れたイリア達を見ているリン達を見て、ワルドはやれやれとため息をついた。

最初は喜んでいたリン達も、説明が終わる頃には黙り込んでしまった、そしてその視線はリースの膝の上ですやすやと幸せそうに寝ているアリスに向けられていた。

話終えたイリアとフィリンは沈痛な表情を浮かべながらアリスを見ていた、リースもアリスの頭を撫でながらも何処か寂しそうな顔をしていた。

しばらく皆が黙っていると、そんな空気に耐えられなくなったのか、それともただ単に食べ終わったからか、パレントが立ち上がった。

「そろそろ、へやにもどってるよ」

じゃあね、と言ってパレントは食堂を出ていった。人数が一人減った事によって更に気ましくなった空気の中で、喋ろうとする者はいなかった。

更に時間がたち、ワルドもこれ以上いても何も無いと思い、冷めてきた紅茶を一気に飲み干した。

「一応、これからどうするかも考えないといけないからね、考えてくれたら助かるよ」

そう言い残してワルドは食堂を出た、確かにワルドの言う通りで、国の城を攻撃したのだからそろそろ騒ぎになってもおかしくない。そんな事になるまえにどうかしてゲルマニアから逃げる方がいいだろう。

リン達もワルドの後を追うように立ち上がった、やはり気まぐしい空気に耐えられなかったのだろう。

結局城に行ったメンバーになってしまい、気まぐさを誤魔化すためにリースは適当にサンドイッチを頼んだ。

すぐに運ばれてきたサンドイッチを口に運びながら、リースは沈黙

に耐えられずに口を開いた。

「ん、で、結局どうするんだ？流石にこの国に留まるのはまずいだろうか？」

「……………とりあえず、ガリアという国に逃げようと思います、仮にも大国と呼ばれているらしいのでゲルマニアも手出しは出来ないでしょう」

「……………それに、私達はそろそろ帰ろうと思ってるの」  
イリアの言葉にリースは固まった。

「何処に……………帰るんだ？」

「知らないと思うけど、アリスはあのリンって子に呼ばれたんじゃない、私達の仲間のリリスの能力で来たの。暇をもてあましてアリスの為に暇潰しとしてのちよっとした遊びのようなものよ」  
フィリンはイリアの後を引き継いだ。

「そして、その遊びのクリアの条件としてある場所が設定されているんです。それがガリアの何処かにあるんです」

「……………つまり、ガリアにあるそこに行けば、お前らは帰るんだな？」

イリアは首を縦にふった、リースはショックを受けている自分にショックを受けていた。

別にアリスの事は好きではなかった、はずだ、むしろ何回かいなくなればいいのにと本気で思ったこともある、と思う。

何故だろう、アリスの事がいつの間にか嫌いではなくなっていた。

自分の膝の上で穏やかに眠っているアリスを撫でながらリースは自分の手が少し震えている事に気付いた。

幸い誰も気付くことは無かったが、その震えはリースが何かに怯えている事を明確に表していた。



## 其の八十九

夜中、リースはアリスと一緒にベッドで横になっていた。

フィンリン達も一緒に寝たがり、アリスを呼んだり、手を引いて連れていこうとしたりしたが、アリスはリースの服を握りしめていたので、やがて諦めたかのようにリースを恨めしげに見ながら自分の部屋に入ってしまった。

アリスもリースもベッドに横にはなっているが、寝ているわけではなかった。

リースは横で虚ろな目をしているアリスを見る、先程からベッドの中でも離れなくないらしく抱きついたまま放そうとしないアリスの様子にリースはため息をついた。

今、アリスは現実から逃げている、もしかすると既に精神が死んでいるのかもしれないが、今リースにすぎるように抱きついているアリスを見て、リースはある事を考えた。

リースは所詮、記憶を引き継いで生まれてきた唯の人間だ。いずれは老いて死んでしまうだろうし、その後もアリスはこのままかもしれない。

ならば、自分が不死になればいいと思ってしまうのも当たり前かもしれない。とリースは思ってしまった。

確かにフィンリンなどの前例もある、しかし不死になるということは人間では無くなるということだ。

しかし、それは並大抵の事ではない。

アリスはそんなリースが発する空気を感じたのか、更に強く抱きついてきた。

そんなアリスをいつもは見せないような優しい目で見ながらリースは思った。

とりあえずはこの子を助けよう。

それが、問題の先送りにすぎないとわかっている。

その頃、イリアとフィリンは部屋の椅子に腰掛けながら紅茶を飲んで  
いた。

イリアはフィリンが淹れた紅茶を飲むのは初めてだが、素晴らしい  
出来だった。これをいつもアリスが頼んでいたらしいから、少しア  
リスに嫉妬した。

しかし、とうのアリスがあんな事になっては妬んでも虚しいだ  
けだ、イリアはため息をつきながら紅茶をすすった。

イリアと向かい合っているフィリンも大方そんな感じだった。

しばらく、紅茶をすすする音だけが響いていた、そんな空気を変えよ  
うと思ったのかフィリンが口を開いた。

「……………主は、どんな人だったんですか？」

イリアは少し不思議そうな目でフィリンを見た。アリスとの付き合  
いが長いのは自分ではなくフィリンの方だ、てっきりアリスの事な  
らフィリンの方が詳しいと思っていたのだが。

「貴女がよく分かってると思うけど？私はある子と別れて五百年た  
つてるのよ、貴女の方が詳しいと思っただけ？」

フィリンは少し複雑そうな表情を浮かべた。

「確かに、私と主は長い付き合いです。しかし私は主について少し  
不思議に思っていた事があるんです」

フィリンはイリアの紅茶が空になったのを見て交換しましょうか？  
と訊ねた、イリアは首をふってから話の続きを催促した。

「実は主はここ最近……………といっても十年ぐらい前からですが、な  
んていうのでしょうか、ぼろが出始めたようでした。私と出会った  
当初は本当にいつも堂々として、まだ未熟だった私に色々な事を教  
えてくれたりしてくる、まさに完璧な人でした。しかし最近夢で  
うなされていたり、他人の言葉や行動にすぐ傷ついたり完璧な主の  
裏側が見えてきた様な感じでした」

まあ、もちろん私はそんな主も尊敬していますが。とフィリンは言

つてから自分の紅茶が空になっているのをみて、ため息をつきながら紅茶をついだ。

「……………ああ、そういうことね」

「何がですか？」

「いや、あの子は偽る能力を持っているのよ、多分事故があった時に私の名前をもらった事に気付いてから自分を偽って私そっくりになるうとしたんだと思うの、だけどここ最近だんだんアリスの存在が強くなってきた、だからそんな一面が出てきたのだと思うわ」  
そして、フィリンの最初の質問の意味も理解した。

「あの子は元々気が弱くてね、いつも私の後ろに隠れているような、そんな子だったのよ。けれども一度決めたらその考えを曲げずに最後までやり通そうとするのよ、私に憧れてたらしくくてね、一日中くつついてきてね、村の皆から仲良し姉妹って呼ばれてたの」

イリアはその頃を思い出すように窓から夜空を見ながら笑った、フィリンもその光景が浮かんできたのか、楽しそうにくすくすと笑った。

しばらく明るい空気が部屋に漂っていたが、やがてだんだん笑い声が小さくなっていき、そして消えた。

やはり、昔のアリスの話をしていると、今のアリスの状態と昔のアリスを比較してしまい、失ってしまった物を実感してしまうのだから。

「とにかく、ガリアに向かえばリリスが待っているはずなんです、他の世界には主を治療できる技術をもっている場所もあるかもしれませんが、城に戻って休めば治るかもしれません、前向きに考えましょう」

明るく言ったフィリンの言葉に頷いてからイリアはベッドに横になった。

「とりあえず寝ましよう？明日寝不足じゃ困るでしょ？」

不死とはいえ眠気や食欲はある、フィリンも確かにこんな時間ですからねと言ってカップを魔法で洗うと片付けてからベッドに横にな

った。

「……………そう言えば……………久しぶりに……………誰かと一緒に……………」  
言い終わる前に眠ってしまい、すやすやと寝息をたてているイリア  
を優しく見ると、軽く抱きながらフィリンも寝た。

其の九十(前書き)

遅れて、申し訳ありません。

## 其の九十

イリアが朝起きると、既に太陽は昇りきっていた。どうやら寝坊してしまったようだ。

私はとりあえず大きく延びをした、頭に新鮮な酸素が行き渡る、それによって頭が冴えていくのを感じながらまだ少し眠気が残る頭で考えた。

寝過ぎして、怒ってるかな？

フィリンがロビーで掃除をしているとイリアが二階から降りてきた、フィリンが挨拶をするとイリアも挨拶を返してきた。

「おはようございます」

「おはよう」

イリアはそう言うてからふと少し不思議そうにロビーを見回した。

「従業員が見当たらないわね、フィリンは知ってる？」

「いえ、早朝から見えてません。なんとなく見当はつきませんが」

イリアはああ、と納得したように頷いた、確かにどう考えても昨日の一件が関係してるとしか思えない。

「皆は？」

「買い出しに出かけるふりをして逃げています、何人かついていったようですが大丈夫でしょう」

リース達ならむしろ返り討ちにしてそうだなと思い、イリアはフィリンの言葉に頷いた。

掃除を終えたらしいフィリンはふう、とため息を少しついた。

「じゃあ、出しましょうか」

フィリンは静かに頷くと、殺意丸出しの壁の向こうに歩きだした。

その頃リース達は国境をちょうど越えた辺りで休憩していた。刺客らしい黒づくめの奴ら（忍者に似ていた）をリースとワルドで軽々撃退してからフィリンに指示されていた場所まで歩いたリース達は来る途中にイリア達の似顔絵が書かれたビラが配られているのを見ていた。どうやら自分たちは指名手配されているらしい。

まあ、国外に逃げたので安心して良さそうだが。

そこまで考えた辺りでリースは服の袖を小さく引かれた、下を見るとアリスが相変わらず虚ろな目を開けて座っていた。

雰囲気食べ物をねだっていたのでバッグの中からアリス用のクッキーを取り出すと折って小さくしてからアリスの口に入れた。リースに入れられたクッキーをもぐもぐと咀嚼しているアリスの口元は薄くほころんでいて、自然とリースの口元も少し緩んでしまうのだ。つた。

リースが全てのクッキーをアリスにあげる頃に、イリア達は帰ってきていた。

リースは傷ひとつないイリアとフィリンに改めて理不尽さを感じながら、それを隠そうともせず聞いた。

「行くあてはあるんだろ？」

「ええ、ガリアの『空を飛ぶ魚』亭にいるらしいわ」

「何処だ、そこ」

「さあ、リリースはそういうとこまで教えてくれないから」

つまり、探せと言っらしい。

そんな問答をしながら、リースはある一つの事を考えていた。リースの手の中にある温もり。それを手放すことができるのか。終わりは迫ってきている。

クロムウェルはレコンキスタの拠点を構えることができた祝いとし

て会を開くことにした。

と言ってもレコンキスタの一員は全員指輪の効果で人形化しているので杯を開けるのはクロムウエルだけであり、横にはシェフィールドとティファニアを侍らせていた。

アリエツタは侍女の服を着せてクロムウエルの世話をさせている、そのほうが支配したという実感がわくからだ。

そんなことを考えながら独り酔っていると、ティファニアが口を開いた。

「クロムウエル様、先程始祖の祈祷書を開いたら新たな魔法が記されてました。お試しになられますか？」

クロムウエルはほろ酔いの思考力が低下した状態で生返事を返した。ティファニアが頷き、詠唱が始まる。

美しく朗々と響く詠唱を聞きながら、クロムウエルは物思いにふける。

聖地遠征などクロムウエルには欠片も興味がない、トリスティンを手に入れたが、所詮弱小国家。次は聖地遠征を交渉条件にロマリアとでも同盟を組もうか……

ふと、気になった事をシェフィールドに尋ねる。

「これは、なんの詠唱だ？」

雰囲気から詠唱は終わりかけているのがわかった、シェフィールドはいつものように柔らかく笑いながら答えた。

「『解除』です」

あれ、おかしい。何かが引っかかる。

酒に浸った頭で考えてみるが何が引っかかるかがわからない、そんなときふとクロムウエルは気づいた。

あれ、指輪が無い。

詠唱が終わる。

ティファニアは只々呆然としていた。



今までのまるで自分が無になってその無に包まれる充足感と至福感、それから切り離されたティファニアは今までの記憶を否定しながらペタリと床に座っていた。

下にはクロムウエルの死体がある、シエフィールドと名乗る女性が正気を取り戻した瞬間に喉を裂かれて殺されたのだ。首から流れる血がティファニアの足を染めていくがそんなことを気にする余裕はなかった。

わたしは、子供たちがコロサレテ。このおとこについていって、シモベだと自分の事をしらない人達に宣言して、ああ誰か私を導いてお姉ちゃんをコロシテ、これも全部あの男がこの男が悪いのだと言いたいけどそれはもう動かなくて死んでて殺されてて。

帰りたい。

帰る場所はないけれど、お姉ちゃんや子供たちがいる場所なら心当たりがある。

それは少し遠いけど。手を伸ばせば届く場所。

床に落ちている銀の輝き。赤く濡れたそれをティファニアは滑らかに首に刺した。

白い空間にティファニアはいた、気がつくとな隣にはお姉ちゃんがいる。向こうには小さな小屋があつてその近くには子供たちが遊んでいる。

お姉ちゃんは私に笑いかけてきた。

少し寂しそうに、お姉ちゃんは話しかけてきた。

来ちゃったんだ、ティファ

私は、うん。と頷いてから恐る恐るお姉ちゃんに言った。

ごめんなさい、お姉ちゃん、私のせいで。

ティファ、気にしないで。

でも

私は、あなたと一緒にいられて嬉しいから。

私は大きく頷いた。

熱い何か、ほほを伝った。

アリエッタが死体が二つある部屋の隅で震えていると、真っ白な手がアリエッタの前につき出された。

それが何か判断する前にアリエッタの頭の中は再び白いもやに包まれた。

ティファニアは無表情で自分の方を見るアリエッタに微笑みかけた。見に纏う服は黒く染まり、髪も不健康な白になっていく。肌は血が流れていないかのような白で、その瞳は暗い闇を抱えた朱に変わっていた。

体型は少し控えめになり、大体平均的な形になっただろうと言った具合だ。

ティファニアはクロムウエルだったものの頭を踏み潰した。

『私が、ここまで進めてやった、君の命運は、ここで尽きていたのだ。しかしこの劇が見れなくなるのは惜しい、だから君の理想は私が引き継ぐ』

少女の皮を被った、邪神ナイアルラトホテップはこうしてレコンキスタを動かしていくことになる。

ロマリアが陥落したのはこの二日後だった。

## 其の九十一

イリア達が半日ほど歩いただけでガリアの国境が見えた。国境といつても実際に国境を壁にしているのはゲルマニアだけで他の国は国境を通る主要道に看板を建てるぐらいである。

当たり前だがイリア達が起こした事件で国境警備も堅くなっているようで、入るときに見た警備よりも兵士の数が数倍に増え、武器を構えて見るからに物々しい雰囲気を出している。

そんな兵士達の様子を見下ろしながら、リースは密やかにため息をついた。

「……上に注意しないのは上から来るとは思っていないからなんだろうな、……確かに普通は前を注意するけど……」  
それにしても、全員真面目に見当違いな方向に注意しているとなんだか少しこつちも虚しくなってくる。

真面目な兵士達に哀れみの視線を少し向けてからリースはアリスを抱えたままガリアの土に音もたてずに着地した。

上からワールドがリンと才人を抱えて落ちてきた、イリアとフィリンは既に降りているのでこれで全員降りたことになる。

才人はハメートル近くあたりある壁を飛び上がれるリース達に驚いているようだが、リースとワールドは風の魔法を使って飛んでいるだけなので、実際に人間離れしているのはイリアとフィリンだけだ。

まあ、魔法自体が人間離れしていると言えばそうなのだが。

なんだから、あつさり越境出来た事に少し物足りなさを覚えたが、一々ドンパチやるのも嫌だからなと思いついて、リースはイリアの後をついていった。

フィリンの話によると、リースは『三日月の杯』という酒場にいるらしい。しかし肝心の場所は話されていないので周りの住民に日々

聞き込みするはめになった。

結果、首都の中で売り上げ一位（暫定）の『月光衣』という洋服屋の隣にあるらしいことしかわからなかった。店名が月繋がりなのは『月光衣』と『三日月の杯』の店主が双子だからだそうだ。

それだけの情報で探すはめになったので見つけるのは長期戦になるとイリアは踏んでいた。

首都までは馬車を使って移動することになった、馬車の人割りはいリア、リース、アリス。フィリン、リン、パレント。才人、ワルド。に決まった。

ガタガタ揺れる馬車の中には沈黙が重く満ちていた、イリアはアリスに菓子をねだられている（ように見える）リースを見ていた。リースはアリスに一摘まみの蜂蜜菓子を与えながら気まずそうに目を合わせないようにしていた。

イリアは諦めたようにため息をついた、おそらくアリスの事だろうがリースは自分に対して少し負い目を持っているようだ。

確かにアリスが自分ではなくリースになついているのを見ると少し妬ましく思う時があるが、別にそこまで気にしているわけではないのでイリアとしてもここまで気まずそうにされるとこちらも困るので何とかしてほしいと思っていた。

しばらく、馬車のガタガタ揺れる音だけが響き、イリアはリースに話しかけた。

「……………これから、どうするの？」

リースはイリアに話しかけられたのが意外だったのか、それとも違う理由かすぐに言葉を返すことが出来なかった。

先程とは少し違う沈黙が降りた、菓子を食べ終えたアリスも空気を察したのかねだらずに馬車の揺れに体を預けていた。

中々話し出さないリースに苛ついたようにイリアは指をまどの枠にトントンと音をたてるようにリズムよく叩いた。

トントントントントントン……………

「……………どういう意味だ？」

トントツ……トントントン……

リズムが乱れた、ついでにイリアが眉を不快気にひそめたのも見えた。リース自身も今のは無駄な質問だと思ったが、とりあえず何か答えておこうと思ってしまったのだ。

……………意味ならわかってる。  
ただ、結論が出ない。

結局、それからは無言のまま無駄な時間が流れた。

暗い部屋のなか、 ジョゼフは一人ボードゲームのこまを動かしていた。

盤上は黒、青、赤がバランスよくあり、青の陣地には白い駒が数個置かれていた。黒い陣地には一つだけ人形ではなく醜悪な異形の黒い駒がいた。

「……………来たか」

ジョゼフは呟いてから振り返らずに声をかけた。

「久しぶりだな、シエフィールド。報告を」

シエフィールドはぼろぼろの服を着て、体の所々が切れていたが、そんなことに構わずに無表情に報告を始めた。

「はい、大方予想の上だと思われませんが……………」

シエフィールドの説明を聞きながら、ジョゼフは今自分が相対している相手に思考を巡らせた。

(黒、と仮定している勢力。元はレコンキスタだったが、クロムウエルにここまで勢力を拡大させる力はない、報告を聞いた限りでは人間ではないらしい)

この黒に対抗するのは白の駒がいいのだが……………。

「……………」

静かに駒を弄ぶ主人を見て、シエフィールドは静かにその無表情を少し緩ませた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1914m/>

---

シリアスな感じのゼロ魔

2011年12月10日01時02分発行